
バカとメダルライダーと召喚獣

OOO・JANIKELU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとメダルライダーと召喚獣

【Nコード】

N6786S

【作者名】

OOO・JANIKELU

【あらすじ】

仮面ライダーオーズとしてバースやディアスと共に戦う明久

だが…そんな彼に最大のピンチが襲う

そしてグリードとの戦いはついにクライマックスへ

みんなを守りたい一心に戦う明久…彼は果たして欲望を思い出すことが
とができるのか!?

そして世界の運命は!

最終章更新中です!

プロローグ（前書き）

始まりです。話はオーズではVSウヴァ戦、アニメバカテスでは3話から始めます。

ブローグ

僕：二年Fクラス吉井明久はいつものように学園生活を送っていた
いつものように美波に関節技を決められ、いつものようにムツリ
ーニから秀吉の写真を買い取り、いつものように姫路さんにうつと
りしたり、いつものように雄二と喧嘩をして

いつものように試験召喚戦争を行う

何も変わらない日々…けど一つだけ変わったことがある…それは

『明久！ヤミーだ！』

「わかったよアंक！」

タカ！トラ！バッタ！

タットツバ・タトバ・タットツバ！

腕の怪物と出会い、ひょんなことから僕は仮面ライダーとなった

ある日偶然見つけたタカのメダル
それは僕を仮面ライダーへと導いた

最初に出会った鳥の怪人（腕だけ）アंकの話だと僕が戦っている怪物、ヤミーを作り出したグリードは800年前にいた怪物なんだけど、現代に蘇り、人々の欲望からヤミーを作り出しているらしい
「何かわからないけど、人々の命を救えるなら！」
アंकが手にした謎の化石のようなものが僕の腹に置かれた途端それは姿を変えベルトとなった

そしてアंकが渡した三つのメダル…タカとトラ、バッタ…このメダルにより僕は仮面ライダーオーズとなったんだ

オーズやグリードについて知っている鴻上フアンデーションの社長鴻上さん、秘書の里中さん、ライドベンダー隊隊長の後藤さん

いろんな人と出会った

そしてメダルを取り返そうと僕やアंकを狙うメダルの怪人グリード…

今日も忙しい日々が始まる

プロローグ（後書き）

次から本格的に書いていきます。いろいろと酷いですが暖かい目で見てくださいと嬉しいです

設定（前書き）

最初にちよつとした設定です。

いろいろと変わっています

設定

話はオーズが対ウヴァ戦。バカテスとは三巻からで行います

バカテス、オーズ、まどかマギカ、なのはからキャラが登場します
増やしていく予定はあり、オリジナルライダーが登場します

なのはやマギカでそれぞれ力は使えますが勝手ながら女性の戦いを
現すのが苦手なので、たぶん明久のサポート以外の人は使わないと
思います

設定では普通の学生としてやっていく予定ですので気に入らない方
はお下がりにください

吉井明久

Fクラス、主役

『観察処分者』

ひょんなことからアंकと出会いオーズとなった

何故オーズになれるのかは不明である

毎日いろんなことがありすぎて彼に欲望というものは存在しない
召喚獣は原作と同じだが、

300点越えになるとオーズになる

ちなみにオーズのことはAクラスとの試験召喚戦争でたいがいの人

が知っている

アंक

Fクラス

訳あって文月学園に転校扱いで通うようになる。

好物はアイスで明久にコアメダルを集めさせようと利用する。頭は
かなりいいのだが態度が悪いことでFクラスになった。召喚獣は鳥
のようなグリードでアंकクロストに似ている

ここからはみんな原作と同じ設定ですが一部を変えているのでその
人だけ紹介します

姫路瑞希

Fクラス

明久が好きでフェイト、ほむらと一緒に勝手に『明久恋愛憲法』を
作った↑明久は知らない

なのは

Fクラス

明久の古くからの友達の一人で明久に危害を加える人を問答無用で
こらしめる

例：アंक、雄二、島田

数学、家庭科、化学以外はかなり苦手

オーズとして戦う明久を心配しサポート係として一緒に戦う

フェイト

Aクラス

明久のことが好きで『明久恋愛憲法』を勝手に作った一人
なのはと一緒に危害を加える人をこらしめる。サポート係の一人

まどか

Bクラス

まどかはほむらに勉強を教えてもらい見事にBクラスに進級できた。明久とは古くからの知り合いで無理をしている明久を心配しサポート係になる

ほむら

Bクラス

まどかに合わせBクラスになった。試験召喚戦争に負けた時根元に変わって代表になった。いつもクールだが明久の時は乙女な子になる。サポート係の一人。『明久恋愛憲法』を勝手に考えた

いろんな設定をしています但全部は書けないのでメインキャラだけを書きました

ちなみに気になるCPはこうです↑ならないよ

明久↑瑞希、フェイト、ほむら

雄二↑翔子

島田は明久ではなく違う人と絡ませる予定です。すみません

ムッソリーニ↑工藤、はやて

アंक↑杏子、？

バーズは誰と思ったそこの方！後藤さんでも伊達さんでもないんですよ！

ヒントは明久の身近な人です！

更新は遅くなると思いますが是非とも興味がある方は見ていってください！

グリードとデートと緑のメダル（前書き）

遅くなりました！やっと一話目更新です！

バカテスト 化学

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為火に掛ける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点と、マグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希、フェイト・T・ハラオウン、ほむらの答え
酸素と反応して危険であるという点。

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、三人は引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

アングの答え

『コアメダルを使わなかったからだ』

教師のコメント

そこも問題じゃありません。

アंकの答え

『アイスを作らなかったせいだ』

教師のコメント

アイスは関係りません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

グリードとデートと緑のメダル

吉井明久の朝は早い。

「こつちが夕食で。」

「明久。アイスよこせ。」

腕だけの怪人アंकが僕にアイスを要求してくる。まったく朝からうるさい奴だ。

「そんなものあるわけないでしょ。」

事実上アंकがすぐに食べてしまうから、僕なんてアイスを食べたことすら最近は無いや。

「ああ！？ふざけんな！」

腕だけの怪物がうるさいな。

「じゃあこれ食べてなよ。」

そういつてアंकに渡したのは…砂糖。

「ああ？なんだこれ。」

「砂糖だよ。アイスも甘いんだし、変わりになるでしょ。」

「ふざけんなあ！！アイスとこんなザラザラしたもんを一緒にすんな！食えるか馬鹿が！」

「そんなこと無いよ？僕は食べるよ？」

そういつてアंकに砂糖を口を開けて入れようとする。

ちなみにアंकは腕だけの怪物だけど、ある時、ヤミーに襲われた人の体に乗っ取り人間として活動している。

「ああ！？てめっ何しやがる！！」

この！！強引にでも…。

「くっ…！？ぐああ！！」

僕の家からアंकの叫びが響き渡った。

「はあ…下手に使えないよなあ…」

僕は財布の中を見てため息をつく。

今日はAクラスとの試験召喚戦争で負けた後、三人に無理矢理？出掛ける約束をされたんだ。

「雄二のせいで…」

思い出すだけでイライラが収まらない。

雄二い…絶対に殺す…。

雄二が負けたことで同時に僕の食費に大打撃が与えられることになるとは。

ちなみに三人と言うのは…

姫路さん、フェイト、ほむらさん…

「さてよ…これはひょっとしたらデートじゃないか…。そうだよ！これはきつとデートだよ！それならちよつとやそつとの出費全然平気じゃないか！」

けど僕は知らなかった。まさかグリードと戦うことになるなんて…。

気持ちを切り替え僕はステップを踏みながら集合場所である噴水広場に向かった。

あつ三人共集合時間までまだ30分あるのにもう来てる。

『瑞希の服可愛いね！』

『そんなフェイトちゃんやほむらちゃんだって可愛いですよ！』
『ありがとう瑞希。ほむらも可愛いね♪』

『ありがとう二人共…。二人も似合ってるわ。』

うんうん。みんな楽しくて何よりだ。それにしてもみんな似合ってるなあ…。

ほむらさんがいつもと違って足の肌が見えている…。

何だろう…普段肌を隠してる子が露出した肌を見せると…何というか…新鮮で可愛いらしい…

「はっ！いかんいかん！」

僕は自分の妄想にストップをかけ現実に戻る。

早くみんなの所に行かなくては

『みんな準備…出来てる？』

『はい／＼！』

『…ええ／＼』

うん？何だろ？フェイトが何か言った瞬間、三人共頬が赤くなったような…。

『『今日は明日の朝まで帰らない（りません）！』』』

「なっ！？」

思わず声が出てしまった。いや出さずにはいられない…。

やっぱりデートなんかじゃない！あの三人一体僕に何をする気なんだ…！まさか死刑？

『あっ！吉井君！』

『明久！』

『吉井…』

三人が僕に気づきこちらを振り返る。凄い勢いで…

まずい…捕まったら最後…僕は…

「やあ…みんな………」

『『……』』

「ごめん！ちよつと用事がっ！」
その言葉と同時に全力で走り出す。
三人はすぐに気づいた…

後ろを見ると

『逃がさない…』とほむらさんが言いもの凄いスピードと追いかけてくるではないか

しまった…ほむらさんは魔法少女…身体能力が半端ない。
いやほむらさんだけではない…
フェイトも瞬速なみにスピードを出し追いかけてくる

くそっ！完全に二人の力を忘れてた…

『止まれ』

急に目の前のトンネルから緑色の服を着た男が現れた。
僕はぶつかるのを避ける為に仕方なく足にブレーキをかける。

「誰かわからないけどどいてくれない？ちよつと急いでいるんだ！」

『断る…貴様からコアメダルを貰うためになあ…！』

男が上半身が緑色の怪物に変わる。

見た目からして虫の怪物だ。

ん？コアメダル？怪物？

「まさか、こいつがアंकの言ってたグリード…！」
アंकは僕に出会って間もない頃グリードについて話してくれた。

完全復活の為にアंकからコアメダルを取り返そうとしている怪物
ヤミーの生みの親…。

ちなみに以前はカザリとかいうグリードと戦ったっけ？

『俺のコアメダルを返せ！！』

そういつて緑色の怪物…アंकによるとウヴァと言っらしいグリー
ドは頭から電撃を放ってきた。

「うわあ！危な！」

どうにかかわす。なんでこんな時にいい！

そこにほむらさんとフェイトが追いつく。

『吉井！』

「駄目だ！来たら危ない！」

僕は電撃を避けながらほむらさんとフェイトに叫んだ

『なんだあ…あの小娘共は』

「！？やめろ！彼女達には手を出すな！」

ウヴァがほむらさん達を襲わないように必死に叫ぶ。

『大丈夫だ…俺が興味があるのはコアメダル』

なんだ…良かった。

『つまり貴様を殺して奪い取る…』

良かった良かった。フェイトやほむらさんには被害が及ばないんだね。

ん？コアメダル…貴様っ？

まさか…

『貴様を殺す』

えええ！？

「うわあ！ちよつと待ってよ！」

僕はウヴァが放った電撃をかわしながら逃げる。

「えっ明久！？」

「フェイト！ごめんどいてどいて〜」

フェイトが目の前にいたので避ける。

『ちょこまかとしごかしい！ふんっ！』

「あっ！危ない！」

僕を狙って放った電撃がほむらさんに当たりそうになり、ほむらさんを庇いながら僕は攻撃を避ける

「大丈夫ほむらさん？」

「ええ ありがとう」

「明久！ほむら！大丈夫？」

「ありがとうフェイト。この通り大丈夫！」

僕らはウヴァが迫ってきた為、すぐに全力で走り出した

「うっ！なんでよりによってグリードなんかに！」

「グリード？」

僕の隣を走っているフェイトとほむらさんが尋ねてきた。

二人はグリードなんかわかる訳ないよね　でも今は話している暇はない！

「ごめん二人共後で話すよ！」

『おい！明久あー！』

どからか僕を呼ぶ声が…

「まさかアंक！？」

周りを見渡すとおおきな木の上にアंकがいた。

「アंक？」

「アंक！なんであんな所に」

二人はアंकに気づき、僕はアंकがいたことに驚いた

「お前がもしかしたらグリードに会うかと思ってな…どうやら当たりのようだな」

こいつ！僕がグリードと会ったのを知ってたのか？

「お前は究極の馬鹿だからな。グリードといつ会おうがおかしくないからなあ」

「きゅ…究極の馬鹿ああ！！？アंकうつ！貴様あ！！」

『何ごちゃごちゃやっていやがるアंक！』
後ろを見るとウヴァが迫ってきていた

「うわあ！！アंक！メダル！」

「ふん…取られるなよ。」

そういつてアंकは僕に三つのメダルを投げる

僕はドライバーを取り出し腰につけると同時にメダルをキャッチした

「フェイト！ほむらさん！離れてて！」

僕は迫ってきたウヴァを足で蹴り飛ばし、フェイトとほむらさんに離れるように言った

「わかったわ。」

フェイトとほむらさんは頷きアंकの方へ行った

「さて…いくぞ！」

僕はドライバーに三つのメダルをセットし横にあるスキヤナーでメダルにスライドさせ読み込む

「変身！！」

『タカ！トラ！バッタ！』

ドライバーから三つのメダルの名前が聞こえメロディーが流れる

『タットツバ！タトバ！タットツバ！』

その途端、僕の周りにメダルが現れそれはひとつのサークルになり

僕の体に刻まれる同時に僕の姿は変わり仮面ライダーオーズとなった。

「ハッ！」

敵に向かって構える

『俺のメダルを勝手に使うな』

ウヴァが苛立つように言い放つ

「俺の俺の言うけどさ 今はアंकのものじゃないか」

『うおっ！！』

ウヴァはさらにキレて僕に向かってきた。

「ハアア！！」

僕も走り僕は蹴りをウヴァは拳を放つ

「ぐわっ！」

『ちいっ！』

同時に当たり火花がちる

「おりゃあ！」

『ふんっ！』

次は拳を同時に放つ

僕はウヴァの爪が体に当たり後ずさる

「ぐあっ！」

さらにウヴァは爪で攻撃する

「ぐうう！パンチじゃ不釣り合いか！」

腕についているトラのクローを展開させウヴァにクローで上からアッパーをするように切り裂く

『ぐあ!』

「ハアッ!」

怯んだ所をさらに蹴り飛ばす

『ごさかしい!』

「うわああ! ちよっ危ない!」

ウヴァは頭から電撃を放った。僕は腕をクロスさせ電撃から身を守る

『返せ!!』

ウヴァはベルトに手をのばしバッタを取ろうとする

「させるかあ!!」

僕は隙についてウヴァにアッパーをくらわせる

『ぐうつ!』

ウヴァは吹っ飛び建物にぶつかった

「凄い。怪物を圧倒している」

フェイトが驚きながら見ている

「あれがオーズの力!」

ほむらさんも静かにつぶやく

「いや! オーズだけじゃない。明久がオーズの力を上手く引き出している! いやそれ以上か」

アंकは起き上がるウヴァを見ながら感心したように言う

『くっ俺が圧倒されているだど? ふざけるなあ!』

「ぐあああ!!」

ウヴァが放った電撃が僕に直撃して僕はたまらず吹き飛ば
さすかはグリードといった所か…
って…

「あちち!! 尻が燃えてるう!」
僕は火を消そうと走り回る

ガン!

「いたああ! おうう!」
ライドベンドーぶつかり頭を打つ

「さすがはグリード…やるじゃないか!」

『いや…貴様が自爆してるだけだろ』

ウヴァは呆れたように言い放つ

「やっぱり…馬鹿だからか…」

アंकはため息をつきながら呟いた
…アंक…

明久がウヴァを圧倒してるがこのままだと馬鹿してメダルを取られ
ちまうな…

「おいウヴァあ!!」

俺はウヴァに聞こえるように叫ぶ

「知ってるか？お前のコアメダル…カザリが持っているぞ！」

「何…カザリが？」

やはりな…

「やっぱり知らないんだなあ！俺達はカザリにカマキリのメダルを取られたんだよ！」

ウヴァの奴…かなり同情していやがる
今がチャンスか

「おい明久あ！！こいつに変えろ！」
俺は明久にチーターのメダルを投げる

「こういうことあまりよくないけど…今は仕方ないよね！」
バッタからチーターにメダルを変えて読み込む

『タカ！トラ！チーター！』

バッタの部分が黄色い足に変わった

：フエイト：

「あつ…緑色から黄色に変わった！」

私は驚きながら明久の方を見る

「三色から二色になった…」

流石にほむらも驚いてる

「はああああ！」

その瞬間明久は高速でダッシュした

「凄い…私でもあんなスピード出せない」

さつき読み取ったのは…チーター…

つまりチーターの力を引き出してることね…

「セイヤアアア！」

加速して放った蹴りが怪物に直撃した。怪物は後ろへ吹き飛ばされた！

：明久：

『うおおお』

僕が放った蹴りでウヴァは吹き飛び途端にメダルが散る

「あつ！あれってコアメダル！？」

その瞬間、アंकが人間から離れ二つのメダルを掴みすぐに戻っていった

「はっ！揃ったなあ…」

アंकの手にはカマキリとクワガタが握られていた

グリードとデートと緑のメダル（後書き）

ぐだぐだで始めましたが頑張っています！

映画とフェイトと女の欲望（前書き）

「最初に」

この小説は原作オーズと全く話が異なります。
多少は合わせて行く部分もあります

さて今回はフェイトがメインのお話になります！
上手く書けない（笑）

映画とフェイトと女の欲望

：明久：

『く…俺のコアメダルが…』

虫のグリードウヴァはコアメダルがなくなりカザリと同じように体の鎧が破壊されよるめいていた

「よし！このままとどめだ！」

『ちい！』

僕がウヴァにとどめをさす前にウヴァは電撃を放ちその場から逃げ出した

「うわ！あつ逃げられちゃった」

「ふんまあ…いい」

僕は変身を解きアंकの方へ歩く
アंकはさっき奪った緑色のコアメダルを見ていた

「「揃ったってどういうこと（ですか）？」」「」

フェイト、ほむらさん、姫路さんがアंकに詰め寄る
僕も気になるなあ…

って姫路さんいつの間に！？

「ああ…さつき明久が変身した時…使ったメダルはタカ、トラ、バツタだったよな？」

「うん。あとはチーターだったね」

「コアメダルは各種類が三枚揃った時本当の力を発揮する」

アंकは僕達の方を見ながら淡々と話す

「そして、各三枚を使った時コンボが成立する」

「コンボ？」

「ああ…同じ色のコアメダルが三枚揃った時になれるオーズの進化形態だ」

コンボ…オーズの進化形態…

「俺がさつき手に入れたクワガタ、カマキリ。そしてお前が使ったバツタ…こいつでガタキリバコンボが成立する」

「ガタキリバ…コンボ」

フェイトがアंकが握っているコアメダルを見ながら言った

「ではさつきのチーターを使用した時は亜種ということですね」
さすが姫路さん。回転力が早い

「へえ…使ったら強いのか？」

「強いというレベルじゃない。簡単に街一つ破壊できる」

アंकを除くみんなが黙り込んだ。

でも逆に考えたら戦いが有利になるってことだよな

「そっいえばグリードって何なの？」

ほむらさんがアंकに向けて尋ねる

「グリードというのは800年前にいたメダルでできた怪物で俺もその一人だ。グリードは俺を含め5体いる」

「5体…」

「つまり他のグリードもコアメダルを持っているってことね…」
フェイトが僕を見ながら呟く

「明久。今から鴻上の所へ行ってメダルの件について話してくる」
アंकはそういうと木から飛び降り歩き出した

「あつ僕も行くよ」

「ああ？お前用事あんだろ？」

えっ？用事って何かあったかな？

何かオーラを感じたので振りむいてみたら

「明久。さっ行こう」

フェイトがにこにこしながらそう言った

しまった！出掛ける約束！

「逃がさないわ。」

方向転換しようとした僕をほむらさんが腕を掴んできた…ちょおおっ！

当たってる！なんか当たってるうつ！「現在9時ですから時間はまだ沢山ありますね」

姫路さんがそう言いながらほむらさんが抱きついている逆の腕に抱きつく

うわわわ！当たってる！二人共プロポーションが凄いから…

「さっ行こう明久」

フェイトが何故か不満そうな顔をしながら歩き出した

はあ…仕方ない。死を覚悟するか

さて…アंक上手く行くといいけどなあ…

：アंक：

俺は鴻上の前に立っている。

奴には剣やカンドロイドなどバックアップで世話になっててなあ

昨日明久がチーターを手に入れた時にセルメダルを70%よこせと言ってきやがった

勿論70%渡せばオーズをバックアップする為に様々なことをしてくれるらしいが…

「70%も渡せるか!!」

「ではオーズの補助の件はなくなるのだが」

鴻上はにこにこ笑いながらパソコンを見ている

「30%だ！30%なら譲ってやる！」

「NO！70」

くっ…ふざけやがって

俺は赤いジーンズのポケットあたりを握る。

んっ何か感触が

「アंक君なんだねそれは？」

鴻上が俺がポケットから取り出した紙に興味津々に眺めている

こいつは明久が渡した紙！

『アंकもしもの時にこれを使ってよ』

昨日乗り込みに行くと言った時明久が何か書いて渡したきたんだっけなあ

「…こいつを明久がお前にと行ってやがった」

鴻上は俺からさっきの紙を受け取り中身を読み始めた

「素晴らしいiiiiiiii！！やはり彼は面白い」

鴻上は笑いながらもイスから立ち上がりその紙を里中と言う秘書に渡した。あん？何が書いてあったんだ？

「里中君読んでくれたまえ！」

セルメダル交換の件について

『僕は思いました。さすがに70%は厳しいのでは無いかと。そこで提案があります！

セルメダルを50%にして欲しいんです。やはり半分半分の方が互いに納得できますし、もしも大量に稼げたなら平等に振り分けた後全て余ったセルメダルを渡します。アंकもグリードだからセルメダルが必要になると思うんです。確かにあいつは化け物、グリードです！しかしあいつは人に危害を加えてません。僕はあいつの優しさを学校に一緒に行った時に感じました。あいつはグリードなんかじゃありません！だからここは半分にしてもらえないでしょうか？お願いします』

「吉井君は面白いよアंक君。ヤミーやグリードと戦うのは彼。彼は君の存在を知っていながらも君の為にセルメダルを稼いでいる」

「……」

馬鹿かあいつは。俺はあいつを利用しようとしているだけだ
あいつも気づいているはずだ

「彼は優しすぎる。そして面白い。確かに君はセルメダルを必要とするね。そして我々も必要とする。確かに吉井君の言う通りフェアにすべきだ」

鴻上は高らかに笑った

「素晴らしいいい！良いだろう吉井君の言う通りフェアにしようじゃないか！だが余ったセルメダルは我々が貰う。いいねアंक君？」

「まあ70%取られるよりましかな…良いだろう」

「では吉井君に感動した私からのプレゼントだ受け取りたまえ。里中君！」

そう言った後里中が俺に渡した物は…カンドロイドセットか

「私も吉井君を見習って50体にしてみたよ。吉井君に渡しておいてくれたまえ」

「ハッ！お前にしちゃあ随分と気前がいいなあ」

フン！明久に感謝だなあ…

俺はそう思いながら外に出た

俺の何かが変わりつつある。まるで俺が俺ではないかのようにだ
ハッ奴の言う通り明久は変わった奴だ

：明久：

チケット一枚千円！ポップコーンLサイズ三百円！これが数時間に
して一気に減って行く…映画館なんて恐ろしい場所なんだ！

「あの…明久君」

「なあに姫路さん？」

姫路さんはたどたどしくしながらポスターに指をさす

「これ見ませんか！？」「これって今人気の恋愛映画よね？」

姫路さんが叫んだと同時にポスターを見てフェイトが目を潤ませる

「明久これを見ない？」

ほむらさんもか…

僕はもう一度チケット代を見る

千円…僕も見たら四千円か…

食費をもたせるにはとてもきつい

「明久どうしたの？」

ほむらさんが心配したのか僕に声をかけるが僕はチケット代が書い
てある看板とにらめっこをしていた。くう仕方ないか…

「三人で見えてきてよ。僕は待つてるからさ」

なるべく笑顔で答えたが三人は急に財布を取り出す

「ちょっと別に足りない訳じゃないから！ちょっと買い物しなきゃな
あゝて」

「まさか逃げる気？」

ほむらさんがビシリと言い放つ

なるほどその手があったけど今じゃもう無理か

「嫌だなあゝほむらさん。本当に買い物だった」

実際買い物したいのは本当だ。アंकのアイスも買わなきゃならなし夕食だって買わなきゃ…その為に今まで買ったゲームや漫画を半分以上持ってきたからね

「でもその鞆重たそうですよ？」

くっさずが姫路さん。すぐに鞆を指摘してきたか

「大丈夫だよ！すぐに軽くなるから」

「「？」」

ふと時計を見たら上映まで時間がないじゃないか

「あつ始まつちゃうね」

「やっぱり三人で見えてきてよ！」

「諦める明久…男とは…無力だ」

この声は…

「雄二！？」

声が出た方を見ると雄二が手錠につながり綺麗な服を着た霧島さんに連れられているではないか

「…雄二。何が見たい？」

「俺の望みは叶えられるのか？」

「…じゃあ戦争と平和」

「おい！それ7時間40分もあるぞ！」

「…二回見る」

「14時間80分も座ってられるかあ！」

「…暇なら寝てていい」

『バリバリ』

「待て翔子！！なんだそれはがああああ！」

雄二がスタンガンをくらい霧島さんに連れて行かれてしまった

「雄二…幸せにね…」

僕は雄二を見送った後にカウンターにいる人に声をかける

「すみません！この映画のチケットを四人分欲しいのですが…」

「申し訳ございませんお客様！この映画は人気でして今は二席しか空いております」

二席か…仕方ないよね

「じゃあ二枚お願いします」

「わかりました！二千円になります！」

僕は財布から二千円取り出しレジ係の人に渡した

「ありがとうございました！間もなく上映なのでお急ぎください」

「ごめんみんな…もう二席しか空いてなくて…二人しか見れないん

だ」

「仕方ないよね… 人気なんだから」

フェイトが残念そうに呟く

「では公平にじゃんけんしませんか？」

姫路さんの意見でみんな納得したようだ。よし負けるように頑張るか

「じゃんけんほい！」

僕：パー

姫路さん：チョキ

フェイト：パー

ほむらさん：チョキ

「ありやく負けちゃった」

「私も負けちゃった」

「あつ… 勝ちました」

「… 私も」

ナイスだ僕の手！勝ったら骨を壊すところだったよ

「勝ったのは姫路さんとはむらさんだね。はいチケット」

何故かチケットを受け取った姫路さんとはむらさんは残念な顔をしながら僕が勝ったジュースを受け取り中へ入っていった

：フエイト：

「ごめんねフエイト。フエイトだけ見れないね…」

「別にいいよ。」

瑞希、ほむらごめんね。これで明久を一人占めできる
今は9時30分…映画は2時間ね…

「暇になったね明久。…？明久？」

振り返ってみると明久がいなくなっていた。
周りを見渡してみるけどいない

「明久？」

まさか逃げられたのかな？

『じゃあな真美！！』

『待って公平ー！！』

ふと声がした方を見てみるとカップルの人が喧嘩をして別れてる…

「…私もあんな風に明久に捨てられるのかな…」

明久は私のことをどう思っているんだろう…私はいつでも本気だよ
明久？

「ねえ君！」

ふと声がしたのでそちらを見るとさっき女の人を振ったの男の人が
私の前に立っていた

「君かなり可愛いね〜！どう？俺と付き合わない？」

「お断りします」

「どうしてさ〜幸せになれるから!」

さっき振った人が幸せにできるだろうか

「すみません。お断りします。」私はそう言って去ろうとしたんだけど

「ああ!?!なんだてめえ!せつかく人が付き合ってやろうと言ってんのによお!」

「痛っ!離してよ!!」

男は私の腕をつかみ引っ張ってきたから私はバッグでその男の頭を思いきり叩いた

「痛ってええ!ふざけんなあ!」

男がぶちぎれて私は即座に逃げ出した

周りの人に助けを求めようか?いや助けてくれそうにない

「きゃっ!!」

今日はオシャレしてハイヒールを履いていたからとても走りにくくこけてしまった

「ぶん殴ってやるぞオラアア!」

男が私に追いつき拳を構える

助けて明久！！

「させるかああああ！」

急にジェット機のようなスピードで明久が走ってきてナンパ男に思いきり蹴りを放った

「ぐほああああ！」

男は叫びかなり吹き飛んでいった

「明…久。」

：明久：

「大丈夫フェイト！？」僕はフェイトに手を貸し起こしてあげた

うかつだった。ゲームや漫画を売りに行っている間にフェイトが男にナンパされてたなんて

フェイトには本当にとんでもない迷惑をかけてしまった

「フェイト逃げるよ！またあの男が追ってくるかもしれない」

「うん…」

フェイトの手を優しく握り僕とフェイトは二階へ急いで逃げた

「ごめんねフェイト…何か言っておくべきだった…」

「いいよ…明久助けにきてくれたから」

フェイトは微笑みながら頬を赤くした

フェイトの微笑みはやっぱ癒やされる

髪は金髪でorousしてあり、瞳は綺麗な赤色。おまけにプロポーションもいい…フェイト程の美人…ナンパされるのは当たり前だよ…

勿論姫路さんやほむらさんも素晴らしいよ

「フェイト…お詫びと言つてはなんだけど服をおごるよ」

「本当！？嬉しい！」

良かった喜んでもらえた

「じゃあ行こうか。」「明久…」

フェイトが頬を赤くしながら上目遣いでしゃべる

「腕…掴んでもいいかな？」

上目遣いされたんじゃ断れないや

「うん…さっきのこともあったからね」

フェイトは僕の腕に抱きつき歩き始めた

何か当たってるような…

当のフェイトは嬉しい顔をしているからよしとするか

：姫路：

『ミリア！エリー！桜！由希！真里！みんな一緒に暮らそう！みんな俺の妻だ！』

『『賢治！！』』

『結婚しようみんな！』

はわわ…私とほむらちゃんは顔を赤くしながら映画を見ている。

まさかこんな展開があるなんて！！

：真美：

「公平に振られちゃった…」

今まで彼を一生懸命愛してきたのに…私どついたらいいの？

『育ってる育ってる。早く生まれてね私の子供達』

映画とフェイトと女の欲望（後書き）

どうでしたか？次はいよいよピラニアミーと戦います。

クレープとロングヘアと女の欲望の秘密（前書き）

遅くなりました。続きを更新しました
良かったら見てください！

明久と三人の恋愛関係が難しいです

クレープとロングヘアーと女の欲望の秘密

「明久…似合う…かな？」

その姿を見て僕は頬を赤くした。

可愛いを通り過ぎ綺麗がふさわしいくらいだ

フェイトは上を黒い服を主張とし、ピンクのミニスカートを履いてる

「明久…？」

「……！！ああ！うん淒く似合ってるよ！！」

畜生！困った顔したフェイトも可愛いすぎる！

「…！嬉しい…なあ」フェイトは両手を頬につけ赤くなっている

フェイトとは昔からの付き合いだけど…こんなに美しくなったんだ…昔から見てきているから気づけなかったただけかな？

「明久…」

「うん？何？」

「もしもだよ。明久が好きな人が5人いて…」

もしものレベルを越しているような…

ちなみに僕が異性として好きな人は3人しかいないよ

「もし同時に5人に告白されたら…明久はどうするの?」

フェイトが少し暗い顔をしながら尋ねてくる。彼女にとっては何か大切そうだな…

よし…僕も真面目に答えようじゃないか

「そうだね…僕ならきつと5人とも受け入れるかな…大変だと思うけど…やっぱり好きな人とは一緒にいたいしね…」

僕が顎に手をあてながら考えているとフェイトが目の前にいた

「ありがとう明久!明久はやっぱり優しいね…」
フェイトが微笑みながらそう言う

何故お礼を言われたかわからないけどやっぱり彼女にとっては大事そうなことなんだろう…

真面目に答えて正解だったね

しばらくフェイトといろいろな所へまわってから姫路さん達と合流した

：姫路：

「明久君!」

私は明久君に手を振りながら映画館からほむらちゃんと一緒に出ました

とても感動して…途中から涙が止まりませんでした…うっ。

「ありがとう明久。たまには映画もいいものだわ。」

ほむらちゃんが微笑みながら明久君に飲み物を渡してきました
ほむらちゃんはめったに笑わないので微笑んでほむらちゃんはとても可愛かったです

「ありがとう。喜んでもらえて何よりだよ。」

頬を赤くしながら答える明久君は素敵です！

「フェイトちゃんそれ…」

私はフェイトちゃんが持っている物が気になり尋ねてみますと

「これ…明久に買ってもらったの」

とフェイトちゃんは微笑みながら明久君の腕を握りました

うっ…羨ましいですう。

「明久君！お昼ご飯はどうします？」

「うーん…そうだね…」

「吉井。前に美波から教えてもらった店があるけど…そこにする？」

「じゃあほむらさんに任せるよ。なんて店？」

「ラ・ペデイスと言う場所らしいわ。」

「じゃあそこに行こう。姫路さん、フェイトいいよね？」

「勿論です！」

「うん！私もいいよ」

私達四人はラ・ペデイスへと向かうのでした。まさかこの後にあんなことが起きるなんて私達はまだ知りませんでした

：真美：

なんで…なんでよ

なんで私…

私は公平に振られた

あんなに私を信じてくれたのに。あんなに私が好きだって言うてくれたのに

どうして？

私は涙をこらえ店の中をあてもなく歩いていた
ふと周りを見ると仲のいいカップルが歩いている

許せない！私だけ私だけ！

拳を握りしめ周りにいるカップルを睨む

「あれは…Fクラスの吉井明久？なんであんなに仲良く姫路さんや
フェイトさん、ほむらさんと話しているの？」

彼女達は成績優秀で学園主席の力を持つ人達だ。
それなのなんであんな馬鹿と一緒にいるの？
どうして？

「吉井：明久。あんな馬鹿がなんでモテるのよ」

私は吉井を含め仲のいいカップル達を潰したい…潰したい！

：メズール：

『生まれるわ…』

彼女は仲のいいカップル達を潰したい…という欲望により彼女に入れた欲望のセルメダルは十分に育った。

『さあ…どんな力を見せてくれるかしら？フフ』

彼女の部屋を見るとふ化した大量のピラニアのヤミーが彼女の部屋から現れ外へと出て行った
彼女の欲望を叶える為に

：明久：

何故こんなことになってしまったんだ

僕の目の前の席と隣に座っていた姫路さんとほむらさんは僕にクレ
ープを刺したフォークを差し出し、頬に何か感触があったので横を
見るとフェイトがニコニコとクレープを刺したフォークを当ててくる

ことの発端はフェイトだ

『美味しいです！このイチゴクレープ』

『私のチョコクレープも美味しいわ…』

『私のマロンクレープも…美味しい！』

姫路さんがイチゴクレープ、ほむらさんがチョコクレープ、フェイトがマロンクレープを美味しくそうに食べている

うん。やっぱり女の子は甘い物が好きなんだね…

三人の幸せそうな顔を見るとつい微笑んでしまう

『明久は…食べないの？』

『僕はいいよほむらさん！ほら食べて食べて』

実はさっき収入を得ただけど、この後、アイスや夕食の材料を買わないといけないから無駄使いはできないんだ

『でも…明久お腹減ってるでしょ？』

『ありがとうフェイト。確かに減っているけ…ズイ』

僕が言い終わる前に三人が一斉にクレープを刺したフォークを差し出してきた

そして今に至る

『はい！アーン！』

「ちょっと待ってみんな？それじゃ口移しのようなことになるよ！？」

『構わないわ（構いません）！』』

ええ！ちよつと待ってくれ

なんで嫌がらずどんどん迫ってくるの！？

「明久あれ何？」

フェイトが外を指を指す

「うん？なん（グイグイ）…！」

気づくと僕の口には三つのフォークが入っていた

「！？」

そして三人は僕の口にクレープを入れた後、普通のようにクレープを切ってフォークに刺し食べている

僕の口に入れたフォークを自分達の口へ…

僕は頭から湯気を出し俯きながらクレープを味わった

「あの…明久？」

顔を上げるとフェイトが赤くなりながらしゃべる

「明久…ってどんな子が好みなの？」

いきなり何を聞いてくるんだろう。

「いや そのムツツリーニが明久は長い髪の子が好みって言うから」

ムツツリーニイイ！

何故、僕の好みを知っているんだあ！これじゃ彼女達に僕が好きだって誤解を招くじゃないかあ！

彼女達は僕より雄二が好きなはずだから…

よし！ここはわざと外して誤解を解こう！

「そうだね…実は三つ好みがあつて…一人はふわふわのピンク色をしたとてもおしとやかな子が好みかな…

二人目は金髪でストレートで瞳が赤くて元気な子

三人目は黒い髪でストレート。性格はクールでもの静かな子が好みかな」

よしこれで大丈夫…あれ？なんで三人共赤くなりながら俯いてるの！？

はっ！？

僕はさっき言ったことを思い出した

しまった！つい本音を

待てよ…さっきの好みって

一人目姫路さん

二人目フェイト

三人目ほむらさん

「ちょっと待ってみんな！これはその…えと！まさかみんな自分のことだと思ってる？」

『『コクン』』

なんて正直な人たちなんだああ！
ヤバイヤバイよ！

これって…告白に近いよね！？

ああああ！振られるうう！

さらば僕の人生！さらば僕の初恋！

「明久…」

「明久君…」

「明…」

三人が俯きながら僕に声かけ一瞬ビクリと肩が上がる僕

あれ？ほむらさん呼び方変わってない？

『私達は…「バリイイン！」』

三人が何かを言う前にラ・ペデイスの入り口が破壊される

「！？なんだ！」

僕はすぐさまみんなと外に出た。

そこには…

一人の女の子とピラニアのヤミーが男女を食べている

「…なんだよこれ！」
『キヤアア！』

叫び声がした方を見ると三人がピラニアミーに襲われそうになっていた

「くっ！危ない！」

とつさに三人を突き飛ばし盾になる

「ぐはっ…」

ピラニアミーの体当たりが当たり僕は吹き飛ぶ

ギリギリ急所には当たらなかったけどわき腹をやられ血が流れた

「ぐ……みんな逃げて！」

「でも…明久」

「早く！！！」

僕は三人に大声で叫ぶ

「姫路、フェイト、行くわよ」

ほむらさんが苦しい顔をしながら二人を連れて逃げる

「逃げられたわ…」

声が聞こえそちらを向くと知っている人がいた

「君は…Dクラスの真美さん…」

真美さんは僕に気づき暗く微笑んだ

「こんにちは吉井明久…」

「まさか君がこのヤミーを!？」

「そうよ。これが私の欲望の化身」

ピラニアヤミーが噛みつこうと突進してきた

「うわ!」

すれすれでかわせたけど軽く数千体はいる…よければすがない

「ぐはっ…」

「あははは! いい気味だわ!」

「何故だ真美さん! 何故こんなことを!」

「私は公平に振られたのよ。」

真美さんは唇をかみしめながら呟く

「私はあの人に全てを注いだのに! あの人を全てを愛したのにいい!」

「ぐは…真美さん…」

「あの人は私を振った…目の前の金髪の子に一目惚れしたのよ」

「そんなんっ!」

僕は必死に避けながら叫ぶ

けど叫びは彼女には届かない

「そして…一目惚れした相手はAクラスのテストロッサ」

「!!」

そんな…フェイトが一目惚れの相手だったなんて…

そして僕はさっきのことを思い出した

それはフェイトをナンパしようとした奴のことだ

「私は許せなかった。テストロッサが。テストロッサが私の公平を奪ったんだわ…そして吉井明久! あんたも許せない!」

「!!」

「なんであんなのような馬鹿がモテるのよ?」

悲しくなってきたけど落ち込んでいる暇はない

「けど…君のヤミーのせいで多くの人の命が失われるんだぞ!?」

「あははは! もう構わない! 私の欲望が満たされるまで他人の命なんかどうてもいいのよ!」

そんなこと許されるはずがないよ!!

「僕が君の欲望を止める!」

僕はピラニアヤミーから離れドライバーを腰につける

そして三枚のメダルをセットする

「変身!!」

わき腹の痛みに耐えながらスキヤナーを取り出し三枚のメダルを読み込む

『タカ！トラ！バッタ！』

『タットツバ！タトバ！タットツバ！』

僕は仮面ライダーオーズに変身しメダジャリバーという剣を取り出した

「いくぞ！うおお！」

僕はピラニアミーの軍勢に立ち向かって行った

クレープとロングヘアーと女の欲望の秘密（後書き）

明久：次回はいよいよガタキリバの登場でーすう！

フェイト：なるべく早く更新するらしいから見ていってね（ニコッ

故障と覚悟と緑のコンボ（前書き）

遅くなりました！続き更新します！

故障と覚悟と緑のコンボ

「うおりゃあああ!」

僕はピラニアヤミーの軍団をメダジャリバーで切り裂く

けど…切っても切っても一向に数は減らない

「うわっ…くそっ…」

メダジャリバーで回転切りしながらピラニアヤミーを蹴散らす

「はあっ!」

そして片手で持ち真っ二つにする

こうしていけばピラニアヤミーの攻撃を少しでも防げる

「うっ…ぐあっ!」

く…さっきくらった脇腹の痛みでメダジャリバーを落としてしまう
そして、ピラニアヤミーの軍団から攻撃を受け吹き飛ぶ。くっ…このままじゃまずい!

「く…ならクローで!」

僕がトラクローを展開した同時に叫び声が聞こえた

「!真美さん!?危ないっ!」

僕はピラニアヤミーに襲われそうになった真美さんを庇う。ぐあっ…

「大丈夫真美さん?」

「どうして…どうして私なんか」

「真美さんがやったことは確かに悪い。」

真美さんは俯きながら涙を流し始めた

「私……どうすればいいの？」

僕は黙るしかなかった。本当は彼女は悪くないはずだ…
そして僕に一つの答えが導き出された

「真美さんは頭もいいし、可愛いけど…」

僕は仮面の中で笑った

「ただ…男を選ぶのが下手くそなのかもね」

僕はそう言って真美さんの頭にポンと手を置く

さて…このヤミーをどうにかしなきゃ！

「僕は今から…君の欲望を止めにくよ」

僕はそう言って真美さんの頭から手を離し再びピラニアヤミーに向
かっていった

「どうして…人殺しなんて言わないの？」

：アंक：

俺は鴻上から貰ったカンドロイドを手に明久の元へ向かう

このメダルがたまる感覚…

メズールのヤミーか…。なら大量に稼げるなあ。

「…チツ明久の奴勝手なこと考えやがって」俺は明久の考えた案の内容を思い出し舌打ちをする

俺が人間だと？ふざけんな 俺はグリードだ！どんな手を使ってでも自分の欲望を叶える

あの馬鹿はその為に利用しているだけだ！

「馬鹿がつ！」

俺は再び舌打ちをしながら明久の元へ向かった

：フェイト：

「明久君大丈夫でしょうか…」

瑞希が俯きながら呟く

「大丈夫だよ…明久は強いから」

あの時だってグリードを蹴散らしてくれたから…

そして明久は絶対ピンチを乗り越える人だから…

「今私達にできることは…明久を信じることよ」

ほむらさんの言葉で私と瑞希は頷いた

「うわああ！なんでええ！」

急に叫び声が聞こえ振り向くと明久がオーズが自動販売機を叩いていた

えっ！？なんでそんなことになってるの！

：明久：

僕は再びピラニアヤミーに立ち向かっていった

けどトラクローが攻撃範囲狭いせいでピラニアヤミーの攻撃を受けながら戦っている

ぐっ…きつい

「こうなったらバイクで一掃してやる！」

僕はセルメダルを取り出しライドベンダーへ向かった

「えっと… あ。あつたあつた」

セルメダルを投入し準備完了！

「よし！変形だライドベンダー！」

シン

あれ？なんで変形しないんだろ？

何度もボタンを押す。けど反応は見られない

あれええ！？

「わああ！セルメダルが出てこなーいつ！」

なんなんだこのライドベンダー！

これじゃあセルメダルを無駄に消費しただけじゃないか！

「明久。はあ 何やってるのよ？」
傍らにほむらさんがいた。

「あれ？ほむらさん呼び方戻って『ゴスッ！』痛ああ！？」

僕の顔面にほむらさんのストレートパンチが直撃した

「やっぱり恥ずかしくなっただけよ」

そう言っただけほむらさんはぷいっと顔を逸らす

なんだ…急に呼び方変えるのって恥ずかしいよね

「で、どうしたの？」

「あっうん。ライドベンドーが変形しなくてさ」

僕はそう言っただけセルメダルをもう一回入れる

「畜生！変形しないよ！」

またセルメダルを無駄使いしちゃったじゃないかあ！

「わかったわ。私がやってみる」

ほむらさんはそう言っただけ足をトントンとしている

いやな予感がする

『ガアアアアン！』

ほむらさんが放った回し蹴りが思いきりライドベンドーに直撃した

ちよつと待つて！ほむらさんスカートだよね！見えちゃうよ！？
僕は必死に目を逸らす

『ガシャーン！』

ライドベンダーが音が聞こえ見てみるとバイクへと変形していた…

「凄いやほむらさん！」

僕はほむらさんの手を取り感動したように言った

うん？ほむらさん顔赤いなあ

「ほら…早く行きなさい！」

ほむらさんは焦ったような声で僕に言った

「うん！ありがとう！」

僕はほむらさんから手を離しバイクへとまたがる

「よおし！行くぞおお！」

ブオンと音を立て再びピラニアヤミーの軍勢へ向かって行った「だ
っしやあああ！」

勢いよくバイクを飛ばしピラニアヤミー達を引き倒していく

ピラニアヤミーは倒れたと同時にセルメダルとなり、次々と倒した
ピラニアヤミーのセルメダルが散らばる

アंकが見たら喜びそうだ

「あれは？部屋？」

ピラニアヤミー達が現れる場所をたどっていくとあるマンションの家の部屋から次々とピラニアヤミーの軍団が出てきている

「よし！」

僕はスピードを更に上げマンションの部屋へ突撃しようとした。

部屋はマンションの二階だからジャンプしなきゃ届かない

「よいしょっ！」

バイクを加速させ一気に部屋へめがけてバイクをジャンプさせた

けどそう簡単にはいかずピラニアヤミー達の妨害を受け僕はバイクから落下した

「うわああー！」

地面へと叩きつけられた後、ピラニアヤミー達に噛みつかれた

「ぐ…痛たたたあー！」

おのれピラニアヤミーめ！これでもくらえ！

僕は拳をピラニアヤミーに放ちバタレグをいかして回し蹴りを放つ

そしてその勢いで後ろへと下がった

『ベシヤっ！』

バタレグの跳躍力が強すぎた為に僕はうまく地面に着地できずに頭を打ってしまった

「痛てて…もう少し弱めにジャンプしておけば良かったかな…」

すぐに立ち上がってマンションの部屋を見るとピラニアヤミーはもう生まれてくる様子がないけど、まだ軽く数千匹はいるな…

「ほうっ！これは大量だなあ」

「アंक！」

ふと声がしたので振り向くとそこにはアंकがニヤリと笑いながらピラニアヤミー達を見ていた

「鴻上さんと上手くやれたの！？」

「まあな…お前の案を使つて上手くいった」

「それは…良かったね」

まさか僕の考えが通るなんて

「…無駄に気を遣いやがつて」

「うん？何か言つた？」

「独り言だ。それより何苦戦してんだ」

アंकは呆れたように僕に言い放つが仕方ないじゃないか！

「タトバじゃ限界があるんだよ！他のメダルに変えれば…」

「無理だな…一つメダルを変えた所であの軍団には勝てない」

「やっぱり無理なのかな…ん？一つ？」

「アंक！コンボならいけるんじゃない？」

「確かに…だがコンボは危険だ」

危険なんで？

「亜種になれるんだからコンボも」

「亜種なんかと一緒にするな。コンボはあまりにも強い為に制御できなかつたり下手したら死ぬ」

僕はアंकが言ったことを黙って聞いていた

「コンボは普通の奴じゃあ無理だ。お前にできるか？明久」

僕は拳を握りしめピラニアヤミー達を見た

「でもコンボを使えたらあいつらを倒せるんだよね？」

「ああ…」

僕にもう迷いはない。やってみなきゃわからないしね

「じゃあ…やってみようかな…」

アंकは黙って僕を見た後、二枚のメダルを取り出した

「ぶっ飛ばされてメダルなくすなよ？」

「わかった」

僕はアंकから二枚のメダルを受け取りその場を走り去る

「明久！」

僕はアंकから少し離れた後、メダルを入れようとした時、声が聞こえその方向を向く

「フェイト……」

フェイトが悲しそうな目で僕に近寄る

「明久……」

「明久君」

フェイトだけじゃない。姫路さんやほむらさんも僕の方へやってくる

「みんな……」

「明久……帰ってきてね？」

「明久。信じてるから」

「明久君……必ず勝ってくださいね？」

やれやれ聞いてたのか……そんなこと言われたらなおさら絶対生きて帰らないといけないね

「大丈夫！僕はこんなことでは死なないよ！」

僕は笑いながら答えポンと三人の頭を軽く叩いた

「「いつてらっしゃい」」

三人は笑顔でそう言ってくれた（上目使いで）

「うん！行ってくる！」

僕はピラニアヤミーの方へ走り去り三人から離れた

よし…ここなら何かおきてても大丈夫！気合いは十分だ！
「さて…行きますか！」

僕は二枚のメダルをドライバーにセットした

三枚揃ったメダルはセットされた時に緑に光った
そしてスキャナーを取り三枚のメダルを読み込んだ

『クワガタ！カマキリ！バッタ！』

ブーンと虫の飛ぶ音が聞こえた後

『ガータガタガタキリバツ！ガタキリバツ！』

歌が響いた

三つのサークルはガタキリバのサークルとなり僕の体に刻まれサークルはタトバからガタキリバへと変わった

「手とカマキリへと変わり顔はクワガタをモチーフにした姿へと変わっていったわ」

ほむらさんが驚きながら言った

「全身が緑色ですね」と姫路さんが言う

体中から力が満ち溢れる

「うおおおおお！」

僕は体中に駆け巡る力を外へと解放した

僕から出た波動が周りに広がる

「っ!？」

アंकが手を抑えて防ぐ

「きゃああー!」

「凄い…力」

「これがコンボ…」

「おおおお！ハアアア！」

砲口を止めて思いきり腕を下ろす

「うおおおお！」

「え！明久が沢山いる！？」

「これは分身！？」

「凄いです！明久君！」

僕はピラニアヤミーへ向かって行き、ガタキリバの力で僕の分身を沢山作りだす

負ける気がしない！

「コンボの力！どれほどか見せてもらうか」

故障と覚悟と緑のコンボ（後書き）

ようやくガタキリバへとなれました！
次回は決着とその後を更新します！

力と反省と決意と…（前書き）

明久：管理人ちよっと

管理人：何何？

アंक：くたばれ

管理人：ぐはっ！？

ほむら：こんなに遅く更新してしかも内容が曖昧なのはどっいつことかしら

管理人：それは…僕だって用事が

明久：嘘つくな！いつも遊んでいただろ！

管理人：ギクッ

ほむら：しかも他の方への感想書かないでお気に入り登録しているのはどっいつつもりかしら

管理人：すみません（泣）（泣）必ず必ず書きますからあ！

明久：管理人他の小説を書くって本当？

管理人：うん♪仮面ライダーではなくバカテスシリーズを…何？どうしたのみんな

全員：ある程度更新してからにしるおおお

管理人：ぎゃあああ

力と反省と決意と…

明久side

『うおおお!』

僕はガタキリバの力で作り出した50人の分身と共にピラニアヤミ
ーに切りかかる

『はあっ!』

『てやっ!』

『はっ!』

『おりゃあ!』

『よっ!』

腕についているソードど切り裂けば、殴ったり蹴っ飛ばしたりもする

50人对1000匹以上なのに軽く圧倒している

凄い!まだまだ力がみなぎってくる!

『はあ!~!』

『うおりゃ!~!』

ピラニアヤミーは次々とメダルとなっていく

「ほおう！これは大量だなあ！！」

アंकはタカカンドロイドに散らばっている大量のメダルを集めさせていた

『！！！』

切り裂いたり、倒したりしていたけど
残ったピラニアミーが上空で固まり大きなピラニアになった

けど…今の僕には通用しない！

腰についているスキヤナーを取り出せば僕の分身達も取り出した

そしてそれを再びドライバーに読み込む

「スキヤニングチャージ！！」

その音と共に僕らは上空に飛び上がり必殺キックをお見舞いする

よし！決める！！

『ハアアア！セイヤアアアア』

くらえええええ！！

僕らはピラニアミーの体内に入りキックを何発も放った

『ギャアアア！』

ピラニアミーが大きく叫びその途端大爆発が起きた

「ハッ！」

僕は爆発から抜け出し地面に着地した

危ない危ないあやうく虫焼きになるところだった

！？あれ？急に力が…うぐっ苦しいや…
でも、僕は帰ってこれたんだ

「どう…だ…アंक。コンボに耐えた…よ」

ドライバーを横にして僕は変身を解いた

体は重く大量の汗が流れ落ちる

「…召喚獣で受けるフィードバックよりはまだましかな？」

僕はそうアंकに言って笑ってみせた

これがコンボの力…強すぎるけど…かなり体力が減ってしまっ…

「…正直驚いたな…まさかコンボに耐えられるとはなあ…」
アंकが珍しく顔をびびらせながら呟いていた

フエイトside

私…凄い光景を見ちゃったな…

大量にいる怪物を圧倒する仮面ライダー…ううん明久

そして降り立った時の姿がとても格好良かった…

「フエイトちゃんすごかったですね今の」

「うん…そうだね」

瑞希が嬉しく聞いてくるけど私は静かに答えた
あれ？私まさか

「フエイト？」

ほむらが心配そうに尋ねてきた

「…二人共…私…明久もだけど」

本当にあの姿は格好良かった…

「あの緑色の姿のオーズが…好きになっちゃった…」

私は頬を赤くしながらそう答えた

「！えええ！？」

瑞希は慌てていて、

「…！！」珍しくほむらは驚いていた

アンスaide

あの馬鹿…コンボに耐えやがった

俺は何故か震える手首を抑えて手のひらにある緑色のコアメダルを

見つめた

「……ハッ！やっぱりあいつにはメダルの力を使いこなす才能があるなあ……」

ガタキリバを耐えたあいつのことだ…

おそらく…他のコンボも

俺は明久の方を見ながら独り言のように思った

『わあああ！三人共落ち着いて！』

明久は叫びながらあの三人から必死に逃げていた

「……やっぱり馬鹿だからか……」

俺はそう呟き少しだけ笑った

明久side

「大丈夫？」

僕はそう言いながら泣き崩れている真美さんに近寄り問いかける

「私……私……みんなに酷いことを……」

真美さんはボロボロと涙をこぼし必死に謝った

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

「真美さん……」

僕は拳をぎゅっと握りしめた

真美さんはきつと利用されていたんだろう……

勝手な考えだけど……フェイトをナンパしたあの男はナンパをした時点で酷い性格の人だとわかる

真美さんはきつとナンパされて……真美さんは告白と勘違いをし……利用されてたんだ……

彼女の欲望はきつと彼女の叫びから生まれたものなんだろうな……

「吉井……明久君？」

真美さんはようやく我に返り僕の方を見てきた

「私……私……」

彼女は再び涙を流した……

彼女のやったことは許されない……けど……彼女は反省をしている

一番大事なのはその後自分の過ちに気づけるかどうかだ…

できることなら彼女を救ってあげたい…

彼女を悲しみの渦から救い出したい…

悲しみを背負うのは僕だけで十分なんだ

アंकをふと見るといつも通りにアイスを食べながら最新型の携帯を使い何かをしていた

「真美さん…君のやったことは許されない」

「！……」

「だから…ちゃんとした人を見つけるんだよ？これがみんなに対する謝罪さ」

僕はそう言ってから真美さんに微笑んだ

「吉井…君。どうして…？」

「うん？だって…誰だって青春が欲しいでしょ？」

「そうじゃなくて」

「じゃあ真美さん…また学校でね！」

僕はそう言つと真美さんから離れていった

彼女ならきつと大丈夫…

「吉井…君。私…」

ゆっくりと目をつぶりそして笑った

「ありがとう 私…もう自分に負けない」

そこには一時欲望に飲み込まれたが、欲望を自ら打ち砕いた女の子が空を見上げていた

「きつと…自分を大切にしてくれる人に出会ってみせる…必ず」

「みんな大丈夫だった？」

僕は三人の所へ走り無事かを確認した

「はい！私達みんな無事です」

良かった…怪我一つなくて…

「明久…大丈夫？」

急にフェイトが僕の額に手を当ててきた

ちよっ…

「…！フェイト。急にどうしたの？」

「明久…つらそうな顔をしてるから…」

僕はまだ疲れている顔をしてたのか…
正直体が重いや

「大丈夫だよ！こんなのフィードバックに比べたら全然たいしたことないさ！」

僕は笑いながら答えたけど三人は心配な顔をしている

もっっ！…どうしたらいいんだよお！

「明久…あのね…」

ほむらさんが急に静かに話し始めた。なんだろう

「あなたがオーズとなって戦っているのを見て正直つらそうだった

…」

「…」

「あなたは欲望を止める為に一人でヤミーやグリードと戦ってる…私達はそれがとても辛いんだよ…」

ほむらは顔をゆっくり上げて話を続ける

「だから…明久にとっては迷惑かもしれないけど…私達も明久の戦いに協力させて欲しいの」

僕は指で額を弾かれたように驚いた

ほむらさん達は人間だ！オーズになれる力はない…

「そんなの…危なすぎるよ」

「危ないのはわかってる…けど私には魔法少女の力があるから」

「私だって能力があるよ」

フェイトが笑顔で言ってきた

「姫路さんは…」

「私は…これから明久君をサポートできるようなことを見つけます。」
「」

きつと何を言っても三人は突き通すだろう。なら僕にできることは…

「わかったよ…なら僕はみんなを必ず守ってみせる」

三人は笑顔で頷き…そして

「ところであつきの子は誰？」

ほむらさんのこの一言により天国は地獄化としてしまい家に帰れたのは夜の8時だった

力と反省と決意と…（後書き）

次回は真美さんが再び登場！

そして新たな欲望の主とまさかの明久へ惚れた人が…

なのはと新たなメダルとキス（前書き）

管理人：やってしまった

明久：ううー

なのは：今回は酷い内容かもしれませんが是非見ていってください

なのはと新たなメダルとキス

「でね…明久がとても格好良かったの！」

「へえ…凄いねアキ君」

私の名前は高町なのは

今、私は親友のフェイト、はやてと一緒に文月学園に向かっています
フェイトったら合流した時からずっとアキ君の話ばかりで幸せそう
に見えるなあ…

「アキ君体大丈夫なんか？コンボは厳しいんやろ？」

はやてが少し心配な顔で喋る。フェイトからガタキリバコンボの話
しを聞いた時は私もびっくりしちゃった

『…つてよ！』

「!？」

ふと声がしたのでそちらを向くと

『なんでそんなに急ぐんだよ！』

『うるせえ！今日こそ坂本の奴を懲らしめてやる！』

ダッシュで走るアंकに続いて必死について行くアキ君がいた

「大丈夫そうやな」

「流石は明久だね…一日でもうよくなってる」

苦笑しながら笑うはやてと感心しているフェイトと一緒に私は笑っ
た。アキ君なら大丈夫…かな

『たくっ！明久あ！早くこねえと帰ったらアイス全部食っちゃうぞ！』

『えええっ！そんなことしたら僕の食費にダメージがあ！』

アंकを追いかけてながらアキ君は涙目になりながら叫んでいます

カチン！

この時は私…ううん。はやてやフェイトも一緒に頭に怒りマークが浮かび上がりました

アキ君は私達三人とは古くからの親友。さらに私はアキ君とは幼なじみ関係

そんな関係で目の前で涙目になりながら叫んでいる幼なじみを見て果たして誰が怒らないだろうか？いや怒る

「アंक！」「」

私達は一斉にアंकに向かって叫ぶ。

「んあ？うおお！？」

アंकは私達から放たれているオーラを見て顔をひきつらせてる

「アंक…アキ君を泣かせたわね？」

「まて！高町！こいつが悪いんだ！」

少しOHANASHIしようか？

瞬間アंकは高速で逃げたので私達はすぐに追う

「「「逃がさない！」「」」

『畜生があああ！』

けど、その時ドサツと倒れた音がしたので止まって振り返ってみると

「アキ君っ！！」

アキ君が急に倒れ私は二人を追わずにアキ君の所へ走って行った

明久side

何だろう…この感触…どこかで…そうだ…この懐かしい感触はあの
人しかない…

「…うん？」

「良かった…気がついたんだね」

目をゆっくり開けると額に手のひらを当てながら微笑む幼なじみがいた

髪はサイドポニーテールで優しそうな瞳…

「なのは？あれ？僕どうして保健室に？」

気づいたら僕は保健室のベッドにいた

「もう…びっくりしたんだから。急にアキ君が倒れて何かあったんじゃないかって」

なのはが苦笑しながら額から手を離して僕を起こすのを手伝ってくれた

そっだ…確か

『アंक…なんでアंकはアイスだけで生きていけるの？』

『はんっ！俺はグリードだからなあ。だが今は体は人間だ…栄養を与えてやらないと死んじまうからな』

『それでアイスって…酷くない？』

『はっ！塩と水の奴には言われたくないんだがな！』

『ぐっ！仕方ないだろ！あの後三人とまた映画を観たんだから』

『自業自得だな…』

『なにいい！』『ピロロン』ん？アंकメールだよ。雄二からだ』

Re：馬鹿鶏へ

本文

早く学園に来ないと貴様の昨日あったことをバラす by雄二

『脅迫状？』

『なわけねーだろ！あのゴリラ！バラバラにしてやる！行くぞ明久あ！！』

『あつ待つてよアंक！』

『ガタキリバでボロボロにしてやれ！』

『うわっ！と急にメダル投げないでよ！それに変身する気もサラサラないよ！』

「そうだよ…朝ご飯を食べずにダッシュで走った上、まだコンボの時の疲れが残ってて倒れてしまったんだった」

僕はぶつぶつと呟きながらアंकに対してまた一つ恨みができた

「それ全部本当？」

「え？」

しまったあ！ついペラペラと口に出して喋ってしまった！何やってるんだ！僕の馬鹿！

「やっぱり…アキ君コンボの疲れが治ってなかったんだね」

「あれ？なんでなのはがコンボのことを！？」

なのは申し訳なさそうな顔をして呟いた

「ごめんなさい。フェイトから全部聞いちゃって…」

なんだ…フェイトから聞いたのか…別になのはなら聞かれても大丈夫だよ！

「謝ることはないよ。なのはなら信用できるから」

僕は笑いながらそう答えるけどなのはの顔はまだ暗い

「アキ君…」

「何？なのは…」

「…」

なのはは静かに僕に近づいてくる
な…なんだなんだ？

「アキ君…」

何故かなのははどんどん近づいてくる

「へ？ちよつと待つてよ！

僕は慌ててベッドから抜け出し後ろへ下がる

何？何なの！？

「フェイト、瑞希ちゃん、ほむらちゃんが明久のサポートをするこ
とも聞いたの…」

ゆっくりとなのはは歩み寄ってくる。僕は下がるけどとつとつ壁に
阻まれてしまった

「いけないよなのは！君みたいな綺麗な女の子が！」

「アキ君…私も…アキ君の為に戦うよ」

「へっ…！？」

そう言うとなのは急に抱きついてきたって…ちよつとちよつと！
あた…当たってるよおお！

「ちよつなのは…急にどうしたの／＼！？」

「私はどうもしてないよ」

そういうとなのは急にポケットから一枚のメダルを取り出した…
ってちよつと待ってよ！

「なんでなのはがコアメダルを！？」

そのメダルにはライオンの絵が刻まれていた

「アキ君ごめんなさい！」

「どうし…！！！？」

僕の唇にやらかな感触がした…

「…？」

なのはが僕にキスをしたということが10秒おいて理解できた

これが僕にとって最初のファーストキスとなった…

何が無なのかわからないまま…

なのはと新たなメダルとキス（後書き）

管理人：畜生！気まずいよー

明久：うう…

血祭りとフラグとなのはの気持ち（前書き）

< バカテスト >

問題

以下の英文を略しなさい。

『 This is the bookshelf that my grandmother had used regularly .

』

姫路、テストロッサの答え

『 これは私の祖母が愛用していた本棚です。 』

教師のコメント

正解です。しっかりと勉強をしているようですね。

高町なのはの答え

『 これは使った。 』

教師のコメント

確か高町さんは英語が苦手でしたね。

土屋康太の答え

『 これは 』

教師のコメント

あなたが訳せたのは This だけですか

吉井明久の答え

『 ● ♪ ー ー 』

教師のコメント

出来れば地球上の言葉で。

アングの答え

『私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

珍しくきちんとした答えを書いています。がThisが訳せていないので不正解です

血祭りとフラグとなのはの気持ち

「……………え？」

僕は何をされたんだっけ？確か…

「アキ君？どうしたの？」

ふと見るとサイドポニーテールで可愛い顔のなのはが首を傾けてこっちを見ている

「なのはそのメダルは？」

そっだ！なのはが新しいコアメダル…ライオンのメダルを僕に見せてきたんだっただ

「ああ…これはね朝…鴻上さんて人からアキ君へって」

なのははそう言うって僕の手の平にライオンのメダルを渡したでもなんで鴻上さんが持ってたんだろ

「ところでアキ君…」 「うん？」

「その…」

なのはは顔を赤くしながら答えた

「腰に巻かれている手…」

え？手？…………

「うあああつ！ごめんなのは！」

僕は急いでなのはの腰に巻いていた手を離す

「別にいいよ…アキ君なら」

ん？なのはが何か呟いている…

あれ？コアメダルの他に何か大事なことが…

「ほう…これは面白いものを見ちまったなあ…」

何故だ！急に殺気が！

僕は恐る恐る後ろを振り向くと…

「雄二………」

ニヤニヤと笑いながら保健室の入り口に立っている悪友がいた…

アंक side

なんだ？何故かさつきメダルの気配が…しかもコアメダルだ…
俺は確かめに行こうとしたが

「アंक…まさか付き合ってたなんて」

「誰と付き合おうが俺の勝手だ！」

俺はFFF団と言う連中に明久と共に捕まっていた

『『『罪人吉井明久…ならびに西条明訓は…』』』

FFF団の説明を聞くのがめんどくさいと思うからその間に教えてやる

俺はアंकだが、西条明訓と言う名前にもなっている。

西条明訓はヤミーに襲われ死にかけていたのを俺が憑依して体を使わせてもらっている。元はこの学園の生徒だったらしい

『判決！有罪！死刑！』

「何が死刑だふざけんなあ！」

『異端者に反論は認めん！』

俺と明久、何故か坂本は火炙りりの刑になった

なのはside

「なのはちゃん！吉井君に抱きついていたのは本当ですか！？」

瑞希ちゃんが私に詰め寄ってきた。近いよー

「……………うん」

「アキにはお仕置が必要ね……」

そう言つてポニーテールを揺らしながら腕をパキポキと鳴らしている美波ちゃん

「何…美…あががが！僕の関節はそっちには曲がらないいい！」

いつもなら助けるは私だけど何故か…体が動かない

あれ？美波ちゃんって彼氏いたはずだよね？

「あんたって奴は！本当にフラグを立てるのだけは上手いんだから
ああ！」

「ぎゃああ！僕の背骨がバキバキと碎けるうう」

フラグって何だろう？

「明久君…」

「何姫路さ…ぎゃああ！腰が腰がああ」

ちよつと！流石にやりすぎだよ！姫路ちゃんまで何やってるの！？

私は急いで気絶しかけているアキ君を助けに行った

なんだろ…このもやもやした気持ち

アキ君が他の子に関節技をされているだけなのに何故か胸が痛むよ…

でも今は

「何やってるの二人共！！」

急いでアキ君を助けに入った

血祭りとフラグとなのはの気持ち（後書き）

次回はいよいよヤミーと戦います

巧と重力ヤミーとライオンヘッド

俺は明久を見ながらぼーとしていた。

あつ俺都築つづき巧たくみ

迷い猫オーバーランっていう小説の主人公だ。ん？何故そんな奴がここにいるかだって？

それは二次作小説だからさ。まあ…作者が考えたことだからよくわかんないけど

設定は迷い猫オーバーランと同じさ

特に勉強できる訳ではないから俺はFクラスってわけ

んで俺は一緒にいる悪友の家康と大吾郎と一緒に島田に締め付けられている明久を見ている

相変わらず可哀想な奴だ…助けたいけど俺まで巻き込まれるからなあ

「それにしても何故吉井はあんなにモテるんだ」

家康、FFF団に行こうとするな!?

「あいつは優しいからな」

俺は明久の方を見ながら笑った

そう…あいつと初めてあったのは俺がいじめられていた時だ…

あの時のあいつは言葉にできないくらい輝いてた

「だが、このままでは危ないのではないのか?」

秀吉と似ている言葉をしゃべる大吾郎

まあ確かにあのままじゃー

「あつ高町じゃん」

「……なんだあれ杖?」

ヒュゴオオ!

な、なああっ！ちょっと待て！姫路と島田が灰になったぞ！？

「大丈夫アキ君？」

「う、うん。ありがとうなのは…」

流石の明久も怯えてる…

チャリン…

なんだ？さっき何かが落ちる音が…

「どうしたの巧？」

そう言って俺の顔を覗き込むのは俺の幼なじみせりざわふみの芹沢文乃

茶色の髪と緑の瞳、頭に着けたリボンが特徴ないわばツンデレ美女だ

「いや…なんか最近…音が聞こえるんだ」

「出たな！芹沢文乃！」

「出たって何よ！それにその写真は何よ！？ムツッリーニから買ったの！？」

「ふはは」名答！この写真は貴様の下着が姿が写っている」

「なっ！／＼」

俺の話を無視し、いつものように文乃と家康が喧嘩をしている

家康…お前ムツッリーニから文乃の写真買ったのか

「……巧も買うか？」「うわああっ！ムツッリーニ？」

突如ムツッリーニが俺の背後に現れたってびっくりするよ…

「いや…俺はいい」希のメイド写真…安くしとく」「ぐっ……」

ムツッリーニが撮った写真は凄すぎて何回買わされそうになったことか…

「二回死ね!!」

「ぐはっ!見えたっ!!」

「なっ!／／」

ムツツリーニと俺は窓まで離れ再び話す

「……これ見本」

なっ…正直言つと可愛い

「…そしてこれが希のメイド写真」

!!!?

「芹沢の下着はー」

「120回死ねええ!」

ドゴオ!

『『芹沢さんの下着教えてくれええ』』

俺は理性が壊れ気づいたら希のメイド姿の写真を持っていた

「しまった！俺は何を！？」

「七万回死ねえええ」

『ぎゃああああ』

とりあえずこの写真は文乃には見せれない…

「…巧何してるの？」「うおおああつ！……の…希！」

突如俺の後ろに現れたのは猫の耳に見える髪の毛が特徴的で瞳が赤い美少女…霧谷^{きりや}希^{のぞみ}だ

「いや…ちよつとムツツリーニとお話を…はは。」

「にゃあ…それ何？」

しまつ…た…写真を隠すのを忘れてた…

正直仕方ないと思っている。なぜならあの写真の希はあまりにも可愛いからだ

「…にゃあ。見せて」「…拒否権は「ない」」

仕方なく希に写真を渡す

「にゃっ…（カアアア）」

希は顔を赤くしながら俺に抱きついてきた

「嬉しい…巧」

「ちよっ…希！（カアアア）」

真っ赤になりながら俺は慌てふためく

「あああ！羨ましいぞ巧！」

馬鹿っ！家康声が大きい！

「……アキ君。オハナシしょ？」

「どうしたのなの！？顔が赤いし何か当たってる！」

「明久…」

「巧…」

「「うわああああ！」」

俺と明久は同時に教室から抜け出す

勿論…希は俺に、なのはは明久にくつついたままだ

「はっ…ざまあ見ろ」「ざまあ見る馬鹿明久」

家康と雄二の声が重なる

「家康がこの間Aクラスの梅ノ森^{うめのもりちせ}千世とゲームしていたぞおお」

「代表坂本雄二はAクラス代表の霧島さんと弁当食べてたぞおお」

「馬鹿っ！巧貴様ああ！」

「明久ああ！てめええ」

『異端者には死を！！』

「「ぎゃあああ」

ふう…助かつ…てない

「巧いい！二回殺す！」

「明久君大人しくエデンへ行きましょうね」

「明久！なのはに抱きついたの本当？」

「巧！下僕のくせにいい」

「わああ！文乃！千世！まで！」

「姫路さん！フェイト！ちよつと待ってよ！」

俺と明久は全力で地獄行きの門から逃げた

明久 s i d e

「はあ…はあ…」

僕と巧は地獄という地獄から上手く逃げきりとある駅に来ている

「どうしよう巧…」

「ヤバい明久…鞆を持ってきたしまったし、授業を抜け出してしまった」

鉄人に見つかったら大変だ

「あれ？ここどこ？」「にやつ？」

なのはと希ちゃんが僕らから離れ辺りを見回す

「だいぶ遠くに来てしまったな」

「うん。えーと…」

そう言っ僕は駅の名前を見る

「文月駅だね」

「にゃ。それなら学園まで一時間でつく」

「じゃあ、学園に戻ろうアキ君」

その瞬間僕と巧は一気に暗くなった

今帰ったら大変なことになる

僕と巧は頷きあって二人の方へ顔を向ける

「あのさ二人共」

「せつかくだからたまには授業休んで」

「どこか行かない？」

よし！完璧だ！

「アキ君と…いいよ」「にやっダブルデートだね」

なっダブルデート…！？ちよっ…ちよっ

「何を言ってるんだ！二人共」

「そうだ！まずデート…じゃないぞ」

「にや？私となのは二人のことが好きだよ？」

そう言って希が巧の手を握る

「ちよっのぞ…えええっ！」

これは告白？告白なの！？

「あの…なのはも」

「うん。私ずっと前からアキ君のこと大好きだよ？」

「なああああ！？」

ちよつと待て！ちよつと待て！

現在オーズが使えるメダルは

タカ×2

クワガタ

カマキリ

バッタ

ライオン

トラ×2

チーター×2

ふう……

「きゃああ！」

「わああ！」

人の声が聞こえ、そつちを見ると…

「なっ！ヤミー！？」 「ヤミーってあの時学園に現れた？」

「にゃ…バイソンだ」

何故ヤミーが…ん？

「ちよっ危ない」

僕達はすんでの所でとんできた物をかわす

あのヤミー…重力型？

物を浮かし人にぶつける

このままじゃ危ない！

「みんなはここで待ってて！」

みんな驚いてるけど僕がオーズのことを知ってるからすぐに頷いてくれた

「アキ君！」

なのはが僕を呼び止める

なのはは心配そうな顔をして

「気をつけてね…」

と言った

「うん！大丈夫。だって死んだら大好きなのはに会えなくなっちゃうからね」

「へ？」

さあて…ヒーローの出番だね！

その時、電話がかかってきた

「はい…どちらさまですか？」

『俺だ』

アंक？なんで

『コアメダルの情報を知っている奴がいるからそいつにあってくる』

コアメダルを知っている人がいるのか…

なんか怪しい…

「ごめんアंक。今からヤミーと戦わないと」

『あああ！？またお前勝手に戦ってんのか！？』

アंकの激しい怒鳴り声

「仕方ないだろ!？」

『チツ…わかった』

プツンと電話が切れた

いつものアंकならもっとうざいくらいうるさいのに…

おっと!今はヤミーに集中集中!

みんなに手を振った後、すぐにヤミーの近くへ行く

「また当たった!んー?」

「うおおお!ダラッシャアアア!」

勢い良く跳び蹴りをヤミーにお見舞いする。
その時、髪が尖った人を巻き込んでしまった

「痛い……」

「グウウウ……」

「ごめん君！大丈夫！？」

「お前…なんか腹立つ。お前倒す！」

ちょっと待って！？なんか悲しくなってきたよ！

髪が尖った人はメダルに包まれ化け物になった

「なっ！グリード！」

確か…あいつがカザリ、あいつはウヴァ、前出てきた女のグリードはメズール

ということはいっつはガメル！

「まさか…またグリードと会うなんて…」

でもメダルが取ればアंकも機嫌が良くなるだろう

素早くベルト…オースドライバーを腰に巻きタカ、トラ、バッタの
コアメダルを取り出し素早くセット

ドライバーを斜めにしてからスキヤナーを取りメダルにスキャンして読み込んだ

『タカ！トラ！バツタ！』

おなじみのメロディー

『タツバ！タトバ！タ・ト・バ！』

上からタカ、トラ、バツタとオーリングサークル作り黒い姿のオーズに刻まれ色がつき僕は仮面ライダーオーズに変身した

『オーズ…！』

『ウオオ！』

『いくぞ！』

2体に向けて構え勢い良く殴りかかる

『ダラッシャアアア！』

『ウオオ！…！』

バイソイヤミーは顔面に直撃した僕のパンチあびフラついてる

「オース倒す！」

ガメルが突進してきたから僕も突進で対応した

「うわああ！」

すぐに力負けして吹き飛ばされた

「くっ…なんて力だ」

ガメルが再び突進してきたから再び僕も突進

「今度は負けるかー！」

『ヌウウ！』

互いに譲らず今度は僕が吹き飛ばした

「おりゃああ！」

『ワアア！』

ガメルは近くにあった階段に頭を打つ

僕はバイソンヤミーに向けて何発も殴る。そしてトラクローで切り

裂く

『グウウウ…』

バイソンヤミーは吹き飛びガメルに撃沈

『痛い！』

『痛い！』

見るからにして馬鹿の図だ

『ウオオオオ！』

バイソンヤミーが起こした波動によって僕の体が引き寄せられる

「ちよっ！まっぐああ！」

そこをガメルの拳が僕の体を殴る

「うわああ！ぐあああ！」

再び引き寄せられ再び殴られる

ガメルの拳は重い

何発もまともに受けられない

「うわあ！またか」

けど何発も受けてられるかあ！

「くっ…おりゃああ！」

バキッという音が響く

2体に向けて重力を利用し重い一撃の蹴りをお見舞いした

『グウウウ！』

『痛い！痛い！』

そうだ…せっかくだからなのはがくれたライオンを使ってみよう

タカを抜き取り素早くライオンをセツト

『ライオン！トラ！バッタ！』

タカだったヘッドはライオンをモチーフにしたヘッドに変わり眩い光がヘッドから発光される

『グウウウ！ウウ』

『眩しい！目がああ』

「おお…凄いなあれ！」

2体とも目を押さえて暴れ回っている

今のうちだ！…

『タカ！トラ！チーター！』

素早くチーターに変える。足は黄色い

「ハアアア！」

足をギリギリまで落とし勢い良くスピードにのる

「セイヤアアアア！」

加速がついた両足でガメルに蹴りをお見舞いする

『ぐああああ！』

するとガメルから一枚のコアメダルが出てきた

「やった！ゾウゲット！」

灰色の新しいメダルだ

『ライオン！トラ！バッタ！』

再びラトラバになり目を潰す

『目がああ！』
『ウウ！』

これはもはやイジメレベルだ…

再びガメルに今度はジャリバーで切り裂く

くっ…固いか！

ガメルは裏拳を放つが僕は上手くジャリバーで防ぐ

ジャリバーに二枚セルメダルを入れる

『ダブル！スキヤニングチャージ！』

スキヤナーで剣をスキャンし構える

『セイヤアアアア!』

『うわあああ』

今度は効いたらしくガメルから二枚のコアメダルが飛び散る

「よいしょっ! やった! ゴリラとゾウゲット!」

よし! このまま全部貰うか…ってあれ?

気づいたら逃げられていた

危機と二人の絆とグリード戦（前書き）

特別問題

明久君がコンボを使ったらあなたはどのコンボに抱きつきますか？
また理由もお答えください

未使用コンボでもOK

タトバ

ガタキリバ

ラトラーター

サゴーズ

タジャドル

シャウタ

プトティラ

オリジナル
↑

高町なのはの答え

『サゴーズ 遅いから抱きつきやすい』

教師のコメント

『本人は戦いずらいと思います』

フエイト・T・ハラオウンの答え

『ガタキリバ 恋をしたから』

教師のコメント

「 以外の答えにビックリしています」

暁美ほむらの答え

『タジャドル Wスピナー』

教師のコメント

「この答えにもビックリしています。できるといいですね」

危機と二人の絆とグリード戦

「ああ！？また勝手に戦ってんのか？」

「仕方ないだろ！！」

「ちっ…わかったよ」

俺は電話を切った。明久の奴こんな時にヤミーと会いやがって

俺は緑のコアメダルを見たって奴の情報を聞きそいつに会いにきた

だが…妙な気配がした…もしもの時を考え明久を呼ぼうと思ったがこの様だ…

何故俺は明久をそのままにした？あいつに何か期待しているのか？

理由なんかわからないしわかりたくもねー

俺は港にいる緑の服を着た奴の所へ歩いて行く

「お前か？コアメダルの情報を知っているのは？」

するとそいつはニヤリと笑ってこう言った

「アंक…やはりこの姿じゃわからないようだな」

この時は俺はこいつの正体にすぐ気づいた

「ウヴァ!？」

すると奴はグリードの姿に戻り俺を殴ってきた

「うはっ!」

走る衝撃に俺は歯を噛みしめる

「まさか…お前らが人間の姿になっていたとわな…」

俺はすぐに片手を自分の本来の腕に変える

コアメダルが全然ない俺。力などもないこの腕

勝敗はわかっていた

「ぐああ！」

ウヴァは俺の腕を掴み捻る

そして顔面を殴ってくる

俺は必死に避けながらも痛みに耐えていた

このままだと確実にコアメダルを持っていかれちゃうな…必死に抵抗してもさらに捻られるだけだ

「ぐっ…っあ」

俺はたまらず体を借りている人間から抜け出す

だがウヴァはすかさず掴み

「オーズがない貴様など赤子同然だ」

と言ってから俺にクローを突き立てる

ビリビリと走る雷

「うぐ…」

くそっ… 確実にまずい状況だ

「フハハ…」

ウヴァは何度も何度もクローを突き立てる

「ぐっ！」

なんとかウヴァの腕から抜けれたが逃げれば確実に角の雷を受ける

なら

「ああああ！」

俺はウヴァに突っ込む

「ふんっ!!」

ウヴァを向かってきた俺をクローでなぎはらう

「ぐはっ!!」

俺は宙を舞い吹き飛ばされる

そして飛び散るチーターのメダル

奴が気を取られている隙に逃げるしかない!

俺はすぐに逃げようとした

が、すぐに再びに掴まれる

「何!?!」

そいつは髪が白い人間だった。

「逃がさないよアंक」

そいつはすぐに黒い怪物に姿を変えた

「カザリ」

馬鹿な！？何故カザリが

「ごめんねアंक。ウヴァがこのメダル返すって言ったらカマキリを返すことにしたんだよ」

奴はさつき持っていたチーターをウヴァはカザリから渡されたカマキリを取り込む

「残りのメダルも全部貰うよ」

カザリもクローを突き立てウヴァがさらに突き立てる

「ぐ…ああ」

くっ…くそっ

さらにクワガタ、トラが飛び散る

「ハア…ハア…」

「ウヴァこれ」

「ふんっ」

カザリはトラ、ウヴァはクワガタを取り込み壊れていた鎧が復活した

まさか…ウヴァとカザリが組んでいたとはなあ

「残念だったねアंक。原作のオーズの話で進んでいくと思った？」

「作者は設定をかなり変えてんだ。」

〇〇〇（作者）の野郎ふざけんなああ！！

「じゃあ…そろそろバイバイアंक」

「ぐっ！」

ちっ…体を取り戻せず終わんのか俺は

「うおおお！だあっしやあああ」

諦めかけていた時間こえたのはあの馬鹿の声だった

明久 s i d e

くっやっぱアंकは無事じゃなかった…

ヤミーを追い払いすぐにアंकの所へ向かったけどいたのはグリー
ドに攻撃されているアंकだった

僕はとつさにオーズタブコンボに変身し奴らに向かっていった

「うおおお！だあっしやあああ！！」

「うわあー！！」

跳び蹴りがカザリっていうグリードに直撃しカザリは吹っ飛んだ

「明久…」

「くっ…オーズ！？」

ウヴァは驚きながらカザリを起こしアंकは驚いていた

「アंक。やっぱり僕がいなきゃ駄目じゃないか」

「ちつつるせえ」

アंकは腕にダメージを受けていて一部が破壊されている

（ごめんよアंक…僕がもっと強ければ）

僕は知っているアंकの優しさを

いつもうざい奴だけどさりげない優しさがある

ガタキリバコンボで倒れた僕を家まで連れて帰ったのはアंकだったらしい

そして僕にお前は馬鹿だから危ないと言ってメダルを渡してくれた

アंकは敵なんかじゃないんだ！僕の仲間なんだ！だからアंकを必ず助ける

「遅いんだよ明久」

「それは悪かったね…大丈夫かいアंक」

「ハッ 誰かさんのせいでこの様だ。 ……すまない。メダルを4つももっていかれた」

アंकは苦虫を噛んだような顔しながらそう言った
僕はニカッと笑って 「大丈夫だよ…取り戻すから」と言っ

「オーズ…俺のメダルを返せ！」
「返してもらっよ」

虫と獣のグリードが向かってくる

「はあ…だからアंकのものだって言ってるだろ！この馬鹿ああ」

僕はトラクローを展開させ対抗する

ぶつかり合うクローとクロー

「はあっ！」

ウヴァに蹴りを入れる

「くっ」

「せいっ！」

トラクローでカザリを切り裂く

「ぐっ…やっぱり強いね今のオーズは」

「原作ではこんなには」

「原作とは違うんだあ！この馬鹿あ」

トラクローでウヴァを切り裂き素早くカザリの頭に拳を入れる

「ぐっ！ お前にだけは」

「うっ！君にだけは」

何？何なの

「馬鹿と言われたくない!」

ウヴァは雷をカザリは砂を同時に発射してきた

「うあああ!」

まともに浴びて吹き飛ばされる僕

「うおらあ!」

「ふんっ!」

すぐにクローで切り裂かれる

「うわあ!」

くっやっぱりグリード 強い

「ぐわ」

休む暇もなく殴られる

「くっ」

「オラオラ!」

「はあ！」

畜生！このままだと

「「明久！」」

「アキ君！」

！？この声は…

「なのは！フェイト！ほむらさん！」

美女三人が向かってきた

なのはとフェイトはバリアジャケットを、ほむらさんは魔法少女に変身している

「危ない！…ぐ…来ちゃ駄目だ」

「言ったよね明久！私達も戦うって」

フェイトは走りながらタカ缶を発射した

「ちっ…」

「くっ」

タカ缶は2体のグリードを攻撃して助けてくれた

「ふう…危なかったあ」

「大丈夫？アキ君」

「うん…このくらいどうってことないよ！」

「良かった…けど今はあの2体をどうにかしなきゃね」
「うん…さっきはありがとうフェイト」

僕はフェイトの頭にポンと手を置いた

「うん…どういたしまして」

フェイトは顔を赤くし伏せている

あれ？何かしたっけ僕？

「…明久どうするの」

「僕が攻撃するからほむらはこれを使ってサポートを、フェイトは隙を見て攻撃して、なのははアंकを頼むよ」

そう言ってジャリバーをほむらさんに渡す

「わかったわ」

「うん。わかった」

「じゃあ…行こうか」

フェイトの合図でフェイトは空中に飛び
僕とほむらはグリードに向かっていく

「大丈夫アंक？」

「…ああ」

アंकがやけに素直だ

「人間など敵じゃない」

「どうかしら」

ほむらはウヴァに向かって行く

ウヴァは雷撃を放つがほむらさんに当たらなかった

「何！？消えた！」

「ここよ…」

ほむらはウヴァの背後に現れジャリバーで切り裂く

「グウウ！」

ほむらは再び瞬間移動をして後ろから切り裂く

「ぐああ」

「ウヴァ!？」

「お前の相手はこつちだあ！」

カザリに向かって跳び蹴りを放つ

が、カザリはすぐに砂を発射し僕は吹き飛ば

「くっ… やっぱり鎧が復活しているから強い」

「小娘ええ」

「う！」

ほむらさんも動きを読まれ攻撃されたがなんとかジャリバーでガードする

「今だ！ファイヤ！」

フェイトが持っていた杖から金色の光弾が発射しウヴァとカザリに直撃した

「ぐああ！なんだあの小娘！」

「本当に人間なの!？」

今だ！

素早く二枚のメダルに変える

そしてスキヤナーで読み込む

『タカ！ゴリラ！チーター！』

「体が銀色になったよ！？」

「あれはガントレットかな？」

「何？明久の奴何故ガメルのメダルを！？」

「はああああ！」

チーターで加速を上げ二体に向かって力いっぱい殴りつけた

「せいやあああ！」

「ぐおおお」

「うあああ」

するとカマキリ、トラが飛び散りすかさずキャッチし読み込む

『タカ！カマキリ！チーター！』

「今度はカマキリになった！？」

「緑色？」

僕はカマキリソードを構え素早くダッシュ

「アंकにダメージを与えた分だああ！」

そう言って思い切り切り裂く

「ぐおおおお」

「うあああ」

再びクワガタ、チーターが戻ってきた

そして再びウヴァとカザリの鎧が破壊される

「こんなこと…って」

「くっ…逃げるぞカザリ」

2体のグリードは急いで逃げていった

「明久の奴…こんなに強いとわな…」

「凄いよアキ君！」

「ふう…みんなありがとぐふおお」

僕はみんなの所へ向かって行っただけ、何故かバイソンのミミが現れアッパーを喰らう

「やっぱり馬鹿だ」アंकはそう呟きため息をついた

「畜生うつ！返せ！僕の感動返せ！」

せつかくみんなと感動の再会を再現しようと

「オーズのせいだ！オーズのせいだ！」

「ぐはっ！何で僕っ！？」

いや確かにあの時苛めてたけどさ！

「あああ！邪魔だなあ！こうなったらコンボ使うか！」

「馬鹿久！コンボはやめ クペッ↑フェイトがアंकを締めた音」

フェイトは僕の所を走ってきて

「明久…ガタキリバコンボになるんだよね？」

「ほえ？」

手にはクワガタがあるからガタキリバで行こうとした所だしフェイトの…上目使いと涙目のコンボはオーズのコンボ以上の破壊力だ

「うん！さつさと片づけてくるよ！」

素早くクワガタに変えて読み込む

『クワガタ！カマキリ！バツタ！』

『ブーン！』『ガータガタガタキリバツ！ガタキリバツ！』

同じみの歌

そして姿は緑色のガタキリバコンボとなった

「一気に決める！」

『トリプルスキャニングチャージ！』

ジャリバーを持って振り切る

「うおおおお！せいやああ！」

そして

いつもと同じ威力で切り裂かれた

うんバイソんヤミーは爆発してメダルになったけど…

「あれええっ！？威力が変わらない」

馬鹿な！コンボで使ったら威力が倍増すると思ったのにいい

「馬鹿か…何自分から疲れるようなことしてんだ」

畜生うつうつ！

「明久！」

「何っフェイ…うわっと」

フェイトが僕に抱きついてきた

頬は赤く顔をオーラングサークルにうずめている

「しばらくこのままでいてくれない…かな？」

涙目＋上目使いコンボ

これに勝てない奴はいないだろう

「けど…コンボが使える時間が」

ぐっ 苦しい

「フェイトちゃんだけずるいよ！私だつて」

「私も」

「うわわわ！ちょっとみんな待って！抱きつかないで！当たってる

！しコンボでの疲労がああ」

うわああ！！本当に死んじゃうよおお

アंकのため息を最後に僕対グリード、ヤミーとの戦いの1日が過ぎてゆくのだった

現在オーズの使えるメダルは

タカ二枚

クワガタ

カマキリ

バッタ二枚

ライオン

トラ二枚

チーター二枚

ゴリラ

ゾウ

告白と疲れと新たな欲望（前書き）

今回は短くてすみません。

いよいよまどマギからあの人が登場します

告白と疲れと新たな欲望

「うっ…眠い」

朝…それは今の僕にとっては邪魔な存在…

昨日は大変だったのだ。剣の力を試したくてコンボが使ったが力は変わらず…おまけに美女三人に抱きつかれて危うく本当に死ぬところだった

とにかく今は疲れている。体はまだ寝ると告げ僕はそれに従った

「う…ん？」

再び目覚めたのは窓から日差しがさすぐらい明るい時間帯…

「えっ…？」

そばにあった時計を見て思わず声が出た

最悪だ…よりによって赤信号になるなんて…

この信号は確か1分はかかるはずだ

「マズい…このままだと鉄人に怒られてしまうよ」

そんなことを考えている時、昨日の疲れが僕を襲った
脚はふらつき今にも倒れてしまいそうだ

「うつ…駄目だこんな所で倒れたら…」

けど体は言うことを聞かず徐々に倒れ始める

「…もう駄目だ…」

僕はその場にドサリと倒れてしまった

「…丈夫？…吉」

少し聞き取れなかったけど意識を失う前に可愛いらしいそして懐かしい声が聞こえた

巧 side

「遅いな明久…」

俺は窓を見ながらそう呟いた

あいつがこんな遅刻をするなんて珍しいよな…

「巧大丈夫？」

傍から幼なじみの文乃の声が聞こえた

「なんでだ？」

「さっきからずっとあくびしてるじゃない」

「昨日のケーキ作り結構時間かったからな…」

ストレイキャッツに帰った後明日の為にケーキを作っていたんだけど結構時間がかかったんだ。何せ新しいメニューだったもんで希も遅くまで協力してくれてやっと完全できたんだ

「まあ…寝たら大丈夫かな？」

そう笑いながら答えてやると文乃はそっぽを向き

「だったらゆっくり休みなさいよ！別に巧の体調なんか心配してないから」

と言った

つまり文乃の言ったことは逆になるから心配してくれていることに

なる

これは正直に嬉しいことだ

「そついえば他のみんなは？」

姫路に尋ねてみると姫路は窓を指差した

「皆さんなら野球をしていますよ」

文乃ははあ！？と言いながら窓を見る

ちなみに教室にいるのは俺、姫路、文乃、希、なのは、島田

文乃が起こるのも無理はない。もうすぐ清涼祭が始まるんだからな

簡単に言えば学園祭のようなものさ

AからEクラスまで既に準備に取りかかっているのに俺達のクラスは…

『プレイボール！』↑秀吉

『こい坂本！お前の球なんか打ち返してやらあ！』↑家康

『後悔するぞ家康？』↑雄二

とまあこんな感じで野球をしている。俺はとても眠かったからFクラスに残ったんだ

『お前らああ！何をやっている！』

鉄人が登場しみんなが一斉に逃げ出した

『出し物が決まってるのはFクラスだけだぞ！？』

1分もたたずにみんな捕まってしまった…さ、流石は鉄人…

「んじゃあ出し物決めるぞ…」

この後みんな帰ってきて坂本を中心に出し物を決めることになったけど…明久本当に遅いな…

「う…ん？」

ゆっくりと目をあけるとそこは保健室…

あれ？確か昨日もこんなことあったよね？

なにかヤバイような

「起きた！？」

傍らから柔らかく元気な声が聞こえてきたのでそちらを振り向くと

「まどか？」

幼なじみがいた

「うん！明久君久しぶり！」

まどかはにっこりと微笑みかける

「ほむらは一緒にやないの？」

「それが…寝坊しちゃって…」

まどかはそう言いいながら苦笑いをした

「そうなんだ…大丈夫なの？」

「うん。一応代表には伝えてあるから。それより明久君こそ大丈夫？」

その言葉に僕は首を傾げるとまどかは僕が倒れていて保健室まで運んだことを話してくれた

「そうだったんだ…ごめんねまどか。迷惑かけちゃったね」

「そんな…迷惑なんて思っていないよ！」

まどかは慌ててそう言った

それだけで体の疲れが癒やされるように感じた

「じゃあ後は湿布だね！」

「へっ…うわっ！」

まどかは笑いながらそう言つと僕をうつ伏せにして制服のシャツをめくつた

ちよっ…

「何するのまどか？」「明久君背中が赤く腫れ上がったから今から湿布を貼るよ！」

そう言つとまどかは湿布を貼り付け綺麗な指で伸ばしていった

「気持ちいい？」

「うん。ありがとうまどか！」

まどかはほむらさんと出会ったおかげで積極的になり成績も良くなり今はBクラスにいる

「明久君…なんか雰囲気変わったね」

「え！？そうなの？」

「うん…なんかさらにカッコ良くなって余計惚れちゃったなあ」

僕はこの一言を聞き逃さずきちんと聞き取った後意味が理解できた

「まどか…それって友人として…だよね？」

するとまどかは首を振ってから僕の顔を真っ直ぐ見て口を開いた

「違うよ明久君。私は明久君のことがほむらちゃんに負けないくらい異性として好き…」

僕はいきなりのもで頭の中が真っ白になった

何故だ
…

見れば見るほど心が惹かれる

「高町なのは…」

ああ…美しい…僕のものだけにしたい

そんな僕の願いを叶えてくれたのは

「これが僕の欲望…」

欲望から生まれた怪物だった

「人を手に入れたい欲望の力はどれほどのものか興味深いですね」

メガネをくいと上げ男は化学室から出て行った

肩に乗っている人形は衝撃で少し揺れたのだった

出し物とDr・と迫る危機（前書き）

急ではありますが清涼祭編スタートします！

この章で明久の恋人が決まる…かもしれません

出し物とDr・と迫る危機

N O s i d e

「H A P P Y b i r t h d a y :」

誕生日を祝う歌。それが今鴻上ファンデーションの会長室で響き渡っている

歌っているのは勿論ファンデーションの会長鴻上だ

「H A P P Y b i r t h d a y :」

いつものようにケーキを作りホイップクリームでデコレーションし文字を書いていく

「素晴らしい！メダルのライダーオーズに続き新たな戦士が誕生だよお！」

鴻上はいつもより大きな声でそれを言った

「で、Dr・真木い！そちらの方は決まったのかね？」

鴻上が問いかけた先にはメガネをかけ、肩に人形を乗せたいかにも博士のような人が立っていた

「はい… 装着者については既に決まっています」

静かに真木は答え鴻上に資料を渡す。それを見た鴻上は笑みがさら

に大きくなった

『素晴らしいいよDr・真木！いかにも欲望に忠実な人間だ！』

真木は頭を下げると

「まずは、不足したセルメダルを集めなければなりませんね」と答えながら肩に乗っている人形を見た

『その通りいいだよ！コアメダルの力を増幅させるにはセルメダルは欠かせないからね！』

鴻上はケーキを仕上げまた歌い出した

『HAPPY birthday: オーズ！』

鴻上の前には三つのケーキが置かれていた

その一つにはオーズと書かれていた

明久side

「…どうしよう」

僕は今Fクラスの教室前にいるのだが入りづらい

「前のようにバレてたら…」

数分前に僕は幼なじみの一人鹿目などが…

とても可愛い幼なじみに僕は告白された…

そりゃ僕だってあんなに可愛い幼なじみに告白されて嬉しくないわけがない

けど…僕は好きな人がいるんだ…

だからまどかにまだ答えられないって言ったんだ…だってまどかのことも好きだから…

控えめにガラガラと開け

「すみません遅れま「死刑！」なっ！」

黒いフードをかぶった集団に捕まった

「…死ぬかと思った…」

僕はみかん箱に突っ伏した。なのはの助けがなかったら死んでいたよ

「大丈夫アキ君？」

「ありがとうなのは。僕は大丈夫だよ」

「良かった」

なのは安心したような顔になり僕は心配してくれたことに嬉しくなりたがいに笑いあった

「本当に仲良いわよね二人共」

文乃がちゃかすけど全く聞こえない

勝手な考えだけどきつと今の僕らにはピンク色の空間ができてるんだと思う

反面、みんなからの殺意に満ちた目線が怖い

「明久君…お仕置が必要ですね」

「瑞希落ちて着いて！アキが死んじやうから」

聞こえない！さっきの会話聞こえない！

「アキ君大丈夫？」

「あつ…うん大丈夫。それよりみんな何やってるの？」

「えつとね清涼祭の出し物について決めてるの」

「雄二は…ちゃんとやってくれてる？」

なのはは苦笑いをし

「たはは…ちよつと…ね」

と言った。何だろぅ淒く気になる

「よつ明久！大丈夫だったか？」

「あつ巧！ちよつと遅刻しちゃった。それよりどーなってるのこの状況！？」

僕は黒板を指差した。

そこには

『・メイド喫茶

・中華喫茶

・ウエディング喫茶

・コスプレ喫茶

・写真館etc…』

と書かれていた

凄いことになってる…

「一体何が…？」

「ああ…お前が来ない間に清涼祭の出し物決めることになってなそうしたら家康がなのはや希の写真を採用された人にプレゼントとか言つて」

それは…人権もへつたくりもないね…

「はあ…菊池君ったら」

なのはが溜め息をつきながら黒板を見たから僕も振り返った

「皆良く意見を言うってくれた！では出し物を決定する！」

家康はそういうとゴホンと咳払いをした後、チョークを持ち

「我がFクラスは…コスプレ喫茶に決定する！」
と言いながらコスプレ喫茶の字に丸をした

途端に落胆の声上がり始めた

『畜生！』

『神様なんか大嫌いだ！』

『二人の写真がああ』

「シャラープ！んで誰だ？この意見出したのは」

あつ…それは…

「僕（俺）…」

僕と巧が手を静かに上げた

教室に入った時、家康にやりたい出し物を書けと言われたから巧と
相談してこれを書いたんだ

「んじゃー写真プレゼントなー。」

僕と巧はみんなからの視線を恐れながら写真を受け取った

「じゃー鉄人に坂本と報告しとくから。今日は解散」

『吉井殺す!』

『写真よこせえ巧いい!』

『明久君…やっぱりお仕置きが必要ですね』

『巧!300回死ねええ!』

ぐっなんでいつもいつもこんな目にいいい!

「はあ…酷い目にあつたよ…」

僕は溜め息をつきながら歩く

「まあそつ言つな。高町の写真が貰えたからいいだろ」

雄二は苦笑しながら霧島さんと歩いていた

「そもそもお前が遅刻したのが悪いだろ」

そう言いながらアंकはアイスを食べながらBクラスの赤髪でポニ
ーテール、美波のような強気な女性佐倉 杏子さんと歩いている

「アキ君はいつも戦ってるから仕方ないよ」

そう優しく言ってくれるのは女神のなのはだ

僕は腕に抱きついていているのはと一緒に歩いている

秀吉は部活、ムッツリー二は撮影に、美波は彼氏とデートに姫路さ
んは急用、巧達はストレイキャッツの営業があるからいないんだ

「雄二のコスプレ楽しみ…」

「お前は一体何に期待してる！いつとくが女装はしないからな」

「…残念」「お前本当に願ってたのか!？」

坂本夫婦はいつも通りだからほっておいて

「アंकが付き合ってるなんて意外だったよ」

「悪いか？俺だって異性に興味はあるんだよ」

へえーそういえばAクラスの木下さんとも噂があるらしいね

「「そして何で高町はこんな状態なんだ?」「」

「そんなの僕が聞きたいよ！」

わからないよ！……だっていかにも幸せそうに腕に抱きついてるんだよ！？理由なんか聞きだせたもんじゃないよ……

それにしても姫路さんが転校することには本当に驚いたよ……そりゃ……Fクラスなんかいたら心配されてもおかしくないはずだ
でも清涼祭で売り上げが良かったら新しい机や椅子を買うことができる。

姫路さんの為にも頑張らなきゃね

そういえば姫路さんがこんなことを言ってたな……

『……その、明久君は知ってますか？ 文月の学園祭では、とっても幸せなカップルが出来やすいって噂が……』

……果たして僕に春がくるのかなあ？心配だよ……

そんなことを考えてると学園長から呼ばれて…腕輪を回収して欲しいとか言われ召喚大会に参加することになったんだ

召喚大会に勝てばきつと姫路さんのお父さんだつて認めてくれるはずだから勝ちに行く気で姫路さんを選んだけど美波と出るらしく、雄二は霧島さんだったら巧と…と思っていたけど希と出るらしくて

そしたらなのはに声をかけられて今に至る訳。

「アंकは出ないの？」

「興味ないからな」

言うと思ったよ…

「それにしても強敵ばかりだね。フェイトとはやてさんペア、まどかとほむらペア…雄二と霧島さんペア、美波と姫路さんペアに巧と希ペアか…」

「お前らも十分に強敵だな」

雄二はそう言うのと僕らを見た。そうだよな。なんたつて僕にはなのはがいるから！

「そうだ…高町、明久」

「何雄二？」

「テストロッサが何故か恐ろしいオーラを出してたぞ」

「「え？（ピロロン）」」

なのはの携帯からメールの受信音が…

「二件？…」

それを見てなのはは急にペタンと膝をついた

「どうしたのなのは！？」

「フェイトちゃんが本番絶対負けないって…」

「あはは…簡単には勝てないね」

「うん。（フェイトも明久の事好きだもんね）問題は次なの」

僕はなのはから見せてもらった内容を見て驚く

「あなたの全てを知っています。僕と付き合ってください」

「なんだよこれ…」

杏子さんが携帯を睨みながら呟く

「私こんなメール知らないよ」

「こいつは脅迫メールか？」

「そんな…一体誰が…」

途端にアंकが大声で叫んだのが聞こえた

「明久！後ろだあ！」

「えっ…？うわああ！」

僕はいきなり現れたサメの怪物に突進され倒れる

「うっ…痛てて」

『キシヤアア！』

「きゃああ！」

なのはがサメのヤミーに襲われかけていた

「このやろー！」

サメヤミーに激突し跳ね飛ばす

「大丈夫なのは！？」「うん」

「アंकこいつってやっぱり」

「ああ！メズールのヤミーだ！」

「おい明久！これがヤミーって奴か？」

「そうだよ雄二…言わば欲望から生まれた化け物」

そう言った後みんなを下がらせ僕はベルトを装着した
そして三枚のメダルを入れる
スキャナーを取り出しメダルを読み込む

「変身！！」

『タカ！トラ！チーター！』

いきなり亜種のオーズに変身した

「いきなりこれ！？」

「いいから倒せ！」

文句を言ってもアंकがうるさいから仕方ない

「ハアアア」

足に力をためて一気に加速！

「はやいなっ！」

「チーターの能力か」

「セイヤアアア！」

地面を泳いでいるサメヤミーを引きずり出し空中で連続高速キック

をしてセルメダルに分解した

「よつと…！」

「凄いな…あの明久がここまで戦えるとはな」

「…流石吉井」

坂本夫婦。お誉めの言葉ありがとう

僕はすぐなのはの方へ駆け寄る

「大丈夫だったなのは？」

「うん…ありがとう／＼」

「良かった。／＼」

お互いに照れているとまたアंकのでかい声が

「馬鹿明久！後ろだ！」

「えっ…ぐああ！」

二体目のサメヤミーに奇襲をつける。しまったメズールのヤミーは
確か沢山いるはず

「くそっ…！！？うわああ！」

「明久！」

今度はさらに協力的な攻撃がきて近くの川まで吹き飛ばされた

「ぐっ……」

「オーズ……私のヤミーよ？」

「そうだメズールのヤミーだ！」

「お前達は確か……メズールとガメル！」

灼熱コンボと誘拐と新たなメダル（前書き）

カウンザメダル！

現在、オーズの使えるメダルは

タカ×2

クワガタ

カマキリ

バッタ

ライオン

トラ×2

チーター×2

ゴリラ

ゾウ×2

灼熱コンボと誘拐と新たなメダル

「お前達は確か…メズールとガメル」

「あら…覚えていたなんて嬉しいわオーズの坊や」

「オーズ！俺のメダル返せええ」

ぐっマズいな…状況は前と同じ2対1…

しかもグリードが2体けど…やるしかない！

「いくぞおお！」

「あら…元気がいいわね…いらっしやい！」

僕はジャリバーを構えてダッシュでメズールへ攻撃を仕掛ける。足が水に浸かっているから早くはないけど

「いいわよオーズの坊や♪」

メズールは手の平を僕へ向ける

んっ…待てよ！？

「ハアア！」

「しまった！ぐああ！」

メズールが発射した水流弾をともに受け吹き飛ばされた

「メダル返せええ」

「うわああ！」

倒れた所をさらにガメルの突進を受けまた吹き飛ばされる

「くそおお！」

ジャリバーでガメルを切り裂きメズールに斬りつける

「甘いわ……」

「なっ」

攻撃は簡単に避けられた……

「ハア！」

「うぐっ！」

メズールは僕に蹴りを放った

「ウオオ！」

バキヤツと固い音が響きガメルにボディーを殴られる

「くっ……ぐあ」

そして再びメズールの蹴り…

くっ…このままじゃ

「フフ！」

「ぐっ…がつ」

メズールに何発も蹴りを打たれ僕はよろめいた

「あらあら…こんな程度なのオーズの坊や」

「うるさい…」

セルメダル素早くジャリバーに入れる

「ウオオ！」

「おりゃあ！」

突進してくるガメルを蹴り飛ばしスキヤナーで剣を読み込む

『ダブル！スキヤニングチャージ！』

「はあああ！うおりゃあああ！」

剣に力を込めてチーターの力でメズールまで近づく

「なっ！」

「それでも…くえええ」

カ一杯メズールに剣を振り下ろし

「うあああ！はあっ！」

チーターで素早くメズールの体に高速蹴りを放つ

「きゃあああ！うはっ」

たまらずメズールは後ろへ吹き飛びメダルが4枚飛ぶ

「メズールうう！オーズうう！」

「ぐっ…」

ガメルの拳が顔面に当たり吹き飛ばされた

そしてチーターとトラが飛ばされた

「しまった！」

僕は機転をきかせ素早くメズールから出たコアメダルを掴む

『コッソ』

そんなまぬけな音が響き、飛んだトラとチーターのメダルはメダルを取られ足の部分の鎧が破壊されたメズールの頭に当たった

「ぶ……」

駄目だ思わず笑いが…

ピキッ

「オーズの坊やあ…」

えっ何？僕何か悪いことした！？

「ハアア！」

「えっ…うわああ」

変身が解けた僕にメズールの水流弾が襲いなんとか避ける

「明久ああ！」

「この声はアंक…！？」

すると僕の目の前に腕だけのアंकが現れた

「何メダル取られてんだ！」

「ごめん…」

「謝る余裕があんならさつさとメダル取り返せ」

アंकは僕にトラ、チーターを渡す

そつえばまだあつたんだっけ？

「変身！」

『タカ！トラ！チーター！』

僕は再び変身をしてグリード達に構える

「何度やっても同じよオーズ」

「そうだ！メズールの言うとおりだ」

「わからないじゃないか…だって僕には」

そついつて黄色いメダルを取り出す

「お前！そのコアメダルいつの間に！」

「鴻上さんからのプレゼントさ！」

そう僕が取り出したのはライオンのメダル…つまり

「これで黄色のコンボでしょ！」

「なっ！コンボはヤバいと言っただろうが！」

「あなたはコンボに耐えられる器かしら？」

確かに前は運が良かったかもしれないけど…

「言っただよねアंक。僕は死ぬきなんかないって」
「チッ！」

僕はピーンとライオンメダルをはじいてキャッチ。そしてタカと入れ替える

「まさか！この坊や本当にコンボを」

『ライオン！トラ！チーター！』

さあいくぞおお！

『ラッタラッタ〜！ラトラータ！』

オーリングサークルは上からライオン、トラ、チーターとなり顔が立派な鬣と青い目に変わる

これがラトラーターコンボ！

「うおおおおー！」

そしてライオンヘッドから夜をかき消すくらいの光が放たれる

「きゃあああ！」

「〜」

頭から放たれたのは灼熱…水がすぐに干上がりメズールとガメルは大ダメージを受けた。

「はああああ！」

灼熱の光を払い当たり一面が溶けている

「はあ…はあ…」

肩で息をしながらグリッド達を見る

メズールは弱りきっていてガメルは穴を掘ってメズールを連れて逃げ出した

『シャアアア』

川からサメヤミーが飛び出した

「ふっ！はあっ」

トラクローを展開させサメヤミーを捕まえる

バシャンと地面に叩きつけ素早く切り裂く

「はあっ！」

胴体を集中的に狙い素早く

「はあっ！てああ！」

そして何度も切り裂き後ろへ吹き飛ばす

さあとどめだ！

「ふっ…（ガチャン）」

『スキヤニングチャージ！』

「はっ！」

三つの輪を作りそして構える

「はあああ」

ダダダダと高速で走り敵の前でライオンヘッドから光を放つ

『キシヤア…』

「うおお！せいやああ」

そして目を潰した所で力一杯切り裂く

ドオオンと爆発音を立てヤミーはセルメダルに分解された

「ぜえ…ぜえ…やった」

うつ…体に入らないや…

「ぜえ…ぜえ」

「まさかラトラーターも耐えるとは…」

どんなもんだい。僕だってただの馬鹿じゃないんだ

「明久！」

雄二達がこっちに急いで走ってきた

「ゼエ…あれ雄二？どうしたの」

雄二達は顔を青くしながら僕の顔を見て

「落ち着いて聞け。高町が…誘拐された」

えっ？なのはが…

まさかヤミーに！？

でもどうして！？

「明久は休んでろ！俺達が助け出す！」

そう言つて雄二達はダッシュで走つていった

「あれは…タカ缶？」

そうか…雄二がとつさに…流石に雄二だね

「明久！お前は寝てろ」

そう言つてアंकは僕からコアメダルを取り上げタカ缶の後を追つていった

「冗談じゃない！…なのはが誘拐されたんだ…ゼエ…助けな…きゃ」

ドサツと音が響き僕は地面に倒れる

くそっ！こんなところで倒れている場合じゃ…

「やはりあなたではメダルの力を引き出せませんか…」

突然声が聞こえ顔を上げると

「真木先生……？」

僕らの化学を担当している真木先生がいた

肩には同じみの不気味な人形を乗せている

「どういう……こと……ですか？何故…先生がコアメダルのことを……」

「…高町さんをさらったヤミーならさっき私の前を通り過ぎました
よ」

「なっ！？」

ちよつと待つてよ。彼は先生だよね？どうして生徒を助けなかったんだ…

「どうして助けないんですか？…」

「最近…人を手に入れたいという欲望の持ち主がいましたね…」

「？」

「私はちよつとある所に博士として勤めてましたね。それがグリードやオーズ、メダルに関する職業なんですよ」

「えっ」

「そして今私は人間の欲望の強さを研究しているんですよ。そしていい欲望の持ち主が現れました」

「それとこれとなんの関係があるんですか」

「あるんですよ…そのヤミーの主はあなたのクラスの生徒…確か高橋という生徒でしたね」

僕は無理やり体を起こしながらショックに耐える

「そんな…高橋君が…」

高橋君は確かFFF団のメンバー…何故彼がなのはを…

異端審問にかけられるから…ヤミーを作ってまで…？

いや高橋君はそんな人じゃない

「それにしても…面白いものです欲する欲望は…」

僕は先生の言葉を聞き拳に力を入れた

「一人の人間を手にする為にあそこまで力が増幅するとは…」

「そんなことでなのはを見放したんですか！？」

「これからが面白いのですよ吉井君。実際に欲望を満たせばどうなるか興味深いです」

「興味深いだど？なのはがどうなっても先生はいいんですか」

「人間は必ず終焉を迎えるのです吉井君。高町さんに良き終焉を」

こいつ……

「ふざけるなああああああああああ」

僕はダッシュで先生の所まで走り

バキヤッ…

先生を殴り飛ばした…

「!?!」

「ふざけんな！先生は人の命よりも人の欲望を優先するんですか？」

僕は先生を睨みつけた。先生は人形が落ちて混乱している

「あんたはクズだあああ！」

僕はそういつてこの場を去る

「なのは！待っててね！」

携帯を取り出し雄二に電話をする

『もしもし明久か！？休んでろと言っただろうが！』

「大丈夫だよ雄二！それよりそっちは見つかった？」

『くっ…缶が破壊された』

「えっ？」

『本来普通のヤミーじゃ…破壊は難しい』

急にアंकの声が聞こえた。ということは

「まさかグリードが…」

『わからねえ！だが今はとにかく探さねえと！気をつけるよ明久！』

「わかったよ雄二！」

グリードか…だったら余計に状況がマズい！

僕は疲れた体に無理やりダッシュをかける

「ほお…これは面白い状況になってきたね。里中君。」

「はい」

「面白いものが見れるかもしれない。これをあの人に渡してきてくれたまえ」

「了解です」

そっいつて鴻上は里中に銀色のコアメダルを渡した

嫉妬とトラ缶と黒いコアと…（前書き）

今回は急展開が多いです。そして毎回感想ありがとうございます！

嫉妬とトラ缶と黒いコアと…

バカテスト 清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決めるためのアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？』

【？可愛らしさ ？統率力 ？行動力 ？その他（ ）】

また、その時のリーダーの候補も挙げてください』

土屋康太の答え

『【？可愛らしさ】 候補…… 姫路瑞希、高町なのは、島田美波、

芹沢文乃、霧谷 希』

教師のコメント

甲乙付けがたい、といったところですかね。

吉井明久の答え

『【？可愛らしさ】 候補…… 高町なのは、フエイト・T・ハラオウン、鹿目まどか、暁美ほむら、姫路瑞希、泉比奈（取り消し）』

女性達のコメント

「泉比奈って誰（ですか？）」

坂本雄二の答え

『【？その他（結婚相手）】 候補…… 霧島翔子』

教師のコメント

なぜAクラスの霧島さんが用紙を持ってきたのでしょうか？

なお、このアンケートは当日の前の日に行っています

「…うわあああ…！」

キヨちゃん！キヨちゃんの顔が泥で汚れていくうつ！

「ああああ…！」

キヨちゃん！キヨちゃんの頭に鳥のフンがああ

「ヤメロー…」

「ゼエ…高橋君はどこだ！」

くそっなのは…

『PULL』

焦っている僕に電話が鳴り響く

「はい…」

「明久！大変だ！テストロッサまで誘拐された！」

「え…？」

「すまない、助けようとしたらヤミーに襲われちゃった」

雄二は悔しいそうな声で叫んだ

フェイトまで…

「相手の特徴とかは！？」

「ああっ一人は緑色のジャケットを着た奴だ！」

そんな奴Fクラスに居たっけ？

とにかく急がなくちゃ！

「うぐ…くそっ！どこだ！どこへ行けば…」

『キシヤアア！』

「なっ！？」

突如サメヤミーが僕に襲いかかってきた

メダルを持ってない僕はどつすることができず腹を殴られた

「ぐ……」

ボタンと音が聞こえた

くそっ倒れたら駄目だ！倒れたら駄目……だ……

「……君！」

ん？何だ？

「アキ……君！」

この声はなのは……？

「！？」

僕はすぐに目覚め起き上がったが、縄で両手を縛られ、目の前には両手を縛られたなのはとフェイトがいた

「なのは…フエイト」「良かった!」

「大丈夫明久?」

「うん…」

ここはFクラス?そっか…サメヤミーに襲われて連れて来られたのか

「よう吉井!」

「高橋君…!?!」

高橋君はこちらを見ながらニヤニヤと笑っていた

「なんでこんなことをするんだ!」

「理由は簡単だ…明久…お前が憎いからだ」

僕が…憎い?

「ああ!…なんでお前だけそんなに高町とテストロッサと親しいんだよ!」

「それは…」

高橋君はギリギリと歯を食いしはる

「憎いなら僕だけにすればいいじゃないか…!」

高橋君はこっちを睨みつけ

「俺は高町さんとテストロッサさんが好きなんだ！」
と言った

「え…？」

一番早く反応したのはなのはだ…

「二人が好きなんだ！けど…どうやっても振り向いてくれない！なら」

高橋君は俯きながら拳を握りしめる

「なら…力づくでも奪うしかないんだ！」

「高橋君！私達がそれであなただを好きになると思っの！？」

「思っていないよテストロッサさん！けど…こうするしかないんだ」

何だよそれ…結局は逃げてるだけじゃないか…それになのはやフェイトがヤミーに襲われて…こんな状態にされて…

「君は本当に彼女が好きなんだろ！だったらこんなのおかしいよ！」

「黙れ吉井！お前なんかに説教なんかされたくないんだよ！」

高橋君が腕を上げると同時にサメヤミに殴られた

「がつは…」

「アキ君！」

「明久！」

「女たらしなお前なんかには何がわかる！お前なんかがいるから」

「高橋君！アキ君に酷いこと言わないで！」

「うるせえ高町！無理やりにもわからせてやる！」

高橋君はなのはの顎を掴んだ

「いや！」

「なのは！」

「やめるんだ高橋君！！！」

高橋君は無理やりなのは顔を寄せようとしなのはは必死に抵抗する

「やめて…」

「ぐっ…なのは！」

「なのは！」

やめるんだ…高橋君…

「やめてええ…！」

なのはが思い切り叫んだ瞬間

「うわあああ！！」

高橋君が吹き飛ばされ、サメヤミーが消し飛んだ…

「え…？」

なのはもそれに驚いている…

「なのは？」

「あれは！？」

なのはの周りには黒いコアメダルが浮いていた

「なんだあれ？…黒いコアメダル？」
「なのは！」

フェイトはなのはを抱きしめ黒いコアメダルは再びなのはの体内へ消えていった

「フェイトちゃん！」「なのは！」

二人はお互いに泣いている

怖かったんだろう…

僕はふつふつと怒りが込み上げてきた

「痛てて…なんだ？」
「くたばれええ！」

起き上がった高橋君に思い切り僕は殴りつけた

「うっぐっ！」

高橋君は後ろへ吹き飛び教卓へ激突した

「ふざけるな！二人がどんな気持ちなのかお前にわかるのか！？」

「……ぐ」

「君は本当に彼女達の幸せを願ってるんだろ！？だったらどんな結果になっても応援するのが本当に好きって意味じゃないの！？」

「……う」

「君はただなのはとフェイトに恐怖を植え付けただけだ！」

欲する欲望？くだらない！

「お前に…お前なんか…」

「高橋君…冷静になろうよ…」

高橋君は俯きながら齒を食いしばる

「高橋君…私ね」

なのはが高橋君に近づいた瞬間サメヤミィが襲いかかった

「や、やめろ!!」

高橋君がとっさにかばい高橋君は背中を斬られた

「ぐ、ああ」

「高橋君!」

「おい明久!大丈夫か!?!」

この声は雄二!

「雄二!アंकがいる!?!」

「明久!何やってんだ!」

「アंक!メダル!早く」

アंकは僕に迫力負けをしたのかメダルをすぐに渡した

「高橋君…僕が君の欲望を破壊する!変身!」

『タカ！トラ！バッタ！タットツバ！タトバ！タットツバ！』

同じみのメロディーが流れ仮面ライダーオーズに変身した

「ハッ！」

トラクローを展開しサメヤミーを廊下へ引きずりだす

「ハア！ぐっ…」

トラクローで引き裂いたがコンボの疲れが僕を襲いサメヤミーに蹴り飛ばされた

「チッ！やっぱり無茶しやがって…」

「たあ！おりゃあ！」『キシヤアア！』

「うああ！」

駄目だ…力が出ない

『キシヤアア！』

ズバツとボディーを切り裂かれ僕は吹き飛ばされる

「うわああ…！」

廊下を転がり階段から転げ落ちた

「うわっ…！ぐっ」

『キシヤア！』

サメヤミーは学園の外へ逃げ出した

「しまった！」

外を覗いてみると20匹はいる…あれが全部か…

「ぐっ…このままだと…ん？化学室？」

僕は何かを誘われるように化学室へ入る

「明久！何やってんだあ！！」

「アंक！これって！」

アंकの声がしたから僕はある物を持って化学室から出た

「なんだそりゃ？」

「新しいカンドロイド？」

雄二となのはが覗き込む

「ライドベンダーを起動させ合体させる…乗った所でラトラーター
コンボだって…」

フェイトが説明書を読み上げる。そうか…これはライドベンダーに
合体させるのか！

そうと決まったら

「アंक！メダルメダル！出して！出して」

腕状態のアंकを掴み叩く叩く叩く

「ぐっ…」

「メダルうつ！出せええ」

そしてアंकを上下に振ると素晴らしい！

メダルが出てきたではないか

「あつた。ちよつと邪魔」

アंकが凄い邪魔だから横へどける

「ぐあつ明久…覚えてろよ」

「くくつ。ざまあねえな」

雄二がアंकをつつきながらニヤニヤと笑う

「じゃあ…行ってくるよ！」

二階から飛び降りてすぐにライドベンドーを探す

確かこの学園には3つあつたはずだ

「！あつたあつた」

さっそく販売機をライドベンドーに変形させる

「よし！じゃあ頼むね！」

トラ缶のタブを開けて空中に投げる。すると小さなトラになった

「はは可愛いや」

「ガウ」

トラ缶は喜びながら手にこすりついた。それがまた可愛くて

「よし合体だ！」

「ガウ！」

トラ缶は僕より大きくなりライドベンダーの先端に合体する

トライドベンダーの完成だ！

「ガウ」

トライドベンダーはまるで僕に乗れと言っているように鳴く

「よし！わかった！せりやっ」

『ライオン！トラ！チーター！』

飛び乗ると同時に素早く黄色コンボへと変身する

『ラタツラターツラトラーターツ!』

「凄い!コンボになっても疲れを感じない!」

「ガオオン」

トライドベンダーもやる気満々だ!よし行くぞ!

『キシヤ?』

「邪魔邪魔ー!」

サメヤミーを引き倒して行く僕とトライドベンダー
すると一部の奴が水流弾を放ってくる

「うわあっ!」

『キシヤアア!』

サメヤミー達が飛びかかってくるのを見て僕はトライドベンダーの
上に立つ

『トリプルスキヤニングチャージ!』

オーズ無双の始まりだ!

「ハッ!」

「よっ!」

「りゃあ!」

「セイヤッ」

「ホッ!」

「フッ!」

「オリヤアアア」

何体ものサメヤミーを切り裂いていき残るは5匹になった

「決めるよトライドベンダー!」

「ガオオン!」

サメヤミー達を追い抜き止まる

「ガオオン!」

トライドベンダーが砲口は放ちサメヤミー達が地面から飛び出す

「ハアア！」

トライドベンダーを傾けてタイヤから光弾を放った

『キシヤアア！』

空中では大爆発を起こし大量のセルメダルが落ちてくる

「よおっし！よしよし♪」

僕はガッツポーズをした後、トライドベンダーを撫でる

「ガオオン！」

嬉しそうにトライドベンダーは吠えた
良かった良かった！

「ふん。上出来…メダルメダル」

いつの間にか来たアंकは僕を誉めるとメダルを拾い集める

さてと手伝うかな！

この時僕はなのはから出た黒いコアメダルの力をまだ知る余地もなかった

N O s i d e

「H A P P Y b i r t h d a y …」

鴻上はいつものようにケーキを作る

そのケーキにはオーズとデコレーションされているが中央には赤いコアメダルが置いてあった

「素晴らしいよ！！黒いコアメダル…そしてそれは人間の体内に宿されている！」

鴻上はモニターを見ていた。勿論オーズの戦いだ

「ですが不思議ですね…」

そう言ってガチャガチャのカプセルを持っているのはD r ・真木だ

「人間はコアメダルを体内に宿すとやがてグリードとなるはずですが…」

「そこなんだよDr・真木！彼女の体内には3つの黒いコアメダルがあるのだよ…しかし！彼女には何の変化も訪れない！実に面白い話だよ」

鴻上はなのはを見てニヤリと笑った

「そしてオーズにそのコアメダルが宿った時…何が起きるか興味深いものです」

真木はキヨちゃんと言う肩にのせている人形を見ながら呟いた

『HAPPY birthday…HAPPY birthday…』

誕生日の曲が流れる中鴻上はケーキを仕上げた

『HAPPY birthday…ディース！』

鴻上が高らかに叫び曲を遮った

そして再び曲が流れる

『HAPPY birthdayオーズ…』

ケーキが3つある中で2つにはオーズとディアスとデコレーションをされていた

「銀色の戦士の誕生だ!…」

明久side

僕は走っている。そう全力で…

昨日、僕は高橋君と仲直りをした。高橋君はあの後、自分の過ちに気づきなのはとフェイトに謝った

二人は反省をしているから許すと言って高橋君はその時本当の気持ちを伝えたんだ

二人に告白をした…

けど…高橋君は断られ肩を落としていたけどその顔に後悔はなかった

『吉井！俺決めたよ！もし二人が危ない時は俺も協力する！もし二人が変な奴らにつきまとわれたら俺が助ける！それが俺にできることなんだ』

高橋君はこれからきつといい彼女に巡り会えるだろう…そう僕は信じてる

そんなことがあったけどなぜ僕が全力で走っているかと言うと…

明日の清涼祭にそなえて…ね準備を…ね

「うっ！今日は早くから教室の準備をする予定だったのに」

僕と秀吉とムツツリーニ、そして須川君で教室を喫茶に改造すると決めていたんだ

集合は6時…文月学園は結構早くから学校を開けてるんだね…思ったりする

「今は5時40分…どうにか間に合うかな？」なんでこんなに早くからするのかと言うとAクラスの梅ノ森さんが指揮する梅ノ森財閥が協力してくれるからなんだ

遅くなったらいい迷惑だからね

梅ノ森財閥は7時に手伝いに来てくれる予定だから少しでもやりやすくしとかないと駄目だしね

「雄二…そうだ雄二は朝からなんかの用があるらしいから来ないんだった。雄二め！今はFクラスを優先するべきでしょ」

流石に朝の5時は静かだ…まだ空も暗いから仕方ないか…

前に捕まった信号も今は青だ！

「よし！間に合うぞ！」

あとはこの道を曲がったら…

「！！きゃああ」

ドーンと誰かにぶつかる音が響く…声からして女性だね…

「痛たた…」

「痛てて…あつすみません！大丈夫ですか！？」

僕は謝りながら素早く手を差し伸べた

「…！あつごめんなさい！大丈夫です！」

その人は慌てながら手を差し出してきた

制服からして文月学園の学生か…

「私…結構不注意でして…本当に大丈夫ですか？」

その人は顔を上げて心配してきた

トクン…

「はい… 大丈夫… 夫です」

トクン…

「良かった。あれ？Fクラスの… 吉井さんですよね？」

ドクン

「は、はい…。何で僕の名前を…」

「あっ…それは最近私のクラスでFクラスの吉井明久と言う人の噂で持ちきりでして…」

そこで彼女は言葉をきり慌てて口を開いた

「あっすみません！自己紹介がまだでしたね…私…2年Aクラスの
泉比奈っています！よろしく願います」

ドクン…

「えっあっうん…！よろしく泉さん！僕は2年Fクラスの吉井明久です！」

「あっ比奈でいいですよ。やっぱり吉井さんだったんですね！」

彼女はふわりと微笑み目をキラキラさせている…可愛い…

「吉井さんて噂では可愛い受けの男子と言われてますが…」

誰だ…そんな噂を流した奴はああ？

「吉井さんて噂とは違って格好いいですね！」

ドクンドクン

「ほえ？」

つい間抜けな声が出てしまった…だってなのはやフェイト以外に格好いいなんて言われたことないから

「あ、ありがとう！ひ、比奈さんだって可愛いね！」

「ふえ？／／」

あっしまった…！

「……／／」

「／／／そ、それじゃ僕は用事があるから！」

沈黙を破ったのは僕だった。はは…間に合うかな？

「あっはい！また学園で…」

「あっうんそうだね」

さっきのは不自然じゃないよね！だって比奈さんも同じ学園だし

けど…何で胸が熱くなっただろう

NEWキャラ紹介（前書き）

今回は新キャラ紹介です！

NEWキャラ紹介

泉 いずみひな 比奈 Aクラス、Eカップ

見た目：アキちゃんを可愛くした姿。髪をセットすることでバカとテストと召喚にっ！に出た秋子ちゃんにもできる
普段はポニーテール

明るく親しみやすく誰からも好かれる性格

明久と運命的に出会った彼女が後の話を大きく左右する

川澄 かわすみ 絵里 えり

Aクラス、Fカップ

見た目：バカとテストと召喚にっ！に登場した土屋香美をさらに可愛くした姿

性格はムツリーニと似てクールだが明るく信頼されやすい

比奈とは明久とムツリーニの関係なような存在、とても仲が良い

花檻 はなおりちよみ 千代美

Aクラス、Eカップ

見た目：栗色の髪でストレートで後ろを一つにまとめている

性格はおしとやかで神秘的な人。翔子とも仲が良く比奈と絵里とは親友

たまに黒い性格になる

後藤慎太郎
ごとうしんたろう

Aクラス

後藤さんが若くなつた感じ

クールでライドベンダー隊隊長だったが、青春と言う理由でライドベンダー隊から離れた。今は美波の彼氏として学園生活をエンジョイしている

恋と準備と始まり（前書き）

今回も戦いはありません。砂糖が出ないことをお祈りします（笑）

特別問題

あなたは気になっている異性がいますか？

吉井明久の答え

『朝早く僕はある女性と出会った。これって恋なのかな？』

瑞希のコメント

明久君とりあえずお仕置きです

泉比奈の答え

『優しい人がタイプです（にっこり）』

教師のコメント

いえ、タイプは聞いていません

恋と準備と始まり

『メズール！メズール！』

ガメルが必死に呼びかけてもメズールはぐったりとしていた

オーズとの戦いでコアメダルを4枚も失ったメズールは力が衰えてしまったのだ

『俺のコアメダルあげるから…俺のお菓子あげるから…』

ガメルは泣きじゃくりながら必死に呼びかける…そのガメルの頭をウヴァは優しく撫でた

『ちっ…オーズの奴め…』

『なんであるオーズはあんなに強いんだろっ…』

舌打ちをするウヴァに力ザリは問いかけた

『わからん…馬鹿だからかあるいは…』

ウヴァはそう言いながらガメルの頭をポンポンと叩いた

『とにかく今は奪われたコアメダルを取り返す』

カザリはウヴァの言葉に頷き何かを思い出したような顔をした

『そうだ…僕欲望を作り出すいい場所を見つけたんだ』
『何っ?』

カザリは仮面ライダーオーズこと吉井明久が通う文月学園の制服を
羽織った

『この学園にはね…欲望が沢山あって…オーズがいる』

それを聞いてウヴァはニヤリと笑う

『なるほどな…欲望祭りの始まりだ!』

ウヴァとカザリは笑いあった

明久side

「…で…して」

あの子可愛かったなあ

「明久！。聞…」

今思いだしても胸が熱くなる…

「明久！聞いておるのか！？」

パアアンと何かがはじけて僕は正気に戻った

「あつ…秀吉…？何？」

「何ではなからう！今説明していたではないか」

そう言つて僕を叱るのは美女の秀吉

「あ…ごめん！もう一回説明してくれないかな？」

「仕方ないのう…今からこの部屋の駄目なものを全て外すから明久には窓を外して欲しいのじゃ」

そうだ…今は準備の途中だった

「うん！わかったよ」

「それじゃ…財閥が来るまでに全部片付けるぞ！」

「「「オー！」」」

須川君の合図と共に僕らはそれぞれの仕事に取りかかる

「よいしょ…うわ埃だらけ」

よくもまあこんな窓で過ごしてきたなあと思いつつガタガタと外しに行く

ちゃんと学園長からの許可はとってあるから大丈夫

「さてと…秀吉！手伝うことあるー？」

「大丈夫じゃーそれよりムツツリー二の所をお願いするのじゃ」

「うん！わかった」

秀吉は須川君と畳を外している。ボロボロだから簡単にはずせてる

「ムッツリーニ手伝つよ!」

「……………すまない」

いつも物静かなムッツリーニはやることを終えて買い出しに行くところだ

「いいよいよさっ行こうムッツリーニ!」

「……………(コク)」

こんな朝から店が開いてる所なんて…

あるんだよねー

『スイーツ・クスクシエ』という店が

そこは健康の為や朝から働く人にと店長が考えて朝の6時30分にはもう入れるんだ

普段は喫茶店なんだけどスイーツを作る材料があるんだよねー

ちなみに巧達の店からは材料を出させてないよ

「ムツツリーニ…ようやく行けるんだね僕達」
「…噂に聞く楽園の喫茶店」

僕とムツツリーニはポツとした顔になった

スイーツ・マドンナは美人が多くて大人気なんだ…今まで行こうとしたけどそのたびにヤミーがね…

「ムツツリーニ、秀吉達だけで大丈夫かな？」

「…問題ない。高町達も後から来る」

良かった…なのはの家は喫茶店だから本格的になりそうだね

そんなこんなで喫茶店に僕らは到着した

「おはようございます」

カランカランとよく喫茶店にある鈴がなる

「うわあ…凄いなあ」「……Aクラスの設備」

豪華な使用で喫茶店とは思えないなあ

「お帰りなさい！今日はメイドフェアです。あらっ明久君！？」

元氣よく一人の女性が調理する場所から現れた

彼女は店長の知世子さん。姉さんと同級生だったんだ。
綺麗だなあ…

「おはようございます知世子さん。僕達今日は学園の祭の為にケーキの材料買いに来たんです」

「あらそうなの～。じゃああっちに材料が売ってあるから」

店には既に何人がカップルやサラリーマンがいる

「あら…？お友達の人どうしたの」

「えっわああムツツリーニ！！」

ムツツリーニが鼻血を出してノックアウトしてるっつ

「…明久。ここは美女の楽園」ガクッ

「ムツツリーニイイ！」

「あら…鼻血が出てるわ…星野さん！救急箱お願いできるかしら？」

そう知世子さんが言うのと近くにいた女性メイドが頷き走って行く

うつ…ここは本当に女性ばかりだ

「じゃ　じゃあ僕は買い物するのでムツツリーニをお願いします」
「わかったわ」

籠を持って僕は食品、材料売り場に向かった

「うわあ…凄い…」

品揃えが凄いなあ…流石知世子さんだ…

「えっと…ショートケーキにチーズケーキ、クッキーやクレープに…」

僕は作るスイーツを確認し材料を入れていく

「さてと…こんなもんかな結構多いなあ…」

籠を二つ持ってレジに向かう。さてと買ったらムツツリー二を起こさなきゃね

「すみませんお願いしまーす」

「あつ…はい」

さっきまで接客をしてた女性がレジに向かって…

「すみません！あつ…吉井さん？」

「い、泉さん…」

なんで泉さんが…

「あつ…私、ここでバイトをしてるんです」と言いながら泉さんにはにつこりと微笑んだ

可愛い…メイド服だから余計に…

「？どうしましたか吉井さん？」

「あつごめん…ごめん。じゃあお願いするね」

「かしこまりました。ご主人様♪」

(うつうつ…ヤバイよ)

僕は顔を真っ赤にしながら照れた

「ありがとうございます♪」

「さ、さて…ムッツリーニは…」

「……明久…休憩したい」

そうだね…ムッツリーニは鼻血が出たから栄養とらなきゃ！

「知世子さん！ちょっと食べていいですか？」

「あら！嬉しいわ〜じゃあこの中からメイドさんを指名してね♪」

(えっ……)

知世子さんからメニューと『メイドさん名簿♪』を貰いパラパラとめくっていく

たまには贅沢しような？

えっとメニューは…

メイドさんの熱々クレープ

メイドさんの愛情ケーキ

メイドさんのラブラブクッキー…って

「ちよつとマテエエエイ！」

「あら？どうしたの明久君？」

「ここはメイド喫茶ですか！？メニューまで変わりすぎでしょ！」

知世子さんはほっこり微笑んで

「大丈夫よ！今日だけだから」

と笑顔満々で言った…

「あの…普通のメニューは「今日だけだから是非選んでね！」ぐ…」

くそっ……仕方ないか…

「じゃあ…僕は『メイドさんの愛情ケーキで』ムッツリーニは？」

「…………俺も『メイドさんの愛情ケーキ』を頼む」

「わかった！すみませーん『メイドさんの愛情ケーキ』を二つお願いします！」

すると知世子さんがやってきた

「メイドさんも指名してね」

な、何っやはり

「あの、無しは『駄目よ』メイドさんも待ってるから」ぐっ……」

キャンセル不可！なんてこった

「はあ……じゃあ僕は……『泉……さん』で……」
「……俺は『川澄』で頼む」

「了解よ。アクアちゃん！アートちゃん！指名よー」

「「ちょっとマテエエイ！」」

僕とムツツリー二は同時に叫ぶ

「誰だよアクアちゃんって！」

「……アートちゃんなんて知らない！」

「あらゝ二人のニックネームよ」

「（いや…無茶ありすぎる）」

ムツツリー二と同時にツツコミながら待っていると

「すみませんお待たせしました！」

「…ケーキ二つでしたよね？」

比奈さんとまるでムツツリー二のように静かな川澄さんが笑顔でケーキをテーブルに置いた

「あっどうも」

「（パシャパシャ）」

僕は照れながらムツツリー二は写真を撮りながら赤い液体を出している

「大丈夫ですか!？」

くっ 泉さん可愛いすぎる…

ズボッ！

「ふん… 大丈夫」

「…… もんたいない」

「… テイツシュ」

「ふふっ 面白いですね」

川澄さんと泉さんが微笑みながら僕らを見る

「「！？／／」」

「「では隣失礼させていただきますね」」

ゑ…！？

「えっ どういうこと！…」

「メイドフェアですから… はいご主人様あ、あーん／／」

ケーキをさっくりと刺し笑顔だけど恥ずかしそうに僕にケーキを向けてくる

そりゃあ… 初めてだから恥ずかしいよね

「あ… あーフゴゴゴ」

でかい！ケーキが丸ごとおお！口がああ

「…ご主人様あーん」

「……っ！あーフゴゴゴ」

隣を見るとムツツリーニも同じことにいい

「あつすみません！（うるうる）」

「バクン！問題ないよ！」

し、幸せだ…

「バクン！…これくらい朝飯前」

「…凄いです！／＼」

「（ブシャアアア）」

僕らはしばらく泉さん、川澄さんと楽しくお話をして店から出た

「じゃあ、行こう明久君！」

「そうだね比奈ちゃん！」

僕らはあの幸せだった短時間でだいぶ距離が縮まったような気がする

「…ムッツリー二君も行こう！」

「…（コクン／＼）」

青いストレートな髪をした川澄絵里ちゃんはムッツリー二とかなり仲良くなっている

きつとクスクシエは女性と仲良くなれるんだ！だったらみんなにも教えて少しでも危険を減らさなくちゃ

「どうしたの明久君？」

「な、何でもないよ／＼」

比奈ちゃんといると何故か胸が熱く苦しくなる…なんでだろう

まさか…これが恋って言うのかな？

お仕置きと約束と漏れ出す欲望

「……………」

（何故…こんなことに）

「アキ君…OHANASHIしよつか」

「ちょっと待つてよなのは…誤解なんだよ！」

僕、吉井明久は今、生まれ変わったように綺麗な喫茶店教室の片隅で…

悪友坂本雄二、エロ仲間の土屋康太（通称ムッツリーニ）と一緒に異端審問にかけられている

さかのぼること数分前

「へえ 比奈ちゃんは将来服のデザイナーになりたいんだね」

「うん。自分が考えた服が外国にも人気がでるくらい凄い服を作るの」

「…ムツツリーニ君写真撮るのが上手いんでしょ？」

「そんなの常識」

「…なら私を撮ってくれないかな？」

「そんなの朝飯前。（ダラダラ）これは疲れのせい」

なんて楽しい会話をしてた時にあいつと出会ったんだ

「ん？…明久、ムツツリーニじゃねーか」

「雄二！急用だったはずじゃ」

「ん？ああ…もう終わった」

嘘だ！絶対こいつ遊んでたな！

「じゃあその人誰？」

「勘違いするなよ！こいつは…花檻は朝出会った同級生だ！」

雄二は頬を赤くしながら強気で言った

「なるほど…（ニヤニヤ）」

「うるせえ！お前らだって誰だその女性は？」

「誰だとは失礼な！この人は学園の天使！泉比奈ちゃんだ！」

「…自惚れるな明久…。川澄絵里こそが学園の天使」

しまった！余計なことを言っちゃったよ…

「違うぞ二人共。花檻千代美こそが学園の天使だ！」

雄二も乗っかってきた…ってまさか…

「二人共こっちに来て」

「なんだ明久？」

「ムツツリー二は僕と行動したからわかるけど…雄二もしかしてクスクシエにいたの？」

「なんで知ってんだ明久…あ。」

「やっぱり！普段恋愛に興味なさそうな雄二なのにおかしいと思っ
たよ」

「う、うるせえな明久／＼。お前らだって同じだろ」

「「う……／＼」」

「僕はクスクシエで同時に恋をしたのか…」

「…明久…お前の好みは知ってる」

「馬鹿な…ムツツリーニ！なんで僕のエロ本を！？」

「…明久はポニーテールにバストが大きい人が好みと重点的に学習
している」

「な、何故ムツツリーニが知ってるんだ！？」

「ふっそんなの常識^{ニヤリ}」

えっ僕の好みが知られているのって常識なの!?

「ムツツリーニ…お前も人のことが言えないぞ」

そう言ってニヤリと笑い雄二が取り出したものは…

「…!?!俺のトップシークレット!」

ムツツリーニのエロ本だった…

「ほお…ムツツリーニは髪が青く明るいい奴が好みか(ニヤニヤ)」

「…////ぐっ」

なるほど…だからムツツリーニは川澄さんを…

けど…

「残念だったね雄二!」

僕が取り出したもの見て驚く雄二

「馬鹿な…明久何故お前が!？」

雄二のエロ本をヒラヒラさせながら笑ってみせた

「え」と雄二は栗色で長い髪をして穏やかな人が好みなんだね（ニヤニヤ）

「ぐっ…／／」

つまりまとめると…

比奈ちゃん↓ポニーテールで胸が大きい

川澄さん↓青い長い髪で明るい

花檻さん↓栗色で長い髪で穏やかな人

「ふっ…明久…お前は告ったのか？」

「ふ…無理に決まってるじゃないか」

ムツツリーニこそどうなんだい？」

「……簡単に行くはずがない」

僕らは同時に肩を落とした

「「「告つたら確実に嫌われそう……」」」

そして同時に呟いた

それに僕らには他の好きな異性がいる

もし、……まとめて付き合えたらどんなにいいだろうか……

『明久君どうしたんだろう？』

『……ムツツリーニ君も何か変』

『雄二さんも……もしかしたら告白の準備ですかね？／／』

『……！？／／／』

この後…校舎に入った途端姫路さんと会ってしまっなんて

「明久…とりあえず楽になろう」

「嫌だ！死にたくないよ！ってフェイト！？」

何時の間に！？

「それに…僕らただ…話をしていただけ」

少しなのはとフェイトの顔が緩んだ

良かった…とりあえずわかって

「嘘です！」

もらえなかった…

「だってあんなに楽しそうにしてたじゃないですか!！」

「何を言ってるんだ姫路さん!」

「そうだ姫路!何を言ってるかわから…あががが翔子待ってくれええ」

「……浮気は許さない」

「…さあ〜てムツッリーニ君…本当のこと話してもらおうやないか
(ニ「ニ」)」

「……お、俺は嘘をついてない」

教室には僕らと女性陣しかいない…何故なら

男子はクスクスエを紹介したらまっさきに飛び出して行ったからだ
…少しでも危険は軽くなった

「明久…特別に私は許してあげるわ」

「本当!?!ほむらさん!」

「当たり前じゃない…私は暴力をしてまで納得する人間じゃないから」

「ほむらちゃんがそう言うなら…私も…だって明久君が可愛そうだよ」

まどかも教室から出て行った…

まどかは何もせず痛そうだなあ…て顔で見てただけなんだ

……そうだ…まどかに言わなくちゃね…この祭が終わったら

「確かに暴力はよくないよね…Aクラスの教室良かったら来てね明久」行こはやて、翔子」

「せやな。ほなまたな」

「……雄二ごめんなさい」

フェイトと霧島さんはAクラスに八神さんはBクラスに帰って行ったフェイト、八神さん、霧島さんも教室から出て行った

Aクラスはどんな出し物をするんだろう…

「暴力で解決することなんておかしいね…ごめんねアキ君」

なのはが罪悪感が混じった顔で謝ってくる

「そんな…いいよ！僕が早く戻って来なかったのが悪かったんだから！」

僕はなのはの肩に手を置きすぐに謝る

確かに僕らが休んで行こうと言わなかったらこんなことにはならなかったんだろうな…

でも、やっぱり比奈ちゃんが忘れられない

「そうだ！アキ君これ」

そう言ってなのはが渡したのは…お弁当？

「アキ君仮面ライダーなんだから…たまには栄養つけないと駄目だよ！」

「うん…ありがとうなのは／＼」

僕は頬を指でかきながら笑った

「翔子には悪いことしちゃったな…」

「…それは俺も同じ」

「明久！無事だったようじゃの」

秀吉と須川が教室に入ってきた。手には大きな荷物を抱えている

「うん…それよりそれ何？」

「これは衣装じゃ。八神から貰ったのじゃ」

「凄いのはやてちゃん！」

ポニーテールに大きなバスト…

なのはも好みには当てはまっている…

実際なのはは幼なじみ感覚だと思ってたけど…違うのかもなあ…

「おはようみんな！」

教室に巧達が入ってきた

家康は相変わらず芹沢さんに蹴られている

「おはよう巧。材料買ってきたから後は頼むよ！」

「了解！さあ…土屋、文乃、希、高町、須川頑張るぞ！」

巧の言葉でみんなは頷き厨房室へ入って行った

「それにしても本当にFクラスの教室とは思えんな」

「これも全部「この私！梅ノ森のおかげよ！」出たの」

出た…でもまあ…梅ノ森さんのお陰だしね

「ありがとう梅ノ森さん！」

僕は二つと笑いながらお礼を言う

「ま、まあ当然よ…仲間だから」

ん？なんだろう最後が聞き取れなかった

梅ノ森さんは二人のメイドに連れられて教室から出て行った…

本当に耳がいいから驚くよ

「めんどくせえな…」

アंकは舌打ちをしながらも自分の服を着た

「似合ってるよアंक…くく」

「笑うな！！」

まあコスプレ喫茶だからね

女性陣は召喚獣と同じ姿の少し露出がある服

男性陣は召喚獣と同じ服だからFFF団はそのまま

「明久君凄く似合ってます」

「似合ってるわよアキ」

「そうかな?…」

うーん…まるで不良みたいな着方だなあ

赤いシャツを着てボタンを止めずに羽織ってるだけだからね…

「ちょっと！これ露出多くない!?!」

厨房室から芹沢さんの叫びが聞こえるけどごめん。姫路さんの転校がかかっているんだ

「よし…仕込みもOKだ」

「衣装合わせもOKだね」

明日への準備は大丈夫だ！

「みんな明日は頑張るぞ！」

『オオオオオ！』

「お姉さま…許しません後藤慎太郎！」

私からお姉さまを奪いさらにはAクラスだなんて

「お姉さまは…私だけのものです」

「吉井君…君はなんで僕に気づいてくれないんだい」

僕はそう言ってテストロッサさんを見る

吉井君がテストロッサさんにデレている光景を僕はよくみる

「きつと吉井君には沢山の害虫が…」

「…必ず学園からあいつを叩き出し私が学園を支配するんだ」

「ああ…アキちゃんに会えないかな…」

「畜生…吉井…坂本絶対復讐してやる」

『ねっ言ったでしょ。欲望が沢山あるって』

『ああ…これなら確実にオーズを倒すことができる』

『お前の欲望解放しろ』

開催と怪力と戦闘開始

「みんな気合い入れていけよ！」

「オオオオ！」

清涼祭当日、僕らは雄二の言葉でやる気がMAXだ

姫路さんの為にも頑張らないとね！

ちなみに僕はウェイターだ。幼なじみのなのはの実家は喫茶店だからバイトをさせてもらってるんだ

「のう…なんでワシだけメイドなのじゃ？」

「何を言ってるんだ秀吉！秀吉以外誰がメイドをやるんだよ！」

「ワシは男じゃ！」

そう言っただけ反発している美少女秀吉は昨日とは違いメイド服を着ている

『ウィーン』と自動ドアが開く音がした

さっそくお客様が来たね

「いらっしゃいませ！コスプレ喫茶へようこそ！」

「凄い…ここ本当にFクラス？」「ウェイトレスさん格好いいじゃない」

入ってきたのは女性だ。感動しながら僕を見て格好いいと言ってくれた

「ありがとうございます。ではあちらへどうぞ」

僕は巧がいるテーブルへ行くように促す

「きゃああ！この人も格好いい！」

「いらっしゃいませ！こちらにお座りください」

巧が二人を座らせメニューを渡した

『ウーーン』

次々に人が入ってくる

「いらつしゃいませ！コスプレ喫茶へようこそ！」

隣ではなのが接客をしている

流石に士郎さんの娘さん。接客も完璧だね

「チーズケーキセットお待たせしました」

アंकが器用に持ちながら置いて行く
ちゃんとやってくれて驚いたよ…

「いらつしゃいませ！」

「サンドイッチと紅茶がお二つですね？かしこまりました」

「お待たせしました！クリームソーダです」

「ありがとうございます！」

次々と人が入ってきて僕らはこまねずみのように動き回る

厨房では希さんやムッツリーニが手早く作り待たずにすんでいる

『ウィーン』

あつままたお客様だ！

「いらつしゃいませ…フェイト？それに八神さんも」

入って来たのはメイド服を着たフェイト（淒く可愛い…／＼）とウエディングドレスを着た八神さんだ…

「フェイトちゃん、はやてちゃんどうしたの？」

「うん。Fクラスの喫茶が気になってさ」

「コスプレ喫茶やもん…なのは似合つとるで」

「ありがとう。二人もお似合いだよ！はやてちゃんはウエディング喫茶？」

「せや。みんなBクラスのウエディング喫茶に来てな」

『『必ず行かせてもらいます！八神様！』』

さつきまで接客をしていたみんなが一斉に八神さんに向かって言った。

僕も後からA、Bクラスに行ってみるかな
まさか根本はいないよね

「明久…似合ってるね。格好いいよ」

「ありがとうフェイト…フェイトだって似合ってるよ／＼」

僕はフェイトに向けてにつこりと微笑んだ

「ありがとう明久／＼」

「フェイトちゃん…いいなあ」

なのはが何か呟いていたけど聞き取れなかった

なのはの服は召喚獣と同じでバリアジャケットだけど、肩や胸の部位が露出している

「大丈夫…まだいける」

「アキ君？」

くっ…首を傾げてくる姿も可愛いなあ！

「さてさてアキ君達一緒に何か食べようやないか」

はやてさんがそう言って僕となのはを座らす

ちなみにこのテーブルは一つに六人が座れるようになっている

「そうだよ明久。何か食べよう」

「ちょっと待って僕にはウェイターの仕事が…」

「大丈夫。坂本君に任せてあるから」

馬鹿なっ…雄二貴様！裏切ったな！

「（いつもの仕返しだ）」

雄二はニヤリと笑いながら接客をしていた

そうだ巧！

「にゃ…巧次お願い」

「わかった。行くぞ家康！」

「はいはい」

駄目か…

ならば座る前に逃げ出すか…

「アキ君、フエイト
の隣に座ってね」

何ということだ！

窓際フェイト、隣僕、隣になのは、フェイトの目の前が八神さん

逃げ出せない…

「八神さん僕と変わろう」

「はやてでいいんやでアキ君。後それは無理やな」

はやてさんはニヤリと笑いながら僕達を見ている

「お待たせしました！クリームソーダとクレープセットが二つです
！」

「ありがとな」

お礼を言うはやてさんの前にはクリームソーダ、なのは、フェイト
にはクレープセットが置かれた

『美波助けてよ！』

美波はにっこりと笑い笑顔で
『頑張つてねアキ』と言った

嬉しくない！今は嬉しくないよ！

何故か接客をしている姫路さんからオーラが出てるし！

「ほな食べようか！」

「「そうだね」」

はやてさんはそう言うクリームソーダのアイスを食べ始め、二人はクレープを切って口に入れ始めた

「じゃ、じゃあ僕も何か頼も「大丈夫だよアキ君」

なのはに遮られた…

「私のクレープをあげるから。はい…あーん」

ちよつと待つんだのは！その服じゃいろいろと危ない！

「食べないの？」

「え…あ、いや…じゃあ有り難く。あーん

」

なのはクレープをフォークごと僕の口に入れた

「おいしい？」

「うん。甘いイチゴとクリームが美味しさを引き出し何ととってもこの練乳は絶品だね」

「じゃあ次は私の番だね。明久あーん」

ちよつと待つんだフェイト！そのメイド服は可愛さが最大限に引き出されてるから鼻血がでそうだ…

「あ、あーん」

フェイトもフォークごと僕の口へ

「うん。美味しい！

チョコレートとクリームの絶妙なバランス。さらにアイスが入っているのもまた美味しいね」

二人共幸せそうな顔をしてる…

「…………ハッ！」

いつの間にか意識がどこかへ吹き飛んでたよ…危ない危ない

「アキ君二人に見とれてたやろ？」

はやてさんがいきなり小声で言ってきた

「な、何を根拠に」

「二人共プロポーシヨンええもんな」

「そ、そんなこと」ブシャアアア

「アキ君！？」

「明久！」

二人が心配して体を押し付けてくる…

な、何という破壊力だ…

「おい明久」

「あっアंक」

アंकは僕を立たせると小声で話しかけた

「ヤミーだ。しかもこの学園にいる」

「!?!」

なっ…文月学園に…それはまずいよ!

「みんな、ちよつ、ちよつとトイレに行ってくる!」

「大丈夫アキ君? 召喚大会までには帰ってきてね?」

「うん勿論だよ!」

僕はそう言った後、雄二達に任せて教室を出た

「アंक! ヤミーはどこにいるの!?!」

「…Aクラスだ」

「Aクラス！？まずい…霧島さんや比奈ちゃんがいる！」

僕はさらに速度を上げて教室に向かった

まさかヤミーが学園に出てくるなんて…

『ウィーン』

「Aクラスの皆さ」『ぐおおお』「わああ」

教室に入った途端ヤミーがこっちに吹き飛んできた…

え…？

「ふんにゅー！」

比奈ちゃん！？え、あれって冷蔵庫だよね！？

「ふんにゅー！」

『ぐおおお』

比奈ちゃんが投げた冷蔵庫はアゲハのようなヤミィを押しつぶした

「……………はは…」

苦笑いするしかないよ…何という怪力なんだ…

「あつ明久君！」

「や、やあ比奈ちゃん」

メイドの姿をした比奈ちゃんはこっちに気づくと恥ずかしそうに出迎えた

怪力だけど…やっぱり可愛いなあ…

「見られちゃいましたね…／＼」

フォローせねば…

「大丈夫だよ。誰も君を馬鹿にしないよ。それよりもヒーローだよ比奈ちゃん！」

大丈夫！怪力な女ならFクラスにいるから…

「だから恥ずかしがらなくて大丈夫だよ」

「違うわよ吉井君」

いつの間にか僕の隣に秀吉の姉、木下優子さんが立っていた

「違っつて何？」

「比奈は吉井君だから恥ずかしいのよ」

え…何？どういうこと？え？え？

『貴様……』

忘れられていたアゲハヤミーは起き上がって比奈ちゃんを襲った

「きゃああー！」

やはり怪物には勝てないらしく手首を捕まれた

『…邪魔をするな!』

アゲハヤミーは比奈ちゃんを殴ろうとしたがそうはいくか!

「だっしゅああ」

僕はアゲハヤミーに跳び蹴りをかました

『うおおお!』

アゲハヤミーはよろめいて倒れた

「今だ!比奈ちゃん逃げるんだ!」

「うん!」

比奈ちゃんは頷いた後木下さんと一緒にみんなの所まで離れた

さすがはAクラス…みんな落ち着いてる

「明久!奴をセルメダルにしちまえ!」

アंकが三つのコアメダルを投げた

「了解！さあいくぞ！」

ベルトを取り出し腰にセットし自動で巻かれる

そして三つのメダルを入れて左についているスキャナーで読み込む

「変身！！！」

『タカ！トラ！バッタ！タットツバ！タトバ！タットツバ！』

いつもの歌が流れ僕は仮面ライダーオーズタブコンボに変身した

『オーズ……！』

さあ……戦闘開始だ！

邪魔と大会とそして記憶はなくなった（前書き）

いやゝ最近更新が早くできて嬉しいです！

皆さんに質問です

明久と皆さんはどのカップがいいですか？また雄二に新しい愛人ができるとしたら誰がいいですか？

明久のカップ候補

高町&フエイト

まどか&ほむら

比奈

瑞希

もしかしたらこの中から本当の恋人を決めるかもしれません

よろしく願いします！

邪魔と大会とそして記憶はなくなった

「ハアア！」

学園の外にヤミーを追いつき勝負する

トラクロードで切り裂こうとしたが避けられる

「くっそ！」

『遅いぞ！オーズ！ふん！』

アゲハヤミーが放った鱗粉を僕は直で受けてしまった

「しま…うわああ！」

体中が爆発して僕は倒れこんだ

火力が半端ないや…

『ふん！』

「！！？うわあ」

アゲハヤミーが飛び交ってきたのを素早く避ける

「うおりゃ！」

素早く回し蹴りを頭に放つ

『ぐっ…』

「はあ！てりゃあ！」

二回連続で回し蹴りを放ちチャリチャリとアゲハヤミーからセルメダルが落ちる

「よし！おりゃあ！」

『ぐっ…ふん！』

殴った瞬間再び鱗粉を浴びてしまった

「しまった！うわああ」

さっきよりも爆発が出かく僕は転げ回った

だって熱いんだよ!?

『…はあ!』

「げふああ!」

のた打ち回っている所をアゲハヤミにアッパーされた

卑怯だぞ!

「明久!何馬鹿やってんだ!」

アंकが腕だけの状態で怒鳴りつける

「いや…だつてぐおおお」

再びアッパー!己卑怯ものめええ

「はあ!…せいや!」

殴り蹴り飛ばしを連続で放った

『うおお!』

「はあ!」

そして脳天に回し蹴りを放つとアゲハヤミはよろめいた

今だ!

『オーズウウ!』

「うわあ!」

いきなり突進を受けて僕は壁に叩きつけられた

「チツ!ガメルか!」

「痛たた…」

まさかグリッドが…

「メズールのメダル返せええ！」

「え？うわあ！」

突進を避けながら僕はガメルに話しかけた

時間がないから一か八か

「メズールがどうしたの？」

するとガメルは素直に話始めた

『メズール…コアメダルがなくなって弱ってる…意識が戻らない！』

ふむふむなるほど…つまりこうすればいいのか

「アंक」

「何だ？」

ガシッ

「何しやがる明久！うあ！」

アंकから二枚のコアメダルを取り出した

えーとこれで大丈夫だね

「メダル返すよ！だけどこれしか返せないけど…ねっ！」

そう言って僕はガメルにウナギとタコを投げた

ポス

『メダル！メズールのメダル！ありがとうオーズ！』

ガメルは嬉しそうに帰って行った

グリードにもあんな奴がいるんだね…

「おい！明久！てめえ何グリードにメダル渡してんだ！」

アंकはやっぱり大激怒した

「痛てっ…まあまああのグリード幸せそうだったからいいじゃないか」

「ハッ！馬鹿が。おらあいつ倒せ」

そう言っ僕に二つのメダルを渡した

「わかってるよ！」

トラとバッタを外し新たに二枚入れる

『タカ！カマキリ！チーター！』

「いくぞ！せいや！」

カマキリソードを展開させ素早く切り裂いたが

『甘い！ふん！』

上空から鱗粉を浴びてしまった

「うわあああ！」

そんな。あいつ空を飛べたのか！

上空からじゃ太刀打ちができず

「うわあああ！」

「ぐあああ！」

「ぐはっ……」

何度も爆撃を受け僕は倒れてしまった

『欲望の邪魔をするな…』

そう言ってアゲハヤミは飛びさっていった

なのはside

「アキ君まだかな」

私は今、もうすぐ大会が始まるのでパートナーのアキ君を待っているの

「ごめん！ごめんなのは！ちょっと用事があったさ」

アキ君は謝りながらダッシュでこっちに走ってくる

何か…体がふらついて見えるような？

「大丈夫アキ君？」

アキ君は頷きながら汗を拭っているけど
本当に大丈夫かな…？

「それより早く大会に行こう！」

「そうだね！」

大丈夫だよな？本人がそう言ってるから

高いステージの周りには沢山の生徒や、先生、保護者の方がいっぱい
いるね…

「リラックスなのは！頑張ろうね！」
「うん…！」

相手は…女子の仲の良さそうなペアだね

『対戦科目は…家庭科!』

やった!私の得意な教科なの!

「「行きます!サモン!」」

相手のペアは同時に召喚獣を召喚する

Aクラス 中川悦子

家庭科 380

Aクラス 吉田光子

家庭科 350

流石はAクラスだね!だけど…

「行くよアキ君!」

「了解!」

「「サモン!」」

ポンと音を立て私達の召喚獣が現れる

Fクラス 高町なのは家庭科 560

Fクラス 吉井明久

家庭科 250

「凄いよ！アキ君勉強したの？」

「うん…なのはの足を引つ張る訳には行かないからね…何せ僕は仮面ライダーだから！（ニコッ）」
今の言葉に私はキュンと来ました

「行くわよ！」

「ごめんね勝負だから！」

突っ込んで来る相手の召喚獣を私達は迎え打つ

「アキ君は点数は負けてるけど、操作では学園一なんだよ！」

えっへん！と私は胸を張りながらそう言いつてみせた

Aクラス 中川悦子

家庭科 0

Aクラス 吉田光子

家庭科 0

『勝者Fクラス!』

ワアアアと歓声の音が聞こえ私とアキ君ハイタッチをする

「まずは一回戦クリアだね!」

「うん!」

「じゃあ…教室に戻…」ガクン

アキ君が急に膝をついて顔をしかめている

「大丈夫アキ君!？」

やっぱり何かあったんだ…とりあえず保健室に

「大丈夫だよなのは！ただのギックリ腰さ！」

アキ君はそう言ってから普通に立ち上がった

いや…アキ君…それはギックリ腰じゃないよ？

「あ？」

この時のアキ君の顔はとてつもなく印象的だったの

「営業妨害？」

Fクラスの教室…もはやAクラスに近い教室に戻ってきた私とアキ君は秀吉ちゃんから三年生の先輩がクレームを次々に言っていることを聞いた

「…何とかしなきゃね」

アキ君が考える前に…

「うわああ！二度とこんな店くるかああ」

「ひいひい！」

坊主の先輩とソフトモヒカンな髪をした先輩は逃げて行きました

「ふん…二度と来るな」

アंक君が…どうやら追い出したようだね！

ナイスだよ！

「あれはヤバいな」

「雄二！終わったの？」

坂本君は顔をひきつらせながら明久君と話している

「ああ楽勝だった…俺は何としても勝たないと行けないんだ…じやなきや俺の人生は」

坂本君のペアは翔子ちゃんだったよね…何かあったのかな？

「アंक君…一体あの人達に何をしたの？」

「んあ？これだ」

そう言っアंक君がみせたものは…

瑞希ちゃんの…手作りワッフル…

「あれは凄かったのう」

「……当分何もできない」

「まっ…これで一件落着だな」

「えっ何！？凄く気になる！」

「私もアキ君と同じだよ！」

瑞希ちゃんのワッフル…どんな破壊力が…

このあと常夏コンビと言われている先輩方はこの祭の記憶が消えていたのだしたゝ

不戦勝とおかしな女子達と明久の推理（前書き）

だいぶグダグダになってしまいましたが勘弁して下さい（汗）

不戦勝とおかしな女子達と明久の推理

常夏コンビが消えてから数時間後…

接客で忙しい僕だったけど…

「吉井君ー!」

「可愛い!」

「きゃーこっち向いてー」

何だこれは!?

えーと状況を簡単に説明するとー

僕は今女子生徒に襲われている

「わああ!何なのみんな!」

タンマ!タンマああ!押しつぶされるっつ

「明久大丈夫かー！」

秀吉！どこにいるかわからないよ！

「ちょっと待ってる明久！今助け…ぐふあ」

巧！？巧ー！

「きゃー可愛い！」

僕は可愛くないよ！

「メイド服着せましょー！」

やめてー！そんなことしたら…お婿に行けないよ！

「とりあえず服を剥ぎましょー！」

何…！？

「どうせなら童貞…」

童貞！？童貞が何なの！？

「待つてよみんな！ストップ！」

「……可愛い！」

ふざけるなああ！何が起こってるの！？

何故こんなことにいい！

『バツ！』

！？上着が！！

このままじゃ本当に…やばいよ

『アキ君！！！！』

こゝこの声は…

「なのは！」

群がる女子の中から幼なじみの手が見えた

手を伸ばさなかったら必ず後悔する！

それが嫌だから

『手を伸ばすんだああ！』

グイッ

「……ええ？」

「私を選んでくれたんだねアキちゃん！」

パッ
↑手を離す

再び群がる女子の中へ…

誰だあの人…

僕のことをアキちゃん…て

『アキ君！！』

「わっ！」

急に後ろから体を掴まれそのまま引き寄せられた

「うーん！よいしょ！きゃあっ」

「わああっ」

ドターンと音を立て瞬間に柔らかい何かが…

「えっと…」

恐る恐る後ろを振り返ると…

なのはが僕の下敷きになっていた

状況を説明すると…僕に抱きついて倒れた幼なじみ

そのまま倒れたので柔らかい素晴らしいものが僕の背中に当たっている…

「…！！？mw・gapm！／／／」

素早く起き上がって離れたがなのは…

「にやはは…ちょっと失敗しちゃったね」

と笑いながら起き上がった

あれ？何だろっ後ろからピンクの殺気が…

「何よあんだ！」

「アキちゃんを横取りするき！？」

「ちょっと待ってよ！みんな一体何なの！？」

いきなり教室に入って…僕に抱きついて…はアキちゃんて…

「私達はアキちゃんに会いにきたの！」

「そうよ！吉井君は女の子でしょ！」

ちょっと待って！僕はれっきとした男だよ！

「お客様すみませんね…こいつはれっきとした男です」

雄二が詫びながらフォローに入るけど全然嬉しくない！

何がすみませんなんだよ！

「嘘よ！こんな可愛い子が…」

「違うよアキ君は格好いいんだよ！？誰かさんと違って」

「高町…何故俺を見る」

雄二「君のことは忘れないよ」

「そうですよ皆さん」

おっ家康がフォローに…

「こいつは女の子ではないですが女装好きな男子です」

入らなかったあああ！

「「じゃあ私達が女装させてあげるよ吉井君！」」

「冗談じゃないよおお！」

ダッシュで教室から抜け出し全力で逃げる

捕まったら終わり…

「！？アキ君待つてよ！家康君！坂本君！後でOHANASHIだよ？…」

「いやああああ！」「」

どこへ逃げる！？どこへ逃げればいいの！？

「アキ君ー！」「

「なのは！？どうやって！？」「

「そんなことより逃げなきゃ危ないよ?」

わかってる! そうだ…!

「なのは付いてきたなら付き合って貰うからね!」

「ほえ? きゃっ」

なのはの腕を掴み全力でダッシュ!

何故か…廊下にいる生徒が一斉に僕を見る…

『あいつFクラスの吉井明久だよな?』

『何でテニス部で有名な高町といるんだ?』

そりゃ…なのはが付いてきたから

『付き合ってるのか?』

『…殺したい…』

殺したい…？殺すじゃなくて！？

あと僕はなのはと付き合っていないよ！！

そりゃ…付き合いたいと言われたら…

「ふえええゝアキ君ゝ！速いよおお」

か、可愛…ゲフンゲフン

「とっつー！」

勢い良く僕らはAクラスに入った…

「あれ？消えた！？」

「きつとあっちよ！」

ドドドド

「良かった…どうにかまいたようだね…『お帰りなさいませ』ご主人様』うわっ！」

急に声をかけられて僕は飛び上がった

「どうされましたか？」

「ひ、比奈ちゃん…」

メイド服をまとった比奈ちゃんが出迎えてくれた…

「いやちょっとびっくりしてさ…はは」

「……」

「そうでしたか…こちらへどうぞ…」

まあ立场上今はお客様だから僕となのははテーブルに座らせてもらった

少し休んでから出るかな…

「メニューです！決まったらお呼びください」

「あつども…」

流石Aクラス…やっぱり設備が凄い…

「なのはしばらく休憩して行こうよ」

ここならそう簡単に入ってこれないと思うし、なのはに付き合って
なんか言っちゃったからね

「うん。そーだね」

あれ何か変な気が

「なのは…どうしたの？」

「別に…アキ君が泉さんにデレデレしてたのを怒ってるわけじゃないから」

つまり…なのは僕が泉さんに見とれてたの怒っている…

「なのは…僕は別に比奈ちゃんに見とれてなんかいいよ?」

これは本当のこと…よくよく考えてみたら…初恋じゃないよあれは…あの時の胸の苦しさは何かまた別のものだったんだ

「でも比奈ちゃんて言うてるあたり…」

「な、なのはそれは比奈ちゃんとはただ今日友達になりたいと言ったら呼び捨てでいいよと言われたけど馴れ馴れしいからちゃん付ぶことにしたわけで…」

全部本当のことさ…確かに比奈ちゃんはとても可愛いけど…

ただ…

「……ちょっと安心したかな」

「えっ?」

「何でもないよ…ほら何か食べよう」

「えっ…あっそうだね!」

僕は微笑みながらメニューを開くなのはの横顔を見ていた

「……だよ。なのは」

「ん?何か言った?」

「うんうん…何でもないよ!」

ただ…比奈ちゃんは恋愛対象じゃないことがはつきりとしたかな

そしてなのはが普通の幼なじみじゃないことも

「すみませーんふわふわシフォンケーキを二つお願いしまーす」

『メズール！これ！』

『ガメル？これは…』

『メズールのコアメダル！オーズがくれた！』

『オーズが？』

『オーズ本当はいいやつ！』

『何を言っているガメル…オーズは敵だ』

『そつだよガメル。オーズは君を騙そうとしてるんだよ』

『……うつ』

『…そろそろ動くか…ヤミーもいい具合にセルメダルがたまっている。いくぞガメル』

『気をつけてねウヴァ。オーズは強いわ』

『わかってる』

カチャンとスプーンを置き僕は考える…

大会？

何故か食中毒で倒れて不戦勝だったんだよ

まさか姫路さんのワッフルを…

「早くあれをどうにかしなきゃ Fクラスには戻れないか…」

F F F 団は… まあ大丈夫でしょ

「それにしても周りからの視線が…」

仕方ないよね オーズに変身しちゃったんだし

「どうしたの アキ君？ しかめつらなんかして」

露出が多い服のため無理やり学ランを着せられた（僕が着せた）なのはが心配そうに覗き込んできた

「…うん。これからのことを考えてて」

とにかく… ヤミーやあれをどうにかしないと…

待てよ、ヤミー？

「もしかしたら…あの人はヤミーに何かされたんじゃない」

僕はさっきの人達を思いだす

「そうか！わかったぞ！」

「どうしたのアキ君？」

あれは確実にヤミーの仕業…そしてさっきの生徒は二年のE、Dの生徒

おそらく何か暗示をかけて僕のことをアキちゃんだと認識させたんだろう…

ということは次の狙いは…

凄いや僕！

「アキ君？」

「じめんなのは…すぐに戻るから！」

「へっ…ちよつとアキ君!？」

なのはの分まで支払って僕は教室から出た

正直なのはともう少し一緒にいたかったなあ

玉野と奇跡の合体と白いコンボ（前書き）

お待たせしました！今回は凄いことが起こります！

玉野と奇跡の合体と白いコンボ

Cクラス…元根本君の彼女だった小山さんがいる…

もし、小山さんまでおかしくなったら根本君に誤解されちゃ困るし…
…僕の身だって危なくなる！

「何としても防がないと…」

『Cクラス：中華喫茶ヨーロピアン』

ガラッ！！と思いい切り戸を開ける

「いらっしやいませー！中華喫茶へようこそ！！…吉井君？」

出迎えてくれたのは小山さんだった

「こんにちは小山さん。何か異変とか起こってない？」

「いえ…普通通りよ」

良かった…どうやらまだヤミーはまだ来ていないようだ…

ちょっと待てよ…もしかしたら僕の推理外れた？

「どうしたの吉井君？まるで何かに絶望してるわよ？」

「何でもない…何でもないよ…はは」

とりあえずここで待たせて…『ガラッ』

「あ………」

『次はここだな…あ』

まさかのアゲハヤミー出現

「だっしやああ！」

『ぐふう！』

僕は勢いにまかせ廊下へ殴り飛ばした

「見つけたぞ！今度こそ倒してやる！」

『オーズ！？……読まっていたのか』

アゲハヤミーはバサツと翼を広げガラスを割って逃げていった

「待て！」

ガシッ

「は…？」

何かに掴まれたと思い振り返ってみると見知らぬ女子生徒だった

「駄目アキちゃん！私の欲望の邪魔をしないで！」

「はい！？誰君？」

三つ編みの髪をした女子に僕はアキちゃんと言われた

「私の名前は玉野美紀！よろしくアキちゃん」

「ちょっと待ってよ玉野さん！僕はアキちゃんじゃないしあのことは全部君の仕業？」

玉野さんはわびれた様子もなく頷く

「そうよ！みんなに明久…アキコちゃんの素晴らしさを教えようと思ってるの」

なんだその欲望はああ！？

「玉野さん！僕は明久だよ！何で名前を言い換えたの！」

「大丈夫！みんなアキコちゃんのことは受け入れてくれてるから！」

「違うよあれはヤミの仕業で…」

みんなが僕の女装を気に入る訳ないじゃないか！

「目標はこの学園に明久…アキコちゃんファンクラブを作るの」

嫌だああ！そんな欲望絶対に…

「そうはいくか玉野さん！僕が君の欲望を破壊するよ！」

正直…今まで救ってきたけどこの欲望は救う必要がないと思う

「アキちゃん駄目！そんなことしたらアキちゃんがみんなに認めても「僕は明久だああ」」

玉野さんの言葉を遮って僕は窓から飛び降りた

「待つて！アキコちゃんーん」

早く倒そう…あのヤミィ

「待てえええ」

『ちっ…邪魔くさい』

全力ダッシュで飛ぶヤミィを追いかける

「はあ…はあ…駄目だ…やっぱり早いよ」

『吉井さん』

どこからかが鴻上フアンデーションの秘書里中さんの声が聞こえた

「里中さん！？えっ？どっ？」

『じじです』

「うわあ！」

すぐ隣にリムジンに乗っている里中さんがいた

毎回びっくりするなあ…

『鴻上会長からのプレゼントです』

そう言って走っている僕に渡したものは…

「カンドロイド？」

タコとは違う青いカンドロイドだ

「うわあ！ありがとうございます！」

絵柄からしてウナギだ…！

「よし！早速試してみよう！」

ドライバーを取り出し三枚のメダルを入れる

素早くスキャナーで読み込んだ

『タカ！トラ！バッタ！タットツバ！タトバ！タットツバ！』

お馴染みの歌が流れメダルの仮面ライダーに変身した

「はああ…はあ…！」

足をバッタの足に変形させ思い切り飛び上がった

「くらええ！」

空中で素早くアゲハヤミに蹴りを放った

『うおお』

アゲハヤミーは蹴られた衝撃で地面に叩きつけられる

よし！勝負だ！

アंकは来ない…よね？

今アंकのメダル以外全部は僕が持っている

アंकを戦いに巻き込む訳にはいかないからね

「うおおお！」

アゲハヤミーに突っ込むが見事によけられた

『ふん！』

鱗粉！？しまった！

「ぐああ！」

爆撃され、僕は跪いた

『はははは！くらえ！』

今だ！

「おりゃあ！」

アゲハヤミを足で引っ掛けて転ばせる

『うおお』

「はっ！！だりやりやりゃああ」

倒れた所を連続で何回も殴りつける

『ぐふあ…』

「お前のせいで僕はああ」

どうしてくれるんだ！FFF団を完全に敵に回してしまったじゃないか！

『知ったことか！！ふん！』

「ぐふあああ」

真下から鱗粉を喰らい吹き飛ばされた

『邪魔をするな！』

アゲハヤミーは翼を広げた…チャンスだ！

「今だあ！」

さっきもらったウナギカンドロイドを奴に投げる

『ウナギ〜』

『ぐあああ』

ウナギはヤミに巻きつきビリビリと電撃を流す

おお…便利だなあ

『邪魔をするなオーズ』

バキッとウナギカンドロイドは殴られアゲハヤミは解放された

「ぐあ！え…？」

いきなり攻撃を放ってきた方向を見ると

緑のグリードウヴァとさつき戦ったガメルがいた

『久しぶりだなオーズ…』

『……………』

「まさかグリードまでここにいたのか…」

僕は苦笑いをしながらトラクローを展開した

『残念だったなオーズ！いくぞガメル』

『俺いかない…』

僕は来ると思い構えていたがガメルは動かなかった

『どういふことだ貴様』

『オーズ…メズールにメダル返した』

「一部だけだけどね…」

『メズール元気になった！』

そりゃ良かったのかな？

『だからどうした！』

『オーズ…本当はいい奴かもしれない』

そういつとガメルは座り込み動かなくなった

………どうということだ？

『何をやっているガメル！早く戦え』

『嫌だ命の恩人とは戦いたくない！』

ガメル…でもあいつはグリード…けど何故か悪い奴に見えないよ

『勝手にしろ！ああ！』

ウヴァはキレながら僕に攻撃を仕掛けた

「うわつと！」

上手く交わしトラクローで切り裂く

「はあ！おりゃ！」

『ぐっ……ふん!』

「うわああ!」

『はああ!』

「ぐはっ」

ウヴァに真正面から電撃を受け空からアゲハヤミの鱗粉を喰らった

『おら!おらあ!』

「ぐっ……があ!」

ウヴァに何度も切り裂かれ僕はダウンした

くっこうなったらメダルを変えるしか…

『おらああ!』

「うあああ！」

ウヴァにクローで切り裂かれ僕はメダルを落とした

『返してもらったぞ…俺のメダル』

しまった…今のでクワガタとカマキリを奪われてしまった

『ふははは』

ガシッとアゲハヤミーに掴まれアゲハヤミーは上空に飛ぶ

「うわああ！」

そのまま建物にぶつけられ大ダメージを受けた

うぐ…体中が痛い

『ふん！トドメだあ！』

くつやられる！

『待ってウヴァー！』

負けると思ったその時ガメルがウヴァーを突き飛ばした

『ガメル何をする！？』

『オーズ…助ける！』

「え……」

『何を言っている貴様は！オーズは俺達の敵だ！メズールも言っていただろ』

『違う！昔のオーズ悪い奴…でも今のオーズはメズールが言っていることが間違ってる！』

ガメルは子供のようなグリード…だけど…今のガメルはヒーローに見えた

『立てオーズ…！俺のメダルやる！』

「えっ…あっ…わかった」

僕はガメルが体内から取り出したメダルを貰った

「ならこれは君に返すよ…君が怪物じゃないことを信じて」

『怪物じゃない？』

「そう…君は正義のグリードなんだよ…」

もしかしたらグリードも救えるのかもしれない

「だから…良かったらグリードをやめて僕と戦ってくれないかな？」

『わかった！俺もオーズになる！』

ガシャリとガメルはセルメダルとコアメダルに別れて

僕の体内に入った？

「えええええ！？」

ちよつと待つてコアメダルが僕の体内に入ったんだけどおお！

『…馬鹿な！？ガメルが吸収された？』

いやいやいや！？

『オーズと一緒に戦う！…』

「！？」

体内から三つのメダルが現れた

あれ？僕…あと三つあるんだけど…

ヒュンと音を立てその三つも体内に消えた

「どうなってるのおおお!？」

『何が起きたんだ…!! オースウウ!』

ウヴァは怒り狂って電撃を放った

うわっ…!!

「何が何だかわからないけどとにかく」

三つの白いメダルをドライバーにセットしスキヤナーで読み込んだ

コンボは体中にダメージがいく…フィードバックの何百倍も…
けど

「今はやるしかない!」

『サイ!ゴリラ!ゾウ!』

『サゴーズ…サゴーズォ!』

鋭い角が特徴の白い頭

ゴリラのようにたくましい銀色の体

ゾウのように重い灰色の足

僕はタトバからサゴーズコンボへと変わった

ガタキリバ、ラトラーターに続く新しいコンボだ！

力と疲労と子供達

「ウオオオオオ！」

大きく相手を威嚇し僕はドラミングを始めた

サゴゾコンボの力はガメルと同じ重力とパワー

「オオオオ！ウオオオオオ！」

胸を叩いた瞬間に大きな波動が放たれる

コンクリートが剥げて土が敵を覆う

『うおお！』

『！？』

ウヴァとアゲハヤミーは重力を奪われ空中何度もぶつかり合った

「オオオオオ！」

『ウオオオオオ！ああああ』

ウヴァを重力操作で建物に何度もぶつけダメージを与える

今の僕は無敵の状態だ

これがサゴーズコンボ！

『グエア…』

ウヴァの体から三つのコアメダルがこぼれ落ちた

「ウオオオオオ！」

僕は敵を重力操作を解除して地面に叩きつける

『ぐああ…俺のコアメダルが…くそ』

ウヴァはふらふらしながら逃げていった

流石は虫…逃げ足だけは速い

『ぐああ』

アゲハヤミも地面に叩きつけられ僕はスキャナーを取り出す

トドメだ

『スキャニングチャージ!』

「ふん!!」

地面から重量の力で浮き両足で着地

ゴゴゴゴ

足から波動が流れ壊れたコンクリートは戻り相手の重力を奪う

『!?!!』

相手をこっちに引き寄せる

重力を奪われた敵は抗うことができない

「オオオオオ！セイヤアアア！」

相手が来た所を角と腕についているガントレットを叩きつけた

『ぐああああ』

アゲハヤミーは爆発を起こしセルメダルに分解された

やった…

「う…あ…」

体力がもう限界だ…

強制的に解除され

僕は膝をついた

「ハア…ハア」

やっぱりコンボの力は凄まじいよ…

「は、早くみんなの所へ…」

僕はふらついた体を無理やり起こしさっき落ちたコアメダルを拾った

「クワガタとカマキリ二枚…」

クワガタとカマキリは取り返した

けど

「あいつ…何で鎧が破壊され…なかつ…たんだろっ…」

いや…僕の前に現れた時も鎧があった

まさか…コアメダルを？

「ウヴァ？大丈夫なの！？」

「くそ…ガメルがオーズの味方に」

「ガメルが…馬鹿な」

「ぐ…6枚のうち三枚を取られた…」

『ガメルが…そんな』

『仕方ないよメズール。ガメルは温厚なグリードだから僕らと少し外れている存在だったからね』

『とにかく気をつけろ…体内にコアメダルを吸収したオーズは強いぞ』

「ぜえ…ぜえ…」

汗がダラダラと流れ落ちる…

「僕の体内にコアメダルが…」

そしてグリードがいる…

「どうなるんだろうなあ僕」

苦笑いしながら汗まみれになった制服を脱ぎ捨て替えに着替えた

流石ははやてさんだ…

『なあなあ何か食べたい！』

体内からガメルの声が聞こえた…

「そっか…でもごめんね。もうちょっと…我慢したら食べられるよ」

『わかった！我慢する！』

ガメルの気配が消えた…きっと眠ったんだろうな

更衣室から出てふらついた体に鞭をうつように走る

『只今より第三回戦を行います』

周りから歓声が聞こえる中僕はなのはから目をそらしていた

「アキ君！なんでそんなにふらふらしてるの！？」

「別に大丈夫だから…」

正直言うとかなりきつい状態だ

『青コーナー吉井明久！高町なのは！』

さて相手は誰かな？

『赤コーナー根本恭二！小山優香！』

まさかの根本君か…

「高町！？吉井！？お前達が対戦相手か…」

根本君はこっちを見て驚いている

「どうしたのよ恭二。相手はFクラスよ？」

「き、棄権します！」

「はあ！？…まっいつか」

『勝者高町、吉井ペア！』

「あ、あれ？勝っちゃったね？」

『く…くそ…あいつらが居るとは想定外だ！召喚獣で勝てる訳がない…まあいい吉井、高町、坂本にはこいつで借りを返してやる』

『根本…約束覚えてるわよね？』

『優香！？待ってくれ！』

『さようなら恭一』

『畜生がああ！』

『！？きゃああ』

巧 side

「三回戦も不戦勝だったね」

希と話ながら俺は教室へ戻る

相手はまさかの家康と千世と来たもんだ

風を引いたことでFクラスになった希だけど実力は本物だ

楽勝かなあと思っていたら勝手に仲間割れ…

自爆して不戦勝になってしまったという訳だ

「にゃあ…お店大丈夫かな」

「今は昼だからだいぶ落ち着いてる…みんな休憩に入ってるよ」

希に微笑みながら言いながら歩いているとFクラスの教室前に三人
…いや…四人の子がいた

どうしたんだろうな

「君達こんにちは。どうしたんだい？こんな所で」

「こんにちはです！あ、あの。葉月はお兄ちゃんを探してるんです」

ツインテールで可愛い緑色の目をした女の子が話始めた

「お兄ちゃん？ 名前はなんていうんだい？」

「えっと、それが分からなくて……」

『そっか…それなら、何か特徴はわかる？』

『えっと……バカなお兄ちゃんでした』

す、凄い特徴だな。

「うーんでもこのクラスには……沢山いるぞ？」

「いえ、他には凄く優しいんです」

赤い髪をした男の子が丁寧にフォローしている

「にゃあ…みんな優しい」

希はうーんと考え込みながらそう言った

確かにこのクラスは優しい奴が多いもんな

「あ！その人はとても格好いいんですよ！」

ピンク色をした女の子が目を輝かせながら言った

「にゃあ…格好いい？」

「はい！フェイトさんを助けてくれたんです！」

テストロッサを…うーん何か…わかってきたぞ

「他には…そうです！キスをしました！」

黒い髪の女の子が爆弾発言

絶対明久だろ！？

「あと……すっごくバカなお兄ちゃんだったんです！」

「やっぱり明久か！」

「にゃあ…明久だね」

ああ。あいつしかないよ

「たぶん君達の探している人ならこの教室に居るよ」

「本当ですかあ！？」

「ああ！本当さ」

『ウーン』

『明久（アキ君）…！』

『あはは…なのは、フェイトくすぐりたいよう!』

『……』 ↑ F F F 団の死骸

「あ、バカなおにいちゃんだ!」

『えっ?…!?葉月ちゃん』

『ウーン』

「教室を間違えたようだ」

「何ですか!?バカなお兄ちゃんいたですよ?」

「……明久さんでしたか」

「にゃあ…巧い」

「うわっ!の、希!」

さっきは見なかったことにしよう

「「「エリオ君！」」「」

三人の可愛い女の子に抱きつかれる男の子と美女に抱きつかれる俺…

なんだこれ…？

「どうしたお前ら？」

向こうからアंकが杏子と…ツインテールの子学生徒と歩いてきた

「入んないのか？」

『ウーン……』

『ウィーン』

アंकは速攻で出てきた

「…グリートの俺でもあれは無理だ」

「だろうな」

メイドと後藤と二人の危機

僕は今、Aクラス教室前にいる

一年前にあった葉月ちゃんやエリオ君と再会して昼飯を食べに行く所だ

2年Aクラス 『メイド喫茶 ご主人様とお呼び!』

看板がAクラスの前に置かれていた。

なんと言うか…凄いね

「綺麗な服です」

近くのメイドさんを見て、葉月ちゃんは呟いた。

うんうん…葉月ちゃんなら似合うね

「そうですね。一度着てみたいです」

姫路さんも目を輝かせながらそう言った。

そんなことより…

「ねえ雄二。いい加減覚悟を決めなよ」

「そうよ坂本。逃げるなんて男らしくないわよ？」

「いや、分かつてはいるんだが……」

僕は今、雄二を美波と説得してるところだ。このAクラスには雄二の彼女である霧島さんがいるからね。きっと大丈夫だよ霧島さんから。

「雄二。確かに僕等はお昼を食べに来たけど、これは偵察でもあるんだ。相手のことを知るのも大切なんだよ」

「坂本…諦める」

アंकまで溜め息をつきながら呟く

そう言えばアंकに話してなかったなあ…コアメダルのこと

「……………！！（パシャパシャパシャッ！）」

雄二を説得していると隣で、いろんな角度からメイドさんを、指が擦り切れんばかりにシャッターを押すムツリーニがいた。

「……ムツツリーニ？」

「……人違い（ブンブン）」

「どう見ても土屋でしょうが。いったいここで何をしてるのよ？」

「……敵情視察」

それは視察とは言わないと思うけど。

「全く。ムツツリーニ。そんなことしたら女の子がかわいそうだと

——」

「高町とテストロッサの。一枚二百円」

「3ダース貰おう。—————思わないのかい？」

「アキ君……。普通に注文してるよ？」

しまった……

「……そろそろ交代だから戻る」

そう言つて写真を渡してムツツリーニは戻つていった。

レア物ゲット…

「さて、そろそろ入ろうか？」

「明久君。その写真、どうするんですか？」

う……

「え？ や、ヤダなあ。もちろん処分するに決まつて
半分以上が男の足ばかりじゃないか！ 畜生！！」

だ、騙されたああ！

「やつぱり見るんじゃないですか！」

「すみまへん…くひをひっぱらないで」

葉月ちゃんが思い切り僕の頬をつねる

子供だけど痛いよ

「全くアキ君たら…」

なのははそう言つと僕に抱きついてきた

「ちよつなのは!?!」

えっ何これ…!! あっ柔らかい感触が

「そんなことしなくてもいいのにノノ」

「明久さん凄いです」

「バカなお兄ちゃんモテモテです」

えっみんな何? 姫路さんから怖いオーラが…

「と、とりあえず入ろうよ!」

「そうじゃの」

秀吉達は頷きながらAクラスの教室に入っていた

「お帰りなさいませご主人様」

この声は…霧島さんとフェイト！

「雄二…僕らも入るよ」

「そつだよ坂本君」

「けっ…」

『ウィーン』

「お帰りなさいませお嬢様」

「二人共綺麗だね！」

本当に綺麗だね…

「うわあ…やっぱりAクラスは凄いなあ」

なのはに続いて僕らも入る

『…お帰りなさいませ。今夜は眠らせませんダーリン』

『お帰りなさいませ。今夜は甘い夜を過ごしましょうダーリン』

霧島さんは雄二を出迎えフェイトは僕を出迎えてくれた

「おい明久」

「何雄二？」

「何かおかしいよな」

「奇遇だね…僕もそう思う」

「ダッシュ!!」

「今日は帰らせませんダーリン」

僕はすぐに捕まった

アंकは女子生徒と一緒にどこかへ消えた…あいつ

『お帰りなさいませご主人様』

「後藤さん！」

捕まった僕らを出迎えてくれたのは元ライドベンダー隊隊長の後藤さんだ

「似合ってるね……」

「ありがとな」

そう言った後、後藤さんは美波と楽しく会話を始めた

確か美波の彼氏だったっけ

「羨ましいな……美波ちゃん……」

なのはは憧れの目で二人を見ている

「メニューになります」

フェイトが僕らの前にメニューを置いた

メニューまで豪華だなあ…

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もです」

「葉月もーっ」

「じゃあ、私もそれにします」

「では、ワシはサンドイッチに紅茶とするかの」

「僕は『果実たっぷりタルト』にします」

「わたしは『イチゴパフェ』にしようかな」

「「じゃあ、僕（俺）は——」「ご注文を繰り返します」「」」

フェイトと霧島さんによって僕と雄二は遮られた。

「『ふわふわシフォンケーキ』が四つ。

『サンドイッチ』が一つ。『紅茶』が一つ。『果実たっぷりタルト』が一つ。

『イチゴパフェ』が一つ。……『メイドとの婚姻届』が二つで宜しいでしょうか？」

「『ぜんぜんよろしくないんだけど（だが）（よ）（ですが）！
？』『？』『？』」

馬鹿な…まさかこんな罠が！？

「……では、食器をご用意いたします」

そう言つて霧島さんが食器を持ってくる。

姫路さん、島田さん、葉月ちゃん、キャロちゃん、エリオ君のころにはフォークが。

なのはのところにはスプーンが、僕と雄二のところには朱肉と印鑑が置かれた。

な、何いい！？

「しょ、翔子！？ これ本当にうちの実印だぞ！？ どうやって手に入れたんだ？！」

「フェイト…これ僕の家なんだけど…」

まさかフェイトが僕の家に入入した！？

「うん！事情を話したら明久のお母さんから貰ったの」

母さんんんん！？

あなたは何をやってるんだよ！

「フェイトちゃん…できれば私のも」

「いいよなのは」

そして+2になった

「雄二」
「明久」

ダッシュ！

教室に出る前に僕はなのはとフェイト、雄二は霧島さんに捕まった

結婚式と秘密と根本襲撃

危うく人生が終わる所だった…

「ここも凄いね…」

Bクラス ウェディング喫茶：今日結婚します！

と言う看板が置いてある

大丈夫！…さっきみたいにはならないはずだ

「結婚かあ…」

美波が頬を赤らめながら呟いた

うん。きっと後藤さんと幸せになれるよ美波！

「…結婚は人生の墓場」

ムツツリーニ…何時の間に

ムツツリーニは高速でシャッターを押している

注意しなきゃね

「こらこらムツツリーニそんなこ」……まどかとほむらの一枚二百円「ニダースもらおう…可愛そうだと思わないのかい？」

「明久君思い切り言葉に出てます」

姫路さんから恐ろしいオーラが流れているんですが…

「……教室に戻「いらっしやーい！」！？ブシャアアア」

はやてさんがいきなり現れムツツリーニに抱きついた

「は、はやてさん!？」

「いらっしゃーいあき君！」

ウェディングドレスの姿をしている…羨ましいぞムッツリーニ！

「そや！あき君お嫁さんたちが待つてるで」

そついうとはやてさんはムッツリーニを連れながら僕を教室に入れた

「……あれ？」

後のみんなを置いて

『『325人目ご結婚おめでとつございまーす！』』

ウェディングドレスを来た女子がお出迎えだ

結婚おめでとう…て

『吉井明久様ですね…あなた様には代表が決めた特別プランがあります』

そう言うとタキシードを着た僕に白い結婚のタキシードを着せてそこへ促した

本物の結婚式場みたいに綺麗で階段まである

『明久（アキ君）』

「え…」

そこはさらに綺麗で…とても美しい花嫁がいた

白い純白なドレスに綺麗なヴェールをかぶっている

「アキ君（明久）」

天使と女神の微笑を持つのはとフェイトはにこやかに呼んでいる

「「えへへ（……）」」

可愛さが満点なまどかは恥ずかしそうにクールだけど美しいほむらさんは無口だけどニコツと微笑んでいる

「／／／／／…は…！」

夢から目覚めたようにはっとする

「…みんな綺麗だね／／」

「「！？／／／」」

本当…綺麗だ

「では只今より新郎新婦による結婚式を始めます！」

はやてさんが司会をしながら周りから凄い拍手が送られた

「えっ！？ちょっと待って…まさか本当に…」

「うん…そうだよ」

そう言っ僕を押すなのは

「…ええっ！？／／」

ちょっと待ってよ！！本当ってことは…まさか…き、キスも…

「大丈夫やてあき君。すぐに終わるから」

はやてさんはニカツと笑った

「では…吉井明久…あなたはこの四人を将来愛し続けると誓いますか？」

神父の格好をした男子にそういわれた

「ちょっと待ってよ…僕は…」形だけでもいいやで「うっ」

まいったなあ…四人が緊張したような目つきで見つめてる

「えっと…ち、誓います／＼」

「「!?!?!」」

四人は顔を真っ赤にしながらかっこつちを見ている

まるで告白じゃないか…

「ではあなたは片はこの人を将来愛し続けると誓いますか？」

四人は僕が好きはずないから…きっと形だけで終わるんだろうな

「「誓います」」

四人は真っ直ぐと決意のある声で僕を見ながらそう言った

「……／／」

え…？まさかみんな

「では誓いのキスを」

「ほ、本当にやるの！？」

はやてさんは笑いながら口を開いた

「四人があき君を本当に好きならする、嫌いならしないってなってるから安心せいや」

どちらも複雑な気持ちだ

願わくば…好きであって欲しいかな

「――え？――」

何か頬に柔らかい感触がした

「え…？」

僕はいきなりのことすぎて処理が追いつかなかった

N O s i d e

『素晴らしい！体内にコアメダルとグリードを宿す男、吉井明久。彼はセルメダルの戦士、コアとセルメダルの戦士を凌駕する存在になる』

『それって危なくないですか？』

『安心したまえ里中君。彼の体内にいるグリードが力を制御している』

鴻上はケーキを切り分けコアメダルを乗せる

『彼はやがて…アंकのメダルも取り込むだろう…いや、グリードのメダルを吸収してしまう！素晴らしいではないか』

鴻上は眉を寄せて直ぐに厳しい顔になった

『だが、コアメダルを吸収した彼の体はただではすまない。そして何より黒いコアメダルが彼に不幸を呼ぶ存在となるだろう』

里中にケーキを置き鴻上は呟いた

『予期せぬ事態が起き始めている…』

なのはside

「
…」

「どうしたのなの？」

「ふえっ？あつ何でもないよ！あはは」

アキ君にいきなり話かけられて私は飛び上がった

その理由は…何か違和感があるの

私の体の中で何かが起きているのかな？

「そうだなのは！僕何か買ってくるからそこに座ってて！」

アキ君はそう言つと屋台に走っていった

Bクラスの教室を出た後、急にアキ君が私達にデートしない？と言
い出したのがきっかけで…三人が終わり今は私の番なの…

「アキ君とデートかあ…」

今、何か事件があつたみたいで大会は一時中断してて…しばらく休
憩してこいつと坂本君が言ったからこうしてアキ君と外で歩き回っ
てるの

外も賑やかで祭り以上かな…さすがは文月学園だね！

あつ服装はコスプレ喫茶つてことでメイド服を着てるんだあ

「それにしてもアキ君遅いなあ…」

何かあつたのかな？

とりあえず私は立ち上がってアキ君が向かった方へ歩く

「アキ君！？」

「なのは来たら駄目だ！」

「高町なのはか？探す手間が省けたぜ！」

根本君！？けど何かおかしいの…

「なのは早く逃げて！こいつヤミーに寄生されてるんだ！」

「えっ！？」

「高町いいい！」

根本君の目が赤く光り私の方に走ってきた

「きゃ！」

根本君の突撃を避けてアキ君の方に走る

「なのは大丈夫!？」

「うん」

アキ君は安心したような顔をすると同時に私を押しした

「なのはは早く逃げるんだ！僕がなんとかするから」

「アキ君…私も戦うよ！」

「駄目だ！なのはは何事もなかったかのように教室に帰ってて」

「それじゃあアキ君が!!」

アキ君は微笑みながら走り出した

「僕は…大丈夫。慣れてるから…」

そして根本君を掴みかかる前に呟いた

「みんなが楽しめれば…いいんだ」

「…え？」

根本君を殴ったアキ君は根本君を掴み学園から離れて行った

根本と姫路さんと救出（前書き）

今回は姫路さん久しぶりに登場です…アंकは…まだ出ません

根本と姫路さんと救出

「根本君！何が目的なんだ！」

根本君は叫びながら掴みかかってきた

「吉井明久あ！…許さねえ！うがあ！」

「うわあ！！」

根本君はヤミーに取り付かれているから化け物のような力がある

僕は根本君に投げ飛ばされた

とにかくヤミーを中からださなきゃ

「吉井いい！死ねえ！」

「うわっ！」

すんでのところで避けて根本君のパンチは木を破壊した

「あああ！」

ブンと回転させ根本君の拳は僕の鳩尾に直撃した

「うがああ！」

そねまま吹き飛ばされ建物に激突した

「げほ……」

口から赤い液体を吐き出し突っ込む根本君を殴る

「うがああ！」

根本君は地面に倒れこんだ

「高町いい……」

なのはの名前を呼んでいる…

そうか！根本君の欲望は僕らに復讐することか！

「あああ！」

むちゃくちゃに放ったパンチが僕の腹に当たる

「ぐほっ！…」

苦しい！

「このお！」

「あがああ」

根本君を遠くへ殴り飛ばし僕はまた血を吐き出す

「がはっ…僕となのはは根本君にビンタとアッパーをして、雄二は…代表だからか」

たったそんな小さな欲望で…みんなに

「アキ君!!」

あり得もしない声が聞こえて僕は振り向いた

「なのは…?」

何で来たんだ…!

「うああああ!」

根本君の体内からヤミーが現れた

『ウオオ…!!』

すぐに姿が変わった

あれはハイエナ…？

「きゃあああ！」

「なのは！！！」

しまった！…根本君！？

「吉井！こいつは誘拐させてもらっぜ！」

根本君はなのはを気絶させると学園へ連れて逃げ出した

「なのはああ！」

僕はふらつきながら根本君を追いかけてようとしたがヤミーに阻まれた

『死ねえ！』

「うわあ！」

ハイエナヤミーはクローで切り裂こうとしてきたのでギリギリ避けた

「くっ…こんな時に」

『ウオオ!』

「ぐあ!」

しまった!

「うっ…」

腕を切り裂いてきたので交わしたが少し切れてしまった

『ふん!—!』

「くっ!」

避けながらオーズドライバーを取り出す

そして腰につけた

「ぐあ！」

クローで腹を切られながらもメダルをセツトした

『ウオエ！』

「……！！！」

スキャナーを取り出した所でハイエナヤミーの蹴りを受けて僕は草村に飛ばされた

「…う、く…」

ハイエナヤミーは走り去って行った

自力で体を起こしタカ缶を買い追跡させた

「近くて…よかった」

僕の意識はそこで途絶えた

「…久君…」

僕は声が聞こえて目を覚ました

「比奈ちゃん？姫路さん？」

ふわふわのピンク色の髪をした姫路さんと茶髪で可愛らしいリボンをつけた比奈ちゃんが心配そうに覗き込んでいた

「二人共…どうして…痛つつ」

「駄目ですよ明久君！じつとしててください！」

「ここは保健室です。明久君倒れてたんだよ？」

そつだ…確か根本のヤミ…はっ！！なのは！？

「早く行かなきゃ！」

「駄目です明久君！」

姫路さんに抑えられ行く手を阻まれた

「どいてよ姫路さん！行かなきゃならないんだ！」

「わかってるよ明久君…明久君仮面ライダーだもんね」

比奈ちゃんは俯きながらそう言った

「…！姫路さん」

「これは返しません！」

姫路さんの手にはメダルとドライバーが握られていた

「明久君…またヤミーと戦ったんですね？」

「…うん」

「明久君…無理しちゃ駄目だよ…明久君が傷つくことで…悲しむ人がいるんだよ？」

「比奈ちゃん…」

わかってる…そんなのわかってるよ

だからなおさら

「姫路さん…返してくれないかな？」

「嫌です！」

そう言っ て姫路さんは僕に抱きついた

「姫路さん！当たってるよ！」

「明久君…他人に頼っていいんですよ！」

「姫路さん…」

「明久君は頑張りすぎです…」

「今回の件は警察に任せて明久君は休んでください」

「僕は……」

その時…電話がなった

「はい……」

『よお吉井い』

「根本！」

『お前の大切な奴らは預かったからな』

『アキ君！来ちゃ駄目！』

『明久！私達は大丈夫だから！』

『うるせえ！』

『きゃあー！』

『なのは！』

「お前…！」

『悔しければ俺のそこへ来るんだな！ハハハ』

プツンと電話が切れて僕はギリギリと歯を食いしばった

「明久君！我慢です！」

「明久君…きつと罠だよ！？」

「でも僕は…」

二人を助けなきゃ！

「ごめん…」

姫路さんを押し倒してドライバーとメダルを取り上げた

「明久君!?!」

そしてダッシュで比奈ちゃんを交わして保健室を出た

「待ってください明久君!明久君!」

姫路さんが後ろから走ってくるけど僕は振り向かずそのまま走り去った

「明久君…どうしてですか？」

「ムツツリーニ！居場所わかった！？」

『…学園の近くにあるカラオケボックス』

「ありがとう！」

電話を切って学園の外へ出た

「待ってて二人共！！」

バンとドアを開けカラオケボックスの中に入った

「おじゃましまーす」

「死ねえ吉井！！？何！」

根本君はナイフを持って僕を突き刺したがそのナイフははじけとんだ

「ほい」

「ぶげらああ」

僕はオーズに変身していたから傷一つない

そのままデコピンで根本君を気絶させた

「アキ君！！」

「明久！」

「やれええ!」

根本君の他にチンピラがいたがそいつらもデコピンをして気絶をさせた

二人は僕に抱きついてきた。

「もう大丈夫だよ…」

『ウオオ!』

「!?!はあっ」

ハイエナヤミの攻撃を交わして蹴りを入れた

「今のうちに早く逃げて！」

「無理だよ！」

わからずやああ

僕は二人を外に連れ出しペットのトラカンドロイド…名前はライをライドベンダーに合体させ二人を乗せた

「じゃあライ！よろしくね」

『ガオオン！』

ライは二人を乗せ学園に向けて走って行った

さてと…後は

『ウオオ!』

「せいや!」

飛びかかってきたハイエナヤミーを回し蹴りを放ち吹き飛ばした

「この祭…僕が守る!」

みんなが楽しめれば倒れることなんて…訳ないよ

「一気に行くぞ!」

タカ、トラ、バッタを抜き取り、しまった

「ガメル…力を貸してくれ!う…!」

体内から白いメダルが出てきてキャッチした

サイ

ゴリラ

ゴリラ

「違ーーう！」

三枚を体内に戻した

『ウオオ！』

「邪魔だあ！」

『ゲフウ！』

腹に拳を叩きつけ吹き飛ばした

『ヒュン！パシッ』

ゴリラ

ゾウ

ゴリラ

「頭がない！違うよガメル！ゴリラが一枚余分！」

『ごめん…次こそ』

体内に戻し再び白いメダルが出てきた

『サイ！ゴリラ！ゾウ！』

『サゴーズ…サゴーズォ！』

サークルの動物が重量系に変わりタトバからサゴーズへと変わった

「ウオオオオ！」

限界と対決グリードと新たな戦士（前書き）

カウンズメダル！

現在オーズの使えるメダルは

タカ

クワガタ×2

カマキリ×3

バッタ

ライオン

トラ

チーター

サイ×2

ゴリラ×2

ゾウ×2

ウナギ

タコ

限界と対決グリードと新たな戦士

「ウオオオオ！」

胸を叩いてドラミングをする。地面は浮き上がりハイエナヤミーは重力を奪われた

「はあああ！」

手についているガントレットをロケットパンチのように発射した

『ぐええ！』

顔面に直撃し、ハイエナヤミーは吹き飛ぶ

「オオオ！」

胸をドンドンと叩きハイエナヤミーを引き寄せた

「ウオオオオ！」

ガントレットで殴りつけ蹴り飛ばす

「はああ！」

「おああ！」

「ウオオオオ！」

角で突き上げ、踏みつけ、蹴り上げ

力の限り叩きつけ、殴りまくる

コンボを長時間使うことができないから早く倒さないといけない

『ウアア』

かなり弱っている止めだ！

『ハアア！』

「ぐああ！」

いきなりクローを突き立てられ吹き飛ばされた

「く…うわあ！」

起き上がった所を水流弾を受ける

「この…！ぐああ！」

濡れた体に電撃を受け体に強烈な痺れが伝わった

「ぐは…」

『久しぶりねオーズの坊や』

『僕らのコアメダルを返してもらつよ』

『お前にはここにくたばって貰う』

「そんな…グリードが…三体！」

嘘でしょ…これは本当にヤバイよ…

けど…やらなきゃ！

『ふふ…ガメルを返して貰うわよ』

「冗談じゃない！ガメルはグリードをやめて仮面ライダーになった

んだ！」

『ならあなたを殺して無理やり奪うまでよ！』

三体のグリードは一斉に攻撃を仕掛けてきた

「せいや！」

『ぐお……』

左腕でウヴァの頭を殴り

「はああ！」

『ぶ……』

右腕でカザリの顔を殴り

「おらああ！」

『『ぐああ』』

片手で二体を持ち上げて投げ飛ばした

「ぜえぜえ……」

くそっ… もう限界だ

『はああ!』

「おりゃあ!」

『うっ…』

メズールの蹴りを避け角で胸を突き刺した

「あ、あれ？感触がない」

『（カチン）それは上半身が不完全だからよ！はあああ！』

「ぐべらああ」

何かスイッチが入ったメズールは蹴りを思い切り脇腹に打ち込んだ後投げ飛ばした

「ぐ……」

これ以上は危険だ

素早く白いメダルを戻した

『本当に体内にコアメダルを吸収したわ……』

そして素早く新たなメダルを入れる

『ふん!』

『おらあ!』

「うわああ!」

ウヴァとカザリの攻撃を受け地面を転がる

「く…」

素早く起き上がってスキャナーで読み込んだ

『クワガタ! カマキリ! チーター!』

トラとチーターは一枚ずつメズールに取られてしまった…

カザリの鎧が戻ってるってことは吸収したのか…

おまけにメズールも足が復活している

勝てるのだろうか？こんな体で…

「考えている暇はない！はああ！」

チーターの力を使いメズールの前に立ちふさがった

『！？』

「せいや！」

頭から電撃を放ちメズールに浴びせる

『きゃああ』

メズールは水…だったら雷は有効だ！

『おらあ！』

「せい！」

『ぐお！』

ウヴァが攻撃してきたのでチーターの足で高速キックをお見舞いした

「そしてお前はこれだ！」

『くー！』

カマキリソードを展開させ力ザリを切り裂いた

「よし！くら…」

ガクンと体が崩れた

『ハアア！』

「うわああ！」

隙をみて力ザリは僕を殴り飛ばした

「ぐ…がは」

『ここまでのようね』

『期待はずれだよオーズ』

『消えろ！』

『『ハアア！』』

ウヴァの雷、メズールの水、カザリの砂をまとめて受け吹き飛ばされた

「うわああああ」

そして変身が解除されメダルが落ちる

「う……」

さっきの反動で残りのメダルも何枚か落としてしまった

『返して貰ったぞ俺のコアメダル』

『ふふ……オーズの坊やありがとうね』

『僕のコアメダルはないか……まっいいさ』

そして三体が近づいてきた

チーターだけはベルトに残っている

『じゃあ…バイバイ』

カザリが砂を放つ

くっ…結局ハイエナヤミーは取り逃がし

コアメダルも取られた

「何やってるんだよ僕…届く範囲なのに守れてないじゃないか」

ああ…死ぬのかな僕…

僕は目を閉じて防御の構えをする

防ぎきれぬ訳なのに

ガキンと音がして僕は目を開けた

「死んでない？」

そう…僕は死んでなかった

「え…？」

「大丈夫か？」

僕の目の前に誰かが立って砂を防いでいたからだ

『誰！？』

『何よあれ？オース？』

『貴様誰だ！そのメダルは何だ！』

メダル？

後ろ姿しか見えないけど騎士のような戦士だった

「ああ…俺は仮面ライダーディアス」

彼はそう名乗った

『HAPPY birthday ディアス!!』

ディアスと銀色と器（前書き）

短いですが新ライダー登場です！

カウンザメダル

現在オーズの使えるメダルは

タカ

バッタ

ライオン

トラ

チーター

サイ2

ゴリラ2

ゾウ2

ディアスと銀色と器

「いくぜ！」

『銀色のコアメダル！？』

大ピンチの僕の前に現れたのは騎士のような戦士…新たな仮面ライダーだった

「よっ」

ディアスと名乗った仮面ライダーはグリードの攻撃を避ける

「はああ！」

『ぐあっ！』

ディアスは腕についている剣を展開させ切り裂いた

『くられ！』

後ろからカザリが攻撃を仕掛けるがヒュンと音を立て後ろに回った

『なっ！？』

「遅いぜ！」

カザリが振り向いた瞬間に蹴りをお見舞いした

「は、早い……」

スーツは黒色で鎧が銀色だ……中央には……狼の姿が……

「コアメダル!?!」

僕が全く知らないコアメダルだ…

『はあ!』

「くっ…」

メズールの水流弾をくらい一歩下がったが全然効いてない

「おいおい…その程度かよ」と

『きゃああ!』

「おまけだ!」

『ぐああ！』

ディアスは腰にある大剣を抜きウヴァとメズールを切り裂いた

「よしっ
…」

ディアスはベルトから一枚のコアメダルを抜き剣に入れた

『ウルフブレイク！』

「はあああ！」

ディアスは剣を構え輪を作りグリード達に発射した

『くっ…何だよこれ!』

『動けない!』

「いくぜ!」

ディアスの後ろに銀色の狼のビジョンが現れる

「おりゃあああ!」

そのまま大剣を地面に振り下ろし

『ぐあああ』

『きゃあああ』

大量の斬撃がグリード達を切り裂いた

そして爆発を起こす

『チャリン…』

何枚かメダルが落ちた音がした

『くそっ…覚えてろ』

ウヴァが二体を背負い逃げていった

「す、凄い……」

「さっきはありがとう!」

僕はメダルを拾って仮面ライダーにお礼を言った

「……はあ……無茶すんなよ……明久」

溜め息をつかれ何故か僕の名前を言つと

「先に帰ってるからな」

後ろを向き校舎へ歩いて行った

「え…？何で僕の名前を…？」

巧
s
i
d
e

「どうだった？」

「ああ…問題ないよ」

俺は明久を助けた後、校舎に戻ってきた

まあ随分と留守してたんで文乃こつてりと叱られた訳で

今は文乃、希に変身した感想を言ってるんだ

「流石にグリード四体は無理かな」

「にゃあ…巧は無理しないでね」

「あんたが倒れても心配なんかしないんだからね！」

「ああ…サンキュー二人共」

ピンと銀色のメダルを弾きキャッチする

「アキ君…どうして」

高町が溜め息をついている

簡単に言うと高町は明久が好きな訳で…心配して明久を助けようとしたんだけど明久に帰れと言われて落ち込んでるんだよな

俺が知ってる理由？それはヤミーが出たから向かってたら一部始終を見たのさ

俺が仮面ライダーなのを知っているのは…文乃、希、そして坂本だ…

そう物語は…俺らが教室にいた時だ…

『いらっしやいませ！』

『HAPPY birthday!』

いきなりとても甲高い声でそう言われた

『あ…あのどうしたんですか？』

『見つけたよ！君が銀色のコアメダルの器だったとはね』

『は？』

メダル？メダルと言えば明久がオーズになる為の

『何をしたいのかわかりませんがコアメダルに関しては吉井明久に尋ねてください』

『素晴らしい！その真っ直ぐな性格！ますます騎士にふさわしい！』

騎士と言えば…ドラゴンを倒す戦士のこと言っはずだが今はどうでもいい

『べついつことですか？』

『これは私からのプレゼントだ！受け取りたまえ！』

『は、はあ…ありがとうございます』

何かの社長かな？なら失礼な態度は取れないよな

俺は大きな箱をもらった

いかにも高そうだ

『君が持っている石盤とこれがあれば新たな戦士が誕生する！』

何のことが全く意味が分からない！

『ちょっと待ってください……どういう……あれ？』

気づいたらその人は消えていたんだ

変身とピンタと4回戦（前書き）

今回は回想と少し暗いです

カウンザメダル！

現在オーズの使えるメダルは

タカ

クワガタ

バッタ

ライオン

トラ

チーター

サイ2

ゴリラ2

ゾウ2

ウナギ

タコ

変身とピンタと4回戦

『何だろうな…これ』

俺は都築 巧

今、明久達がAクラスに行っている間、俺はFクラスの教室に残っていた

そして変な社長さんからこんなものをプレゼントされたんだが…

『こいつは明久と同じものかもしれないな』

と言って明久達を追いかけて行った

『にゃあ…巧…その大きな包みには何が入ってたの?』

そう言っ て紅茶を持っ てくるメイドの服を着て いる子は猫耳のよう な髪と赤い瞳が特徴な希だ

『えーと… 狼のような絵柄をした銀色のコアメダルが一枚… 鹿のよ うな絵柄をした銅色と熊の絵柄の銅色のコアメダルが一枚ずつだ』

『それは何なの？』

食器を片付けて いる髪が茶色く綺麗な瞳をして いるこの女は幼なじみの文乃だ

『えーと… 『ディアスセイバー』 だっ てさ』

そう言っ て俺はこの単剣を取り出す

「銀色の剣…だね」

「…待てよ…もしかしたら」

コアメダル…オーズ…仮面ライダー

俺はこの時を望んでいたのかもしれない

俺がヒーローになれる時を

いつも明久に任せて…逃げていた

馬鹿だけどあんなに優しく勇敢なあいつを見て悔しかったんだ

けど最近のあいつは何故か元気がない…

今日も我慢しているように見えて…

誰かが明久を助けなくちゃいけない

きつとそれは俺なんだ…！

あいつが昔…俺を助けてくれたように

今度は俺が…！

次怪物が出たときは俺も！

そして運命の時は訪れたんだ…

しばらくすると

高町が元気が無い顔で戻ってきたんだ

俺は理由を聞いた時…走らずにはいられなかったんだ

そして…グリッドに追いつめられた明久…

俺は銀色のコアメダルとあの社長が言っていた…乙女姉さんから貰ったお土産のベルトのような石盤

そして…ディアスセイバーを使い

俺は仮面ライダーとなっただ

『あなたは！？』

『俺は…仮面ライダーディアス』

明久side

「…ただいま」

僕はフラついた体でFクラスに戻った

「明久あ！」

アंकが掴みかかってきた

「ちよっアंक？何！？」

「お前…何故ふらついている」

「何のことだか…」

「何故ヤミーの気配がしたのにすぐ消えた？」

「それは…」

「お前…また勝手に戦つてだろ？」

「……」

「戦ってだろ！？どうなんだ！ああ！？」

アंकは黙っている僕を突き飛ばし教室に帰って行く

「ごめん…アंक」

アंकは舌打ちをすると

「俺の目的は完全復活することだ…忘れんな」

と言葉を吐き捨て教室に入って行った

…仕方ないさ。うん！同情してた僕が馬鹿みたいだ！

よしここは張り切って

「ごめーん！遅くなっちゃったよ！」

笑顔で教室に入る

みんなは馬鹿にしながらも迎えて入れてくれた

一人を覗いては

「アキ君」

「あつなのは！ごめん…ちょっと遅くなっちゃったよ」

パアアアン！と僕の頬に強烈な痛みが伝わった

「なのは？」

「アキ君…おかしいなあ…何でそんなにボロボロなのかな？」

魔王が降臨した

「な、何のことだか…それよりフェイトは大丈夫？」

「フェイトちゃんはアキ君を心配してたよ」

僕は腫れた頬をさすりながら苦笑した

「ごめんね…」

「私…なんでアキ君を叩いたかわかる？」

「え…？」

「私達はアキ君の体が心配だから…怒ってるんだよ？」

「なのは…」

気まずい雰囲気の流れながら僕となのは会場に向かった

『これより第第4回戦を行います!』

相手は…

「明久君…なのはちゃんと何を話していたんですか？」

「瑞希…落ち着いて!」

黒いオーラを出している姫路さんとそれを押さえている美波が相手だった

「たいしたことじゃないよ…OHANASHIをしてただけだよ」

なのはムスツとしながら静かに答えた

僕と美波は震えていた

「アキ…何をやらかしたのよ!」

「う…」

「明久君!覚悟してくださいね?」

「アキ君…行くよ」

怖い…本当に怖いよ…

早く二人を何とか…その前になのはを何とかしなきゃ

でも今回ばかりは僕が悪いよね…

巧に聞いたけど…なのは…泣いていたんだよね…

はあ…自分が本当に情けないよ

「アキ君!!」

「え…?」

ぼーとしていたらしく…試合が始まっていたことを忘れ

Fクラス 吉井明久
古典 0

気づいたら姫路さんに討ち取られた

「ぎゃあああ!背中があああ!」

グリードもろくに倒せないで何が仮面ライダーだ

大好きな人を泣かせて何がヒーローだ…

目の前のことをすっぽかして何がヒーローだ

「畜生…」

仲直りと悩みと一日目の終了(前書き)

コメント返せなくて申し訳ないです！

できるだけ返せるように努力します！

仲直りと悩みと一日目の終了

「…なのは」

「やっぱり強いね瑞希ちゃん！」

Fクラス 高町なのは古典 150

Fクラス 姫路瑞希

古典 346

こんなの…無理だ…

なのはが姫路さんになうわけないよ

「きゃああーやりますねなのはちゃん！」

え…？

姫路瑞希 210

「凄い…」

なのはは姫路さんに攻撃されないように距離を取る

「甘いですよ！」

しかし姫路さんは隙を見てでかい大剣でなのはの召喚獣の腹をえぐった

「あちゃあ！」

高町なのは 80

「なのは…やっぱり無私ね…仮面ライダーって凄いなと思うんだあえ…？」

なのはは笑いながら姫路さんの攻撃を避ける

「だって…いつも誰かの為に手を差し伸べるんだもん」

「それでも僕は…」

目の前にあることをすくえなかった

「けど…仮面ライダーはいつもみんなを守って…一人でいろいろ背負って…きっと辛いんだよね」

なのはの召喚獣が杖を構える

「だって…自分の命を投げ捨てて…人を救うことばかりで…誰にも助けを求めないんだもん」

「なのは…」

「確かに一生懸命戦うのは素晴らしいことだよ…誰かの命を守る…
格好いいこと」

なのは杖に力をためる

「でもね…そんな素敵な仮面ライダーがね…ボロボロじゃ…意味が
ないよ」

「でも…誰かが傷つくのは」

「わかってるよ…けどね…私だって…フェイトちゃんだって…アキ
君が傷ついてほしくないんだよ?」

なのはは悲しい顔をしながら続ける

「だからね……私達……アキ君が何を言っただって一緒に戦う……アキ君の命を守ることが今の私達の役目だから」

「なのは……ごめんね」

「謝ることじゃないよ……アキ君が居場所を求めてるなら私が作ってあげるから」

なのははそう言った後、姫路さんの攻撃を避け杖から桃色の閃光を発射した

「ディバインバスターアア!!」

巨大な閃光は姫路さんの召喚獣を飲み込んだ

姫路瑞希 0

『勝者吉井、高町ペア！』

すっきりした顔のなのはは僕の方を振り向き笑った

「アキ君……ありがとうね」

「え……？僕は何も……」

「うっん……違うよ……本当……アキ君で良かったよ！」

なのは満面の笑みで微笑んだ

どういうことなんだ

「仮面ライダーオーズ…吉井明久は私のヒーローだよ」

そっだ…僕はこの笑顔が見たくて…みんなの幸せを守りたくてヒーローになったんだ

なのはに心配をかける事態で僕は…

「ありがとうなのは…確かにヒロインは必要だよね！」

「アキ君…どうやったらそう解釈できるのかなあ？」

なのははそう言いながら笑った

「あはは…ごめんごめん！…じゃあなのはは僕にとって…」

あれ？何だろう…

なのは幼なじみ…けどしつくり来ない…今日から一緒に戦つヒロ

イン？それも違う

なのはは期待しているような目で見ている

「うーん…言葉じゃ表せない大切な人かな…」

それを聞いたなのはははじけたような顔をしながら真っ赤になった

「あ、アキ君！」

「何？」

なのはは頬を赤くしながら緊張したような声で喋る

「（やっぱり…耐えれないよ…ごめんねフェイトちゃん）アキ君…私ね…」

雄二 side

俺は明久と一緒にババアに本当のことを聞きに行つた

どうやら…教頭の野郎といろいろあつたらしい…

遊園地のペアチケットが優勝賞品にしていただとおお!?

翔子の手に渡る訳には行かねえ!

俺は明久に勝つように言つたんだ

今日はちょっと事故があつたらしいから4回戦で中止になった…

次は明久達とだったから危なかったな

勝つてたら大変なことになる所だった

話を戻し…ババアの部屋から出て明久に勝つように言った

だが明久は…

「……………／／／はあ」

溜め息を吐いてばかりだ！

こんな時に限って明久はどうしちゃったんだ！

「たくっ教室に帰るぞ明久」

「うえ！？無理だよ！／／」

「一応聞くが何故だ…」

「そりゃ…その」

俺は呆れ果て教室に帰って行つた…

明久は何故かAクラスの教室に入って行きやがった

まあ…そんなこんなで今日の祭は終わった

「みんな今日はゆっくり休んで明日はさらに売れるように頑張るぞ

「！」

なんか俺に似合わないセリフだ

『オオオオオ！』

まあみんなはやる気満々だから良しとするか…

「おい坂本」

「なんだ鳥もどき」

「ああ？…明久はどこだ」

しゃーね…教えるか

「Aクラスにいる」

『『ザッ』』

みんなが一斉にAクラスに向かって行きやがった

まっいつか…

「坂本君…なんだ高町…うお！」

そこには魔王がいた

夜道と気持ちとフェイトと歩く

「はあ……」

只今19時……だいぶ暗くなっている中、僕……吉井明久は買い物袋を持ちながら歩いている

「とりあえず……アंकは家にあるアイスですむとして……やっぱりゲームを買うのは控えた方が良さそうだね」

趣味に金を使い……おかげで今日はラーメンだけ

なのはの家は喫茶店でバイトをさせてもらっている

今日は運悪く休みだった

「はあ……なのは達に心配させない為にも……ちゃんと栄養を取って……んおお!?!」

いやいやいや…あれはやばいよ

『満』

『三菱』！

『チュ…ンチュ』

「デープ…僕にはレベルが高すぎる…」

よく思うけど平然とあんなことができるって凄いと思う

『明久』お腹減った』

体内からガメルの声…

「ごめんね！もう少し我慢してね」

早く…帰ってラーメン食べなきゃ

『満ちンチュ』

「！？／／／」

急いでその場から離れた

「カップルか…」

呟いた言葉で僕はあの時の言葉を思い出し顔が真っ赤になった

「／／…はあ」

はっきり言ってしまうおう

僕は今日の4回戦が終了した時…

なのはに告白をされたんだ…

僕ははっきりできず…祭の終わりにと言ったんだ

さらには放課後フェイトにAクラスに来るように呼ばれて…

行ってみるとフェイトだけしかいなくフェイトは夕日に照らされながら微笑んだ

可愛いではなく美しいがふさわしかった

そして告白をされたんだ

結局フェイトも祭に終わりにと言ったんだ…なのはやまどかと同じか…

「僕って以外とモテるのかな…いやかなりモテる…」

そういえば…姫路さんからも帰る前に告白されたんだっけ

美女達から告白されまくる僕って

「やっぱり美少年…なのか」

そつだよ！僕は美少年なんだ！

「さあ…早く帰って勉強しなきゃ！」

「あれ？明久」

急に暗い道から綺麗な声が…

「フェイト？」

あの綺麗な声と言ったらフェイトしかない

「やっぱり明久だ！」

フェイトはこっちへ嬉しそうに掛けてきた

「どうしたのフェイト？こんな時間帯に」

「…ちょっとお買い物…エリオやキャラにね」

僕は納得しながら一緒に歩く

「でもこんな夜道に一人は危ないよ…ましてや美女なんか余計だよ」

「び、美女！？／／」

どうしたんだろう…顔が赤いよ…

「だ、大丈夫だから！すぐそこだし」

「でも危ないよ。…僕も付き添ってあげるからさ」

「え！？／／ありがとう」

「うん！どういたしまして！」

そんな訳で僕はフェイトの家を目指して一緒歩く

「ねえ明久」

「んー何？」

「明久って…なのはが好き？」

「ぶげふ！い、いきなりどうしたの！？」

何で唐突にこんな質問が…！

「だって明久…なのはと話してる時凄く嬉しそうだから」

「え…？」

「…ちょっと悔しいかなあ…」

フェイトは苦笑しながら喋った

フェイトがそんなことを考えている何て思っても見なかった

「そんなことはないよフェイト」

「え？」

「今こうしてフェイトと話せているこの瞬間もとても嬉しいよ」

フェイトならあのことを言ってくれてくれるかもしれない…

「明久… / /」

「そっだ…」

ポケットから僕はネックレスを取り出した

「フェイト…これさ…一年の教室で売ってたからあげるよ」

フェイトは驚いた顔でみていた

「いいの!？」

そのネックレスは…黄色い花の形をして中央には綺麗な宝石がついている

「うん!フェイトに似合いそっだったから」

「ありがとうノノ」

良かった…気に入ってもらえたようだ

「明久…」

「何？」

「ネックレスかけてくれないかな？」

「え…あっうん！わかった／＼」

フェイトは嬉しそうに近寄る

「／／／…」

凄じ緊張する…

目の前にはフェイトが…

「……（我慢だ…耐えるんだ）」

フェイトは目をつぶっていて余計に美しさをかきたてる

「……よ、よし。つけたよ」

「ありがとう明久！」

危なかった…あやうく理性が飛ぶ所だったよ

「明久ここでいいよ！」

「大丈夫なの？」

「うん。あれだから」

「わかったよ…じゃあ僕も帰るね…」

どうやらフェイトの家についたらしい

ちょっと残念かな

「じゃあ…おやすみフェイト」

フェイトは僕の方に走ってきて

「おやすみ明久！」

そう言ってから僕の唇に口づけをした

「／／／うん！」

僕は手を振りながら走った

今起きたことが何を言いたかったのかは鈍感な僕でもなんとなくわかった気がした

迷いと恭也さんと真夜中の（前書き）

特別アンケート

好きな異性と勉強するなら何の教科にしますか？また教えてもらうなら何の教科がいいですか？

高町なのはの答え

「『教える…数学、教えてもらう…保健体育』アキ君の保健体育／／…」

教師のコメント

おや、高町さんは吉井君が…応援してますよ

吉井明久の答え

「『教えてもらう…発達保育』」

教師のコメント

どうしたのでしょうか？

坂本雄二の答え

「『教える…人権について』」

教師のコメント

涙の跡ではないと信じたいです

迷いと恭也さんと真夜中の

「現在…夜の9時…」

僕は教科書や参考書を積み重ねている

「明日は霧島さんと雄二…なら多くでも点を取らなきゃ」

得意な日本史から始める

カチツと時計の針が動く

「アंक…寝たのかな？」

まだ怒っているのだろうか…いやアंकのことだからそれはない

「明日の夜…」

答えを出さなきゃいけない

誰が好きなのか…

「みんなの気持ちは嬉しいけど…せめて二人かな…」

前何人でもと言った自分が恥ずかしいや

「……」

一人は決まっている

大事な大事な人

「……さあて勉強を続けるかな」

カチリと針が10時を示す

「……うん」

全然わからない！！

「えつと次の図形の面積い？」

こんなの誰が作ったんだ…

「駄目だあ！頭に入らないよ」

「仕方ない…あそこに行くかな」

「……………」

僕は幼なじみ…高町なのはの道場で座禅をくんでいた

懐かしい…昔…ここで剣技を習ってたんだよね

心を空っぽにして…瞑想する

『オーズの力はこの程度か』

『がっかりさせないでよね』

『ガメルのコア…返しなさい』

「はっ！」

額には汗が流れ…僕は無理やり目を開けた

「はあ…はあ…もう一回」

再び瞑想をする

大丈夫…今度は大丈夫だ

『アキ君！』

『明久！』

『明君！』

『明久君！』

僕を呼ぶ…美女達…

『ピシャアアン!』

「あだああ!」

いきなり頭を叩かれ僕は現実に取り戻された

「心に迷いが見えるぞ明久君」

「恭也さん…」

僕の目の前に土郎さんと一緒に剣技を教えたのはの兄…恭也さんがいた

「力がわからない？」

「はい…」

僕は恭也さんに悩みを打ち明けた

とりあえず…オーズとバレないように召喚獣のことにした

「強力な力を使おうとするといけなくて」

「…だから勝てるか不安なのか…」

「はい…」

恭也さんは頷きながら僕の額をつついた

「あたっ！」

「だからと言って…無茶するのは感心しないな」

「う…」

「見てたよ…かなりハードな特訓してたじゃないか」

「あはは…見てたんですか…」

「腕立て200…腹筋300…スクワット200…素振りを4000…体が壊れるぞ？」

「ちょっと邪念を払おうかと」

「明久君…別に力を求めなくてもいいと思うぞ」

「え…」

恭也さんにはっこりと笑った

「力を求めれば…自我を失う…下手したら心すら制御ができなくなるんだよ」

「…でも…このままじゃ駄目なんです」

グリード一体すら勝てないなんてこの先勝っていきない

「明久君…君は無欲だ…だからこそ危ないんだよ」

「それってどういう…」

恭也さんは立ち上がって僕に飲み物を渡す

「あっ…ありがとうございます」

「明久君…強くななくていいんだ…君には仲間がいるだろ？」

「はい…」

「強くなりたいと言うよりも誰かを守りたいと言う方が力つてのは自然と身につくんだよ」

「誰かを守りたい…」

「けど…それで行き過ぎたら…結局は同じだがね」

そうだ…強くなりたいんじゃない…誰かを守りたいと願えば

「ありがとうございます！恭也さん！」

恭也さんはふっと笑うと僕に飲むよう促してくれた

僕はそれを頷きキャップを開けて飲み始めた

「それにしても明久君…君はなのはが好きなのかい？」

「ぶほおおっ！」

なんだこの罨は！？

ああ！僕のドリンクが…

「いきなり何ですか恭也さん！」

「はははー…ごめんごめん！でも本当だったとはね」

「う…そりゃあ幼なじみですから…何年も一緒だと流石に」

「へえ…誤魔化さないか…うん流石はなのはの彼氏だな！」

「だから違いますって…！！／＼」

「あはは…じゃあ今からなのはに会つかい？」

「今11時ですよ！…？」

何を言ってるんだ恭也さん…会えるなら会いたいけど

「だそくだなのは」

「えっ！まさか」

「はは…冗談だよ…で、本当は？」

「会えるなら…いや会いたいです」

どうせいないんだし冗談ぽく

「だそうだなのは」

「そうなのアキ君？」

「な、ななのは！？」

「じゃあ頑張れよ仮面ライダー」

「へっ！？」

振り向くと恭也さんは手を振って出て行った

「ちょっと待ってください恭也さん！何故僕が仮面ライダーなのを……」

追いかけてよとしたらぐいっと引っ張られた

「な、なのは……」

「アキ君…勉強しよ！フエイトちゃんも呼んで」

上目づかい…そして微笑み…胸

「男とは無力だ…」

「？」

こうして僕は二人に朝まで教えてもらった

やましいことはしていないからね!!

二日目とVS魔法美女とディアス

「おはようみんな…」

僕は欠伸をしながら教室に入る

「おはようなのじゃ明久」

美少女の秀吉がこちらに微笑む

「うん…ってうお！」

今日の秀吉は猫耳メイドだと!?

カメラ!カメラはどこに…

「そうだ!ムッツリーニに!」

『ムッツリーニ君…今日の夜は楽しみにしとくんやで』

『夜…（ブシャアア）』

『駄目だよはやてちゃん…ムツツリー二君は3Pが好きなんだから』

『…そんなものに興味など』

『またまたムツツリー二君は嘘つきやな！』

『…この破壊力は（ブシャアア）』

駄目だ！ムツツリー二は既に力尽きてる…

『…雄二…今日の夜は』

『そんなものの興味ねえ』

『そうですか？坂本君。本当は期待しているんじゃないですか？』

『ま、マミ！？ぐっ離れやがれ！待て翔子もくつつくな！／＼』

『じゃあ私もくつつかせて貰います！』

『千代美まで！／＼』

何だ…このそこはかとないうるは…

「何故…不細工でゴリラの雄二が…」

巧にでも借りるかな

「巧…カメ『巧』！』」

『うお！なんだ千世！』

『にゃあ…当たってる』

『はっ！悪い希！／／』

『巧！六回死ねえ！』

『ぐはああ』

何だこのハーレムは…

「全く…巧はけしからん奴だ」

「家康…。そうだね…」

同士がいた…二次元人間が…

「」「あいつら…拷問…いや死刑…」「」

そつだ：僕にはFFF団と言つ同士がいたんだ！

「みんなあいつらを懲らしめるぞ！」

「オオオオ！」

鎌を持ちフードをかぶりFFF団は降臨する

「異端審問だああ」

「「「うわああ！」」」

「追え！あいつらを逃がすなあ！！」

「「「オオオオ！」」」

FFF団はドドドドドと音を立て奴らを追いかけた

「だから違うつってんだろ」

「ふうん…私はこの人が好きだけどね」

「先輩と言えど容赦しませんよ」

教室に入ってきた木下さん、杏子さん、後輩のティアナ…

そしてアंक

「明久…家の鍵だ」

「ああ。ありがとうアंक」

「……」

「……」

「……異端審問だああ！」

「『オオオオ！』」

残ったみんながアंकを殺しに行った

「ふざけんな明久！どいうつもりだああ」

ドドドドドと追いかける音が響いた

「ハハハハハ！最高に気分がいいや！」

「あれ？明久君？」

「あつ比奈ちゃん！どうして？」

「千代美についてきてって言われて…今日は元気そうだね」

「うん…スカッとした気分さ！」

「ふふふ…良かった元気になって」

「うん。ありがとね……………はっ！！殺気！」

素早く椅子から離れるとザクザクと椅子に何かが突き刺さった

「アキ君…おはよう」

後ろにはにこにここと笑うサイドテールのなのはがいた

「お、おはようなのは」

「昨日のこと覚えてるよね明久？」

そっ…その声は…

「フェイト…」

腰まである美しい髪が特徴の天使…フェイトが笑っている

「明君は他の人にも告られていたんだね」

「まどか!?!」

「はあ…明久は浮気が得意なのかしら」

「ほむら！？」

幼稚園の幼なじみと今日の朝告白してきた黒髪の美女が立っている

大丈夫…少なくとも二人は攻撃しないはず

「明君…嫉妬しちゃっていいかな？」

「え…」

「たまには私達も…」

「何を言っているんだよ…」

まずい…これは非常にまずい…

くそっーかハか

「おはよう佐々木さん！」

「え…？」「」

振り向いた！今がチャンスだあっ

「だっしやああ」

僕は窓から飛び降りた

『タットツバ！タトバ！タットツバ！』

勿論高いから変身するけどね

「とう！」

上手く着地して急いで逃げる

冗談じゃないほどオーラが伝わってくる！

「確かに告白されてるのに異性と仲良く話すのは失礼だよね！」

とりあえずライドベンドーライドベンドー…

学園から離れ外に逃げる

大丈夫！時間までに戻れば

「シュート！」

「ファイヤ！」

上空からいきなり閃光弾がああ

「うわあああ！」

『タカ！ゴリラ！バッタ！』

ガントレットで素早く防ぐ

「げっ…二人共」

「アキ君…OHANASHIしよっか」

「大丈夫だよ明久…暴力は振るわないから」

「本当に!？」

良かった!まだ希望は…

「R18なことをするだけだから」

なかった…

「ちょっと待ってよ!何考えてるの!」

「暴力は駄目ならせめて体で…それに」

なのはは顔を赤らめながら俯く

「いつも…助けてくれるお礼が…」

何だこのエロアニメのような展開…

喜ぶべきか…

「だ、駄目だよみんな！指定18以上じゃないからこの小説」

オーズの力があればこの程度…いけ

「！？バインド？」

「「逃がさないよアキ君（明久）」」

「な、んだと…」

二人の後ろには弓を構えるまどかが

「ごめんね明君！」

「絶対詫びてないでしょおお…」

これから僕は美女達に…

意識が遠のいていく

巧
s
i
d
e

「はあ…酷い目にあつた」

「大丈夫か明久？」

俺は仕方ないよなと思いながら疲れ果てている明久に声を掛けた

「ふっ…あそこでああなるとは」

駄目だ…明久完全に我を失ってる

『ウオウ！』

おっ見つかった

「巧…何それ？」

明久が不思議そうに尋ねてきた

まあ無理もないか

「これはウルフカンドロイドだ」

「ウルフ？僕が持っているのは…えっとタカ、バッタ、タコ、トラ、ウナギ」

そう言えば明久…トラカンドロイドを飼ってたよね？

「って何で巧が持ってるの！？」

「反応が遅いような…まっいいか。明久やミーが見つかったって…どうした？」

「すっかり忘れてた…」

「はあ…とにかく行くぞ！」

「ちょっと待ってよ巧！巧は戦えないよね！？」

まあ…あいつから見ればそうだけど…今は違う

「とにかくついて来いよ！」

「あつ待つてよ巧！」

俺と明久は教室から出た

大丈夫だ。雄二には言つてある

「いた！」

俺と明久は学園長の部屋の前でドアを壊そうとするヤミィに飛びかかった

「「うわああ」「」

が、すぐに投げ飛ばされた

「あれは根本君のヤミー！学園長の部屋に一体なんで!？」

「大方…明久に殴られて女装させられたのを学園長のせいになろうとしたんだ」

あいつは腐ってるからこういうことをするはず

「だが、親の根本は…」

明久はにっと笑うと

「大丈夫！今頃アंक達が捕まえてるよ！」

と安心する一言を言った

「じゃあ…あとはこいつの始末だけか」

「巧!?!生身の人間じゃヤミーには」

確かに…けど今の俺は

「大丈夫だ…俺にはこれがあるしね」

銀色のコアメダルを明久に見せる

今の俺は仮面ライダーだから

「巧！？それってまさか」

『ウオオオオ！』

「ぐあっ！！」

「うぐ！」

ハイエナヤミーに首を掴まれ校舎の外まで連れられた

「好都合！」

明久はそう言うとハイエナヤミーを外に蹴り飛ばした

『吉井…許さねえ』

全く…本当にヤミーは親に似てる

「いくぞ明久！」

「え…う、うん」

明久はベルトを腰に付ける

俺はディアスドライバーを腰に付ける

「巧？まさか君…」

「ああ。俺も仮面ライダーさ！」

明久は驚きながら三枚のメダルを取り出す

俺は銀色のウルフメダルとセルメダルを取り出す

「とにかく行くよ巧！」

「ああ！」

明久は三枚のメダルをセツトし

俺はディアスドライバーにセル、コアと順番に中央の穴に入れる

明久はスキヤナーを取り出し読み込み

俺は短剣をメダルの上から穴に入れた

「「変身！」」

同時に叫ぶ約束の掛け声

『タカ！トラ！バッタ！』

『ウルフアップ！』

『タットツバ！タトバ！タットツバ！』

明久は三つのサークルが中央に刻まれオーズとなり

俺は中央がウルフの紋章が刻まれディアスとなった

「凄い！あの時グリードと戦ってたのは巧だったんだね！？」

「そう言うこと。けど俺の力はコアとセルから引き出されてるから明久よりは強くないんだ」

「そうなの？」

「ああ。明久はコアメダルの力が十分に引き出されてるしね」

「そうだけど…魔法美女達に負けたからなあ」

「ちょっと待ってくれ…どういう」

『ウオオオオ!』

「「はあ!」」

ハイエナヤミーを同時に蹴り飛ばす

「行くよ巧!」

「話スルーか!無理するなよ明久!」

明久はトラクロー、俺はウルフソードを展開し構えた

「でやあ！」

ガキンとハイエナヤミーのクローと火花を散らす

「いけ明久！」

「OK！ハアア！」

俺の肩を踏み台にしてトラクローでハイエナヤミーを切り裂いた

『オオオ…』

「おまけだ！」

弱った所をソードと切り裂いた

『吉井…』

「時間がない… 明久決めるんだ！」

「了解」

『スキヤニングチャージ！』

「ハアア！ハア！」

オーズの足がバッタの足になり高くジャンプ

「ハアアアアアア！」

翼が生え三つの巨大なサークルをくぐりながら両足でキックをする

『ギアアアア！』

必殺キックをくらいハイエナヤミーはセルメダルに分解された

五回戦と覚悟と愛する（前書き）

いつも感想ありがとうございます。

返信が遅くなりすみません。

勝手ではありますができる時は返したいと思います。コメントを返せない時がありますがすみませんが見逃してください

今回はメズールの心境が…

五回戦と覚悟と愛する

『はあ！』

ズボツとメズールの体から一枚だけ残してコアメダルが取り出された

『ウヴァ…カザリ…』

メズールは人間の姿になり二人を睨む

『ごめんねメズール。』

『あいつらに勝つには進化が必要だ…』

二人はメズールから取り出した六枚のコアを半分ずつ取り込んだ

『私を捨てたと言うの？』

『優しいグリードなんかいないよ』

『お前はガメルとオーズに同様してたからな』

メズールは危機感を覚えて逃げ出した

『…文月学園に逃げるの？』

『あそこは欲望の渦だ…貴様を殺すヤミーなどいくらでも作れる』

メズールはそれでも必死に逃げ出した

『あなたは…ガメルを助けたように私も』

『逃げてても無駄だな』

ウヴァは汚いセルメダルを割りなげた

そこから黒いクズヤミーが生まれメズールを追って行った

『ウヴァ…実験を続けようよ』

『ああ…もつじき新しい仲間がくるからな』

「まさか巧が仮面ライダーだったとはね」

「文句あるのか？」

「いや…僕は巧が仮面ライダーで正解だと思うよ」

さっきのことを話しながら僕と巧は教室に帰った

「アキ君！良かったあ…5回戦始まるよ！」

なのはは僕に気づき5回戦の始まりを教えてくれた

「もうそんな時間！？」

「早く行こう！」

「うん！」

会場に向かって走る

確か…相手は…

「よう明久」

「やっぱり雄二か……」

悪友はニヤリと笑いながら霧島さんと一緒に僕らを見ていた

「遅刻しかけるなんて随分余裕そうだな。まさか高町と何かあったか？」

そうは行くか！

「雄二こそ…霧島さんと何かしてたんじゃないの？」

睨み合う僕と雄二

（絶対こいつには負けない）

『青コーナー吉井、高町ペア！赤コーナー坂本、霧島ペア！』

周りからは昨日より凄い声援が聞こえた

全力で行く！その為に勉強してきたんだ！

『『サモン！』』

掛け声と共に現れる

対戦科目は…

化学！

Fクラス 吉井明久

化学 1 2 3

Fクラス 高町なのは化学 3 2 1

Fクラス 坂本雄二

化学 1 6 5

Aクラス 霧島翔子

化学 362

「ほう…頑張ったじゃねえか明久」

「僕だってやればできるんだ！」

雄二はニヤリと笑いながら喋る

「面白れえ…完膚無きまでに叩き潰してやるよ」

「なのはは霧島さんを頼むね」

「わかったの」

「さあ！行くぞ雄二！」

「きやがれ明久！」

木刀を構えて召喚獣の頭を狙った

「甘いぞ明久！」

「な、なにに！」

雄二は木刀を掴むとそのまま引き寄せ顔面を殴った

「あぐっ！」

フィードバックが顔面にいい

「よそ見してる暇はないぜ！」

雄二の召喚獣はガガガガと殴ってきた

「ぐっ…」

木刀と防ぐも点は減らされる

雄二「…召喚獣を操るのは初めてなのに強い

「…！そこだあ」

召喚獣の足を狙って木刀を叩きつけた

「ちっ…やるな明久」

「まだまだあ！」

木刀を上へ投げパンチを放つ

「おりゃああ」

蹴りを放って雄二の召喚獣を吹き飛ばした

Fクラス 吉井明久
化学 53

Fクラス 坂本雄二
化学 0

「な……」

「僕の勝ちだね」

雄二の敗因は僕との操作の差

初めてに対して僕は観察処分者だからね操作は上手いんだ

「なのは大丈夫!？」

Fクラス 高町なのは化学 123

Aクラス 霧島翔子

化学 245

「流石は霧島さんか」

「…貰った」

なのはの召喚獣が斬られそうになり僕がとっさに素手で受け止めた

「痛っ」

「アキ君!？」

僕は素早く霧島さんの剣を蹴り飛ばすが逆に盾で殴られた

「ぐぼあっ!」

僕は頬を押さえながら召喚獣を動かす

「…雄二の仇は私がとる」

「うわっ!」

霧島さんの召喚獣は剣を拾い斬りつけてきた

「アキ君!」

なのはが弾を放ち霧島さんの召喚獣にダメージがいく

「ありがとうなのは」

危うく斬られるところだったよ

「アキ君…デイベインバスター決めるから時間稼いでくれない？」

「わかった！」

木刀を拾い霧島さんの召喚獣と斬り合いを始める

「てええい！」

ガキンと剣で防がれ逆に斬りつけてくる

「うわっ！」

「…はっ！」

真上から振り下ろされた剣を木刀で受け止めた

「アキ君！下がって」

なのはは巨大な閃光弾を放った

「デイベインバスター！！」

「うわああっ」

僕は素早くよけさせデイベインバスターは霧島の召喚獣を飲み込んだ

566

Aクラス 霧島翔子

化学 0

『勝者！吉井、高町ペア！』

「「やったああ！」」

僕となのはお互いに抱きついた

「すまない翔子…俺が」

「…雄二は悪くない…私が弱かっただけ」

「……そんな訳ないだろ」

「…え」

「ありがとな翔子」

良かった…二人共仲良くやってて

なのはと別れ僕は外にいた

「次は決勝戦か…」

姫路さんの転校がかかっているんだ負ける訳には行かない

『きゃああ!』

女の子の悲鳴声!?

僕は急いで叫び声が聞こえた場所へ行った

「あれは…」

ヤミーがいる…しかも沢山

けど黒いなあ…

「そんなことより…うおお！」

ヤミーに襲われている女の子を助けるべくヤミーに突撃する

「おりゃあー！」

『ぐおお』

ヤミーは簡単に吹き飛び木にぶつかった

「あなたは…」

女の子は同年代の人だった

「早く逃げるんだ！てえやあ！」

ヤミーを殴りながらその人を逃がす

「だっしゃあああ」

『うおお』

おかしいな…殴ってもはいがるよ

「明久あ！」

「アंक！？」

木の上にいつの間にかアंकがいた

「こいつら何なの!？」

「そいつはクズヤミで強くないが面倒だな」

そう言うときアークはメダルを投げた

「明久!タトバのメダルはくれてやる!」

「でもアークのメダルが…」

「そのかわり取られるなよ」

アークは真っ直ぐこっちを見ていた

信頼されてると受け取っていいのかな?

「じゃあ…後のメダルはアークにあげるよ」

「ハッ！全部俺のだろうが」

僕はふっと笑いドライバーを腰につけメダルを入れる

スキャナーを取り出し読み込む

「変身！！」

『タカ！トラ！バッタ！』

メダルが僕を囲む

『タットツバ！タトバ！タットツバ！』

サークルが刻まれオーズに変身した

「ハアア！」

メダジャリバーを振るいクズヤミーを破壊した

「確かにこのメダル使えないね」

「オーズ…」

さっきの人が眩きアंकが近づいた

「お前…メズールか」

「えっ！」

ちょっと待つてよ…こんな可愛い女子がああグリード？

「あなた…失礼なこと考えてなかったかしら？」

ヤバッ！

「いやいや全然！」

「何故お前がここにいる」

メズールは深い溜め息をした後…喋り出した

「グリードの進化…それによって私のコアメダルはほとんど奪われたわ」

グリードの進化？

「ウヴァとカザリか」

「ちょっと待ってよ！君…昨日あいつらと一緒に僕を襲ったじゃない

いか…なんで」

おかしいよ…仲間のメダルを奪うなんて

「オーズの坊や…グリードは欲望に忠実なの」

メズールは座ったまま喋る

「だから裏切りなんか当然のことなのよ」

「だからって…」

おかしいよ…そんなことでこの人はこんなめに合わなきゃいけないの？

「とにかく手当てしなきゃ」

メズールに手を伸ばすがメズールは眺めていた

「なんであなたは私を助けようとするの？私はグリードよ」

「そんなの決まってるじゃないか…」

グリードとか人間とか関係ない

「傷ついた人をほうっておける訳ないからだよ」

「人……？」

「そうだよ…仲間に裏切られても怨まない…その心は人間の心さ」

「人間だと笑わせるな明久」

「黙れアंक」

僕はアंकを黙らせメズールを見る

「ガメルは何故…あなたに」

「決まってるよ…ガメルには人としての心があったから」

「……」

救える命は…必ず救う…そう決めたんだ

「やっと見つけた」

ふいに後ろから攻撃された

「ぐああ!」

「カザリ…ウヴァ」

「久しぶりだなアंक」

グリード…！？

「オーズ…ついでに貴様のメダルも貰う」

僕はメズールをかばいながら構える

「何をしたいのかわからないけどさ…仲間を見捨てるお前達は許さない！」

「明久ー！」

この声は…

「巧！？」

「大丈夫か？変身！」

『ウルフアップ』

巧は走りながらコアとセルを入れ剣を刺しディアスへと変身した

「何？銀色のコアメダルだと」

初めて見たアंकは驚いている

「来たか…銀色のコアメダルの戦士」

「僕が相手をするよ」

「うおおお！」

「はあああ！」

僕はウヴァにメダジャリバーで切り裂き

巧はカザリと火花を散らす

「おりゃあ！」

「おらあ！」

ガキンとウヴァのクローとぶつかり合う

「お前には借りがあるからな…おらあ！」

「ぐああ！」

蹴り飛ばされ木に建物にぶつかった

「君の力…見せてもらっよ」

「はああ！」

「はっ！」

バキイと攻撃がぶつかり合い巧が吹き飛ばされた

「ぐああ！」

「巧！うわあ！」

クローをくらい吹き飛ばされる

こいつら昨日はこんなに強くなかったはず

「あいつら……ぐあ」

アंकはウヴァの電撃をくらって木から落ちた

「アंक！うわあ」

「よそ見している場合か？ふん！」

「ぐああ！」

つ、強い

「昨日のお返し！ふん」

カザリの砂嵐を受け巧は建物にめり込んだ

「ぐはっ……」

「巧！？ぐあああ」

ウヴァのクローを連続で受けてダウンする

「おらああ！」

「ぐあ」

蹴り飛ばされ車にぶつかった

「明久！」

「さてと…実験を始めようか」

「ああ…」

く、何をする気なんだ

ウヴァとカザリはメズールに向かって黒いコアメダルを二枚投げた

「何…？黒いメダルだと？」

何だあのメダル…邪悪なオーラが

「ああああ！」

メズールは怪人に戻り姿が…

「まさか…完全体？」

「違う…あれは」

僕を起こしたアंकは驚いていた

「チツ…まさかコアメダルを集中して入れたのか」

「え？」

「あああああ」

いきなり大量のセルメダルが地中から現れメズールを飲み込んだ

「これは…」

何だよ…あいつら。結局…裏切って…完全な怪物にしゃがんだ…

『ギィアア!』

メズールは巨大な怪物となり飛び上がった

「失敗か…」

謎の声が地中から聞こえ…すぐに消えた

「へえ…まさかこうなっちゃうとはね」

「ふん…メズールは哀れだな」

「お前らああ！」

「ぐっ！」

僕と巧は立ち上がり二人を切り裂こうとする

『ハッ！』

「うあああ!」

「ぐああ!」

電撃と砂嵐をくらって再び吹き飛ばされた

「君達は見ているよ」

く…救わないと…メスールを

「明久?」

僕はフラついた体を無理やり起こす

「待ってて…絶対助けるから…ガメル！」

僕は叫んだ瞬間に体内からガメルのコアメダルが出た

「何？明久！お前まさか」

「ごめんアंक！今は話している暇はない！」

全力でこいつらを叩きのめす！

『ギィアアア！』

そしてメズールを

ガメルのコアメダルをセットしスキャナーで読み込む

『サイ！ゴリラ！ゾウ！』

サークルは白の絵柄になる

『サゴゾ…サゴゾオオ!』

「俺も手伝うよ明久」

巧はディアスドライバーに熊のコアメダルを入れる。そして剣を突き刺した

『ウルフベアーアップ』

ディアスのスーツがボディが銀色から銅になり

ディアスセイバーが消えハンマーが腰にセットされた

ボディはガッチリとして目と足は銀色のままだ

『ウオオオ！』

『ウアアアア！』

僕はドラミングをし、巧は吠えた

『ギアアアア！』

重力操作でメズールを地面に落とす

「へえ…面白いね…」

「俺達に勝てるのか？」

勝てなきゃ…手を伸ばせないだろ！

暴走と強化とカポン…（前書き）

遅くなりました！今回は三人目の…

暴走と強化とカポン…

「ウオオオオ！」

サゴゾコンボになった僕はウヴァに立ち向かう

「はああ！」

ガントレットで腹を殴る

「その程度か？ふん！」

「うおお！」

そんな…効いていない…と考える暇は無く電撃を受けた

「ウラアアア！」

巧はハンマーを振り下ろしカザリを攻撃するが…

「効かないなあ！」

「ぐあああ」

水流弾を受けて吹き飛んだ

「巧！？ぐああ」

なっウヴァまで水流弾を使ったのか！？

「うあ！」

僕らはそのまま吹き飛んだ勢いで建物を破壊し、電柱にぶつかった

「ぐ…ウオオオ！」

ガントレットを飛ばしロケットパンチを放つ

「馬鹿が…おらあ！」

「跳ね返…うおお」

ガントレットが跳ね返って僕に直撃する

「明久！」

「よそ見してる余裕なんかあるの？」

「ぐあああ！」

ガシヤンと巧は壁にめり込んだ

「ふん！ふん！」

そのまま力ザリに連続で水流弾を喰らう

「巧！ウオオオ！」

ドラミングをして相手の重力を奪った

「オラアアア！」

力の限りガントレットをカザリとウヴァに叩きつける

「ぐ！」

やった！効いてる

「オオオオ！」

「ぐあああ！」

ウヴァの水流弾を喰らい僕はダウンした

「消えるおお」

しまった電撃…

「ぐあああああ！」

「明久ああ！」

コンボの限界もあり僕は強制的に変身が解除された

「うぐっ」

そのまま地面に這いつくばる

「くっ…っおお」

巧がハンマーを投げ捨てカザリに殴りを入れた

「うあっ」

そしてすぐにハンマーを持ちセルメダルを入れた

『ウルフブレイク!』

ハンマーが牙のような形になりウルフの紋章が浮かぶ

「おおああああ!」

そしてカザリに思い切り叩きつけた

「うあああ!」

カザリは吹き飛び建物にぶつかった

「くっ…セルメダルしか落ちないのか」

ガクと力が抜け巧は荒い息をする

「隙がありすぎだ!」

ウヴァは後ろから巧を攻撃した

「ぐあ…」

「た、巧！アंक…メダルを…」

「チッ…これでいけ！」

アंकは三枚メダルを投げる

「ぐ…変身」

フラついた体を起こし再び変身する

『クワガタ！トラ！バッタ！』

ガトラバに変身した僕は頭から電撃をウヴァへ放った

「ぐっ…」

ウヴァは防御しながらこっちへ突っ込んできた

「ウオオオオ！」

負けじと僕も突っ込む

「オラアアア！」

「ぐあああ！」

やっぱり亜種じゃ駄目だ…

「明久！」

『ギイアアア！』

「なっ…ぐあああ！」

「巧ー！」

巧は重力から解放されたメズールの暴走した姿に弾き飛ばされ変身が解除された

「ぐあ…く」

「畜生ー！」

このままじゃ…手を伸ばすことも救うこともできない

「うあああー！」

ウヴァの攻撃を受けて吹き飛ばされた

「オーズ…メダルを頂戴よ…僕らはもつと強化するんだからさ！」

「ぐあ！」

いつの間にか起き上がったカザリの砂嵐を受けてダウンする

「オラオラオラ！」

「ぐっ…がっ…」

ウヴァの攻撃を何発も受ける

「明久！…こいつに変えろ！」

アंकは覚悟したかのようにメダルを投げる

「ぐっ…っおお」

頭から電撃を放ち二人を吹き飛ばす

「ぐっ…」

メダルをキャッチしてすぐに入れ替える

『ライオン！トラ！チーター！』

『ラッタラッタ〜！ラトラータ！』

サークルは黄色になり体も頭と足がライオンとチーターに変わった

ラトラータコンボか…やるしかない！

「ウオオオ！」

頭から光熱の光を出し二人のグリードを攻撃した

「ちっ…」

「逃げるよウヴァ」

効いたようすもなく二人のグリードは逃げていった

「ぐ…」

駄目だ…力が出ないや

『ギイアアア!』

「……!」

暴走したメズールに噛みつかれ動きを封じられた

ほどく力もない…

「明久！」

巧は変身しようとするけど…

「ぐ…」

フラフラの状態だ

「ぐ…うお」

そんな…ラトラーターの力ですら

やっぱり駄目なのか？僕はまた助けられないの？

『ギィアアア！』

「ぐああ！」

ギリギリと噛み砕かれるような音が響く…

「明久ああ！」

く…アंक…巧…みんな…

そんな時アंकが何故か違う方向を見ていた

「え？」

銀色の鎧に黒いスーツ

まさか…仮面ライダー！？

その仮面ライダーはある人に手で合図をし、その人は車を出して帰って行った

何かを閉じセルメダルを取り出しベルトに入れる

キリキリと回した後

『カポン』

そんな音が聞こえた

バースと破壊と悪友と（前書き）

すみません…こっちの都合が悪くコメントが返せなくなりました…
その分早く投稿できるように全力を尽くします！

ちゃんと要望なども考えています！あとオリジナルバカテス問題を
出して欲しい方はじゃんじゃん言ってください！

バースと破壊と悪友と

『果たして彼は適任でしょうかね』

『大丈夫だドクター。俺の弟子だぜ!』

『だから心配なのです』

『あらっ…坂本ちゃんはちゃんと稼いでくれるさ!』

『それは楽しみですね…』

『さあ…初陣だぜ初代バースの弟子さん!』

「何だあいつ」

「ぐあ…」

敵に噛みつかれながらも謎のライダーを見た

キリキリとガシャポンを回すような物を回すと

『カポン』

という音が響く

そして次にベルトのカプセルが開き

『ブレストキャノン』

と響く

謎のライダーには沢山のカプセルがありボディのカプセルから無数の機械が現れキャノンとなり体に装着された

凄い…セルメダルであんなキャノンが…

謎のライダーはさらに二枚のセルメダルを入れて再びギリギリと回す

『セルバースト!』

ギョオオオとキャノンがチャージされ巨大なビーム砲が放たれたああ!?

『ギイアアア!』

「うわあっ！」

暴走したメズールにキャノン砲が直撃して大爆発を起こし僕は衝撃で口から吹き飛んだ

「痛てて…」

ん？あれって

「明久！メダルだ！」

やっぱりか！

「はっ！」

空中で素早くキャッチする

「……」

謎のライダーはそのまま去って行った

けど今は…

「待ってて…僕が今…救うから」

ガチャンとドライバーを横にして新たに緑のメダルに変えた

「明久！お前ボロボロだろ！」

ごめん巧…僕は…

スキャナーを震える手で持ち読み込む

『クワガタ！カマキリ！バッタ！』

サークルは緑色に変わり体に刻まれる

『ガータガタガタキリバッ！ガタキリバッ！』

頭はクワガタ、体はカマキリ、足はバッタのガタキリバに変わった

時間が無い！

50人に分身してスキャナーで再び読み込む

『スキャニングチャージ！』

「すげえ…あれがガタキリバ」

50人一斉に舞い上がり

『『『セイヤアアア』』』

暴走したメズールに向かってキックを放つ

『ギアアア!』

悲鳴…まるで助けを求める声が…

「『ウオオオ！』」

50人の必殺キックを喰らったメズールは大爆発を起こし大量のセルメダルになった

「ぐっ」

僕はなんとか着地をした

「……！！」

アंकは腕を飛ばし散らばったメダルを回収しようとした

その時―パシパシとさっきのグリードが…

「まっこんなもんか」

「うーん…そうだね」

ウヴァとカザリ…

「卑怯者…ぐ」

「オーズ…また会おう…」

「ディアスまた相手になるよ」

ウヴァとカザリは直ぐに姿を消した

「メダル…かなりもっていかれたね」

「ふん…取り返せばいいだけだ」

アंकはメダルを握りさつさと歩いていく

「メズール…今…助けるからね」

僕は変身を解いてさつき体内で取ったメズールのコアを広げた

一枚…けどこれはメズールの

『オーズ…の坊や？』

人エコアだ…

「君も僕と一つになろうメズール…そしたら怖いものなんかないよ」

『……ふふ…相変わらず可愛くて面白い子だわ…わかったわ…よろしくねオースの坊や』

「うん…」

これでいいんだ…メズールを救えたんだ

ポケットからウナギ、タコを出す

そして人工コアのシャチと一緒に体に押し当てた

『ガメル…』

コアメダルは僕の体内に入り込んだ

よろしくねメズール…

一緒に戦おう

巧を担いで僕はアंकに追いついた

「ちょっと待ってよアंक！」

「お前が遅いんだよ」

こいつもあんな風になるのかな……？

『ガシャン』

音がした方を見ると

さっきの仮面ライダーがいた

「
」
「よう」

「誰だお前？」

アंकが怪しげに聞くと謎の仮面ライダーは何かのマニュアルを取り出した

「これだ明久」

「えーと仮面ライダーバース？ってこの声…まさか」

バースはセルメダルを抜きとった瞬間変身が解除された

そして目の前に現れたのは

「雄二iiiiiii!？」

僕の悪友だった

決勝と変身と二人の会話（前書き）

まさかのあの人が登場します

決勝と変身と二人の会話

「痛たた…」

保健室…僕は新ライダーバースに助けられ今に至る

まさか雄二だったとは…

「ほら…動くな。悪化するぞ」

「すみません…」

保健室で傷を手当てしてもらいながら先のことを考える

コンボですらグリードに勝てなくなってきた

もっと鍛えなきゃ

「それにしても…がっちりしているのになんでこんなに傷だらけなわけ？」

包帯を巻いてもらいながら必死に考える

「いやー女子の力が強くてですねー」

先生は笑いながら巧も手当てをする

「そっぴゃ…よく関節を外されてるもんな。よしこれで大丈夫だ！」

「ありがとうございます伊達先生」

「なあに…お安い御用さ。また関節外されたら、手当てしてやる」

「はは…僕が関節外されるの決定なんですな」

巧と一緒に保健室から出て行く

「さてさて…あいつらと坂本ちゃんの相性はどうなることやら…今日はおでんだな」

「「まず…ごめんなさいい」「」

僕と巧は全力で女子に謝った

「悪気はなかったんです!」

「ただ…悲鳴が聞こえて」

ああ…僕はまた関節を外されるのかあ…痛いだろうなあ

「じゃあなんで腕や首に包帯を巻いてるのかな？」

「巧もよ。どうして顔に湿布が貼ってあるのよ」

「それは…」

「廊下で…」

「「転んだんだ！」」

「嘘です！きつと明久君と巧君はいけないうちをしたらんです！」

ここで黙ってた姫路さんが割って入ったああ

「そつなのアキ君…？」

「違う違う違う違う！」

「姫路…その発言はおかしいぞ！」

姫路さんはぶくつと頬を膨らませた

「嘘です…きっと二人はもう取り返しがつかない…」

「ヤーメーター！」

話がややこしくなるからやめてくれえええ

「アキ君…」

「違う違うよなのは！僕は女の子が好きだからね」

「二人共…誤解だから…文乃は拳をひっこめて」

死を覚悟したその時…

「何やってるのみんな？」

メシアが舞い降りた

「泉先生！？」

黒く長い髪が特徴で家庭科担当の泉比奈先生が教室に入ってきた

「先生…なんでここに？」

ちなみに泉比奈はこの学校に二人いる

一人はAクラスの比奈ちゃん

そしてもう一人が泉先生

どちらも綺麗だから人気があるんだよね

あれ？おかしいな。なんで比奈ちゃんの話になると顔が熱く…比奈ちゃんには恋愛感情じゃなかったはず…

「あまりにも吉井君と高町さんが遅いから呼びにきたの」

僕となのはお互いに顔を見合わせ

「「決勝戦!!」」

しまった…忘れてたよ

「早く行こアキ君!」

「うん!」

ダッシュは出せないけどなんとか間に合った

『皆さん拍手で迎えてください!Fクラスの吉井、高町ペアです!』

歓声があがり僕は階段を上がった

相手は…

「明久達…遅かったね」

「アキ君がまた無茶したの…」

あれ？フェイトからもオーラが凄まじい

大丈夫だよね？姫路さんのこと言っているから…

『では…始めてください』

対戦科目は…

日本史！

「「じゃあ始めようか」「

なのはとフェイトから…殺気が

「なはは…あき君も大変やなあ」

フェイトのペアのはやてさんは笑ってはいるが汗がつつたっていた

『サモン！』

明久 日本史 300

なのは 日本史 210

V
S

フェイト 日本史 420

はやて 日本史 203

開始された直後に僕の召喚獣が光だした

『おおーと！なんと言うことでしょう！吉井君の召喚獣が光輝いて
います』

決勝戦と言うことで実況付きだが…

「なんじゃこりゃあああ」

そんなのはどうでも良かった

「アキ君の召喚獣が…オーズになった!？」

「どう言つことや」

「何が何だかわからないけど…」

僕はオーズを動かしフェイトに攻撃をしかけた

「今は勝つことが大事だよね!」

メダジャリバーでフェイトを切り裂いたと思ったけど

「そうだったね…忘れてた」

「な、なのは!？」

バンドをかけられていた

「アキ君…」

「明久…」

二人は再びオーラを放ちこつちを見た

「ひいいい!」

怖い!冗談抜きで怖い

「「OHANASHIしよっか」」

にっこりと微笑んで攻撃を開始した

「危なっ！」

きんきゆいかいひー！

「あつ外した…」

あんなの喰らったらフィードバックレベルじゃない

「デイベイン…バスター」

「わああっ！」

横へそれで急いで回避

死ぬ…本気でヤバいから…

「こうなったら…」

オーズにメダルを取らせてコンボチェンジした

『おおっとー！吉井君の召喚獣がオーズになりそしてメダルチェンジだああ』

『クワガタ！カマキリ！バッタ！』

『危機的状况なので歌省略』

凄っコンボにもなれるのかこれ…

って二人がキタアア！畜生！

「かかだあ

『スキヤニングチャージ』

『ちよっアキ君！？フェイトちゃんやばいよ！』

『／／／』

『フェイトちゃん！？』

『ごめん三人共！』

『50人にオーズが分身して三人にキックだああ』

実況の子は女の子とはおもえないほど興奮している

『セイヤアアア』

「ちよっあき君待ちいな！」

チユードンと爆発し三人は0点になった

「ぐふ…はあはあ」

これはコンボの疲労と同じ…

疲労までついてくるのか…何というか…はあ

『勝者は…仲間を巻き込んだFクラスの吉井明久だああ』

ワアアアと歓声があがる中、僕は気合いで体を動かしたのはを起こしてあげた

良かったの…かな？

ちなみに召喚獣だったので数分したら疲れは消えた

この後表彰式があり

優勝した僕となのはには僕には黒金と白金の腕輪…なのはには紅の腕輪が渡された

そして…如月グランドパークのチケット×4も

誰と行こうかな？

ちなみに根本はヤミーの事件により本当に反省して教頭は殺人容疑で逮捕されたらしい

いやはや…とにかく凄い一日だったなあ

さてと…チケットを霧島さんにあげなきゃ…

そう言えば残念なことがあった…姫路さんにお礼とか言われて手作りケーキを食べさせられたのだ

生死をさ迷う結果となり…姫路さんの好感度は下がりっぱなしだよ…

「バカなお兄ちゃん格好良かったです！」

「おめでとう吉井さん！」

「おめでとついでいます吉井さん」

「ぐふ！ありがとうございます葉月ちゃん…キャラちゃん。エリオ君」

そういえば葉月ちゃんとキャラちゃんのタックルは効いたよ…

場所変わって屋上

『火野先生…』

『やだなあ…映司でいいよ比奈ちゃん』

そう言ってくれるけど呼び捨ては…やっぱり駄目だよな？

『じゃあ映司君』

『うん。何？』

『吉井君は大丈夫かな？』

映司君はいつものように笑った後

『それは俺達じゃわからないよ…けど…同じオーズとして頑張って欲しいかな』

そう言いながら映司君は空を見上げた

私達がどうこう言う必要はない 彼らの物語は彼らが進めるのだから

『そうだ映君 夜のフィナーレが何か知ってる？』

『うーん…わからないなあ』

『ダンス何だって 良かったら踊らない？』

『ダンスかあ…俺下手だけど…いいかな？』

『うん！』

私は映司君の手を引っ張り屋上から出て行く

後藤さん…あなたと同じ名前の人は彼女がいるみたいですよ

里中さんと仲良くしてくださいね

『ほら始まつちやうよ』

『わかったから…ちよつ早い』

後夜祭と告白と明久の答え（前書き）

祭編完結です。

原作と違う所に注目です

後夜祭と告白と明久の答え

僕は教室で後片付けをしていた。売り上げも良く…これなら…机が買えるかな

とにかくあのみかん箱とはおさらばだ

「良かったね姫路さん」

「はい…皆さんのおかげです」

姫路さんはあの後お父さんと会ったらしくFクラスの良さをわかってもらえたようだ

これで姫路さんは転校することがなくなった訳だ

良かった良かった

後夜祭…それは祭りの終わりに開かれるフィナーレのようなものだ

吹奏楽が雰囲気にあった甘い曲を奏でながら

飲み物を飲んだり、巨大な炎の周りでダンスをしている人だっている

「いや〜終わったね」

「ああ…システムデスクを狙ってたんだが…惜しかったな」

雄二は少し残念そうだった

まあ常夏さえいなければ…行けたよね

「でも良かったじゃないか雄二。ほら教室だって改造されたんだから」

いわゆる結果オーライって奴だ

「まあ…そうだな」

雄二はそう言いながらジュースを飲んでいた

「ねえ雄二…雄二は何で仮面ライダーに？」

「ああ…簡単に言えば師匠のかわりにセルメダルをあつめてんだ」

「へえ…」

「あついました」

突然の声に僕は振り向いた

雄二はあんぐりと口を開けている。いかにも馬鹿そうだ

「…雄二…答えを聞きたい」

「雄二君…」

「坂本さん…」

霧島さんに、花檻さんに、マミさんか

「ハーレムだね雄二」

「馬鹿！今そんな場合じゃ…」

雄二は霧島さん達に連れて行かれた

何というか…

周りを見ると曲の雰囲気もあってか次々に告白をしている

「優香…もう一度やり直してくれないか…生まれ変わった俺と」

「はあ…しょうがないわね…」

実に王道らしい告白だね…

「お兄ちゃん…私と付き合ってください」

「ミチル…」

まあ…まだ大丈夫だよね

「比奈先生…俺」

「ごめんなさい…火野先生が待ってるから」

まあ仕方ないよね…ドンマイ

あれ？火野ってどこかで

「明久！ここにい…」

「」「行くわよ」「」

アंकもハーレムだなあ

『諸君！　ここはどこだ！？』

『『最後の審判を下す法廷だ！！』』

『異端者には！？』

『『死の鉄槌を！！』』

あれは駄目だ。完全に駄目

僕は椅子から立ち上がりスタスタと人がいない場所へ行く

『オーズの坊や…どうしたの?』

メズールの声が聞こえた

「ちょっと…判断に戸惑ってて」

『もしかして恋愛かしら?』

流石グリード…

「うん…実は昨日今日と告白されて」

『オーズの坊やはモテるのね…』

あれ?メズールの声が低いような

「それで…判断に戸惑ってるんだ…ふられた人に申し訳ないしね」

『オーズの坊や…それはあなたが決めることよ…その結果に口を出す人なんていないわ』

頑張っ てねと言いながらメズールとの会話はそこで切れた

「アキ君？」

びくっとしながら振り向くと…幼なじみがいた

「やあなのは…」

「アキ君…どうしたのこんな所で」

「あ、い、いやあちょっと…打ち上げ見ようかと…はは」

なのはは納得したような顔しながら近寄ってきた

立つてるのもあれだから僕らは近くのベンチに座った

ちなみにここは体育館裏口だ

「わあっ…綺麗」

空を見上げると季節的には早い花火が上がった

それでも綺麗だ

あっ…いけない…答えを出さなきゃ

しばらくなのはと花火を見つめていた

さてそろそろ答えを出さないかね

「な、なのは…」

「どうしたの…？」

「昨日の答えを…」

なのははさっきと違って変わって真っ赤になった

「う、うん／＼」

頑張れ吉井明久！勇気を出すんだ

「僕は…君のこ」なのはー！」「

フェイトの登場により緊張感が倍増した

「フェイトちゃん…今からアキ君に答えを聞く所だったの」

「そうなの明久？」

「う、うん…フェイトにも言っね」

ヤバイ…さらに緊張感が…

「う、うん／＼」

なのはとフェイトは目を潤ませながらこっちを見つめる

ゴクリと唾を飲み込み…

拳を握る

「えっと…高町さん！テストロッサさん！」

「は、はい！／＼」

じつと二人を見つめ…口を開いた

「僕と…」

ムツツリーニや雄二は今頃ハーレム状態に…

「付き合ってください！けど、愛人としてまどか、ほむら、姫路さんがいます…」が」

必死に考えた結果だ。まどか、ほむら、姫路さんに告白された時成り行きで愛人関係になってしまったんだ

二人は笑いながら納得してくれたけどなのはやフェイトはどうなんだろう…

やっぱり愛人を持ちながら付き合うのはマズいかな？

「わ、私なんかでいいの明久？／＼まどかやほむらや瑞希がいるよ？」

フェイトは真っ赤になりながら上目使いで尋ねてきた

「う、うん…だって…」

少し緊張感を解き、にっこりと微笑んだ

「僕はみんな好きだけど…二人のことが大好きだから…それにフェイトは魅力的だよ…だから惚れたんだ」

フェイトは頭から湯気を出しながら口をパクパクとさせていた

「なのはは…二股になるけど良いかな？」

「はにゃー…／／」

なのはは真っ赤になりながら停止していた

「な、なのは大丈夫!？」

「ふえっ?えっ、あっ…うん／／!よろしくねアキ君!」

なのはガバツと抱きついてきた

「あつ！なのはズルい…私も！」

ちよっフェイトまで…嬉しいけど…

「…FFF団の前田君」

まさか…鉢合わせするとは…

「みんな吉井が高町とテストロッサさんに抱きつかれてるぞ！」

『『『異端者には死だああ』』』

「わあああああ！」

全力で僕、雄二、ムツリ、アंक、巧はFFF団から逃げながら…

祭りの夜の炎は明るく…空には綺麗な花火が上がった

けど…この時の僕はまだ知らなかったんだ…新たなコアメダルが体内にあったのを…

現在オーズの使えるメダルは

タカ

クワガタ

カマキリ

バッタ

ライオン

トラ

チーター

サイ2

プ
テ
ラ

タ
コ
ウ
ナ
ギ
シ
ヤ
チ
ゾ
ウ
2
ゴ
リ
ラ
2

予期せぬ事態と赤いコンボと火野映司（前書き）

新たな展開が始まります。何故火野がいるのかもあかされます！

予期せぬ事態と赤いコンボと火野映司

文月学園二年Fクラスの坂本雄二は今、鴻上ファンデーションの会
長室にいた

「で、話ってなんだ」

「君達に伝えておきたいことがあってね……」

雄二は後ろ髪をかくと首を傾げた

「俺……達？」

その時後ろから一人の男が走ってきた

「すみません……って雄二！？それにあのときの」

彼は雄二と同じクラスの巧だ

「久しぶりだね都築君！いやディアス」

鴻上はいつものようにでかい声で喋る

「で、用件って何だ？」

失礼な態度に秘書の里中はムツとしたが鴻上がそれを静止た

「君達を呼んだのは他でもない。実はDr・真木の研究結果からこんなものがでた」

鴻上はそう言うとモニターを見せる

「坂本君のバース、都築君のディアス、そして吉井君のオーズ」

モニターにはセルメダルのバース、コア、セルのディアス、そしてコアメダルのオーズが映っていた

「ちょっと待て…なんで明久があんなにパラメータが高いんだ」

雄二はオーズのパラメータを指差した

「流石だね坂本君。そう、これは君達の力を現しているんだよ」

「俺と雄二はほぼ同じですね」

「そう！だが、オーズ…吉井君のパラメータは高い。何故だと思っかね？」

「コンボ…か？」

雄二の回答に鴻上は叫んだ

「惜しいよ！答えはこれだ」

鴻上はモニターを変えた。そこには明久が映っていた

「これは…」

「まじかよ…」

「わかったかね。これが答えだ。吉井君の体内には既にコアメダルが9枚ある」

二人は息を飲む

「都築君は前にグリードと戦ってわかっただろう？」

「あ…確かメズールのメダルを」

「そういうことか…つまり明久はグリードと同様にコアメダルを体内に取り込んだ…だからグリードと同様…パラメータが上がってるのか」

「その通り！！彼はグリードとの融合によって既に人間を越えているのだ…素晴らしい！！」

鴻上は叫びながらモニター切る

「しかし残念なことに…それは大変な方向へ進んでいる」

「えっ…どういことですか？」

鴻上は一度間をおき再び口を開いた

「黒いコアメダルの誕生だ…黒いコアメダルは一枚だけでも邪悪な力を備えている」

巧は何かを思い出したように口を開けた

「確か…メズールに黒いコアメダルを…」

「そつだよ都築君！黒いコアメダルは凶暴にさせる力を持っている
！非常に危険な存在だ」

鴻上は続けて話す

「それが今…君達の近くに存在している…やがてそれは吉井君に不幸を招くことになる」

二人は愕然としながら話を理解しようとしていた

「そして…黒いコアメダルの持ち主…それは吉井君のすぐそばにいる！」

「一体誰なんですか？」

「高町なのは君だ…。」

「えっ…！？」

「高町が…」

「君達には吉井君から引き離して欲しいのだよ…災いを防ぐ為にね」

二人は俯きながらも頷いた

しかし彼らは知らなかったのだ…

さらに危険な力が吉井明久に迫っている

紫の覚醒…それはさらなる不幸を招くものとも知らず

火野映司…彼と同じ欲望を持たずに仮面ライダーとして戦う男だ

そんなオーズの世界にいた彼は何故か吉井明久達の世界にいた

理由は…ヤミーと戦っている時だった

『変身!』

『タカ!トラ!バッタ!タットツバ!タトバ!タットツバ!』

いつものように変身をする

『さあて…稼ぎますか』

『カポン』

そして伊達明こと仮面ライダーバースもグリードから街の平和を守る為に戦っていた

『映司！こいつで行け！』

『これは…』

映司はコアメダルを変える

『キアア！』

攻撃してきたイグアナヤミーを吹き飛ばしメダルを詠み込む

『タカ！クジャク！コンドル！』

炎をまといオーズは赤い姿になった

『タ〜ジャ〜ドル〜!』

『ハア!』

タジャドルコンボになった映司はスキヤナーで再び詠み込む

『スキヤニングチャージ!』

『ハアア!セイヤアア!』

空高く舞い上がりプロミネンスドロップを放った

『セルバースト!』

『ハッ!』

バースもバースバスターから必殺技を放ちヤミーを撃破した

『フン…上出来だ』

映司がアंकにメダルを返した時に事件は起きた

『よし！…おでん食べに行こう！』

『またですか伊達さん…』

『誰が行くか馬鹿が』

『俺は行きますよ。比奈ちゃんも行こうよ』

『うん』

『じゃあ…早速出…何だあれ？』

伊達が見た先には大きな渦があった

『何でしょう…ってうわあ!』

映司は巨大な渦に吸い込まれてしまった

『映司君! きゃああ』

『比奈ちゃん! うわああ』

『伊達さあーん! うわ!』

『映司ー!ー!ぐああ!』

4人はあっという間に巨大な渦に飲み込まれてしまった

そしてたどり着いたのは…

バカテスの世界だった

不安と行方と両手に花（前書き）

カウンスメダル！

現在映オーズの使えるメダルは…

映司

タカ
1

プテラ
2
トリケラ
1
ティラノ
2

明久

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
サイ
2

プ
テ
ラ

タ
コ

ウ
ナ
ギ

シ
ヤ
チ

ゾ
ウ
2

ゴ
リ
ラ
2

不安と行方と両手に花

「早くアंक達を探さなきゃ」

火野映司はバカテスの世界に飛ばされ鉄人と出会ったはずみで教師となり今は比奈、伊達と一緒にマンションに住んでいる

火野は世界史、比奈は家庭科、伊達は保健体育だ

「この世界にもヤミーやグリードがいる…けど今の俺じゃあ」

アंकとアंकに取り付かれた比奈の兄泉慎吾と後藤慎太郎はこの世界にいと確信しながら火野は手の平を広げた

そこにはタカが一枚だけだった

戦いたくてもこれでは変身ができない

「この世界のオーズに任せるしかないか」

火野はそう呟きながらベランダから出て行った

「どうしよう…」

アंकを見ながら僕、吉井明久は呟いた

アंकに取り付かれた青年を僕はずっと助けられないかと考えていた

だが、今の僕じゃ…全く解決策が見つからない…

「焦っちゃ駄目だ…冷静にならなきゃ」

でも…アंकはどくなるんだろう…そんなことを考え僕は明日の準備をしていた

「明日は二人と如月グランドパークに行くんだよね」

傍らでアंकはメダルをケースに入れていた

「明久…」

「何かな？」

「メダルの匂いがする…しかもお前の身近にいる奴からだ」

「それってまさか!？」

「いや…ヤミーじゃなくグリードの気配がする」

まさか…僕の他に体内にコアメダルを？

いや…深く考えすぎかな

「そんなわけないじゃないか」

笑いながら焦りをごまかした

最近…グリードが強くなっている…コンボでも太刀打ちができるのが不安だよ

それにしても…あの時、メズールに入れたコアメダルは一体…

「とにかく…勝てば問題ないでしょ。僕は寝るよ」

「ああ……」

不安と心配を振り払いながら僕は自室へ歩いて行った

「雄二……本当にやるのか？」

「ああ……仕方ないが……他に方法が見つからない」

「明久との衝突は覚悟した方がいいな」

「ああ……」

「うわあ…凄いね」

翌日…僕はなのはに起こしてもらった後、フェイトと合流して如月グランドパークに訪れた

「とりあえず腕組もうよアキ君！フェイトちゃん」

「そうだね。いいよね明久？」

二人は満面の笑みで見上げる

「う、うん。まあデートらしくなるからいいんじゃないかな？／＼」

「じゃあお言葉に甘えて！」

「私も」

二人はそう言つとピッタリとくつついた

ちよつと恥ずかしいけど…これがカップルなのかな？

やれやれ…僕は幸せ者だよ

「如月グランドパークへようこそ!」

僕らを待っていたのは…

「秀吉?それとまどか何やってるの?」

「私達はここのスタッフです」

「……そう言えば鳴子^{なるこ} 叶絵^{かなえ}さんが…他の男と」

「なんじゃと!?!」

本性を表した秀吉。ちなみに叶絵さんはCクラスの代表であり文乃の親友だ

秀吉は叶絵さんが好きなんだよね

「ボロが出たね秀吉。」

しばしの沈黙が流れた後

「（ウエディングシフトで確実に仕留めるのじゃ）」

通信機を取り出し怪しい会話をしていた

「で、まどかは何やってるの？」

「私はこのス「まどか…来週の日曜日あいてる?」「うん!」

再び沈黙が流れた

『フェイトちゃん…』

『何なのは？』

『やっぱりまどかちゃん達も…』

『私もそう思った…明久に相談してみよっか』

『うん』

二人は後ろを向いて何かを相談していた

何だろう？

「明君！私日曜日あいてるよ！」

「良かったあ…ちょっと付き合っで欲しいんだ」

「うん！了解だよ！」

まどかは愛人だから別に大丈夫だよ

…こんな可愛い顔されたら…愛人にしたくなってきたよ

けど…最大二人くらいまでしか許されないと思うし

「諦める明久…」

後ろから足音が聞こえた後、

「俺達は無力だ」

悪友…雄二が出現した

「雄二…」

「…雄二…私楽しみにしてる」

「何を言っているんですか霧島さん。私が先です」

「いえ、ここはみんなで」

君はなんて幸せ者なんだ

「霧島さんに花檻さん！」

「あっ！マミさん！」

(巴マミはまどか達と同じ年に設定してます)

女子達がわいわいと会話する中、僕と雄二は話し合っていた

「どうする雄二」

「逃げるぞ。このままじゃ俺達の人生はゴールインだ」

「確かに…けど逃げられそうにないよ」

「仕方ねえ…あいつら誘っていくか」

雄二はそう言ってから女子達に近づいた

「みんな、今から自由行動だ。」

「「え…？」」

雄二は表情を崩さず

「みんな、俺と明久はヤミーに狙われている。みんなを巻き込む訳にはいかない…」

そして頭を下げる雄二

「お願いだ。俺や明久はみんなが傷つくのはみたくない…だからみんなは自由に遊んでくれ」

「そこまで言われたら…」

「うん…」

「わかったよ坂本君」

「ありがとう」

流石雄二…みんなの機嫌を損なわずに見事に退いた

「じゃあ僕と雄二が変わりに払うから他のみんなも呼ぶといいよ」

「ありがとうアキ君！」

ふう…助かったあ…

「明久…懐は大丈夫か？」

「うん！今日で尽きるよ！」

ピースサインしたら雄二にへし折られたああ

「ぐぎゃああ」

「アホが。夕食どうすんだ」

「あ……」

「たくっ！」

うつ……今日は久しぶりに水と塩で決定だよ

「（全く……だが、これで明久とサシで話せるな）」

「あれ？二人共どうしたの」

まどかと巴さんが残っていた

「嘘…ですよね坂本君？」

「な、何故気づいた」

流石は巴さん…簡単に雄二の嘘を見破った

「はあ…しゃあねえ…マミ、とりあえず一緒に来るか？」

「はい」

「そうだね。僕だって雄二と一緒になんて嫌だし…という訳でまどかも行こうよ」

「わ、私も！？でも私…」

まどかは俯きながら考えている

やっぱり愛人じゃ可哀想だなあ…

「大丈夫だよまどか！行こ？」

「うん！ありがとう明君！」

まどかはにっこりと微笑んだ

やっぱり可愛い／＼

何はともあれ…今日は満喫するぞ！

お化け屋敷と幼なじみと新たな欲望

「とりあえずここから行くか」

「お化け屋敷…ですか？」

「怖いのか？ マミ」

「そんな訳ありません…」

「はあ仕方ねえな。ほら」

「ありがとうございます／＼」

やばっ 砂糖が…

僕らはまずお化け屋敷に訪れていた。

あんな甘い雰囲気見せられるとこっちが恥ずかしいよ

周りに人が沢山いるんだから…

「じゃっ先入るな」

「うん。行つてらっしゃい！」

雄二とマミさんは腕を組んでスタスタと行ってしまった

「あれ？所でなんで三人がいるの？」

「「「ギクッ！」「」「」

三人とは姫路さん、秀吉、美波だ

着ぐるみしてるけどバレバレだよ

「あなたは誰？」

フィーの着ぐるみをかぶった姫路さんが僕に尋ねてくる

やれやれ…

「バイトやってるの姫路さん？」

「いいえ…違いますよ？」

そう言ってフィーは殺人オーラを放つ

何だろ…助からない気がする

「ともかくお二人方も入ってください」

青い着ぐるみをかぶった秀吉が促す

「それもそうだね…行こうかまどか？」

あれ？姿が見えない

「…私はいいよ…明君だけで行つてきてよ」

まどかは僕の後ろに隠れながら怯えている

まさか怖いのかな？

「ははっ大丈夫だよまどか。何か出ても僕が守るし、お化け屋敷はカップルの醍醐味と言つしね」

どうせ作り物だ。早く歩いてしまえば問題ないだろう

「…明君が言うなら」

まどかはひょこつと出てきて苦笑している

やっぱり怖いよね…

「ほら腕出して。組んでいけば離れないから」

「えっ…う、うん／＼」

スッと腕を回しまどかはガツチリと組んでいる

これなら大丈夫だね

「じゃあ行こうか」

「うん！」

「お気をつけて」

秀吉の言葉に送り出されて中へ入って行った

『（アキは気づいてないわね…まどかはお化け屋敷が怖いんじゃないかな
くて姫路が怖かったのよ）』

「へえ…校舎をモデルにしてるのかあ」

「雰囲気あつていいね！」

あれ？まどかが妙に元気だ…怖かったんじゃないのかな？

「それにしても明君の腕つてたくましいね♪」

まどかはにっこりと笑った

「そ、そうかな…」

毎日無理な筋トレをしてるからかな？

まるで夜中の校舎を歩いているような感覚だなあ

まどかは苦笑はしてるけど震えてないから安心だ

しばらく歩いているといきなりバットを持った人が現れた

「死ねえ！」

大丈夫。あんなこと言うけど…ただ脅してるだけだから

「死ねええ吉井いい」

あれええっ！？振り下ろしてきたんだけど！

「明君危ない！」

まどかの叫び声で僕はすんでのところで避けて気絶させた

「ごめんね…鈴木君」

倒れたクラスメイトはブクブクと泡を吹いていた

「ぎゃあああああ」

「うわあ（ひゃあ）！」「」

突然の叫び声に僕は飛び上がった

何？今の叫び声…まさか雄二…

「あはは…迫力あるね」

「いろんな意味で怖いよ…」

しばらく歩いていると腕に力が入っていたことに気づいた

「どうしたの？」

それは幼なじみのものだった

「明君…私ね…何の取り得もなくて…戦うことしかできなかったけど…明君の支えになれて」

まどかは悲しそうな顔で続ける

「本当に嬉しかったんだあ。こんな私でも誰かを助けられるから」

胸がチクリと痛んだ…

僕はもしかしたらあの清涼祭の日に何かを…失ったのかもしれない

僕はまどかを受け入れなかったんだ…

でも本当は…

お化け屋敷を無事出れたけど雄二が震えていた

何を見たんだろう？

「死ぬかと思った…」

「大丈夫？雄二さん」

そしてマミさんと進展したようだ…

「いかがだったでしょうか？」

「うん。まあまあだね」

「途中怖かった部分もあったがな」

それは雄二だけだよ

あれ？雄二の方から悲鳴が聞こえる…

苦笑しながら見てると緑色の虫が飛び跳ねてきた

「これは…バツタ缶だ！」

『おい明久！』

バツタ缶からあいつの声がする

「アंक！？」

『ヤミーだ！観覧車の近くにいる！』

「わかった…」

まさか…こんな時にまでヤミーが…

「明君？戦いに行くの？」

まどかが心配そうな顔で覗き込んでいた

またチクリと胸が痛む

「大丈夫だよ。すぐ帰るから」

まどかは我慢するように頷く

僕は帰る証としてまどかに鞆を渡して観覧車に向かった

アंकと合流した僕は観覧車へ向かった

『…破壊だ!』

「あれだね…カブトムシかな？」

カブトヤミーは観覧車を破壊しようとしていた

「やばっ！やめろおお！」

カブトヤミーに飛びかかるがすぐに投げ飛ばされた

「うわあ！」

そのまま地面にぶつかる

「痛たた…」

『何やってんだ！さっさと変身しろ』

言われなくたってわかってるさ！

「ぐっ…」

体内からゴリラのメダルを取り出す

アंकは黙りながらそれを見ていた

「誰の欲望かわからないけど…」

ドライバーをつけメダルをセットする

「とにかく倒さないとね！変身！…」

『タカ！ゴリラ！バッタ！』

「はああ！」

いつもとは違い今回は体がゴリラだ

『オーズ…破壊だ!』

「おりゃあ!」

カプトヤミーが殴る前に先手を打つ

「オラアア!」

ガントレットで顔面や体を殴りつける

「だっらしゃああ!」

ガントレットを叩きながら相手を殴りつける

『ぐ…オーズ…』

「僕は早く戻らなきゃいけないんだ!」

だから早く倒さなきゃ

「でえやあ！」

『ぐ…』

よしあと少しだ！

『明君…』

突然脳裏に浮かんだ幼なじみの顔…

魔法少女として戦った幼なじみ

僕のことを一番心配してくれた幼なじみ

「まど…か」

「何やってんだ明久！」

「へ？ぐふ！」

カブトヤミーのパンチが腹に響く

「ぐ…げほ」

『壊す！めっちゃくちゃに！』

「がつ！」

後ろから切り裂かれて火花が飛び散る

「く…そんな」

ヤミーが増えた

「こいつら何だ？いきなりもう一体から生まれるとわな」

アंकは高い所に非難しながら疑問を抱いた

『破壊だ！』

『壊す！めちやくちやに！』

「ぐっ…」

突如現れたクワガタヤミーにより立場が変わった

「はああ！」

ガントレットでクワガタを殴る

『アア！』

「ぐあ！」

後ろからカブトヤミーに殴られダウンした

『『アアア！』』

2体のヤミーの電撃を喰らい僕は吹き飛ばされた

「うわあ！」

ガシャンと係員がいる窓口に激突した

『きゃああ』

女性係員はすぐに逃げ出す

「く…コンボで行くしか…うぐ」

立ち上がる前にガクンとダウンする

くっ…早く帰ると言ったのに…

「まどか」

「チッ！奴らに対抗できるメダルは…ん？」

「え…？」

ヤミー達も僕らが見た方向を向く

そこには

「よう明久…もつくたばったのか？」

悪友がいた

喧嘩とウナギとブレストキャノン

「よう明久…随分といい格好じゃねえか」

目の前に現れた悪友に驚きながらも言葉を返す

「この状態のどこがいいのさ」

ゆっくりと体を起こしながら睨みつける

「お前がボコられている所だ」

雄二はドライバーを腰につけるとセルメダルを取り出した

「お前は足手まといになるからすっこんでろ」

「冗談…誰が足手まといだって?」

僕がにっと笑いガントレットを構えると雄二はふっと笑った

ピンと指で弾き片手でキャッチする

「変身」

セルメダルを入れてキリキリと回す

『カポン』

変な音と共に雄二に装甲が装着された

銀色と緑色が特徴の仮面ライダーバースへと変身したのだ

「さあて…稼ぐか」

手をパンパンと叩き、僕は構えてた

『仮面ライダー…破壊だ!』

『壊す!めちゃくちゃに』

「行くよ雄二」

「馬鹿が。それはこっちのセリフだ」

足を踏み込み走り出す

「うおおおお!」

「くたばれえええ！」

僕は雄二の顔面に向けて、雄二は僕の腹に向けて殴る

「ぐはっ！」

「卑怯だぞ雄二！」

「それはこっちのセリフじゃボケ！」

なんて奴だ！戦いの邪魔をするなんて

『……』

「今度こそ！」

「行くぞ！」

再び敵に向かって走り出す

「しねえええ！」

再びお互いの拳がぶつかり合った

「いつてええ！」

おのれ…雄二、また不意打ちとは卑怯な

「あいつら何やってんだ」

「おらあああ！」

「くらつか！逆にしねえええ！」

繰り出されたパンチをよけガントレットで殴る

「ぐは！…やっぱりコアとセルじゃ力の差があるか」

「とどめだああ」

バースに向かってガントレットを殴りつける

『キャタピラレッグ』

「俺にはこいつらがあるんだ！はっ！」

「何！うわああ」

突如現れた巨大な足に蹴り飛ばされた

「痛てて…」

なるほど…姿を変えるオーズに対してバースは武装か

『いい加減にしろおお！』

『壊す！めちゃくちゃにいい』

「「うるせえええ！」「」

カブト、クワガタに僕は殴り、雄二は蹴り飛ばした

『…理不尽だああ』

『壊すめちゃくちゃにいい』

まあ敵からしてみればライダーと戦うのは当然だし、それをウルサ
いは確かに理不尽だね

「たくっ…邪魔しやがって」

「本当だよ。もう少しで倒せたのに」

僕はゴリラを体内に戻し腰からトラを取り出した

『タカ！トラ！バッタ！』

『タットツバ！タトバ！タットツバ！』

「さて、明久勝負しないか？」

「勝負？」

「ああ…俺はクワガタ、お前はカブトムシ。先に倒せるか勝負だ」

へえつまり喧嘩を売ってるんだよね

「いいよ。僕が先に倒したらマミさんにキスしてもらってからね」

「ほお、なら俺が勝ったら鹿目にキスしたあげく恋人にしろ」

なっ
…

「二つは無理だよね!？」

「馬鹿が。誰が一つだけと言った。先に口走ったお前のミスだろうが」

「畜生!それに恋人なら既に…」

「お前:まさか最低二人だけだと思ってんのか？」

「え?違つの?」

「やっぱり馬鹿だな」

「何だとおお！」

『壊すめちゃくちゃにいい』

「話の邪魔をするな！」

顔を二人で殴り飛ばした

全く人の会話を邪魔するとは

「明久…お前が気づいてるかは知らないが鹿目…本当は我慢してんだぞ？」

「え…？」

「マミから聞いたんだ。まああいつは優しいからな…」

また胸がチクリとした…僕の答えは…

「さてとじゃあ勝負開始だ」

我に帰り僕は改めて敵を見る

「それじゃあ始めようか雄二」

ダンッと地面を蹴り敵に向かって走る

「アंक！チーターを」

アंकは無言でチーターを投げた

トラとバッタを入れ替えてスキャナーで読み込む

『タカ！ウナギ！チーター！』

体は青い鞭を持った姿になり足は黄色いチーターだ

高速で走り、相手の背後に回る

「おりゃああ！」

バチンバチンバチンバチンバチンバチン！と2体のヤミィを電撃鞭で叩く

『カポン』

『ブレストキャノン』

「ハッ！ハッ！」

『ぐわああ』

『壊す…めちゃくちやに』

おかしい…雄二がいない

「雄二何やってるんだ…」

僕は気になって雄二の方を見た

『セルバースト』

溢れるぐらいまでセルメダルを入れるバース

隣に置いてあるミルク缶にセルメダルを入れていくゴリラのカンド
ロイド

『セルバースト』

「まだまだあ！」

あいつ何やろうとしてるんだろう

「明久！そいつらを捕まえとけ！」

どでかい声が響き思わず僕は鞭で奴らを縛り付けた

『…ぐ…』

『壊す…めっちゃくちゃに』

「雄…これでいい…の？」

『セルバースト!』

「OKだ!じゃあくたばれ明久あああああ」

戦艦よりもどでかいビームが僕とヤミー達を包み込んだ

「雄二ii」

ビームはヤミーも僕も大爆発させた

衝突と決断と新たなグリード

「雄二いいい貴様ああ!」

ブレストキャノンの最大出力を受けた僕は真っ黒になりながら変身を解いた

「何だ…生きてたのか?」

バースも同様に変身を解き雄二に戻る

「貴様!僕を殺す気だったな!」

指を指しながら訴えるが簡単に無視される

「お前が逃げないからだろ?」

こいつ…反省すらないのか

「全く…セルメダル回収しなきゃ」

僕はふらふらと爆破された所へ歩く

「あ、あれ？セルメダルは？まさか消えた！」

「な訳あるか」

バチンとアंकのチョップが炸裂した

「痛！じゃあ何でないんだよ」

「俺が回収したからだ」

雄二がミルク缶を背負いながらジャラジャラ音を立てる

「あーそつえば」

雄二の奴セルメダル全部貰うっていったよね

「なーんだ。そういうことなら仕方ないね」

「ああ…そういうことだ」

「あはははは…痛！」

再びアークのチョップが炸裂

何なんだよ！

「坂本…セルメダルを渡せ」

「無理だな。こっちはいろいろと交渉してもらってんだ」

睨み合う二人を無視しながら僕はこれからのことを考えていた

「まどかにキス…まどかにキス」

顔からは湯気が昇る

「明久…罰ゲームだ。わかってるな」

「言われなくてもわかってるよ」

雄二を睨み付け僕はまどかの所へ戻り始めた

「はあ どうしよう…」

僕はいいのだがまどかはどう思うんだろう…やっぱり嫌がるかな？

考えながら歩いていると人とぶつかった

「あつごめんなさい！」

「……ああ？」

髪がアंकのように金髪で赤と黒い服を着た人はこっちを睨み付けながら見ている

感じが悪い奴だ

こういう奴は無視するのが一番だ

「早く行かないとまどかに悪いな」

小走りでその場から逃げる

チラッと見るとそいつはまだこっちを見ていた

『…なんだ？あいつからコアメダルの…つけてみるか』

『キーン！』

『あいつを追え』

『キーン！』

「ごめんまどか！」

「明君！？」

まどかは僕に気づくところへ歩いてきた

「時間かけちゃってごめんね」

「ううん。いいよ」

再びまどかと歩き出す。一目につかない所がいいかな…

「まどか…観覧車に乗らない？」

「え？観覧車に？」

「うん…実は話があるんだ…」

まどかは驚いたような顔だったけどすぐに頷いてくれた

「じゃあ行こうか」

「うん！」

「絶景だよ明君！」

「はは…そうだね」

さてどうしたものか…いきなりは悪いし…

「まどか…」

「何明君？」

にこやかにこっちを振り向くまどかはいかにも楽しんでいる顔をしている

「あ、あのさ観覧車でカップルがよくやること知ってる？」

「へ！？／／」

しまった！いきなりカップルはまずかったかな

「えっと…ハグかな？」

こんなことでも一生懸命考えてくれるまどかは本当に優しいなあ

「うん」

やっぱり嘘はつけないよね

「互いの唇にキスするんだよ／＼」

よし言った！頑張った僕！

「ええ！？／＼そ、そうなの」

「うん…だから…」

ええい！こうなりややけくそじゃああ

「明君？えっと…／＼だ、駄目だよ…なのはちゃん達に悪いから」

「わかってる…けどまどかは本当にあれで良かったと思ってるの？」

聞きたい…まどかの本当の気持ちを…

ゴウンゴウンゆっくりと観覧車は動く中、まどかは何かを耐えるように俯いている

「う、うん。私は大丈夫だよ。明君の隣にいるのは私じゃないから」

僕はまどかから離れポスツとソファーに座った

「…私は支えになればいいから…勿論明君のことは大好きだよ…幼なじみじゃなくて一人の異性として」

僕は黙りながらまどかをじっと見つめた

内心イライラしているのが伝わってくる

まどかを受け入れなかった自分と抗わないまどかに

「まどか…今の僕の気持ちを伝えておくよ」

拳を握りしめながらまどかの目をじっと見る

まどかは少し目を潤ませながら僕を見ていた

「まどか…僕は」

続けて話そうとした時ガクンと観覧車が揺れた

「きゃああ」

「うわっ！何！？」

ガタガタと観覧車は揺れ必死にしがみついていた

「くっ…何が起きてるんだ？」

「明君！！」

「え？うわああ」

まどかがいきなり叫けぶと同時に僕は空中に放り出されていた

いや…

『ガギイイ』

ヤミーに放り出されたがふさわしいだろう

「なっ…ぐぶ」

驚いている暇もなく殴られる。必死に観覧車を無我夢中で掴む

何でまたヤミーが…

「しゃああ!」

ヤミーを蹴ったが逆に足がしびれた

「つぎゃあああ!痛い」

何だこいつ!凄く固い

『オーズ!』

ヤミーは姿から見てサソリだ

サソリヤミーは手についている針を突き立てようとしてきた

「うわ!」

何とか避けヤミーを力の限り蹴り飛ばした

『ぐっ……』

顔面を蹴られたヤミーはそのまま落ちていった

「ふっ……うわあ!」

安心できる状態じゃなかった…

風に飛ばされ観覧車を掴んでいた手がすべる

「うわあああああ！」

「明君ー！」

まどかの叫び声が聞こえるがかなり離れている

「やばい…このままだと確実に死ぬよ！」

ドライバーを急いで腰に巻きメダルを入れる

「へ、変身！」

スキャナーを急いで取り出しすぐに変身

『タカ！トラ！バッタ！』

『タットツバ！タトバ！タットツバ！』

「わあああああ」

変身した直後地面に衝突した

「痛てて…危なかったあ…うわあ！」

起き上がった瞬間に強烈なパンチが当たった

「ぐっ…」

『きゃ あああ!』

係員さんは逃げ出したのを合図に周りの人達も逃げ出す

「ハッ!」

敵を見ながら構える…体が固そうな鎧に覆われ両手と尻尾にはでかい針…

こんな奴見たことがない

『貴様がオーズか…なる程…確かにコアメダルを取り込んでいるようだ』

地中から声が聞こえた

「へ？誰？」

『少し遊んでやるつか』

声が観覧車のエリアに響いた後、

地面がゴロゴロという音と共に割れ

『ふん！-！』

「はいい！？」

地面から新たなヤミーが現れた

「いや…違うあのベルト…」

まさかグリード？

『俺の名はスル…甲殻類のグリードだ』

「スル？」

頭は骸骨のような顔にサソリの兜があり、体はカニのようにでかいハサミがついている…足は何もない黒色だ

「こんなグリード…いなかったよね」

『ああ…貴様は知らない…アंकもな』

こいつアंकのことを…

『オーズ…お前の力…見せて貰おうか』

スルはグツと構え僕はトラクローを展開させた

『スル様…私は』

『お前は奴を殺せ』

『御意!』

「あっ! 待て!」

ヤミーは地中に潜り消えてしまった

『貴様は俺の相手をしろ』

「!?!ぐああ」

早い!?

『ふん!』

「ぐはあ!」

スルは素早く蹴りとハサミで殴りつけた

「うぐ……」

一発一発が重い…

『どうした？もっと楽しませろよ』

コイツ…

「しゃああ！」

バッタの力を使いジャンプし素早く蹴りを叩き込んだ

『ぐは…』

ポロポロとセルメダルが落ちる

「なんだ…案外弱…ぐはああ」

ズガンと建物にぶつかった

『さてと…そろそろ本気でやるか』

ハサミが消えて剣が現れる

「ぐ…」

僕はメダジャリバーを取り出し構えた

「うおお！」

ブオンと剣を叩きつけるが

『何だ？本気か？』

腕で掴まれ逆に剣で切り裂かれた

「ぐあああ！」

痛い…体が痺れる

『俺の剣は毒があるのさ』

「このお！」

ベルトからメダルを取り出す

『オーズの坊や…あれは危ないわ』

（メズール…？）

『私達も知らないグリッド…そしてあの毒…確実次受けたらまずいわ…あれはコアメダルの力を吸い取っているのよ』

（そんな！？コアメダルの力を吸い取る？ならどうやって戦えば）

『オーズの坊や…逃げなさい…あなたとは相性が悪いわ』

（けど…あの観覧車にはまどかが）

ふらふらな体を無理やり起こして体内からコアメダルを取り出す

『ほお…』

『サイー！ゴリラー！ゾウー！』

『サコーゾ…サコーゾォー！』

力を吸い取るなら吸い取れない程の力を出せばいいはずだ！

「ウオオオ！オオ」

胸を叩きドラミングをする

『何！？ぐお』

どうやら奴にはこのコンボは有効だ！

「いくぞおお！」

ガンと拳を叩きスルを殴る

『ぐああー！』

「オラア！」

次は左だ！

『ちっ！』

剣を取り出しガードするが怪力の前には…かなわない！

「セイヤア！」

『ぐあああ！』

「ハア！」

蹴り飛ばし殴る

『グウウ』

「オアアア！」

力の限り叩きつける

『ぐあ』

体にヒビが入った

何だこのパワー……ウヴァやカザリと戦った時はこんな力

『馬鹿な……』

そうか！コアメダルを体内に吸収して強くなったんだ

「ハアアア！」

『グアアア!』

渾身の一撃をお見舞いしスルからメダルが飛び散った

『馬鹿な… オーズはこんなに強かったのか…』

スルは体を押さえながら地中へ消えて行った

「待てスル!」

『借りは返すぞオーズ…』

そんな言葉と共に奴は消えて行った

「くっ…っあ
「

コンボの限界がきて、その場で跪いた

危なかった…もしまだ戦ってたら

「とりあえず…収穫があっ…たし…」

僕は三枚の黒いコアメダルを拾った

「はあ…はあ 観覧車をまた動かさないと」

ふらふらと係員がいた場所へ行き止まっていた観覧車を動かした

「これ…で安心だ」

やばい…疲労感が

「…」

僕はその場で意識がなくなった

明久と無欲と繋がれない心（前書き）

明久の秘密が一部わかります

明久と無欲と繋がれない心

『…予期せぬ事態だ…』

まさかあのコアメダルを手に入れてしまうとはね…

『だが…彼なら大丈夫だろう』

全く持って素晴らしいよ！黒い力の誕生だ！

『だが、そうなればなおさら高町という子を野放しにはできない』

「…明…ん」

う…僕は何をやってたんだっけ？

「明君！」

「はっ！！」

僕はまどかの声で目を覚ました

そうだ…確かグリードと戦って…

「大丈夫明君？」

「うん…平気だよ」

ムクリと立ち上がって砂をはらう

「全く…いきなり襲うなんて酷いよね」

苦笑しまどかを見るが目は笑っていなかった

「そうだね…体大丈夫なの？」

「ん？まあ慣れてるからね」

笑いながらベンチに座る

グランドパークはさっきのようにまた賑やかになっていた

観覧車も大丈夫みたいだ

「そうだ！明君何か欲しい物ある？私が奢るよ？」

欲しい物が…うーん

「別に…カロリーは足りてるから…これとってないかな」

それよりもヤミーを探さなきゃ

「そう…なんだ」

まどかは苦笑すると隣に座った

「明君 さっきの話って何だったの？」

まどかが言ってるのはきつと観覧車の時の話だろう

僕は何を考えていたのだろう

「まどか…僕…なのは達と恋人関係になったよね？」

「うん…」

「けどね…そう思えないんだ」

「え?…」

わかってるんだ…この先僕に何が起こるのか

「そんな…あの二人は明君を」

「わかってる…わかってるよまどか でも僕は」

まどか side

明君…いきなり何を言い出すの？

二人は明君に認めてもらえて嬉しかったんだよ？

私だって本当は…けど明君には二人がふさわしいから

なのに明君は…それすらも遠ざけるの？

「明君…やめてよ」

「え？」

「私だって明君が本当に好きだよ」

「まどか？」

「明君は何で逃げるの？」

あの告白は形だけ？

「違うよまどか 僕は二人が大好きだよ…けど」

「けどじゃないよ！それって二人を不安にさせない為じゃないの？」

明君は私から少し離れるけど私は逆に詰め寄った

「本当は…」

明君は目を反らしながら続ける

「本当は…君が」

明君は途端に喋らなくなり大勢の人がいる中へ走っていった

「明君…」

何で…いつも距離を置いてるの？

どうして…あの時黙ったの？

「ねえ…答えてよ明君」

私はいない彼に一人尋ねた

雄二 side

「面倒なことになったな…」

「そうですね…」

俺とマミは遠くからあいつらの様子を見ていた

明久の奴…いつもゲームに誘っても断るのも俺らから距離を置いてるからか？

「歯がゆいな…」

結局罰ゲームは実行せず逃げたか

あいつからキスなんてみたことがないしな

それにあいつはそういうことすらしない

「無欲か…」

あいつにあるもの…欲望ではない人を救いたいという心

自分を犠牲にしても助け出す

「彼は…吉井君は執着心が無いですね」

「まあな…カロリーばかり求めてるがな」

なんでカロリーだけは大事なんだよ

ポケットが光っている

「電話か…マミ少し外れるから鹿目を頼んだ」

「わかりました」

俺はイラッとしながらも電話に出た

「よう明久…金が無くなったか？」

『それはどうにでもなるとして…雄二新たなグリードが出たんだ！』

「何？」

『名前はスルって言って甲殻類のグリードなんだ…しかもそいつから黒いコアメダルが出てきて』

黒いコアメダル…

潮時か

「明久…グランドパークの外で待ってる」

『え？わかったよ』

静かに会話を切りすぐに電話をかけた

「巧か？グランドパークに来てくれ」

俺は外へ向かって走っていた

これが鴻上の言っていたことが…

だが、高町は…

『よう…お前…コアメダルを狙ってるんだってな？』

いきなり声が聞こえ振り向くと赤のジーンズに白と黒の服を着た金髪野郎がいた

「なんだあんだ？」

男はニヤリと笑う

『俺が手伝つてやる』

喧嘩と合体ヤミーと大ピンチ

「雄二達遅いなあ……」

雄二に呼び出されグランドパークの外で待っているけど……

来ない……こっちは急いでるのに

「あつ……明久！」

こっちに向かってきたのは雄二ではなくて

「巧？」

親友だった

「ストレイキャッツは？」

「ああ…大丈夫。みんな手伝ってくれてるから」

ストレイキャッツは巧の家でもあり大事な職場だ

巧はストレイキャッツの仕事を手伝っている…いや、ほとんど仕切っていると言っても過言じゃないだろう

「おお来たか巧。」

「「雄二！」」

悪友は笑いながら歩いてくる

「雄二…遅いよ！ヤミーが動いているんだよ？」

一刻も早くと言おうとした所で雄二が割り込んだ

「巧…聞いている通りヤミーが中にいる。すまないが変わりに戦って

くれないか？」

巧は何かを感じとったように頷きグランドパークへ入って行った

「よし！僕らも行こう」

走ろうとした瞬間、雄二に掴まれた

何をするんだ雄二？

「お前には話がある」

「そんな暇はないよ！後で聞くから」ほお…人を心から信用しないお前がかな？」

雄二は見下したように見ながら僕の腕を突き放す

「…。どういう意味だ雄二」

僕が人を信用してない？

「お前だって気づいているはずだ」

ベルトを腰にまく雄二

何をする気だ…

「明久…高町と別れろ」

雄二の一言に僕は体から痺れを感じた

「何を言ってるんだ雄二…何で」

「いいか明久…高町の体内には、コアメダルがある」

そんな!?

アंकが言ってたのは…

「しかも黒いコアメダルだ…」

雄二はこっちを見ながら続けて話す

「理由はわからないが彼女をオーズであるお前と一緒にする訳には行かない」

「どついつ…」

「お前が知る必要はない。それにな明久…お前だって本気で付き合
ってんじゃないんだろ？」

体から力が抜ける…

こいつ何を知ってるんだ

「冗談じゃないよ雄二…僕はなのはが好きだ…彼女に側に居てほし
いんだ」

「それは本当か？」

「……」

「じゃあ何で鹿目は側に置かない」

雄二の一言一言はずしりと重く感じた

「お前…鹿目好きなんだろ？」

「……………」

「答えないか…まあいい。だがこれだけははっきりしろ 高町と別れる気はあるか？」

理由もろくにわからないし…彼女と別れるだって？意味がわからないよ

なのは大事な人だ…

答えは決まっている

「何がなんだかわからないけどー」

雄二の目を見ながら答える

「無理だよ」

「そうか」

雄二はゆっくりとセルメダルを取り出した

「なら…お前の体内にあるメダルごと奪う」

こいつ…僕が体内にコアメダルを宿していることを…

「悪く思つな明久…」

ピンとセルメダルを弾きセルメダルはそのまま入れる場所へ入る

「変身」

キリキリと回し

『カポン』

と音が響くと同時に雄二は装甲に包まれバースになった

「お前をオースにさえ変身させなければ問題ねえ」

ゆっくり歩いてくる雄二

こうなったら…僕が勝ってあいつから全て聞き出す

「雄二がその気なら…変身」

『タカ！トラ！バッタ！』

『タットツバ！タトバ！タ・ト・バ！』

オーズに変身して僕もゆっくりと歩く

「明久…覚悟しろ」

「雄二こそ…」

「はああああ！」

拳を握りしめ走り出す

「くえええ！」

繰り出された拳は近くにいたヤミーに当たった

『ぐああ』

さっきのサソリヤミーではなく新たなヤミー

「ほお…ライオンにクラゲか」

「合体ヤミーだね…」

また新しいヤミーが出たけど関係ない…

「明久…一連卓上だ」

「足引つ張るなよ雄二」

ライオン…つまり寄生ヤミーか…面倒な奴だなあ

「何が目的かは知らんがいい度胸だな」

「全くだよ…人の喧嘩を邪魔するなんて」

『カポン』

『ドリルアーム』

右腕にあるカプセルから機械が出現し、ドリルになった

僕はメダジャリバーを取り出し構える

「いくぞ！」

「おう！」

『グオオ！』

ライオンクラゲに向かって僕は剣できりさく

『グオオ！』

「うわあ！」

すぐに蹴り飛ばされた

「オラア！」

ギユインギユインとバースのドリルアームがヤミーの体を削る

『グオ!』

「うお!」

殴り飛ばされ建物にぶつかった

「雄二!はああ!」

剣にメダルを入れてスキャナーで読み込む

『トリプル!スキャニングチャージ!』

「セイヤア!」

『ふん!』

放った攻撃はライオンクラゲの覇気により逆に返ってきた

「わあああ！」

くそっ！強い…

『明久！何やってんだ！』

「アंक！？」

アंकはヒュッとメダルを投げた

「こいつに変えろ！」

「これは…よし！」

「どりゃああー！」

雄二はバスターでヤミーを打ちまくる

『ライオン！カマキリ！チーター！』

「うおお…」

雄二はヤミーに殴り飛ばされ転がった

「はあああー！」

十分に加速をして

「おりゃああー」

素早く切り裂く

『グオオ!』

ライオンクラゲは吹き飛ばされビルにぶつかった

「おりゃああ」

ビルを駆け上り

「セイヤア!」

追撃のキックをお見舞いした

『グオオ!』

ヤミーはそれを避け逆に殴ってきた

「がふ!」

くっ…顔がああ

「明久！おりゃあ！」

すぐにビルの上に来た雄二が素早く蹴りを放った

『グオオ！』

「うわっ」と

叩き落とされ転がった

「くっ…ウオオオ！」

頭から光を発した

クラゲがあるなら有効なはず

『グオオ！』

すぐにかき消されてしまった

なんで？

「チッ…ライオンの部分がクラゲをカバーしてやがる…」

「アंक！ならコンボしか…ぐわあ」

何だいきなり攻撃が…

『やあオーズ』

「カザリ…」

「どわああ！」

雄二はカザリにいきなり攻撃されビルから落とされた

「雄二いいい！」

『オーズ…メダルを貰うよ』

カザリは連続で攻撃を繰り返す

「ぐあ！うわああ」

強い…

『グオオ！』

さらにライオンクラゲの攻撃も受けてしまっ

「がは…ぐは」

2体のヤミーの攻撃を受けてダウンする

『ハア！』

「くああああ」

強烈な一撃をくらい変身が解けメダルが散らばる

「ぐ…」

駄目だ…奴に渡す訳には

「うぐあ！」

メダルを必死に寄せ集めた手が力ザリに踏まれる

『ふん』

「がああ」

グリグリと踏まれメダルを落とす

「明久！うお！」

アंकは持っていたメダルケースをライオンクラゲに取られた

『これで…僕のコアメダルは…八枚…あと一枚で』

まさか…完全復活！？

カザリはゆつくりとメダルケースを開けようとしていた

「やめろ！カザリ！」

熊と怒りと呼び起こす力（前書き）

展開が早いですがいいよあのメダルが解禁されます

熊と怒りと呼び起こす力

「さてヤミーはどこだ？」

大勢の人がいる中で俺は辺りを見回す

話によると地面から現れるんだよな

人がいない場所へ行きベルトを腰に巻く

「えっとこいつが有効だっけな」

熊の絵柄が描かれた銅色のメダルを取り出す

「変身」

セルとコアをベルトに入れて上から剣でさす

『ベアーアップ』

いつもとは違いスーツは黒、ボディは銅色に目は青の姿になった

「よし…やるか」

巨大なクローを地面に突き刺す

クローからは特殊な波動が流れ地面がゴウンゴウンと音を立てる

「……………」

よし…地中の内容はわかった…そこからメダルの電磁波を感じ取れば…

「そこか！」

ガンと地面を叩きつけるとヤミーが現れた

『貴様はーディアス！』

俺のことを知ってる？

雄二から聞いた通り…新種のヤミーか

『邪魔をするなああ』

サソリのヤミーは針を突き立てる

「効かないぜ！」

クローで針を破壊する

ベアースタイルは力だけを集中させた姿だ

「おりゃああ」

思い切り相手の体を切り裂き鎧を破壊した

『うお…お』

なる程…甲殻類は確かに固いけど…砕いてしまえば後は簡単だ！

「せりゃ！」

アップパーを喰らわせて吹き飛ばす

とどめだな

俺は目を赤くし、ベアーハンマーを取り出す

色は銅色だが尖っている

セルとベアーコアを入れる

『ベアーブレイク』

ゴウンゴウンと地面が揺れて沢山の岩がサソリヤミィを閉じ込める

『何！？』

「はああああ！」

岩に近づき力一杯ハンマーを振り下ろした

「でやああああ」

振り下ろされたハンマーをあつという間にヤミーごと岩を砕いた

岩からは大量のセルメダルが飛び散った

「一体誰の欲望だったんだ？」

それより早く二人を止めないとな

『今日…僕は完全体になる!』

カパッとホルダーが開かれる

このままじゃカザリが完全体に…

『……な』

聞こえたのは嬉しい声ではなく驚いている声だった

『全部…セルメダル…!』

僕は思わずアंकを振り返った

「俺が何の対策も取らないとでも思ったかカザリ?」

流石アंकだ…まさか先にメダルを取り出してるとは

『アंक…お前…！？』

アंकは腕だけ発射しカザリから何かを奪い取る

「はっ！やはりな。お前が俺のコアメダルを持ってるくらいわかってたんだよ」

アंकの手には赤いメダルが握られていた

『な…。まあいいさ君からメダルを取れば全て解決するからね』

確かにそうだ…アंकは残りのメダルを持っている…アंकさえ潰せばカザリは完全体になる

アंकはニヤリと笑った

「まさか俺が持つてるとでも思ったか？」

え？違うの

「メダルを持っているのはあの馬鹿だ」

アंकはそう言って僕に指さした

『何？』

「何言ってるんだよアंक！？」

勿論持っている訳がない

持っていたらとっくに使っているよ

まさか自分だけ生き残ろうとしているのか？

『そうなんだ…ならオーズを殺せばいいんだよね！』

カザリはそう言って突っ込んできた

ああ畜生！なんでみんな僕に酷いことするんだ！

僕は馬鹿じゃないんだ…なのにみんなは僕を馬鹿にしてばかり

『明久は馬鹿だよな』

『…馬鹿が取り得』

『アキは本当に馬鹿なんだから』

『明久は馬鹿じゃからの』

『明久君て本当にお馬鹿さんなんですな』

『馬鹿か明久』

今まで抑えていた物が溢れ出すように怒りがこみ上げてくる

『お前のせいで康夫は』

『お前なんか弱いくせに！』

『お兄ちゃん…助けて』

小さな少女の声が蘇り僕は叫んだ

「うわあああああ！」

何かが共鳴するように光り出す

『な、何だ！？』

「何！？」

ヒュンと音を立て黒いメダルがベルトの穴に入る

『何だあのメダル！？』

スキャナーを手にとり読み込む

「変身……」

もう誰も今の僕を止めることはできない

「アキ君…」

感じるアキ君の怒りが…

黒いメダルを通して

「明久…」

伝わる明久の怒り…悲しみ

私の体内にある金色のメダルから

「明君…駄目だよ怒りまかせちゃ」

体内にある紫メダルから激しい怒りが伝わってきた

『始まったか…』

鴻上はモニターを見ながらケーキを作る

『黒いメダル之力…それは怒り…そして！その力は眠っていた力を呼び起こす！』

そして黒いメダルが力を現した時…彼にも影響が及んでいた

「う…ぐ…」

そんな抑え込んでいる紫のメダル之力が…

「が…うぐ…」

火野映司…そして吉井明久

コアメダルの戦士となった彼らの運命は…

闇と悲劇と対峙する二人（前書き）

黒いコアメダル…怒りに反応し黒いオーズに変身させる。オーズの心が黒い程、支配する力を強める

カウントザメダル

現在オーズの使えるメダルは

明久

タカ

クワガタ

バッタ

トラ

サイ2

ゴリラ2

ゾウ

シャチ

ウナギ

タコ

プテラ

映司

プテラ2

トリケラ

ティラノ2

タカ

今回明久がかなり黒くなってます…

闇と悲劇と対峙する二人

「あぶねえ」

俺は力ザリに弾き飛ばされた後クレーンアームで何とか助かった

あの馬鹿ちゃんと戦ってるだろうな？

「よっ」

アームを使い上手く着地した

「ふう…またせ」

なんだ？急に力が抜ける！

この圧倒的なオーラは一体？

俺はつい明久を見た

「!？」

あいつからは黒いオーラが漂っていた

「変身」

掛け声と同時にスキャナーで読み込む

『サソリ！カニ！エビ！』

「新しいコンボだ？」

アंकは見たことのないコンボに驚いていた

『サッカービ！サカビ！サカビ！』

いつものように変な歌が流れ明久はたちまち黒いオーズに変身した

頭はサソリのように鋭く赤い目、体はガッチリとし、両腕にはハサミがついている

足はエビの模様が入っている

「サカビコンボ？」

こんなオーズ見たことがねえ…しかも未だに黒いオーラがでていやる

「ウオアアアア！」

明久は空に向かって叫んだ

空はたちまち暗くなり、闇の中にいるようだ

「ひゃっはあ！」

『何だ？うわあ！』

『グオオ！』

『ぐああ』

何！？いきなり攻撃が

くそっ暗くて見えない

「さてと…いたぶってやるよ」

明久の声が聞こえた…今まで聞いたことがないような恐ろしい声だった

「おらよ！」

『ぐああ』

今の声は力ザリか！？

明久 s i d e

『うぐああ』

何だよ手応えないな

「おらよ！」

僕は両腕をシザーアームに変え

大きなハサミでカザリを切り裂く

真っ暗だが僕には見えている

『あああ！』

ズバツと切り裂かれ叫ぶカザリ

はは…最高だよ

「おらよ！メダル落とせよ！」

『ぐっつ…』

カザリの腹を刺してメダルを弄る

ズボツと抜きカザリを踏みつける

「へえゝ案外少ないなあ」

黒いメダルとメズールのメダルをジャラジャラと手の中で鳴らす

『ぐっ…』

あーうるさいなゝ

「吹っ飛べよ！」

回し蹴りを放ちカザリを遠くのビルまで飛ばした

『グオオ！』

「残念」

ライオンクラゲが後ろから攻撃するが地面へ潜った

『何？』

探してる探してる

「ここだよ馬鹿」

地面から出てライオンクラゲの頭を掴み

「じゃああ
」

ガツンと地面に叩きつける

楽しい！

「オラオラ！」

ガンガンと何度も叩きつけ寄生された人を取り出す

「誰君？」

ポイツと投げ

再びライオンクラゲを叩く

「吹っ飛べよ」

頭を掴み思い切り投げ飛ばした

『グオオ!?!』

あはは…飛んでる飛んでる

エビレッグを使い地面を飛び上がる

「ふん!」

顔を蹴り地面へ落とした

『スキヤニングチャージ』

「おらよー！」

地面に倒れたヤミーをハサミで掴み角で背中を刺した

『ぐ…あ』

内部からメダル以外を溶かしていく

「じゃあね」

メダルだけが地面に散らばりヤミーは溶けた

「あっけないな」

地面を飛び上がり雄二がいた場所に着いた

「明久…お前」

「明久！」

「アキ君！」

いつの間にか、なのは、フェイトが来ていた

そうか…そうだよね

こいつらもメダル持ってたもんね

「何みんな？」

「どうしたの明久！」

「何か変だよ！？」

ちっ…戦い見てたか

「そんなことないよ」

「うっん！明久はそんな戦い方しないよ！」

はあ…

「ならさ…そんなに变身解いて欲しいなら」

目を光らせみんなを見た

「みんなのメダル全部ちょうだい？」

「え？」

遅いなあ

「あぶねえ！ぐああ」

なのはを攻撃しようとしたら雄二が庇った

「邪魔だなあ雄二！」

「ぐっ！」

素早くバースを殴り倒し顔を踏む

「うがあ」

「君はいつも邪魔なんだよ……」

ガンガンと腹を踏みつける

「ぐはああ」

「」「やめて！」「」

二人が押さえてくるが構わずなぎはらう

「きゃああ」

倒れたのはに近づく

メダル貰わないとね

「い、いや」

なのはは魔法少女にならず僕から離れようとしている

「させると思ってるの？」

ガシッとハサミを閉じた手でなのはを掴む

「いやああ！」

「なのは！」

「ぐっ…」

『カッターウイング』

バースの背中に何か装着され飛び二人を素早く掴む

「オラア！」

そのまま僕に向けてそれで切り裂いた

「…いて」

バーズは二人を掴んだまま飛んでいった

「逃げられたか」

僕はずっと後ろにいるアंकの方を見た

「明久…お前」

「何だよ？そうか…」

アंकだってグリードだもんね

「はあああ！」

体からどす黒いオーラを放つ

「ぐ…う…うあ」

アンの腕から吸い取られるようにメダルが出る

「ぐあああ」

アンはセルメダルになりメダルは僕の所に飛んできた

「はは…これで君も自由だよ」

手には二枚のタカメダルがあった

セルメダルはバラバラと落ち、アンの取り付いていた人はパタリと倒れた

「やはりしぶといね」

手の中でタカメダルがバタバタと暴れていた

これがアंकの意志があるコアメダルか

『ほお…黒いコアメダルとはな』

いきなり後ろから誰かの声が聞こえた

「君は」

あの時、ぶつかった奴か

アंकと同じ手をしていて金髪だ

『映司…バースを倒した奴がここにいる』

あいつはバッタ缶で連絡を取っていた

「コアメダルの気配がする…わざわざ取られにきた訳？」

『ハッ…誰がコアメダルに支配されてる奴なんかに取られるかよ』

君も馬鹿にするんだ…

「アंक！…オーズ！？」

屋上へ誰かが走ってきた

そいつは僕に驚いている

「何でオーズが人を？」

『あいつは今、コアメダルに支配されている…』

アंकって言うんだ…

まさかアंकが二人もいるとはね

「あなたも邪魔するなら消しますよ？」

今の僕は怒りで一杯だ

「確かに…黒いオーラが出てる」

『映司…奴の力は未知数だ…気をつけろよ』

アंकはそう言つとメダルをヒュンと映司さんに投げた

「わかってる…これでまた変身ができる」

僕と同じドライバーをつけてメダルを入れた

スキャナーを手にとり僕を見る

なんだよその目は

「…どんなことがあっても仮面ライダーは人を傷つけちゃいけないんだ」

「知らないよ…」

「なら…倒すしかないかな…変身！」

『タカ！トラ！バッタ！』

『タツツバ！タトバ！タ・ト・バ』

映司…いや映司さんは変身し僕と同じオーズになった

「同じオーズとして俺が君を救ってみせる！」

「偽物が…うるさいよ」

互いに睨み合い同時に拳を繰り出した

火炎と最強と映司の決断（前書き）

いろいろと皆様から意見がありましたが…悩んだあげくこうなりました

皆様の要望に応えることができず申し訳ありません

カウント・ザ・メダルズ

現在オーズの使えるメダルは

明久
タカ2
クワガタ
バッタ
トラ
サイ2
ゴリラ2
ゾウ2
シャチ3
ウナギ

タコ 2	サソリ 2	カニ	エビ	プテラ	映司	タカ 2	クジャク 2	コンドル	クワガタ	バッタ	トラ	チーター	サイ	ゴリラ	ゾウ	ウナギ	プテラ 2	トリケラ	ティラノ 2
---------	----------	----	----	-----	----	---------	-----------	------	------	-----	----	------	----	-----	----	-----	----------	------	-----------

火炎と最強と映司の決断

「う…！」

くっ…強い

「おりゃあ！」

「うっ…ぐ」

繰り出されたハサミをジャリバーで防ぐ

やっぱりタトバとコンボじゃ力の差があるか

「ハア！」

素早くハサミをどけて切り裂く

「…」

「ハッ！セイヤ！」

隙を見て何度も斬りつけるけど黒いオーズは一向にひるまない

「はああ！」

「ぐっっ」

逆に相手の攻撃をくらって吹き飛ばされた

「強い…あんなメダルがあつたなんて」

『映司！しっかりしやがれ！』

腕だけ飛び出しアंकがメダルを投げた

「よっ…これは！」

アंकお前！

「おりゃああ！」

「うわっ！」

黒いオーズ…サカビコンボがでかいハサミで攻撃を繰り返しなんとか避けた

今の状態ならいける！

攻撃を避けながら素早くメダルを変える

「うわああ」

最後にセッとした所で後ろから攻撃を受けてしまった

「ぐ…」

俺はただ見ることだけしかできなかった

この世界のオーズに任せるしか

けど…アंकからいきなり電話がかかった時は俺はまた変身できる

人を救える…それが嬉しかったんだ

だから人を守る力で君も守ってみせる…だから

「そのコンボを倒す！」

腰についていたオースキャナーで読み込む

『タカ！クジャク！コンドル！』

サークルは今までと違い一つの絵になる

『タ〜ジャ〜ドル〜！』

歌が流れ炎に包まれ顔も変わる

「ハア！」

タジャスピナーと言う盾のようなものが装着され炎が消えた時には
炎のコンボ…タジャドルコンボになった

（タジャドルのテーマ曲が流れていると思ってもらえるといいです）

「ハアアア…」

翼を開き飛び上がる

「何だあのコンボ？タジャドル？」

サカビコンボは首を傾げている

「ハアア！」

急降下しながらタジャスピナーから光弾を発射する

「ぐあ……」

「ウオオ！」

怯んだ所を突撃して吹き飛ばした

「ぐああ！」

「効いてる！」

地上に着地してタジヤスピナーをスキャナーでスキャンする

『ギンギンギンギンギンギンギンギンギンギンガスキャン！』

スピナーにエネルギーが溜まり俺はサカビコンボに向けて発射した

『セイヤアアア！』

スピナーから銀色のリングが飛び出しサカビコンボに直撃した

「ぐああー！」

爆発を起こしサカビコンボは吹き飛ばされた

「ハア…ハア…やった…！」

これで変身は解けるはずだ…

「！？空が暗く…」

アンの連絡を受けて向かった時見たように空が暗くなっていった

「視界が…暗くてあいつが見えない…」

このままだと取り逃がしてしまうかもしれない

『映司後ろだ！』

アンの声が聞こえ振り向くと同時に切り裂かれ火花が散った

「ぐああ！」

くっ…まさか！けどどこから

「おらあ！」

「ぐ！」

地面が割れサカビコンボが殴ってきた

「く…地中から？」

まさか地面に潜ることができるのか…？

「おせえよ！」

「ぐっ…」

再び攻撃が繰り出されたのを避け腕を掴んだ

「ハア！」

パンチを繰り出しサカビコンボを殴る

「じゃああー！」

サカビコンボは怯むことなくカニアームで切り裂いた

タフな上にパワーまで強い

「ぐっ…」

「おらおらあー！」

ガンガンと何度も殴られて吹き飛ばされた

「ぐ…」

タジャドルコンボが通用しない！？

「ハア！」

コンドルレッグで蹴りを放ったがすぐに弾き返された

「ぐ…」

『映司！まだいけるならこいつに変えろ！』

ヒュンとメダルが投げられ受け取る

「ぐ…なる程…堅い相手にはパワーだな！」

「おりゃあ！」

「うっ！」

サカビコンボに殴り飛ばされながらもメダルを変える

『サイ！ゴリラ！ゾウ！』

『サゴーズ…サゴーズォ！』

サークルは白と銀、灰色にかわり

歌と共に重量系のサゴーズコンボへと変わった

連続でコンボはきついけど今はやるしかない！

「ウオオ！」

胸を叩きドラミングをする

「なに…ぐああ」

相手を地面に叩きつけ素早く殴る

「ウオオ！ハア！」

「ぐああ！」

胸を叩き何度も殴る

「ぐ…貴様」

「ハアア！」

ガンツと鈍い音が響きサカビコンボを吹き飛ばした

「ぐ…」

今だ！

「ハアア！」

ガントレットを飛ばしサカビコンボに直撃させた

「ぐ…」

サカビコンボはフラフラしながら立ち上がる

「いくら闇に支配されていてもコンボには限界があるはずだ…」

体がガクンとなり膝をつく

俺も限界か…

「ハア ハア…お前の負けだ…」

「ふざけるな…僕は」

後はドライバーさえ傾ければ

「ここで終わる訳にはいかないんだああ！」

「グオオ…」

そんなまだあんなに力が

サカビコンボは黒いオーラをまといながらこっちへ向かってきた

連続コンボのせいで体が

「うらああ!」

「うぐああ!」

サカビコンボはカニアームを變形させクラブのようなハサミに変えて俺を殴り飛ばした

「ぐ…ああ」

オーリングサークルが傷つきへこんだ

『お前なんかにも負けるかああ!』

『スキヤニングチャージ!』

「う…」

フラフラになりながらも体を起こすが

「目障りなんだよ!」

カニアームに掴まれ動きを封じられた

「ぐっ…」

「しゃああ!」

顔を何度も殴られる

「ぐ…ぐは」

ボキンとサイの角が折れてしまった

「ハアアアア！」

サカビコンボの角が伸びて背中をブスリと刺された

「ぐ…うわああ」

駄目だ…このままじゃ負ける

やっぱりあれしか方法は…

「ウオオ！」

目を紫色に光らせたと同時にサカビコンボは吹き飛ばされた

「ぐあ…なんだと？」

『映司…まさかお前』

仕方ないんだアंक…

あの子を救う為にもこれを使っしかない

「ぐ…」

体内から紫色のコアメダルが現れ掴む

暴走の危険があり…そしてグリードにさせてしまっ恐ろしいメダル

「吉井君…戻ってくるんだ」

俺が紫のメダルと戦ってるように君も

「やってみるよ」

…今の君はいつものように明るい生徒じゃない

俺と同じように誰かを救ってきた生徒には見えない

コアメダルの毒に支配されてるんだ

なら俺は教師として仮面ライダーとして

彼に手を差し伸べるだけだ！

紫のメダルをサゴーズのメダルと入れ替えた

その為にも…吉井君を助ける為にも

「コアメダルを砕く！」

ディアスと明久、映司オリジナルコンボ（前書き）

新ライダーディアスとオーズのオリジナルコンボ紹介です！

ディアスと明久、映司オリジナルコンボ

仮面ライダーディアス

迷い猫の主人公が変身するライダー

コアとセルを使って戦う

見た目はナイトに似ているがマントはなく、色は銀色で顔は狼をモチーフにしている

ディアス ウルフスタイル

狼のコアとセルを使って変身するディアスの基本スタイル

武器は両腕についている剣とディアスセイバーという大剣がメイン
ディアスセイバーにコアメダルを入れることで必殺技のウルフブレイクが発動する

ディアス ベアアップ

ウルフスタイルに熊コアを追加したことで体と両腕がベアースタイルになる

ベアースタイルは動きが遅いので素早いウルフスタイルとは相性が良い

武器は剣からハンマーに変わる

ディアス ベアースタイル

熊のコアを使って変身した姿

力だけに集中しており早さはほとんどないがパワー一撃必殺級を誇る

見た目は仮面ライダータイガに龍騎を加えた感じ

武器は両腕についているでかいクローとベアーハンマー

ベアーハンマーに熊コアを入れることで必殺技ベアーブレイクが発動する

ディアスには狼、熊の他に2枚のコアメダルがある

しかしセルメダルがない場合ディアスの力は半分しか出せない

仮面ライダーオーズ サカビコンボ

シュウ様からのアイデアのオリジナルコンボ

黒いコアメダルの「サソリ」・「カニ」・「エビ」をオーズに吉井明久が使用した

ヘッドは「サソリ」（仮面ライダーサソードの頭部、カラーは黒で眼は赤）

アームは「カニ」（仮面ライダーシザースの鎧がモデル）

レッグは「エビ」（エビの模様が足に描かれている）。

能力 どんな強固な地面も潜れる「地面コンボ」。エビレッグは強力なジャンプで空中も水中もぴょんぴょん跳ねる、カニアームは両手がシザースの「ストライクベント」のようなハサミ「クラブシザー」になり攻撃に使ったり地面を掘ることができる、サソリヘッドは暗い所でも目が見える暗視能力がある。

必殺技 両手の「クラブシザー」で相手の両手を掴み動きを封じサソリヘッドの尻尾の部分が伸びて敵に刺さり強力な猛毒を打ち込み相手を内側から破壊する「ヘルポイズン」が必殺技（セルメダルに猛毒は付着しない）。

しかし変身する者怒りが強い程制御できない

変身した者に強い心がなければ我を失い残忍な性格となり悪のライダーとなってしまう

映司が変身したタジヤドルのギガスキャンを受けてもびくともせず攻撃力はサゴーズのボディに傷をつけ角を折る程最強と言っても良い

仮面ライダーオーズ シンリユウコンボ

火野映司が赤と金色をしたコアメダルを使って変身する

名前とコアメダルは全然関係がない

「リユウ」

「ドラゴン」

「ドラグーン」

破壊と違いと砕かれた闇（前書き）

サカビコンボ対オーズ決着です！

少し微妙ですが読んでくださる皆様が満足できたらいいなと思っています

破壊と違いと砕かれた闇

ガチャリとドライバーを上げる

ゆっくりと映司はメダルを変えた

紫色に光りドライバーを傾けスキャナーを取る

「君を…助ける！」

スキャナーでメダルをスキャンしそのまま腕を胸まで上げた

『プテラ！トリケラ！ティラノ！』

サークルは今までと違い枠がメダルのようになり紫色だ

『プトティラノ〜ザウルス！』

いつものように歌が流れた後オーズの周りからは凄まじい冷気が立ち上った

「ぐ……」

サカビコンボにも冷気がかかり凍ってしまった

「うおおおお」

映司は雄叫びと共に冷気を振り払った

たちまち冷気は消し飛びサカビコンボも吹き飛んだ

「ぐああ」

かつてない力のオーラを感じたのかサカビコンボは後ずさる

冷気を振り払った時、オーズは最強の姿プロティラコンボへと変身

していた

「紫色のオーズ!？」

馬鹿な…こんな奴見たことが

そんなことを考える暇もなくプトティラは雄叫びを上げながら向かってきた

「ウオア!」

バキツと音が響き僕は吹き飛ばされた

「ぐああ」

馬鹿な…この僕が

「ウアア！」

「ぐあああ！」

回し蹴りを放たれ一回転しながら吹き飛ばされた

なめやがって…

「ウオオ！」

地面にクラブシザーで穴をあけ潜ろうとした時

「ぐあ！」

いきなり強風が襲った

「ハアア！」

プトティラコンボは背中についていた物を羽にして強風を巻き起こした

「ぐ…ああ！」

吹き飛ばされ建物にぶつかる

なんてパワーだ…

「ウオオ！」

「ぐが…！」

プトティラコンボはすぐさまパンチと蹴りの嵐をかました

「ぐ、がああ」

「ぐ…」

ガクンとダウンする…強すぎる

「オアアア！」

「ぐああ」

蹴りを放たれボディにはヒビが入る

「げほ…がは」

化け物のパワーだ…

こんなコンボが存在してるなんて！

「ウオ！」

プトティラコンボは地面から何かを取り出した

「何…」

こいつ武器まで持つてるのかよ

「ハアア！」

ギャリンと響きクラブシザーが破壊された

「がああ！」

さらにプトティラコンボは斧を振り下ろす

肩のアーマーが吹き飛んだ

「ぐがああ」

「オアアア！」

プトティラコンボは容赦ない攻撃をする

「うわああ！」

何発も攻撃を受けて体はボロボロになった

「ウオ…ぐ」

プトティラコンボもガクンと膝をつく

いくら強くても弱っている状態で変身すればボロボロになるのは目に見えている

「ぐ…はあ…はあ」

「何故だ…」

プトティラコンボはゆっくりと顔を上げこっちを見る

「何故お前はボロボロになりながらも戦う」

「それは…君だっって言えてるはずだ」

プトティラコンボは本当の僕に言っているのだろう

無駄なのに…あいつは深い闇の底にいる

「君だって無駄して…自分のことを考えずに人に手を伸ばす」

く…体が動かない…

「俺と同じ…だから俺も君のことは理解できる…」

プトティラコンボはゆっくりと立ち上がった

「俺も君と同じオーズだから」

プトティラコンボはゆっくりとこっちへ歩く

やめろ！来るな！僕はまだ…

「怒りたいのはわかる…俺だってそう…」

「来るな！くるなあ！」

「でも…君は馬鹿じゃない…だから人を…仲間を傷つけるな」

「何だよ…何もこいつのことわからないくせに」

「ああ！わからないさ…けど…人を救いたいなら…」

ブティラコンボはゆっくり斧を振り上げた

「コアメダルなんかを負たら駄目だ…それに君は馬鹿な程本当は愛されているんだ」

（君は…俺とは違った生き方ができる…）

僕は何が何だかわからなかった

気づけば…

プトティラコンボは斧を振り上げたまま手を差し伸べ僕は…

その手を掴んでいた

「なんだよお前！あんなに馬鹿にされたのになんで戻ろうとするんだよ！」

ガンガンと自分を殴る

「やめろ…」

ガシツとその腕が掴まれた

プトティラコンボからは冷気が出ていた

「あ…」

足は凍りつき動けなくなっていた

「コアメダル…あいつの邪魔をするな」

ヒュンと斧が振り下ろされた

「ぐがあああ」

ビキビキとコアメダルにヒビが入る

「コアメダルに覆っている黒い力は…俺が砕く！ハアア！」

斧を下に振り下ろし

僕は完全に砕かれた

「嫌だ…僕はまだ！うわあああ」

爆発が起き僕は消滅した

映司 side

「ぐが…はあ…はあ」

メダガブリューを落とし膝つく

変身は強制的に解除された

紫のコアメダルは再び俺の体内の中に入る

「ぐ…」

サカビコンボは変身が解け俺の知っている生徒吉井明久に戻った

吉井君はゆっくりと倒れチャリンとドライバーから黒いコアメダルが落ちた

「…」

彼の体内にはこの世界のアंकのコアメダルが吸収されている

彼はそれを知ったらどんな表情をするんだろう

「グリードだけにはならない……で……くれ」

俺はそう願いながらゆっくりと意識を失った

自分がグリード化が進んでいるのはわかっているながらも

傷と半端と戦う覚悟

鴻上はゆつくりと赤いコアメダルを手にとった

「まさか…この世界にもう一人のオーズが来たとはね」

笑いながらケーキにメダルを置く

「だが…油断してはならない…黒いグリードに続いて新たなグリードが彼らの前に現れるだろう」

鴻上はケーキを箱に入れて里中を呼んだ

「なんですか？」

里中は鴻上が作ったケーキを食べ終えていた所だ

「これを吉井君に渡してほしいのだよ。アंक君が吸収された今、彼にはこれが必要だ」

「了解です」

里中は箱を受け取り部屋から出て行った

「紫のコアメダル…それがグリードを倒す鍵だ！」

鴻上は高らかに笑った

「そしてその力を解放するには彼の力が必要となるのだ!!」

吉井side

「おはよう…」

僕は力のない挨拶をしながらいつものように教室に入った

黒いコアメダルによって我を失ってから

今日で十日…昨日まで僕は意識を失っていたらしい

それでも何が起きたかはわかっていた

アंकを吸収したこと…

アंकがいなくなってしまう…彼が再び危うい状況になったこと

フェイトや雄二が怪我をしたこと

火野先生と戦ったこと

もう一人の僕が消えたこと

沢山のことがありすぎて僕は疲れ果てていた

それでも…前向きにならなくちゃ

じゃなきゃ人を救うことはできないんだ！

改めて言い直す

「おはようみんな！」

「おはようアキ君」

「おう…もう大丈夫なのか？」

出迎えてくれたのは少し暗い顔したなのは、頭に包帯をしている雄

二だ

ズキンと頭痛がした

「うん…早く復帰しなきゃいつまたヤミーが「明久君！」うわあ！」

いきなり僕に飛びついてきたのは姫路さんだ

「明久君！私心配したんですよ！」

「ごめんね姫路さん…もう大丈夫だから」

姫路を離して立ち上がる

『吉井を殺せえええ！』

『YES！boss！』

須川君の命令ですぐさま十字架に張り付けられた

「うわああ！みんな何すんの！？」

『女たらしのお前なんか死刑だ！』

『憎たらしくシネエエ！』

彼らはいつものようになのはにより藻屑にされてしまった

「お前ら！何をやってる！」

鉄人が効果音が出る勢いで現れた

「全く…それと吉井！」

「は、はい！！」

鉄人の声にびびりながらも立ち上がった

「火野先生がお前を呼んでいる。行つてこい」

「…へーい」

火野先生が…なんだろう？

生徒指導室を静かにノックした

「どうぞ」

「失礼します」

あれ？女の人？

ガチャリと開けて入って行く

いつも鉄人が居る

が

指導室に入った時に目に入っただのは黒い長い髪をした泉先生

そして… オーズに変身した日本史担当の火野先生だ

「こんにちは吉井君。とりあえず椅子に座ってよ」

「はい…」

火野先生に促され椅子に座った

「とりあえず… 久しぶりだね吉井君」

「はい… あの時はすみませんでした」

火野先生は少し微笑み気にするなど言うように手を振った

「でも正直… あの力には驚いた… まさか紫のメダルを使うことになつてしまったからね」

泉先生は少し表情が暗くなっていた

「すみません…でも紫のメダルって何か悪いことがあるんですか？」

つい言葉に出してしまった…

「ああ…あるさ。紫のメダルは暴走する危険が強いんだ」

「え？」

暴走？…僕のあれは怒りから出たものだ

「暴走していたら…きっと君を殺していたかもしれない」

火野先生の言葉が一言一言胸に突き刺さった

それほどまで危険なもの僕は発動させてしまったのか

「俺が君を呼んだのは…戦う覚悟があるか聞こうと思ったんだ」

「戦う…覚悟」

「ああ…今の君にちゃんとあるか知りたくてね…」

「勿論ありますよ！けど…また誰かが傷つくと思うと」

火野先生は少しだけ僕を睨んだ

「吉井君…わかっていると思うけど…それは君がやったことだ」

黙るしかなかった

「それは君の意志の弱さがそうさせているんだ…」

「映司君…」

「わかったよ…今の君は戦う覚悟ができていない。中途半端な覚悟じゃ君はまた人を救えないんだ」

「……………」

「映司君！いいすぎです！」

「！？…………ごめん」

「火野先生が謝る必要はないですよ…僕が弱いのがいけないんですから」

僕はゆっくりとメダルを机においた

「吉井君…」

「覚悟が出来たら…取りに来ます」

椅子から立ち上がってドアまで歩いて行った

「吉井君…君の答えがそうなら俺は何も言わない」

「失礼しました」

部屋から出て行きガチャリと扉をしめた

傷と半端と戦う覚悟（後書き）

カウント・ザ・メダルズ
現在オーズの使えるメダルは

明久

タカ2

サイ2

ゴリラ2

ゾウ2

シャチ3

ウナギ

タコ2

プテラ

映司

タカ2

クジャク2

コンドル

クワガタ

バッタ

トラ

チーター

サイ

ゴリラ
ゾウ
ウナギ
プテラ2
トリケラ
ティラノ2
+ 明久のメダル
クワガタ
バッタ
トラ
サソリ2
カニ
エビ

休息と異変と失った力

ゆつくりと階段を上がる

火野先生に言われたことに唇を噛み締めながら

「僕じゃ…オーズの力は」

罪もない…そして力をくれたアंकを僕は

「アंक…」

アंकがいる腹を押さえながら僕はゆつくりと廊下を歩く

廊下を歩いていたらいきなりAクラスの扉が開いた

「明久……………?」

「フェイト」

フェイトはぎこちない笑顔で僕の横を通り過ぎた

「……………」

ぎゅっと拳を握りしめる

どうしようもないんだ…僕はフェイトを傷つけた

フェイトは包帯を巻いている腕を見せないようにしていた…心配をかけたくなかったんだよね

「でも…何か寂しいな…」

僕がオーズになったせいで…みんなを

「こんな力…」

今まではこの力を使って人を救ってきた…手を伸ばしていた…そう思っていたのに本当は

「だったらこんな力…」

グッとオーズのベルトを取り出して窓を開けた

けど…いざ投げようとしたら手が

震えていた

「あれ？何だよ…僕はもうこの力は」

それでも投げれない

手放したくとも体は言うことを聞かないんだ

「そ…そんな」

途端に何かが蘇ってきた

『…必ず…みんなを救う…ヒーローになってね』

ごめん…まどか

約束守れそうにないよ…

いない恋人に語りかけ僕は学校から出た

変わってしまったこの世界…求めていたものは何だったっけ？

「わかってたさ…僕が僕じゃないことくらい」

本当は存在が許されない

僕はこの世界に否定されている

それでも望んだんだ

それでも彼女を蘇らせたんだ

戻りつつある記憶

オースの記憶：僕の記憶

「きゃあああ！」

人の悲鳴声が聞こえ気づけば足を動かしていた

「やっぱり…捨てきれないんだ」

ベルトを腰につけメダルを入れる

「変身」

『タカ！ウナギ！タコ！』

やっぱり目の前で起きていることをほっておけない

「うおおお」

同じ学校の子が襲われかけ鞭で動きを封じた

「今のうちに逃げるんだ！」

「う、うん！」

彼女を襲っていたのはウヴァのヤミーだった

「何故止める」

姿は仮面ライダーを思い出させるようなバッタの姿だ

「奴は人にぶつかっておきながら謝らない」

「だからといって襲っていいはずがない！」

鞭を素早く叩きつけ電撃を流す

「ぐああ」

「ハッ！」

両腕を素早く縛り付け電撃を流す

「ぐあああ」

「どうだ！抵抗できないだろ！」

おまけだ！吹っ飛べ！

「セイヤ！」

「ぐおお」

ズガンと響きバッテリーを壁に叩きつけた

「明久！お前また」

「勝手に戦うなって」

雄二と巧がバイクに乗りながら現れる

「ふん！」

「うわっ！」

ヤミーは鞭を解き素早く攻撃してきた

僕は機転を利かせ素早く交わし構える

「たくっ…無茶すんな」

雄二と巧はそれぞれベルトを巻いた

「変身」

雄二はセルメダルを弾き、弾いた手でキャッチしベルトに入れた

キリキリと回しカプセルが開く

『カポン!』

雄二はたちまち装甲で覆われた

巧はセルメダルと狼コアを入れる

「変身！」

剣を突き刺した途端銀色の光をまとった

『ウルフアップ』

雄二は目が赤く発光し仮面ライダーバースに、巧はディアスへと変身した

「さあて…稼ぎますか」

「明久大丈夫か！？」

二人が加わり勝負は有利になった

増幅と合体と巨大ヤミー

「ぐわっ！」

バッタヤミーの強烈な蹴りを喰らいディアスがふきとんだ

「ハア！セイ！」

鞭で攻撃するが素早く避けられた

「俺の正義の邪魔をするな！」

回し蹴りを喰らい吹き飛ばされた

「ぐっ……」

強い……ヤミーがだんだん強くなってきている

「ドリルアーム」

バースはセルメダルを入れキリキリと回す

途端にメカが現れドリルに変わった

「おらあ！」

「ぐっ」

ギュイイと音を立てながらドリルアームを振り回し腕を攻撃した

「そこだな！」

バースは低くかがみこんでドリルアームを腹に突き立てた

「ぐ…お」

ドリルアームはセルメダルを吸収していく

バッタヤミーは苦しみながらもバースを弾き飛ばした

「ぐ…やっぱり難しいな」

「雄二…バスターで援護して！」

「了解だ」

僕はメダルをウナギからゴリラへ入れ替えた

「ハッ！」

セルメダルを消費しバスターを連射する雄二

「はあ！」

ディアスは後ろからバツタヤミーを切り裂いた

「ぐっ……」

『タカ！ゴリラ！バツタ！』

青いウナギボディからガツチリとした銀色の体に変わる

「ハアア！」

ガン！と拳を叩きつけ重い一撃をかました

「ぐ」

「ぐっ なんだこいつ！」

「雄二！？」

バースが地面を転がりながら敵の攻撃を交わしていた

「新しいヤミー！？」

姿はヒョウの姿をしている

「ぐああ」

後ろからバッタヤミーの蹴りをくらい吹き飛ばされた

「ぐ…」

「がはあ！」

「た、巧！」

ディアスが壁にめり込んだ

「ヴモオオ！」

「また新しいヤミー！？」

姿はエイに見えるけどサイが混じっている

「ぐ…まさか合体ヤミーか」

バッタヤミーの蹴りを防ぎながらガントレットで殴る

まさかヤミーがこんなに現れるなんて…

「厄介だな」

バースはセルメダルを取り出しドリルアームに加えてさらに武装した

『シヨベルアーム』

「…こいつらを野放しにしてたら大変なことになるぞ！」

ディアスはコアメダルを取り出し新たに入れる

『ウルフガゼルアップ』

足の部分が緑と茶色の形をした鎧に変わった

「ちょうどいい… たまっていたストレスを解放させてもらうか！」

バースはヒョウヤミの腕をショベルアームで抑えドリルアームで削り始めた

「明久… 同時攻撃行くぞ」

「わかった」

ディアスは足に力を込め、僕はガントレットに力を込めた

「「しゃあああ！」」

ディアスは足の剣を、僕はガントレットを飛ばしそれは一つに重なり巨大な鎌鼬になり2体のヤミーを破壊した

「くああ」

『セルバースト』

「仕上げだ！おらああ！」

バースはドリルアームで真つ二つにしヤミーを破壊した

「えっ！なんだあれ」

爆発したヤミーのメダルが集まり巨大なエイの化け物になった

『キイアア』

「」「」「うああ」「」

エイヤミーのビーム攻撃で橋が崩壊し、僕らは吹き飛ばされた

「つ、強い」

『キイアア』

エイヤミーは容赦なく僕らにビームの雨を喰らわせる

「ぐ」

「ぐは…」

「くそ…」

どうしようもない状況にさらにエイヤミーは突進をしてきた

ちょっとまって…しゃれにならないよ

「ぐはああ」

「うくっ」

バチンと突進を受けて海へ落とされた

「明久！」

「ぐ……」

『カポン』

『カッターウィング』

僕は橋から落とされ海に投げ出されたが

バースが素早く助けた

「足ひっぱんなよ明久」

「ありがとう雄二……」

バースに橋まで運んでもらいバースはそのままヤミーに突撃した

『キアアア』

「ぐああ！」

「雄二！」

エイヤミーの突進を喰らい雄二は吹き飛ばされてしまった

秘策と大量とVSカザリ

「どわああ!」

容赦ないエイヤミーの攻撃になすすべもなく倒れる僕ら

「ぐ…どうすりゃいい」

確かに…緑のメダルは今はないし

うん?これは…

ゆっくりと広げた手の平には火野先生に渡したはずのトラとバツタがあった

そうか…あの時力ザリから奪い取ったんだった

「しゃーねえ…俺が一発…ぐ」

「フラフラなのに無理するな雄二」

ディアスに助けられたバースはフラフラだ

正直言ってでかい攻撃は無理だろう

「どうやったら勝てるんだ」

「秘策ならある」

いきなりバースがセルメダルをベルトに入れた

「三人で同時に攻撃だ…あいにくプレストキャノンは打てないがな」

「なる程。名案だね」

ガチャリとメダルを入れ替える

そしてスキャナーで読み込みタトバコンボへと変身した

「だが、三人でやるにはかなり危険だ。同時にやることでエイヤミの攻撃を受けちゃうからな」

「ああ…一発勝負と気合いだな」

僕らは頷き合い僕は腰のオースキャナーを取り巧は足ついている
剣にセルメダルを入れ、雄二はバースバスターのポッドを取り外した

「いくぞお前ら！」

「」「」
「おっ！」

『キアアア！』

「」「ぐああ！」

「う…ぐう」

エイヤミーの目の前に立ち強力な突進を喰らうがなんとか立つ

『スキヤニングチャージ!』

僕は足をバツタにして高く跳躍すると三つの輪が出現した

『セルバースト!』

雄二はポッドを銃口に付けて目が赤く発光し、バスターからはギューイイと巨大な音が響いた

『ガゼルブレイク!』

巧の足から巨大な剣が出現して地面に突き刺さる

そこから植物や木の触手が生えてたちまちエイヤミーを拘束した

「「「いくぞ!」」」

三つの輪をくぐりながら翼が生えて両足で必殺キックを炸裂させた

「セイヤアア!」

雄二のバスターから巨大な弾が放たれ彼の足が地面に埋まった

「ハアアア!」

巧は地面から剣を突き放し逆さまになった状態で巨大な剣の斬撃を放つ

「デヤアアア!」

三つの攻撃が一つとなりエイヤミーに直撃した

『キアアア!』

エイヤミーはたまらず大爆発を起こした

スタツと着地したらセルメダルが降ってきた

うわあ…凄い数だ…

「おしっ!大量だな」

『カポン』

『クレーンアーム』

なああ！雄二！セルメダルを全部とるなあ！

「全く雄二は欲望まみれなんだからさ」

「無欲なお前には言われたくないな」

「なんだと？」

睨み合い…殴ろうとした所で巧に止められた

くそっ…おあずけか

「」「ぐああ」「」

瞬時…僕と雄二は何かに切り裂かれた

「明久！雄二！」

素早く起きると目の前にはグリードがいた

「カザリ…」

因縁のあるグリードだ

「久しぶりだねオーズ…メダルを貰うよ」

そうは行くか…僕はアंकを

「今日こそ決着をつける」

メダジャリバーを取り出して構える

「俺達も行くぞ」

「ああ！」

「ハアアア！」

勢い良く走りカザリに攻撃を仕掛けるがカザリはクローで受け止める

「今日でお前のメダル全部貰うよ！」

「逆に僕が完全復活をするけどね！」

ガキイと火花をぶつけ合う

「フン！」

「うわあ！」

砂嵐を受けて地面に飛ばされた

「ぐ……」

『カポン』

『ドリルアーム』

ドリルアームを装着したバースがカザリの腹を攻撃した

「効かないよ……」

ガリガリとカザリから吸収していたが逆にドリルアームが壊れ始めた

「うおっ！」

そのままバシンと叩かれドリルアームは破壊された

「ハア！ハア！」

クローで何度も切り裂かれてバーズは地面に倒れた

「雄二！うおお！」

「ハアアア！」

僕とディアスが剣で攻撃するがカザリは逆に弾き返した

「ぐ…うわああ」

怯んだ所に回し蹴りを打たれディアスは宙を舞う

「巧！くそ！」

カザリのクローとぶつかり合う

「ハア！」

「ぐああ」

水流弾を喰らいダウンする…このままじゃ

「そろそろメダルを貰うよ」

ガツンと響き鎧に傷がつく

「ぐ…」

駄目だ…このままだと負ける

『シヨベルアーム』

「うおお！」

バースが再び武装しカザリに攻撃をする

「ぐ…お前！」

カザリの腹に直撃しカザリは怯んだ

「おらあ！」

バースはシヨベルアームで顔を拘束し殴り飛ばした

「ぐああ！」

「うおお！ハア！」

僕もすかさず跳び蹴りを喰らわせ力ザリを吹き飛ばした

「ぐ…明久…次で決めるぞ」

ガチャリとポッドを銃口に装着する雄二

「ああ！勿論だよ」

けどその前にディアスが宙に浮いていた

「巧！？」

「うああ」

そのまま地面に叩きつけられ、そして僕らにぶつかった

「ぐは…」

「うぐ…」

「残念だったね。消えるのは君達だよ」

カザリから出ているあの力…まさか

「ガメルの…!？」

あいつガメルのコアメダルまで取り込んだのか

「残念だったねオーズ」

「
うわあああ」

砂嵐と水流弾…さらに重力操作で地面に叩きつけられた

ぐ…体があちこち痛む

「フン！」

「ぐああっ！」

「「明久！」」

砂嵐を再び受けて倒れかけた

「一か八か…」

もうあいつを倒すにはコンボしかない

ならこのコンボで

体内からシャチ、ウナギ、タコを取り出した

「そうはさせないよ」

カザリが素早く攻撃を仕掛け吹き飛ばされた

「しまった…」

メダルが弾け飛び地面に転がる

「メズールのコアメダルか…」

ウナギ、タコを回収されるがシャチだけは回収される前に奪い返した

「させるもんか…このコアメダルだけは渡さない」

「オーズ…フン！」

「ぐああ」

クローで切り裂かれダウンする

「ぐ…あ」

「いい加減くだはりなよ！」

ズバアと切り裂かれ変身が解除された

「ぐは…」

「明久!?!」

「うるさいなあ!」

砂嵐を喰らいバースとディアスも変身が解除された

「ぐ…」

巧の狼コアがカザリの下に転がって来た

「へえ…このコアメダルも貰ったよ」

カザリは狼コアも拾い僕を踏みつけた

「うがあああ」

手からトラとバツタが落ちる

「返してもらっよ僕のコアメダル」

カザリは二枚のコアメダルを拾い上げ全部まとめて吸収した

「う…ぐ…力が力が！うああ」

カザリはいきなり光だした

な、何だ

「…嘘でしょ」

カザリは姿が全く変わり体や足に銀色の棘が生え…顔も狼の形へ変貌した

「はあああ」

カザリが両手を広げた瞬間海が真っ二つに割れた

「まじかよ……」

「これがグリードの力……」

こんなのどうやって勝てばいいんだ

「君達には死んでもらうよ」

周りから凄まじいオーラが発生し僕らを吹き飛ばす

「うわああ」

体内から赤いコア以外のコアメダルが落ちる

「ぐふ…」

地面に叩きつけられ額から血が流れる

「くそ…」

カザリは僕らに迫ってくる…足が動かない

このままじゃ

「じゃあね…オース！」

砂嵐が僕に向けて発射された

「「明久！」」

僕じゃやっぱり勝てないのかな…結局

「諦めるには早すぎるんじゃないのかな？」

突如聞こえた声は僕を砂嵐から守った

火野先生…？

「…なんだあの力ザリは」

「いいからいくよアंक」

メダルをアंकから受け取りベルトを付け先生は変身した

「変身！」

『タカ！トラ！バッタ！』

三つのサークルが現れ刻まれる

『タットツバ！タトバ！タ・ト・バ！』

黒い姿から色がつき仮面ライダーオーズへと変身した

『オーズ！？なんでもうひとり？』

「ハッ！」

バツと構えるタトバコンボ

「映司…奴は普通じゃない…気をつけろ」

「わかった」

それを合図にタトバコンボは走り出した

邪悪と協力と海のコンボ

「ぐわあ！」

タトバコンボは吹き飛ばされ建物に衝突した

「ぐ……」

「何でオーズがもう一人いるのかはわからないけど……」

カザリは腕の剣を素早く飛ばした

「僕の相手じゃないね！」

「ぐわあ！」

カザリが飛ばした剣は立ち上がったタトバコンボを切り裂いた

タトバコンボからは火花が散る

「ぐ…やっぱりあのコンボじゃなきゃ…」

「馬鹿か映司！そんなふらふらな状態だったら確実に暴走するぞ！」

タトバコンボはぐっと拳を握りしめ走り出した

「うおお！ハア！」

繰り出した拳をカザリは避ける

「ふん！」

ズバツと剣で切り裂かれタトバコンボはまた吹き飛ばされた

「映司！？」

「火野先生！」

駄目だ…先生ですら勝てないなんて

僕に…何ができるんだ…

タカメダルをぎゅっと握る

「ママ…どこいったの？」

小さな子供…まずい！

「俺はみんなを守って…」

「へえ…オース守れるもんなら守ってみなよ」

「やめろ…！」

カザリから剣が少女に向けて放たれた

「あの子をね！」

「うおお！」

僕は菌を食いしばって懸命に走る

何やってるんだよ僕…守るって

手を伸ばすって…諦めないって決めたじゃないか…！

それなのに怯えて逃げて…見過ごして

そんなことで…オーズの力を十分に

「使えるはずがないんだ！」

間に合う！間に合ってくれ！

僕は…仮面をつけていなくなつて…いつだって仮面ライダーだ！

それを…僕は忘れていたんだ！

「うおおおお！」

「明久！」

「なにっ！」

手を伸ばせば…見えてくる

「ぐがあっ！」

グサリと剣が突き刺さる…血がポタポタと流れる

けど…

「大丈夫？怪我はない？」

笑顔で不安なこの子を撫でてあげる

「う…うん…お兄ちゃん…」

泣きながら僕に抱きつく少女…

「大丈夫…大丈夫だから」

ゆっくりと撫でて恐怖心を取り除いてあげる…

それが僕のやるべきことなんだ

「お兄ちゃん…ありがとう」

声も出せない程怖かっただろう…けど大丈夫

「うん…さあ早く逃げて…大丈夫。僕が守るから」

少女をゆっくりと押し出す。不安な顔だったけれどたちまち真剣な顔になる

「うん！」

そして力強く頷きその場から離れる

「逃がさないよ！」

カザリがセルメダルを投げてくる

少女の頭にスロットが現れる…こんな少女からヤミーを作り出させるもんか！

「じゃあ！」

バチンとセルメダルを叩き落とした

「なっ……」

「先生！今だ！」

タトバコンボは素早くカザリを切り裂いた

「うわあ！」

「ハアア！」

追い討ちを立てるように背中を切り裂いた

「うおおおお！」

僕も風のように走り

「だっしやああ」

跳び蹴りをお見舞いした

「うわああ」

カザリはたまらず吹き飛ばされメダルが飛ぶ

「っ！」

アंकさんは素早く腕を飛ばすがその前に僕がキャッチした

「お前……」

「今までのメダルはあなた達にあげます……けど今からは……」

ドライバーをつける

「僕が頂きますから」

にかつと笑いながらタコを入れる

「お前…メダルを横取りする気か！」

ウナギをゆっくりと入れる

「違いますよ…先生…僕やつと答えを見つけました」

「吉井君…」

シャチを力チャンと入れる

カザリの前に立ち後ろから先生に喋る

「僕はこの力で…グリード達を倒します！もう…あんな悲劇を生み出さない為に！」

そしてもう迷わない！たとえ何があっても僕は…戦う！

「変身！」

「「明久……」」

スキャナーで三つのコアメダルを読み込んだ

『シャチ！ウナギ！タコ！』

サークルは青色になり上からシャチ、ウナギ、タコの絵柄に変わった

そしてサークルが刻まれ大量の水が覆う

『シャシャツシャウタ！シャシャツシャウタ！』

水が弾け飛んだ時にはシャウタコンボ…海のコンボに変わった

「先生！力を貸してください！僕だけじゃ限界があります！」

先生はゆっくり頷き立ち上がった

「映司…こいつでいけ！」

「ああ…わかったよアंक」

『タカ！クジャク！コンドル！』

『タ〜ジャ〜ドル〜』

火野先生はタトバからタジャドル…灼熱コンボに変わった

「いくよ吉井君」

「了解！」

ババツと構える僕ら

「オーズが二人？」

「すげえ…ダブルコンボだ」

「ああ…」

「ハアア！」

同時に走り出した

「くっ…フン！」

カザリは剣を飛ばすが僕は液体化、タジャドルは盾で防ぐ

「なに！」

「ハアア！」

液体化した僕はカザリに突進した

「ぐう！」

カザリは攻撃するがスカツとなるだけだ

「ハアア！」

タジャドルは手から炎を放ちカザリの剣を破壊した

「ぐ…お前ら」

カザリがタジャドルに水流を使う前に僕は素早く鞭をとりだした

「はああ！」

鞭でバチンと一気に数力所を攻撃する

「あぐっ…あっ…うわ」

「くらええ！」

ヒュンと巧みに操り腕と足を拘束し電撃を流す

「あああああ！」

カザリは身悶えるように叫ぶ

「ハアア！」

そこへタジャドルが炎の拳を放った

「ぐはああ」

ジュウウと音を立て大量のコアが飛び散る

「よっ…ほっ」

カザリを拘束したまま散らばったコアを回収した

「お前！勝手に取るな！」

「まあまあ…アंक落ち着いて」

「貴様らあ…」

カザリは鎧が破壊されボロボロになっていた

「まだまだあ！」

ダダと走り出し、タジャドルもそれに合わせる

「セイヤアア」

僕は水をまとった両足キックを、タジャドルは炎をまとった両足キックを挟み撃ちにして放った

「ぐ…があああ」

カザリはたまらずに吹き飛んだ

「よっ…これって…」

手にしたメダル…それはあいつのメダルだった

「お前ら…絶対許さないよ」

「黙れ猫怪人！あんな可愛い少女をよくも…さては」

ためを作ってからビシリと指を指す

「貴様…ロリコンだな！」

絶対そうだ！あんな少女に手を出すなんて絶対ロリコンだ！

「吉井君？」

「馬鹿かこいつ」

あ、あれ？何か変なこと言ってたかな僕？

「はは…君ならあのコンボでも耐えれそうだな」

「先生！？」

タジャドルは変身が解除され火野先生へと姿が戻った

勿論…雄二や巧はその光景に驚いている

「はあ…限界か…」

無理もない…あんなにボロボロにされた所をコンボだ…そりゃいくら先生でも疲れるよ

「吉井君…君が決めるんだ」

そう言って先生はジャラリとコアメダルを渡した

「先生…」

「おい映司!？」

「いいだろアंक。あのコアメダルはこの世界の物だし…あくまで

も主役は吉井君なんだし」

この世界？主役？

「ハアア！」

「なっ…ぐお」

カザリが放った砂嵐を片手で受け止めた

「吉井君…君の決意見せてもらったよ」

火野先生はそう言ってからゆっくりと下がっていった

後は僕だけ…か

馬鹿で…なんの取り得もない僕だけど

確かにできることがあるんだ！

「うおおおお！」

雄叫びと共に海が龍のような姿をして現れる

「ハアア！」

海龍に乗りカザリに攻撃する

「ぐああ」

「いくぞおおお」

僕の決意…絶対成し遂げる！

『スキヤニングチャージ！』

鞭でカザリの腕を拘束し海龍が放った水流をまといたコドリル足に変化させトドメを放った

「セイヤアアアアアアアア！」

ガガガガとカザリの腹を破壊していく

「はあああああ！」

さらに力を込める

これで…最後だあああ

「そんな…僕が…うわあああ」

カザリの腹が貫通しカザリの…ベルトが破壊された

カザリは大爆発を起こしそこから六枚のメダルが落ちた

「ほっ…やった」

見事にキャッチした

「ついにグリードを…」

体が痺れる

「あれ？…意識が…」

そうか…全く…無茶だけは止めれないや

ボタンと倒れ意識が遠のいていった

邪悪と協力と海のコンボ（後書き）

カウントザメダル

現在オーズが使えるメダルは

明久

タカ2

クジャク

クワガタ

バッタ

ライオン3

トラ3

チーター3

サイ2

ゴリラ2

ゾウ2

シャチ

ウナギ

タコ

プテラ

サソリ

カニ

エビ2

オオカミ

映司
タカ2
クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
サイ
ゴリラ
ゾウ
プテラ2
トリケラ
ティラノ2

二学期と祈りとオースの部屋

夏が終わり僕らは二学期を迎えた…

途中いろいろあったけど…平和に学園生活を楽しんでいる

一人をのぞいて…

『須川が逃げたぞ!』

『『逃がすなああ!奴は確実に異端審問だあ』』

『待てみんな!吉井が来たぞ!』

「おはようみんな!」

『『partytime!』』

入るなりそうそう僕はFFF団に襲われた

「うわっ！」

攻撃を避けて一人気絶させた

「ごめんね新田君…まだやる？」

『『須川を引き続き追ええ』』

相変わらず切り替えが早いことで

「アキ君おはよー！」

そう言って幼なじみは抱きついた

「っとおはようなのは」

カザリを倒してから数日…ヤミーが現れなくなり僕らはいつものように学園生活を満喫していた

いろいろいざこざがあったけどなのはやフェイトとは一旦別れ…今では普通の友人に戻っている

決めたのは二人で僕のちゃんとした答えが聞きたいかららしい

まあ…ちゃんとしなかった僕が悪いしね 改めていつか告白するよ

「おはようございます明久君」

「おはようなのじゃ明久」

「おはよう明久」

「にゃあ…明久おはよう」

「みんなおはよう」

いつものように僕はみんなと挨拶をかわす

「おはよう明久」

「うん。おはようフェイト」

フェイトは申し出をだしFクラスに転入したんだ

フェイトだけじゃないけどね

「おはよう明君」

「おはよう…明久」

「おはよう二人共」

幼なじみのまどかやほむらも転入したんだ

理由は僕を守る為らしい……うーん何でだろ

「マミ、翔子！なんでお前まで！」

「坂本君と一緒にいたいからよ」

「……そう言うこと」

雄二も雄二で大変らしく巧も巧で大変らしい

前にヤミーを倒した時……雄二が女の子を助けた時霧島さんがバース
にアイアンクローを……

「席につけお前ら！」

鉄人が出現し僕らは素早く持ち場についた

教室は清涼祭以来戻してないので設備は綺麗だからまどかを入れても大丈夫だったんだ

ちなみに須川君…最近彼女ができたらしい

「もうすぐで合宿が始まる訳だが…」

僕は鉄人の声を聞きながらゆっくり手の平を広げた

アंक…僕の大事な仲間…彼を助ける方法を僕はずっと考えていた

「いいか…Fクラスは…現地集合だ！」

「案内すらないのかよ！」

教室に悲鳴が響き渡るけど…僕にはどうでも良かった

「以上だ」

鉄人はそう言った後教室を出て行った

机の上には合宿の案内や日程について書かれたしおりが置いてあった

997

「アंक…君を助けなきゃね」

けど…アंकを復活させたら体をのっけられていた人が…

「明君…」

気づくとまどかが覗き込んでいた

「まどか？どうしたの」

「やっぱりアंकが気になる？」

「うん…大切な家族だからね」

苦笑しながらタカメダルをポケットにしまった

「明君…努力は無駄なことじゃないよ…明君がちゃんとした答えを見つけ出せるのを信じてるよ」

「ありがとうまどか」

そしてごめんね…僕は君を

ゆっくりと歩きながら僕は三つのコアを取り出した

「さてと...お話ししようみんな」

『僕は興味ないね...』

ライオンのコアはそう言う...

「カザリ...せっかくだし君と友好度を深めぐふう」

メダルが額にぶつかった

『冗談じゃないよ…誰が君と仲良くなるもんか』

『いいじゃないのカザリ…碎かれないだけましでしょ？』

『メズールまで…』

『明久…おやつ！』

サイのコアが動きながらそう言う…

全くグリードって本当に面白いよ

「わかってるってガメル。」

『オーズの坊や…言え…明久…アंकとは話せたのかしら』

「はは…できたら苦労しないよ…」

アंकのコアだけ話しても何も返ってこないんだ

それが凄く寂しくて…

『アंकアंकって君はグリードの仲で一番アंकを気にかけているんだね』

『まさか…やきもちかしら力ザリ?』

『ち、違う!』

『やきもち食べるっつ』

「あははは！」

『わ、笑うな！』

「ごめん。ごめん…じゃあ帰ろ」

ゆっくりと三つのコアを体内に入れた

「お帰りみんな」

にかつと笑いながら僕は再び歩き出した

「……明久の真実？」

「そう！彼の本当の秘密を知りたくないかね？」

「アキ君の…本当の秘密」

久しぶりみんな。私は高町なのは

今、私、フェイトちゃん、まどかちゃん、ほむらちゃん、坂本君、土屋君、巧君に希ちゃん、文乃ちゃんに秀吉君で鴻上さんの所に呼ばれたの

「じゃあさっさと話してもらおうか明久の真実を」

坂本君たら相変わらず口調が荒いんだから

「いいだろう!」

鴻上さんはそう言った後に私達を別の部屋に連れて行った

そこは…オーズのメダルや立体像や剣など…沢山の物があつたの

「ようこそ!王の部屋へ!」

私はその時…コアメダルに目がいった

沢山のコアメダル…

「ほお…やはり君はコアメダルに興味があるのかね」

鴻上さんは笑いながら私達に見せてくれた

「何だあのコアメダルは…」

「俺のと同じ銀色」

「そうだよ巧君！君のメダルは元々はオーズの物だったのさ」

鴻上さんはそう言いながら秘書の里中さんから何かをもらって私達に見せました

これは…

真実と再生と恐竜グリード（前書き）

明久の真実が明かされます

そして次回は明久の過去編です

真実と再生と恐竜グリード

「アंक…」

セルメダルに赤い布を敷き僕はタカメダルを乗せた

僕の隣にはアंकが体をのっっていた生徒がいた

そしてここは僕の家…中には木下さん、杏子さん、後輩のティアナがいた

三人共アंकに思いを寄せている人だ

医者から言われた余命約2日…

この人はアंकが離れすぎたことでもう…命が助からないらしい

正直僕にとっては複雑でもあった

僕は医者の説得してこの人を家まで運んだんだ

新たな命を宿す為に

けど…それはもうこの人じゃない

アンの命となるんだ…

正直嫌だった…それでも決心したのはこの人を救う為…そしてア
ンに会う為だ

何でだろう…最初は追い出すことしか考えてなかった…

化物としてしか見なかった

けど…こいつと一緒にいてそうじゃない

僕はあいつと友達になりたいんだ…そう思っていた

「アंक…お前の欲望…叶えさせるよ」

アंकの欲望…命…人間になることだ

確かにセルメダルだけだからアंकは化け物だ

けど命を与えれば…形ではなく人としてあいつは…

僕も考えなきゃ…あいつを本当の人間にする方法を

「蘇るんだアंक！」

呼応するかのようにアंकのコアはセルメダルを取り込み…たちまちあの人の体に入っていた

「アン…ク」

目の前には金髪で赤い服を着たあいつが立っていた

「久しぶりだなあ明久…」

「「「アンク…！（先輩！）」」」

「うわあ！なんだお前ら！」

良かった…アンクは必要とされてるんだ

「はは…お帰りアンク」

見つけ出すよ必ず…お前を人間にする方法を

『呼んでる…私を』

『まどか？』

『行かなくちゃ…』

私はほむらちゃんを制し鴻上フアンデーションを後にした

『明君が呼んで…』

えっ！何？何で私…外に…

『うあっ…』

体内から何かが出る音がした…

天地を翻すかのように大雨が降り出す

『苦しいよ……なん……』

腕に違和感があり恐る恐る見る…

『えっ……いや!』

私の腕は黒と紫色の…怪物の腕に変わっていた

『いやあああ!』

私は叫びながら必死に走り出した

助けて…明…君

「雨だ…」

「かなり降ってるな…」

「どろどろ…」

ゴウゴウと音を立てる…凄雨だ

「仕方ないよね…みんなしばらく休んでいくといいよ」

「ありがとう…吉井君」

木下さんはお礼を言いながらアंकを見ていた

僕は邪魔かな？

「そっだ…ちょっと買い物いつてくるよ」

「この天気ですか!？」

ティアナは驚いたように立ち上がるが僕は笑った

「大丈夫。傘だつてあるし…そっだみんなはアंकとゲームでもやりなよ」

「おい明久!どうして俺がこいつらと」

僕はウイंकをしてリビングから玄関へ向かった

「ちっ…余計なことを」

「じゃあ行つてきまーす」

ガチャリとドアを開けすぐに閉めた

「全くアंकは素直じゃないなあ」

苦笑しながら傘を開き外へでる

うわあ…強いなあ…こりゃあ傘が壊れそうだ

今日の夕飯を考え歩いているとポケットの携帯が鳴った

「はい…吉井です」

返ってきた声は思いがけない人だった

『明君…助けて』

まどか!?

「もしもまどか?今何処にいるの!？」

僕は理由よりも場所を聞いた

弱った声…まどか傘持っていないのか…いやそんなことより何があったんだ

『文月…公園』

「わかった!すぐ行くから絶対に動かないでね!」

電話を切り傘を畳む

雨は冷たく…痛い…

「けど早く行かなきゃ！」

水が跳ぶくらい足を踏み込み走り出す

「はっ…はっ」

早く行かなきゃまどかが風邪を引いてしまう

ダッダッダと角を曲がったり物にぶつかるがお構いなしに走る

見えた！文月公園だ！

「まどかー!」

まどかはベンチで弱々しく横たわっていた

「まどか!...ぐがあ!」

な、何だ...何かが僕の体内に

「ぐあ...」

えっ...?何でカザリ達のメダルが...

訳がわからずとりあえずカザリ達のコアをポケットにしまう

「まどか!」

視界が...

僕は激しい目眩に襲われながらもまどかの元へたどり着いた

素早く内ポケットから携帯を取り出す

「もしもし…ほむら…文月公園にまどかがいるんだ！しかも弱っている…早く来てくれ」

ほむらは驚いたように返事をした

それを合図に電話を切る

まどかに傘を立ててふらついた体に鞭をうつように立ち上がって公園をでる

「ぐ…う…はあはあ」

激しい頭痛が襲い体はガクガクと震えだした

「なんだ…これ」

何で…体が

「うっ！」

駄目だ…意識が

明久は苦しむように倒れた

その目は紫色に光っていた

N O s i d e

オーズの部屋では沈黙が流れる

「では話そう！吉井明久の真実を」

鴻上は叫ぶと同時に語りだした

800年前…王の命令によりとある錬金術師がコアメダルを作っていた

そして錬金術師は王の命令により十枚目のコアメダルだけを取り除いた

すると9枚のコアメダルがコアメダルを求めて一つの塊となった

それがグリード…

「そしてそのグリードを倒す為に王が使用した物がベルトとコアメダル」

「まさか…」

「そんな物がなんでこの時代に」

「そしてオーズとなとた王は圧倒的な力で敵をねじ伏せたのだよ」

「その中にいた一人がアंकか」

雄二は納得するように呟いた

「しかし…大量のコアメダルを使用したオーズは暴走し…グリード達もたちまち封印されたのだよ」

「そんな…力に溺れて自滅したなんて」

フェイトは悲しそうに俯いた

「しかし！時が流れ…オーズは復活した！」

「けど…もし大量のコアメダルを使って王が暴走したと言っことはアキ君も」

なのはの言葉にみんなが俯いた

「その心配はないのだよ！！」

鴻上は高らかに吠えた

「吉井君こそオーズにふさわしい存在だ！」

「どういうことだ…何で明久がふさわしいんだ」

雄二の言葉にみんなが頷く

しかし鴻上は笑顔を絶やさない

「君達はわからないが吉井明久はかつて！仮面ライダーオーズに変身したのだ！」

鴻上の一言でみんなが驚いた

「そう…二年前…この時代にオーズが現れた」

「ちょっと待て！明久がオーズに変身したのは今年だ！」

「その答えは間違いだよ坂本君…いやバース」

鴻上は何かをめくるとそこには明久が映っていた写真があった

「どういうことだ…」

明久が変身している写真の下にはこう書かれていた

『吉井明久15歳…死去』

「どういうことだ！嘘はたいがにしろ狸」

「落ち着け雄二！」

「君達にはわからない…何故なら吉井明久という本当の人物は一度死んだのだ！」

「そして鹿目まどか！彼女もまた本当の鹿目まどかとして死んだのだ！」

その言葉はみんなの心を凍らせた

「何より吉井明久はオーズ…クガ王の子孫だ！素晴らしい！」

「どういつ…こと？アキ君が死んだ？アキ君がオーズの子孫…」

なのはは何かわからず呟くしかなかった

過去と僕とオーズ（前書き）

カウントザメダル

現在オーズが使えるメダルは

明久

タカ2

クジャク

クワガタ

バッタ

ライオン3

トラ3

チーター3

サイ2

ゴリラ2

ゾウ2

シャチ

ウナギ

タコ

プテラ3

トリケラ3

ティラノ3

サソリ

カニ

エビ2

オオカミ

映司

タカ2
クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
サイ
ゴリラ
ゾウ
プテラ2
トリケラ
ティラノ2

過去と僕とオーズ

「おっきろー！」

「どわあ！ふげぶ」

幼なじみ…鹿目まどかに掛け布団を思い切り取られて僕はベッドから転倒した

痛い…頭が朝からかち割れそうだよ

「おはよう明君」

「おはようまどか…相変わらず乱暴なんだから」

まどかは笑ったまま喋る

「明君が起きないのが悪いんだよ？」

うつ…言いかえせない…本当に言いかえせないよ

「全く…今日は卒業式なんだよ？」

「わかってるよ…」

今日は長月中学の卒業式…僕とまどかは桜が満開なこの季節で卒業するんだ

今日こそ…伝えなくちゃ

「まどか…あのさ」

朝食を食べていたまどかは時計を見ていた

「ああああ!!」

まどかの大声が僕の声を遮った

「明君！遅刻だよ！！」

「えええ！？」

時計を見ると時間は8時

しまった！何のんびりしてたんだ僕は！

バタバタと鞆を持ち急いで外に出る

「最悪だ！最後の最後で！」

「とにかく走ろうよ明君！」

まどかに促され急いで走る

が、その足は急に止まった

「忘れ物しちゃった!!」

「えええ!? 早く取りにいつて明君!」

「サーイエッサー!」

まどかの叫びにびりながらも素早く家に戻る

鍵を開けて素早くリビングに上がる…ドンとドアを蹴り飛ばし机に置いてあるメダルを取った

「これだけは絶対忘れないよね」

再び鍵をかけ急いでまどかの元へ走る

コアメダル…僕の家伝わってきた…家宝みたいな物だ

お祖父さんに渡され肌見離さず持っている

そしてもう一つ…僕の先祖が使っていたこのベルト…

これらはとても重要な物なんだ

「畜生！間に合わない！」

まどかを背負いながら全力で走る

「明君目が回るよ」

ごめんねまどか…今止まったら僕が走れなくなるんだ

「うおおお！」

見せてやる僕の本気を！

「うおりゃああああああああ」

風になるんだ僕！

一陣の風…

「ぐぐらああ」

ドカアと壮大に壁に激突した

ふっ…まさかこんな罨が…

「明君!」

目が、星が見えるよ

『きゃあああ』

『うわあああ』

「ぐふ!あべし!」

え?何?何なの今日は!

みんな何故ぶつかってくるのさ!!

「明君…」

「何？」

幼なじみの弱々しい声が聞こえ尋ねてみる

「あれ…」

まどかが指差した方向に…何かがいた

「え？」

怪人？仮面ライダーじゃあるまいし…何かのショー？

いや…シヨ―ならあんな光線当たらないよね？

なんてことを考えていたら光線はこちらに飛んできて頬をかすめた

「え？」

頬からは血が流れる

いやちょっと待って欲しい…

何これ？一種のパレード？

「明君！逃げようよ！！」

「えっ…あっ…」

まどかが何かに気づいたのか服を引っ張る

そうこうしている間にも光線が飛んできた

「うわあっ！」

なんとか避けて急いで逃げる

何なの一体！何で！

『きゃああ』

女性が打たれ…倒れる…血が…

「うえっ…」

急に吐き気がこみ上げ思わず吐き出した

「あ、明君！？大丈夫？」

まどかは背中から覗いてくるが見せないようにする

あんな恐ろしい光景…まどかには見せれない

「げほっ…」

何が起きているんだ…あいつらは誰なんだ…

再びきた吐き気をこらえ再び逃げる

「がはっごほ…」

「明君…」

まどかにさすってもらいながら僕は胃液を吐き出した

悲惨すぎるんだ…現実じゃありえない

でもこれは現実

『うわああ』

また悲鳴が聞こえた

「うわあ!」

「きゃあ！」

建物が破壊され激しい風圧が襲う

「え……？」

こちらへ確実に向かってくる……あの悲惨な光景の元凶が

『コアメダルを渡せ』

『……………』

二人いた……人間というレベルじゃない

化け物だ……

『コアメダルを渡せと言っている』

「あ…」

恐怖で声がでない

そつえば…昔お祖父さんから聞いたことがある

コアメダルによって出来た化け物がいたということ…

目の前にいる奴らは無口な奴は恐竜のような姿だ…

そして今喋っているこいつは…

『コアメダルを渡せ！！』

「うわっ！」

放たれた光線を避けまどかを連れて逃げた

もう一人の奴はユニコーンに似た姿…ケンタウロスのような足…そして翼…

金色の色をした化け物だ

けど…何だろう

何故か…僕はこれをわかっていた気がする

突如…何かのビジョンが見えた

それを理解した時…何をすればいいのかわかった

戦闘なんかしたことない

遊び感覚でしかなかった

でも…今は遊びじゃない

命をかけた…戦い

昔…僕の祖先がこの力を使ってたなら

「まどか…」

僕はゆっくりと幼なじみを見る

「逃げるんだ…」

「え？」

彼女を巻き込む訳には行かない…

「逃げて逃げて…逃げ延びるんだまどか…」

「明君…？」

「早く行くんだ！」

僕はまどかに叫んだ…まどかは悲しい顔をしていた

「ごめんねまどか…」

僕には結末がわかるんだ…

僕は…

「明君…連絡してね？」

これが幼なじみの最後の言葉だった

僕は頷くことしかできなかったんだ

昔…こう言われたんだ

『神の力に近づく者には…それなりの対価が下される』

僕は…馬鹿だけど…天然だけど…

ずっと…告白すらできずにいたけど

そんな僕だけど…今…確かに僕でもやれることがあったんだ

ゆっくりと封印のベルトをつける

ベルトの石は割れ、本来の姿が現れた

『…何？』

『それは封印の…』

ゆっくりと三枚のメダルを入れ…腰にある物で読み込んだ

何故かわかった…変身の仕方が

「変身！」

『タカ！』

僕が…

『トラ！』

僕が…！！

『バッタ！』

変身する！

『タツトツバ！タトバ！タ・ト・バ』

姿が変わった瞬間巻き起こる巨大なオーラ

『ぐ……』

『ぐああ！』

オーラは街の一部を破壊した…

強力すぎる力…僕はそれに近づいてしまったんだ

彼女がああ破壊された中にいないことを信じて…

もう後戻りは出来ない

この世に再び…王が…オーズが降臨した

封印と圧倒と爬虫類コンボ

「なんだ…この力は…」

「あれがオーズだと…」

二体のグリードが驚く中…メダルの戦士オーズは歩み始めた

それは…歩くごとに地面にヒビがはいり…威圧感が増した

「……………」

メダルの戦士はグリードに歩みより攻撃を始めた

「ハアアア…」

繰り出された拳に恐竜のグリード…ギルは防ぎきれず腕を破壊される

「ぐは……」

セルメダルが落ち……ギルは跪いた

「ふん……！」

放たれた蹴りを受け止めオーズは逆に蹴りを放つ

「ぐがあ……」

「うお！」

タトバコンボは金色のグリード……カイクに蹴りを放った

「ふん……」

しかしその蹴りは簡単に受け止められ逆に攻撃を受けてしまう

「ぐは…」

明久side

「セイヤ！」

トラクローを展開し金色のグリードに攻撃を放つが簡単に受け止められる

強い…

「オーズとはその程度か…ふん！」

「ぐあ…」

くっ…恐竜グリードだけでも

「何？」

恐竜グリードは腕が復活し…さらに強化していた

「残念だな…俺の力を甘く見るな」

顔はティラノのような赤い目に牙…体はトリケラのようにながっしりしている…

足もティラノのように鋭く背中にはプテラの翼

「ハア…！」

恐竜グリードは剣を出し切りかかってきた

「ぐああ…」

切り裂かれ火花が飛び散る

さつきと違い…あの金色グリッドより強くなっている

「余所見してんじゃねえよ!!」

「ぐあっ！」

蹴り飛ばされ光線を受けてしまった

「ぐは…」

つ、強い…

「なんだ？噂に聞くオースとはこの程度か」

「とつとと消える雑魚」

言いたい放題言ってくれるじゃないか

「まあ…貴様が俺らに勝てる訳ないよな…なんせ俺らはお前が封印された後に覚醒したからな」

「何…どういうこと…覚醒って」

「オラアア！」

繰り出された攻撃を防御しながら反撃に出る

「やわだな！オラアア！」

「ぐああ……」

攻撃は通じず逆に攻撃を喰らう

「ふ……！」

恐竜グリードは手から光弾を放った

「ぐああ……」

わからない……どうやったらこいつらに勝てるんだ

「オラアア！」

「うわああ！」

金色グリードの攻撃を受けて建物に衝突した

「がは…ぐは」

体中が痛い…苦しい

「ぐっ…っおおお！」

こんな所で負けるかああああ！

「何っ…」

体中から力が溢れる…

いける…!!

「うおお！」

全力で走り加速する

「何…!!」

「セイヤアア！」

そのまま跳び蹴りを金色グリッドに放った

「ぐお…」

メキメキと音を立てそのまま吹き飛ばした

「ぐがあああ」

金色グリートは吹き飛ばされビルに衝突する

「はあ…はあ…今のは？」

確か体中から力がみなぎって…

コアメダル…そうか！

「ふ！」

飛んできた光弾を避けて恐竜グリードを見る

「はああ…」

低く構えバッタレグで飛び上がる

「くらええ！」

空中にいる恐竜グリードに目掛けて回し蹴りを放った

「ぐ…ぐお」

「しゃああ！」

怯んだ所を思い切り蹴り飛ばし恐竜グリードもビルに叩きつけた

「そうか…なんだか僕でもわかってきたぞ！」

これが神に等しい力…

「やってくれんじゃねえか…」

金色グリードがビルを破壊し光線を放った

「……ふ」

片手で受け止め逆に跳ね返した

「く…」

そつだよ…恐れることなんかないじゃないか

「覚悟しろ…僕は…この世界ごと壊してしまう」

「は…馬鹿なことやってんじゃねえぞオース！」

タトバコンボのメダルを抜き取り別のメダルを入れる

「お前を倒すことで僕は…」

この街を…

スキャナーを手に取り読み込んだ

『コブラ！カメ！ワニ！』

このメダルは昔…錬金術師ガラが封印したと言われている封印のメダルだ

『ブラカ〜ワニ！』

サークルは金色や茶色の色に変わり

それにあわせてタトバから顔は紫色の瞳をした蛇…そしてターバン

体は恐竜グリードよりも堅い体

足はワニを連想させる鋭い足

これがコンボだ…

『うお……』

ブラカワニに変身した瞬間か砂嵐が巻き起こり街の半分を飲み込んだ

これじゃ……まるで僕が悪じゃないか

「面白れえ」

金色グリードは足をケンタウルスに変化させた

僕は紫色の瞳を光らせ相手を見た

「覚悟しろ……君のメダルも貰う！」

「ほざけ……ウオオ！」

突進か…やる気満々だね

腕についている甲羅を突き出し突進を防いだ

「何っ！」

「ハアアア！」

そのまま飛び上がりワニの足で蹴り飛ばした

「がああ！腕が」

セルメダルが落ちその中にはコアメダルもあった

「三枚…十分だね」

「ふざけんなああ」

ケンタウルスの足を閉じ金色グリードは剣で攻撃する

「ハアアア！」

僕は蹴りを放ちその剣を砕いた

「ふっ…ハアアア！」

そのまま連続で蹴り飛ばし体を砕く

「セイヤ！」

「ぐおお…」

笛を取り出し吹き始める

さあ…頼むよ…！

「貴様…ぐお…」

笛を吹けば蛇が金色グリードの首を締め付ける

『シャアア』

僕のターバンの後ろから蛇が現れそのままグリードを攻撃…噛みついた

「ぐああっ！」

笛を投げ捨てスキャナーを手取る

『スキヤニングチャージ!』

「ぐ…はあはあ」

三つの輪ができて僕は地面をスライドする

「ハアアア!」

クネクネとへびのように動き

「セイヤアアアア!」

そねまま両足でグリードを噛み砕いた

「ぐ…あああ」

「ハアアアア！」

グリードはベルトが碎け爆発を起こした

「馬鹿な…うわああああ」

コアメダルを掴んだ

金色のコアメダルか…

「カイを殺るとは手応えがありそうだ」

地中から何かが現れ恐竜グリードではない声が聞こえる

「お前は…」

サソリ…カニ…エビい？

「スルだ…甲殻類グリードのスル」

スルはまるで武士のようなグリードだ…

…このコアメダルの…

「グリード…なら行くよ…」

ブラカワニのコアメダルを外し黒いコアメダルを入れる

「何っ…何故お前が」

「完全体のグリードは10枚…けど黒いコアメダルは…10枚じゃない13枚あるんだよ」

わかってきた…なにもかも

僕は…このグリードに勝てる

「じゃあ…同じ力…どちらが強いかな勝負だ」

スキャナーを手に取り読み込んだ

封印と圧倒と爬虫類コンボ（後書き）

カウントザメダル

明久（過去）

タカ

トラ

バッタ

カメ

コブラ

ワニ

サソリ

カニ

エビ

ユニコーン3

ペガサス3

ケンタウロス4

甲殻コンボと愛と神話のコンボ（前書き）

今回はオリジナルコンボの登場です。アイデアをくださり本当にありがとうございます！

甲殻コンボと愛と神話のコンボ

『サソリ！カニ！エビ！』

体から黒い波動が流れ姿が黒くなっていく

『サッカービ！サカビ！サカビ！』

「うおおお！」

覆われていた甲殻を破壊し僕は闇のコンボになった

『…俺と同じ…』

「そうさ。君と同じ姿だ」

見た目は全然違っけどね

「面白い…」

スルはゆつくりと剣を構え僕はクラブシザーを展開した

「「うおお！」」

同時に走り出した

「くられ！」

スルが繰り出した剣をクラブシザーで挟む

全然甘いよ！！

「オラアア！」

蹴り飛ばし剣をへし折った

「ぐ…ああ」

「やっぱりグリードはたいしたことないね」

腰に手を当て胸を張る

「貴様…うおお！」

スルは体から波動を放った

「ぐ…」

なんて邪悪なパワーだ…

「うおおー！」

スルは巨大なクラブシザーを振り落としてきた

ちよっパクリ！？

「危なっ！…ぐ」

パワー比べか…喧嘩なんかしたことはないけど…

「ふぬぬ…」

スルの巨大なクラブシザーを持ち上げる

気合いなら負けない！

「な…うおお」

油断した所を蹴り飛ばした

ふう…

「ぐ…貴様」

「ハッ！」

地中に潜り僕は姿を消した

「何！？…こんな力俺には」

地中から狙いを定める…上手くいけば一撃だ

「まさか…オーズの力！？ぐお！」

「くっ…失敗した」

後ろを攻撃しようとしたけど見事によけられてしまった

「ふざけるな！うぐおお」

「ぐ…」

再び放った波動に吹き飛ばされる

正直…吹き飛ばされるって本当に痛いんだよね…

体中がまるで壁に思い切り張り付けられたように

「うおおー！」

「ぐ…」

繰り出されたアームを避ける

「ふん！」

「ぐあ！」

早い…こっちが攻撃しても防いでもすぐに別の攻撃が

落ち着け…なら

「ハアアア！」

毒を流す！

繰り出されたアームを避け素早くスルにサソリヘッドを伸ばして突き刺した

「ぐ…」

「がはっ…」

僕はスルのクラブシザーをまともに受け後ずさる

流石に完全体連続は…キツいか

「ぐ…がふ…貴様まさか毒を」

「うん…君が繰り出した攻撃を受けることになったけど…」

スルは苦しむようにクラブシザーを落とした

今だ！

「でやああ！」

「ぐお…」

スルを力の限り蹴り飛ばした

「ははっ…どうだ…うぐ」

何だこれ？頭が…

そつか…サカエビは…自らを喰らっ…

「うわああ！」

気合いでスキヤナーを手取る

頭が…壊れそうだ

「うぐ…く…」

体の痛みに耐えながらもメダルを読み込んだ

『スキヤニングチャージ!』

「うおおお!」

地面に潜りスルの後ろに回った

「何っ!」

時間がない!これで

「どうだあああ!」

クラブシザーで捕まえて頭のサソリヘッドで大量の毒を流す

「ぐ…ぐが…そんな」

「うあああああ！」

ぐ…頑張れ僕！

バキバキと毒はセルメダルを破壊していった

「ぐ…あああ！」

「うわあああ！」

スルは爆発を起こし衝撃に巻き込まれ僕は吹き飛ばされた

「がっ…」

地面に叩きつけられたけど…どうにか破壊が…

「ぐ…あ」

急いでメダルを取り出し投げる

「うおりゃあ」

チャリンと音を立て黒いメダルは残りの10枚の元へ転がっていった

「はあ…はあ」

サカエビコンボ…危うく闇に支配される所だったよ…

「後は…」

体中が痛む中ゆっくりと立ち上がる

『まさか…奴らが倒されるとは…』

あいつ…恐竜のグリードだ

「変身」

『タカ！トラ！バッタ！』

『タットツバ！タトバ！タ・ト・バ』

タトバコンボに再び変身して構える

これが最後だ…！

「こい！恐竜のグリード！」

『いいだろう…君を無に返してやろう』

恐竜のグリードは静かに降り立つ

今までとは比べ者にならない…威圧感

「うおおー！」

僕が走り出し勝負は始まった

「はあー！」

『ぐっ…』

繰り出した拳に…恐竜のグリード…ギルは後ずさる

「オラア！」

蹴りを放つが掴まれた

ちよっさっきのは演技！？

『はっ！』

「ぐべっ！」

ギルの拳を受けて変な声が出てしまった

『ふん！』

「ぐあ！」

ギルの猛攻は続き殴られ蹴り飛ばされ切り裂かれた

「ぐ…うつ」

思わず跪く…パワーがケタ違いだ…

ん？黒いメダル！

「よし！」

黒いコアメダルを拾った瞬間にギルは冷気をまとった拳を放った

「うわ！」

とっさに防御に出たのが…不幸だったのか

「な…ええ！」

黒いコアメダルが3枚砕けてしまった

ギルの能力はコアメダルの破壊？

『ふっ！』

「うわっ！」

再び放った拳を避ける

『素早いな…なら』

ギルの足から何かが…まさか！？

『ウオオ！』

ギルは紫の波動を放った

「うわあ！」

まともに受けてしまい…

「ぐああ」

タトバのメダルは砕けてしまった

勿論…砕けてしまえば変身は…解除される

「うぐ…」

地面に叩きつけられ体が痛む

頭や首…腕や足から血が流れる

軽く骨折もしている…

それでも…あまり痛みを感じないのは…

『終わりのようだな…』

「まだ…だ」

自分を勇気づけているからだ

僕は…人を…街を破壊した

けど…僕は…それでも人を守りたいんだ

「たとえ一人でも…弱くても」

急に…血が流れている手が温かく感じた

「明君は一人じゃないよ…」

「まど…か？」

そこには魔法少女の姿をした幼なじみがいた

『…消える…』

ギルは紫の光弾を放った

「う…」

思わず目をつぶった…けど何も変化がない

「え？」

僕は守られていた…彼女から出ている何かに

「大丈夫だよ明君」

まどかはにっこり笑った

『何…？』

ギルが驚く中…僕は呆然としていた

「明君…戦って…もう一度…」

まどかはゆっくりとオーズドライバーを渡す

「…勝てるかな…」

メダルを砕くあんなグリード…僕は知らない…

そんな奴と戦って勝てるのだろうか

「明君なら大丈夫だよ…」

まどかはそう言って顔を近づける

ちよつ…えっ!?

まさか…

『…ふっ!』

ギルは光弾を放つが跳ね返って吹き飛ばされた

いやそれよりも…何か唇に温かい感触が

「頑張って仮面ライダー！」

僕は自然と笑顔になり頷いた

「うん！」

わかってる…この先何が起きるか…

「私なら大丈夫…どんなに街が消えても明君のそばにいるから」

ありがとうまどか

勝算が決まってもいい…けど諦めたくはない！

「変身！」

『ユニコーン！ペガサス！ケンタウロス！』

金色のコアメダル of の力を使って僕は神話 of の力を手に入れた

サークルは金色に変わり僕を包み込む

『ユゝガゝロオオス』

「ハアアア！」

金色の波動が弾け飛び街がまた消える

（ユーガロスコンボ：見た目はユニコーンガンダムをオーズ風に
してラプラスの箱とNT-Dと変形と武器を外して背中にペガサスの
翼をつけた感じとなっています）

ギルの前に立つ…必ず勝つ

『貴様…その姿…そして何故そんなに平気なのだ』

「君には絶対わからないよ…愛の力が!」

大切な人が見守ってくれる…それは最強の鎧になるんだ!

『愛だと?ならばその力ごと無に返してやる!』

「碎けるものならやってみろ!!君じゃあこの鎧は破壊できない!」

静かに構える…神を連想するように

「行くぞ!」

ギルと同時に翼を展開し大空へ飛び立った

弓と決着と無限の力（前書き）

過去編終わります

いろいろと変な部分もありますが気にしないでいただくと嬉しいです

カウントザメダル

サソリ 3

カニ 3

エビ 4

ユニコーン 3

ペガサス 3

ケンタウロス 3

弓と決着と無限の力

「はあああ!」

『ぐお!』

最後の戦いが始まった…僕は空中で拳をギルに叩きつける

『おおっ!』

「ぐ…」

ギルもまた肩を殴ってくる……

ぐ…力は五分五分…けど油断したらやられる

「うおお!」

僕はさらに飛び上がる

「はあああ！」

腕に力を溜める…拳は光り出し灼熱となった

「おりゃああ！」

空中から急降下し力の限り叩きつけた

『うがぁ！』

熱がギルの鎧を溶かす…次は

「これだあ！」

足に灼熱をまとい地上へ蹴り飛ばした

『ぐは…』

ギルはそのまま地面に叩きつけられた

だいぶダメージを受けているはずだ

「はっ…」

翼を閉じ静かに降り立った

『なる程…オーズはやはり未知数だな』

煙が払われギルが立っていた

馬鹿な…ダメージは確実に通ったはずだ

『…オオオ』

な、何だ！？

「えっ？街が…！飲み込まれていく…」

いや違う…街がセルメダルになりギルへ吸収されてるのか…

『さあ…決着の時だ』

ギルは巨大なキメラへと姿を変えた

「ちょっ…でかいにも程があるって！」

『グガアア!』

もはや怪獣レベルだ…

『グガア!』

ギルは巨大な尻尾を振り回した

大丈夫…動きが遅いはず

「うわあ」

僕は尻尾に叩きつけられ吹き飛ばされた

「ぐあ!…は、速い…」

『グガアア!』

ギルは巨大な翼で飛んでくる…

僕は足についている双剣を取り出し構える

「こい！勝負だ！」

『ギアア！』

ギルが放った火球をかわしながら翼を広げ舞い上がる

「しゃああ！」

ギルの腹を双剣で切り裂いた

『グガアア！』

「ぐわ！」

ギルは怯むことなく僕を叩き落とした

「ぐ…！？うわあ」

巨大な火球が飛んできたのを避ける

『ガアア！』

ギルは火球ではなく冷気をまとった攻撃を放つ

「ぐ…うおお！」

すかさず剣で防ぐけど…なんてパワーだ…

「ぐああー！」

力負けをして吹き飛ばされる

「ぐ……」

何だ……？足が凍ってる？

『ギアア！』

「がはあ！」

ギルは巨大な足で踏みつけてきた

油断していた僕はまともに喰らってしまった

「ぐ……」

意識が……体が動かない

『ギオオ!』

「…っ」

再び踏みつけられ体中が悲鳴をあげる

声すらでない…

『グガアア!』

「」

どうすることもできない…このままじゃ死んでしまう…

『グアア!』

何度も踏みつけられ意識だけはかすかに残っていた

強すぎる…これが最強のグリードの力…

「明君！立ち上がって！」

まどか？

『グギヤアア！』

ギルの攻撃が突如止まり…そっちを見ると…まどかが矢を放っていた

「明君…頑張つて！」

まどかは僕の側に飛んできて矢を打ちまくる

『グガアア!』

ギルからは沢山のセルメダルが落ちる

「ぐ…あぐ」

ボロボロになった体を起こす…僕はまだ諦める訳にはいかない!

「明君…いくよ?」

「了解!」

腕や足、体中の骨はもうズタズタなのに…力が湧き上がるのは…

「うおおお!」

まどかのおかげだ…

ケンタウロスのように四つの足に変化させた

「明君！」

見える…そこだ！

僕は人間の視野じゃ見えない範囲から放たれた攻撃を防いだ

天馬のように…地上を…空を掛ける

「うおおお！」

『グガアア！』

ギルの攻撃を交わし腹を切り裂いた

さっきとは違い大量のセルメダルが落ちる

『ギアアアア!』

「
…」

まどかは静かに矢を引く

終わらそう

さよならまどか

『スキヤニングチャージ！』

スキヤナーを投げ捨て双剣を合体させた

それは弓となり光をまとった

「……………」

ユニコーンの角を矢に変える

そして静かに矢を引く

これで最後だ！

「はああああ！」

まどかと僕が放った矢は合体して巨大な光になった

『ギ…ア』

巨大な光はギルを貫いた

『グガアア！』

ギルは大爆発を起こしチリになった

紫のメダルが静かに落ちる…

「終わった…」

辺りは何もなく…彼女とメダルしかない…

「……………」

体がガクンとなる…

「明君…」

変身を解き体から激しい疲れを感じた

「わかってるよ……」

ごめんね……まどか

「ありがとう明君……私明君と出会えて」

僕の頬からは涙がつつた

「僕は悪だ……人々の命を奪い……大切な人すら」

「違うよ……明君はみんなを守る為に頑張ったんだよ……明君は十分すぎる程人を救ったんだよ……？」

違う……僕は……無力なんだ……

「じゃあ…明君…私行くね？」

僕はまどかの腕を掴んだ

「明…君」

まどかをずっと抱きしめた

これしか出来ない…これしか…

「明君…」

コアメダル…その力は十分に解き放たれた時…器に等しい者が使用することで世界すら修復させてしまう…

十分に解き放つことができるのはオーズである僕だけ

そして器に等しい者は…僕かまどかなんだ

まどかは…錬金術師ガラの子孫だった

しかもまどかは特殊で…不思議な力があつたんだ

それはコアメダルを生み出す力

それにより黒いコアメダル…金色のコアメダルが誕生した

そして…その力に反応するように紫のコアメダルが現れたんだ

まどかは…こういったんだ

『誰かの為に…人の命を救えるなら私はこの身を犠牲にしても構わないと』

僕が器にならないのはオーズの力を使用したからだ

それにより僕は力を解き放ってしまい…満たされないんだ

だから…力を使っていないまどかは簡単に満たされる

けどコアメダルの力は強すぎて…命を奪うんだ

まどかは紫のコアメダルの力を使い世界を修復させるつもりなんだ

でも紫のコアメダルは強すぎるからまどかは簡単に死んでしまうかもしれないんだ

それでも僕は彼女を救いたいんだ

「明君…私満足してるから…」

まどかの瞳から涙が落ちる

「僕は…満足していない…」

君が消えるから

オーズになったから満たされなくなったんだ

神に等しい力は大事なこと…人を奪っていくんだ

「まどか…」

「そんな悲しい顔をしないでよ明君！私…の方が…悲しく…なるよ」

「……………うぐ」

僕らはもう一度抱き合った

例え悲惨な結果になっても僕はオーズに変身していた

僕は求めていたから…この力…そして愛を

「もし……………私が…」

まどかは涙を流しながらゆっくり呟く

「私になれたら…結婚して…ね明君」

まどかの言葉にゆっくり頷く…大丈夫…何年でも待つから

「じゃあ…いくね？」

まどかはそう言って紫のコアメダルを取り込んだ

「ごめんね…きっと私以外にも犠牲者が出るから」

まどかはそう言って僕から金色のコアメダルと黒のコアメダル…オーズドライバーを受け取った

「行つてらっしゃいまどか」

「うん…」

まどかは紫の翼を広げ飛んで行く

僕はその姿が見えなくなるまで見つめた

本当にありがとうまどか

僕は君のおかげで戦えたんだ

僕の頭から何かが消えていった

「……………」

膝をつきゆっくりと倒れた

こんなに眠いのは…

久しぶりだよ…

「ねえまどか…僕は君が」

そつと碎けたタカメダルに触れた

「さよなら…僕」

朝…僕は揺すられて起こされた

僕のベッド…二人の幼なじみが見守る中…

僕はゆっくりと起き上がった

「おはよう…二人共」

今日は文月学園の受験日だね

吉井明久は死んだ…そのことは誰もわかりはしないし…

本人すらわからない

コアメダルの力で吉井明久は蘇った…

しかし…それは本来の明久ではなく何もかもが違う別人の明久だ

そして鹿目まどかは死んだ…本当の彼女は…紫のコアメダルに眠っ

ているのか砕けたのか…知るよしもない

二人は新たに生まれ変わり…新たな人生を歩み出したのだ

二人にとってそれは悲しいことでもあるが…二人は気づかない

そして…コアメダル…この存在だけは…残っていた

何を意味するのかは…誰もわからない

ただ…吉井明久の欲望が存在しないことが過去を物語っている

弓と決着と無限の力（後書き）

カウントザメダル

明久が使えるメダルは

プテラ

目覚めと先生と殺意（前書き）

更新が遅くなるかもしれませんが

皆様の一言一言はとても嬉しいです

バカテス小説を読んでいただきありがとうございます！

目覚めと先生と殺意

「ぐ…うつ」

ゆっくりと目蓋を開く…あれ？ここは

「アキ君良かったあ…」

「気がついたんだね明久」

「なのは？フェイト？」

体を起こし辺りを見回すと病院だった

「おはよう吉井君…」

隣から声が聞こえてきたのでそちらを振り向くといつもお世話にな

っている医師がいた

「シャル先生…」

金髪に笑顔が似合う人だ…シャル先生はこの病院の有名な医師なんだ

僕は関節やコンボで疲れた時はいつもお世話になっている

「気分はどうですか吉井君？」

「あはは…特に異常無しですね」

笑って答えるけどシャル先生は困った顔をしていた

「それより僕は…まどかは！幼なじみは大丈夫なんですか？」

安心している場合じゃない！今はまどかが心配だ…

「落ち着いて吉井君…」

シャル先生は僕を寝かせた

「まどかちゃんは大丈夫だから…ね？」

僕は力なく頷いた

「皆さん…私は吉井君にお話したいことがありますから…少し出て貰えるかしら」

なのははこくりと頷きいつの間にか雄二達を連れて部屋から出た

「吉井君…何度も言ってるけど…自分の体を大切にして…ね」

「先生…僕も何度も言いますが…無理なんです…」

シャル先生は悲しい顔をしながら抱き寄せた

え？あれ？

「吉井君…あなたは本当に可哀想…私が変わってあげたい程…あなたは傷ついているわ…」

「シャル先生…」

その後…僕はまどかの体調を聞いた…

幸いにも伊達先生が通っていたから素早く治療してくれたんだ

伊達先生は有名な医師らしいからまどかは今頃大丈夫なはずだ

ただ…気になるのは何故まどかが倒れたのか…僕に何が起きたのか

何かを感じたんだ…強力な何かを

『ヤミーが…いるぞ』

え？

『人を助けるんだろ？』

！？

僕は点滴を剥がしベッドから出た

「吉井君！？何やってるの？」

「シャル先生…僕大丈夫ですから」

シャル先生を押しつけメダルとドライバーを掴んだ

素早く部屋を出たのはいいけどなのはが何かを言っていた

「早く…倒さなきゃ！」

何かが僕を呼んでいる！

僕に戦えと何かが伝えている

「吉井君！待って！」

シャル先生がすぐさま追いかけてくる

『あいつを殺せ』

え？何だ…また何か頭に

『邪魔なんだろう？』

「う…ぐ…ああ」

瞳が紫色になったことにも気づかず今の僕には激しい殺意が芽生えた

「うぐああ！」

大きく叫びシャル先生に襲いかかった

「!?!?きゃあ!」

え?シャル先生!?

何だ…僕刃物を…

手が止まらない!?

「シャル先生!避けて!」

「きゃああ!」

間に合う距離じゃなくシャル先生は悲鳴をあげた

「女性を刺そうなんて…駄目だぜベイベーちゃん」

いきなり現れた男性に僕は腕を掴まれた

「よっ」

「うぐ…」

バチンと叩かれ刃物が落ちる

「たくっ…何があつた吉井」

「伊達先生…」

伊達先生はニカッと笑いながらも真面目な目をしている…

「何で…先生が」

「ああ…ちょっとな…」

伊達先生は苦笑いした後シャル先生に手を差し伸べた

「立てますか？すみませんね…吉井の奴疲れているんですよ」

「あ…はい。わかってます…あ！ありがとうございます」

シャル先生は俯きながら伊達先生に手を伸ばした

あれ？まさかシャル先生…

「吉井…どうしたんだお前」

「ヤミーが……現れて」

先生はしばらく黙り込み僕を病室に引っ張った

えええ！？

「休め吉井…今のお前は戦うな」

「はいい！？」

シャル先生は笑顔になり僕を後ろから押した

「ちよっ先生！僕は平」駄目よ」「安静にしろ」

駄目だ…伊達先生力が強いから逃げられないや

「そういうことだからよろしくっ坂本ちゃん」

「…了解だ」

「雄二！？僕も行くから…助け「駄目だ」」

雄二は真剣な顔で言い放って助けてはくれなかった

なんで…

「アキ君…ゆっくり休んでね」

「無理しないで明久」

「俺と雄二に任せとけ」

ちよつと待つてよみんな！

「僕も行くから！」

「駄目よ吉井君はまどかちゃんと寝ましよう」

え？まどかがいるの？

伊達先生を見ると先生は目を逸らした

「そんなことより」

「離してよおおー！」

恋心と治療とキャタピラレッグ（前書き）

題名の通り雄二が活躍します！

恋心と治療とキャタピラレック

「あの…」

「駄目よ吉井君」

「いや…まだ何も話してないじゃないですか」

病室…僕は隣で眠っているまどかを眺めながらシャマル先生に質問を遮られた

「抜け出そうとしてたんじゃないですか？」

「うっ」

その通りだ…僕は早く行かなきゃいけないのに

「点滴してるから…それに伊達さんが今吉井君の診断結果を出して

るのよ」

「う…そ、そうですね…」

確かにさっきの僕の行動を疑問に感じた先生は診察をしていた

シャル先生…いきなり服を脱がせようとしたきたから大変だったなあ

「あれ？シャル先生…確かこの病院に伊達って人は居なかったはずですね」

シャル先生は少し静かな顔になり口を開いた

「伊達さんは…頭に弾丸があつたの」

「え！？」

初耳だ…伊達先生は保健室でヘラヘラといつも笑っていたのに

「伊達先生に初めて会った時…」

「…はい」

シャル先生は有名な医師だから文月学園にもちよくちよく来るんだ

毎年、保健の先生に会いに行って講義しているらしい

「何故かわかったの…伊達先生に…弾丸が埋まっていたこと」

「……………」

黙って驚くしかなかった…

「私はすぐに治療を始めたわ…伊達先生は相変わらず笑っていたわ…失敗したら命が無いのに」

「あはは」

「無事治療は成功…その時のあの人の顔が忘れられないの」

先生は近くにあった花瓶を手にとった

「ふふ…『あんたの腕前に惚れた…是非この職につきたいって』…」

「…あ」

何故か喋ってはいけない気がした…

シャル先生はもしかしたら…

「よっ何話してたんだ？」

「ひゃあああ」

伊達先生がいきなり現れシャル先生は飛び上がった

「先生！いきなり現れないでくださいよ！」

シャル先生…顔が真っ赤だ…

「わりい…ちょっといたずらしたくてな」

ニカッと笑いながらシャル先生に謝っていた

…本当にびっくりしたよ…伊達先生は何者？

「診断結果が出た。吉井…お前…やっぱり戦うな」

「はい！？」

「いやいや！いきなり何言ってるんだ！」

「僕は何も異変ないし」

「強がるな…お前の体…そろそろ限界だぞ」

「え？」

「限界…？それって」

「…吉井君…あなたやっぱり…」

「どういふことですか先生？僕何も違和感なんて」

「お前…コンボ使った時前の火野みたいに倒れてるだろ？」

火野？伊達先生は火野先生と知り合いなのだろうか？

「はい……」

「お前の場合…高校生だ。火野とは違う…」

伊達先生はそう言いながら何かを取り出した

「シャル先生から貰った…お前の今までのカルテだ…」

そこには沢山のことがかかれていた

全身打撲… 右足骨折… 左肩脱臼… 両手捻挫… 全身骨折

「こ…こんなにすごいことになってたんですね」

「わかるか吉井？ シャマル先生はお前の為にわざと見逃してくれてたんだ」

シャマル先生は俯きながら花瓶にふれていた

「それでも今は大丈夫ですし」

「それが怖いんだよ…いくら怪我は治ってもお前の場合は異常だ…必ず何かが残っている」

伊達先生は完全に治ってないと言いたいんだろう

「いいか吉井…お前はこの先戦えば必ず…体にガタくる」

伊達先生は真っ直ぐ僕を見たまま告げた

「恐らく…数回戦えばお前は…大変なことになるぞ」

雄二 side

「さあて…今日はだいぶストレスたまってるから発散させてもらうか」

ミルク缶をゆっくり下ろして俺は隣にいる巧に声を掛けた

明久がいない分結構厳しいかもな

「巧！一氣に片付けるぞ」

「ああ…そのつもりさ！」

俺達は目の前にいるクロアゲハのヤミィを睨んだ

『何？欲望の邪魔しないでくれるかしら』

銀行を襲ったってことは金関係か…

全く…まいっちまうな

「そもいかなんだよ。今日は翔子の電気スタンガン喰らってだいぶストレスがたまってんだ」

ベルトを腰に巻きセルメダルを取り出す

「たくっ…あの人形先生も変な趣味してやがる」

このベルトを作ったのは文月学園の教師真木だ

「まっ…俺にとっては得だな」

巧もベルトをつける

ピンとメダルを弾きキャッチする

「変身」

セルメダルを穴に入れてギリギリと回す

『カポン』

いつ聞いても違和感があるな… まあ明久よりはましか

装甲に包まれ俺は仮面ライダーバースに変身した

巧もディアスに変身したようだ

「さて… 稼ぎますか」

パンと両手を合わせ素早くバースバスターを取り出した

明久の野郎… 無茶ばかりしやがって

俺らが明久の分まで戦わないとな

「いくぞ雄二！」

「ああ！こんな雑魚すぐに片付けてやる！」

会話が途切れた瞬間俺は走り出した

「オラアアア！」

バスターからセルメダルの光弾を連射する

『きゃああ』

へっ！楽しいぜ

「まだまだあ！」

ズガガガと連射して的確にヤミーに当てる

一発一発は強力だからヤミーはたまらずに吹き飛んだ

「ウオオ！」

巧は巨大なハンマーを取り出しヤミーを殴る

「ちっ…弾ぎれか」

バスターを投げ捨て俺は肉弾戦にはいった

「オラア！」

ヤミーの顔を殴りつけヤミーが攻撃をしかけたらすかさず交わして

腹を殴る

『うつ』

「しゃあー！」

回し蹴りをヤミーに決め巧が手についている巨大クローで殴り飛ばした

「はっ…やっぱりヤミーじゃ相手にならねえ」

コキコキと首を鳴らしながら構える

「雄二…ヤミーだからって油断すんなよ」

「ああ…わかってるわ」

セルメダルを取り出しベルトに入れる

そして再びキリキリと回す

『カポン！』

カプセルが開いた

『キャタピラレッグ』

両足のカプセルから機械が現れ俺の足に武装した

キャタピラレッグか…確かにでかいな

『くっくっ…おのれ』

ヤミーが立ち上がってきたか

「寝とけばいいのに…なっ！」

素早くキャタピラレッグで走り回し蹴りを放った

『くああー！』

「オラ！」

片方で踏みつけもう片方で蹴り飛ばした

『く……うつ』

「俺の役目は…終わりだな」

巧は変身を解くが確かにトドメだ

もう一度メダルを入れて回す

『セルバースト!』

キャタピラレッグが光り俺は低く構えた

「しゃあああ!」

回し蹴りを何発も放ちトドメに跳び蹴りを喰らわせた

『く…ああ』

ヤミーは体が崩れていき爆発する

『ああああ』

セルメダルにたちまち分解されバラバラと降り注いだ

「おお…今日も大量だな。ストレスも発散できたから一石二鳥だな
」

セルメダルを抜き取り変身を解除した

だが妙だ…あのヤミー…本当に金目当てか？

「本格的にグリードが動き始めたのかもな」

俺は一人呟きミルク缶を背負った

ウヴァと危機と始まる戦い（前書き）

カウントザメダル

現在オーズが使えるメダルは

明久

タカ2

クジャク

クワガタ

バッタ

ライオン3

トラ3

チーター3

サイ2

ゴリラ2

ゾウ2

シャチ

ウナギ

タコ

プテラ3

トリケラ3

ティラノ3

サソリ

カニ

エビ2

オオカミ

映司

タカ2

クジャク

コンドル

クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
サイ
ゴリラ
ゾウ
プテラ2
トリケラ
ティラノ2

ウヴァと危機と始まる戦い

『カザリも倒されたか…』

俺の前にはメズールとガメルのコアメダルがある

『あと2枚手に入れば俺は完全だ』

その為に貴様らのコアメダルを使わせてもらっぞ

メズールとガメルのコアメダルを手にとり横にある大量のセルメダルを見た

「…それを取り込む気か」

椅子に座っていた黒いグリードスルが立ち上がった

「そつだ！俺はこいつらで強力な力を手に入れる！」

「ほう…無理な話だな」

「何？」

「お前のようなグリードじゃ無理だ」

「ふざけんなあ！」

スルに殴りかかった瞬間避けられ攻撃された

何だと

「ぐ…俺のコアメダルが」

奴の手には俺のコアメダル一枚が握られていた

「貴様は最強のグリードではない」

そう言った後にスルは地中へ消えていった

「ぐ…覚えてろ…」

俺はフラつきながらセルメダルを吸収した

明久
s i d e

「ぐ…がは」

登校中…僕はうずくまりながら痛みに耐えていた

く…下手したら飲まれてしまうね…

伊達先生から戦うなと言われたけど僕はそれを断った

そんなことしてたら助けられないんだ

アंकは復活してからしばらく安静状態だ

大丈夫…バレていない

「ぐ…ああ」

何かがあるんだ…僕の体内に何か

それがコアメダルと言うことはわかる…

「けど…気を抜いたら意識が無くなってしまっ」

頭を押さえながらゼエゼエと荒い息をする

まどかは相変わらず眠ったままだ…命の心配はないけど…心配だ

「ぐ…がは」

ズルズルと座り込む

やつちゃったよ…遅刻決定だ

「はー…はー」

汗が伝う…手が震える

「
…」

だいぶ落ち着いてきた…これなら大丈夫かな

「
……ヤミーだ」

何故かわかった…

とにかく行かなきゃ！

立ち上がって同時にある人と目があつた

「明久…」

「フェイト」

フェイトはゆっくりとこつちへ歩いてくる

「大丈夫？手を貸すよ？」

「いや…このくらい平気だよ」

笑いながらゆっくりと立ち上がった

フェイトは何故か悲しい顔をしていた

「明久…まどかのことちゃんと守ってね…」

「何言ってるんだよ。当たり前じゃないか…僕はみんなを守ってみせるよ」

「……そう…なんだ」

「どうしたのフェイト？」

フェイトは俯きながらこっちを見て苦笑いをした

「何でもないよ…」

そう言ってフェイトは後ろを向く

何か言わなきゃ

「フェイト！前に言ってたハーレムだっけ？僕案外本気にしてるよ」

しまったああああ

何を言ってるんだ僕は！

と、とにかく何か言わなきゃ

「え？」

ほら！フェイトも複雑な顔してるよ！

「えつと…ごめん！」

恥ずかしい…何やってるんだ僕は

「明久…」

N O s i d e

「お前の欲望…解放しろ」

「あ…」

セルメダルを投げられ女の体からヤミィが現れた

「ひっ…」

女…姫路瑞希は驚くしかなかった

『アキヒサ…君』

ヤミーは何かを求めるように歩き始めた

昆虫のグリードウヴァは場所を移しさらに違う人にセルメダルを入れた

「うぐ…」

『オレノカノジヨニ…』

男…須川から出たヤミーは直ぐにハチの姿へと変わった

「さて…準備は整った…決着の時だオーズ」

「ぐ…あ」

明久はヤミーが現れたことにより再び頭痛に襲われた

「またヤミーが…」

場所は学園…明久は息を飲んだ

「ぐ…うつ…！」

気合いを入れ直し明久は学園に走り出したが目の前に何かが降り立
った

「ヤミー…恐竜!？」

『オーズ…コアメダルを渡せ』

『さもなければ無に帰すまで』

「ぐ…みんなが危ないのに」

その光景を空から別の何かが眺めていた

無力化とダメージと傷

な、なんだこいつら…新しいヤミー？

「オーズ…コアメダルを渡せ」

「く…」

プテラノドンの姿をした二体のヤミーが迫ってくる

奴らの狙いは…カザリ達…！

「あいにくだけど それはできないよ」

ぐつと足に力を入れる

「なら無に消えるがいい」

同時に走り出し攻撃を避けた

「おりゃああ！」

ブオンと素早く一体に拳を叩きつけもう一体に蹴りを放った

「う……」

今がチャンスだ！

「……っ！」

ベルトを腰につけて三枚のメダルを取り出した

「アंक…タカメダル使うよ」

カチャンと同時に入れてドライバーを傾ける

「…いくぞ！変身」

スキャナーを手に取りキンキンと音を立てながら読み込んだ

『タカ！トラ！タコ！』

いつもと違い足は水色に吸盤のついたタコレッグに変身した

「はっ！」

バツと構え相手を見据える

状況的には不利だけどやるしかない！

「…はああ！」

「「オオ！！」」

オスのヤミーに跳び蹴りを喰らわしメスヤミーにはトラクローで切り裂いた

「ふっ！てや！」

トラクローを上手く活用してメスヤミーを切り裂く

「っ…」

やった！効いている

「ふ！」

「ぐああ！」

いきなり火炎弾が当たり転がった

くっオスのプテラノドンヤミーか

「ぐ…うあ！」

「この程度か」

「うわああ！」

プテラノドンヤミーに吹き飛ばされビルに叩きつけられる

痛たた…

「ぐ…」

足の吸盤を利用してビルに張り付いた

「はああ！」

メスのプテラノドンヤミーが突進してくるが上手く避ける

「ふん！！」

「ぐ…」

けどやっぱり不利な状況には変わりなくすぐに追い詰められてしまった

「はああ！」

「ぐああ！」

「ふ！」

「があ！」

火炎弾を何発も受けビルから墜落した

「うわああ」

叩きつけられ体中に激痛が走った

「ぐ…がは」

強い…耐久力で勝負したけど勝てない

「なら！これしかない！」

ヤミーの攻撃を避けながら二枚のメダルを取り出した

「うわ！」

繰り出されたパンチを交わしながら素早くタカ、トラを入れ替えた

「ぐわ！」

蹴り飛ばされ地面を転がり素早く立ち上がる

「……！」

スキャナーで読み込み胸の辺りまで腕を上げた

「サイ！ゴリラ！タコ！」

顔は鋭い角がついたサイヘッド、体はガッチリとしてガントレットがついているボディに変わった

サゴリタだ！

「いくぞお！」

ガントレットでヤミーに殴りかかり吹き飛ばした

「はあ！」

もう一体に殴られるがこの体はそんなじゃ傷一つつけられないよ！

「りゃあ！」

「う」

サイヘッドで跳ね飛ばしオスヤミーをロケットパンチで吹き飛ばした

1189

「はあ…はあ」

あれ？なんで僕こんなに疲れてるの

「ぜえ……ぐ」

スキャナーを手に取りるけど震えていた

「く…うわ」

スキャナーをつい落としてしまい跪いた

なんで？力が入らない

「…無に消えるがいい」

「は…！」

気づいた頃には遅く2体のヤミーから黒い霧が放たれた

「うわあー！ぐ…ああ」

力が…抜け…る

変身が解除されメダルとドライバーが落ちた

コアメダルの力が無力化された？

「ぐあああ！がふ」

後から恐ろしい程の痛みが体中に伝わり叫んでしまった

痛…体中が痛い

「ここまでのようだな」

「……く」

震える手でコアメダルを掴む

「はっ！！」

「ぐわああ」

何！？腕が…

千切れそうな痛みが走り僕は逃げ出した

勝てない…

腕は流血している

このままじゃ駄目なのに…

僕は自分の家でなく知さんの店へ走って行った

「ぐ…っつ」

頭に激痛が走る…ヤミー…だ

「行かなきゃ！…」

運がいいことに二体のヤミーはいなくなった

今がチャンスだ！

腕を押さえながら僕は器用に変身した

「変身！」

『ライオン！トラ！チーター！』

『ラッタッ！ラッタッ！ラトラッタ！』

黄色いコンボに変身して学園に向けてダッシュした

みんなの欲望と一斉変身とVS変態ウヴァ

俺は怖かった 彼女を取られるんじゃないかって

そして 吉井達の気持ちも理解できた

俺は何て奴なんだ…

「やめろ！やめてくれ！」

叫んでも俺の欲望は止まらない…

『ふん！』

「ぐ…が」

今まで彼女に手を出した奴らを俺の欲望は次々と刺していく

違う…こんなであの子が喜ぶ訳もない！

いのまり
猪瀬真理さん…ごめん

「何で…ですか？」

私は膝をつき目の前の光景に驚いていました

『明久君から離れて！』

私の欲望が…みなさんを

「…きゃあっ」

「く…う」

なのはちゃん…フェイトちゃん…！

二人は魔法少女に変身して私の欲望と戦っています

まるで…蝶の姿をした怪物は…みんなを

「私は…明久君を」

何ですか…私はこんなこと望んで…たんですか

明久君を一番知った気になって…嫉妬して

「やめてください…」

涙をポロポロと流しながら私は俯くことしかできませんでした

明久 side

ダッシュで学園に駆けつけた

大丈夫…コンボに慣れてきてる

変身したまま腕に鞆の中にあつたスカーフを巻いた

「ふう…早く助けないと」

『吉井君！』

突然声が聞こえ振り向くと知った人がこっちへ走ってきた

「君は…Dクラスの真美さん…」

一度は欲望に溺れ…そして欲望に勝った女性だ

「明久君…亮君を…彼氏を助けてください！」

「え…」

まさか須川…亮君の彼女が真美さんだったとは…

不思議なこともあるんだね

「お願い！亮君は…私の為に…私が悪いの」

「わ、わかったから泣かないで！」

須川君め…彼女を気づけるなんて

「僕が必ず止めるから君は須川君を…」

「うん…」

彼女が頷いたと同時に再び風のように走った

雄二 side

「なんだこりゃ…」

学園の外には屑のようなヤミィが…中にはヤミィが4体もいやがる…

1201

「どうなってんだ」

ミルク缶を背負い窓から飛び降りた

「…っと。さて…稼ぐか」

「きゃあああ！」

「来ないで変態！」

なんだ？あっちから女子が走ってきてやがる

『三次元は消えろおお』

まるで…そつだな猿のようなヤミーが女子に抱きつこうとしてやがる

本当に変態だな…大方家康から作られたヤミーか

「…きゃあ！」

女子の中に聞いたことがある声が聞こえた

「翔子!？」

俺は気づけば走り出していた

理由はわからねえ…だが

「おらああ!」

跳び蹴りを喰らわせた後ヤミを投げ飛ばした

何故だか気分が悪い…

「雄二」

「離れてろ翔子」

ベルトを巻きメダルを弾いた

「変身！」

キリキリと回しカプセルが開いた

『カポン』

装甲に包まれ仮面ライダーバースへと俺は変身した

「…雄二格好いい」

「離れてろって言ってるだろうが」

全く…正義のヒーローなんかじゃないのにな…

「いくぜー!」

巧side

「巧!何なのこいつら!」

文乃は回し蹴りで屑ヤミーを蹴り飛ばした

「簡単に言えば弱いヤミーだ!うわっ」

廊下では文乃、希、千世、大吾朗が屑ヤミーと戦っていて階段付近では俺が蟻の姿をしたヤミーと戦っていた

『シャアア!』

「うわっ!」

変身しようとした時蟻…つまりアントヤミーに攻撃されメダルを廊下側へ吹き飛ばされた

「しまっ…ぐ…あ」

アントヤミーに壁へ叩きつけられ必死に攻撃を避ける

「にゃあっ巧!?!」

「ぐ…誰かメダルを」

俺の言葉に気づいたのか大吾朗がメダルを拾い上げた

「巧！受け取れ！」

ヒュンと投げられたメダルを掴む

「サンキュー！大吾朗…ぐあ！」

投げ飛ばされて肘を打ってしまった

「早く倒しなさいよ！私を助ける為にね！」

相変わらずだな千世は

「言われなくても…」

コアとセルのメダルを入れる

今日はこれだ！

「ぐあー！」

アントヤミーに首を絞められる

「ぐ…うつ」

『キシヤアア！』

なんとか剣を中央に刺した

『ガゼルアップ』

音声と同時に木や葉が俺を包み込んでヤミーを吹き飛ばした

『キアア』

「ふう…なんとか変身できた」

銀色のスーツに緑色の鎧と足は尖って顔は鹿をイメージしたように
何本か鋭い角が生えて瞳は赤くなった

ガゼルスタイルだ！

N O s i d e

「きゃああー！」

女性達は逃げるも蝶のヤミィは飛んで追いかける

「くっ…みんなが」

なのはやフェイト達は大量の屑ヤミィや蜂のヤミィを相手にして
いて守ることができない

「ファイヤ！」

フェイトが放った光弾は蜂のヤミィに直撃した

『ぐっ…』

「変身！」

『クワガタ！トラ！バッタ！』

火野映司は仮面ライダーオーズに変身して窓から飛び降りた

「はあ！！」

そのまま頭から電撃を放って蝶のヤミーを落とした

『あなたも邪魔をするんですか？』

「早く逃げて」

映司は逃げ遅れた女性を逃がし構えた

「まさか…火野先生！？」

驚くのは達に振り向いたオースは頷いて再び構えた

「ここは俺に任せて！」

「友香！！」

根本は走り彼女を庇った

「ぐあ！」

「恭二！？」

殴り飛ばされた根本を小山友香は助けた

『ふん…弱いな…所詮は人間か』

「う…」

虫のグリードウヴァは屋上から飛び降り他の生徒を狙った

「きゃああ!」

ウヴァは女子更衣室を襲撃した

勿論ウヴァにはそれがどういふものかわからない

が、女子達は勿論

「きゃああ！」

悲鳴を上げるがウヴアは構わずに女子一人を捕まえた

「変態！きゃあ！」

女子は更衣中に入られたことに怒っていたがウヴアはそのまま壁に叩きつけた

「玲奈ちゃん！」

その中には明久の友達の比奈もいた

「あんた離しなさいよ！」

他の女子がぐいぐいと引つ張る

「つるせえ！」

ウヴァは頭にきたのかその女子め捕まえた

「きゃあ！胸掴まないでよ！」

『ギヤーギヤーつるせえんだよ！』

変態ウヴァの誕生である

ウヴァが武器を見せて壁に叩きつけられていた一人の女子が怯えた

『いい顔だ…殺すのにちょうどいい！』

「きゃああ！」

ウヴァがクローを突き立てようとした時、女子のみんなが押さえつけた

『なんだ貴様ら！』

「最低！」

「変態！」

ウヴァはいつきに払いのける

『貴様ら…ふざけるな』

ウヴァは頭部に電撃を溜めていた

「きゃああー！」

それに気づいた女子達は再び叫び始めた

「誰か！」

「助けて！」

比奈は手を合わせて握り何かを祈っていた

『うるせえ！！全員消えろ！』

電撃がバチバチと発射しようとしていた

女子達は怯えたり、泣いたりする人もいた

『消えろおお!』

「「助けて仮面ライダー!」」

途端に更衣室のドアをぶち壊しウヴァに蹴りが放たれた

「だっしやああ!」

その光景を見て比奈は笑った

「来てくれたんだね…」

『な、なに！ぐわあ』

ウヴァはそのまま窓の外へ吹き飛ばされた

「…つと。みんな大丈夫！？」

オーズ…タトバコンボは立ち上がって女子達に声をかけた

『仮面ライダー…』

一人が呟き女子達は仮面ライダーオーズに見惚れていた

「来てくれたんだね…明久君」

V S ヤミーと雷撃と手懐ける力

「なんとか間に合ったよ…みんな大丈夫」

僕は咄嗟に後ろを向いた

いや…だっていくら仮面ライダーでも…更衣中の女の子を見るなんて最低だ

というよりここは女子の更衣室だったのか…畜生！あの虫野郎に踊らされた！

1221

「あ、あの〜」

一人の女子が近づいてきたことがわかりすぐに逃げ出した

「ごめんなさいー!」

かつこ悪い…そして恥ずかしい…

嬉しい部分もあったが…後が怖いよ

『かつこいい…』

『あれが噂の仮面ライダー』

「えっ…と確かこっちだったよね」

変態昆虫ウヴァが吹き飛んだ場所へ走る

「ぐ…」

なんだ？…また体に異変が

「が…」

何かが体内で強い力を放っている…

『戦え…』

誰？

『最強のオーズに変身しろ』

最強のオーズ？…誰なんだ！僕を呼ぶのは

『力をやるよ』

あれか…これはよく言う敵の幻ってやつだったけ？

催眠術をかけて操るような

『おい…勝手に突き進むな』

黙れ！この催眠術師！

貴様のような奴に操られる僕じゃない

『お前馬鹿か…？』

なっ！化け物からも馬鹿扱いされた！

いや…待てよ…これはあれだな　油断させようとしているわけなんだ！

卑怯だぞ！君には正々堂々って言う言葉がないのか！！

まるで雄二だ！

『いや…俺は』

ええい！僕の心に潜む悪魔め！今までの痛みや苦痛は君のせいだな！

『だ「よくも苦しめてくれたな！コンボで僕はボロボロなんだぞ！」』

さては雄二だな！

真木博士を利用して僕の心の中に侵入してきたんだな！

『いや…だから違「しゃあああ！」ぐはあ！』

・吉井明久は怪物をやっつけた

明久の攻撃力がUPした

何コレ？

『ぐう…こいつとんだ馬鹿だ…』

ああ！また僕を馬鹿にした！

アキヒサハタトバキックをクラワセタ

カイブツハタオサレタ

『……何故だかこいつの体内に入っただのを後悔してる』

意味わからない言葉と共に怪物は消えていつのまにか景色は文月学園に戻った

「あれ？さっきの何だったのかな？」

でも……わかることは僕の体内に新しい力が宿ったことだ

『アア！！』

え……ちょっとっ！でかい雷撃が！！

「うわあ！」

間一髪で避ける

『チッ…』

「変態グリード…ウヴァ」

変態は何かブチギレたように僕に攻撃を仕掛けてきた

『オラア!』

「ぐ!」

グリードにタトバはやっぱり駄目…

「なわけない!」

右ストレートをウヴァの顔面に叩きつけた

『ぐっ…っ』

「くられ変態！」

追加で腹に連続で殴った

『ぐっ…っあ』

君のせいで僕はああああ！！

『タイムだ！攻撃をやめろ！！ぐへあ』

バキヤつと変態を殴り飛ばした

「黙れ！この変態！昆虫は大人しく森に還れ！」

僕はウヴァと睨み合う

何故だ…今の僕はこの変態に勝てるような気がする

『ふざけんなああ!!』

「うあ！」

雷撃を打たれ僕は吹き飛んだ

うつ…何あの破壊力…ボディが…ボロボロだ

『ふん……貴様も変態だろ!』

ウヴァは次に巨大な波を放ってきた

広範囲！？

「うぐああ！」

バッテリーの膝部分が破損した

かなり痛い…

「ぐ…いつ！」

ええ！？何あれ！反則だよね！？

『オラアア！』

巨大な重力が僕の自由を奪い地面に叩きつけられた

「がはあ！！」

ぐ…タカヘッドの角部分が

『どうだ…。コアメダル…返してもらっぞ』

ウヴァはズンズンと迫ってくる

何か…コンボでいかなきゃ

それでも勝てるのかわからない

けどあの変態野郎は絶対許さない！

「うつあ…」

何？…体から何か底知れない力が

まさか…

『ウオオ！』

ウヴァは雷撃を再び放ったが僕はその瞬間に雄叫びをあげた

「ルオオオオオアア！」

体からは巨大な波動が放たれ雷撃を打ち消した

『何！？』

未知なる力…暴れだす危険

手懐けるんだ！あの…怪物を倒したように！

巧side

「ハッ！」

回し蹴りでアントヤミーを切り裂いた

『ぐっ…』

「…いけいけ…」

ダっと踏み込みガゼルの角を生かし敵を挟んだ

『キシヤアア？』

「おりゃあ！」

ブオンと相手を外へ投げ飛ばす

やっぱりガゼルコアは強いな

「ハッ！」

窓から飛び降りヤミーの方へ向かっていく

「セヤアア！」

足のブレードを展開させ切り裂こうとした

が

『ギアア!』

アントヤミーは槍から黒い閃光を放った

しまった!

「ぐ…うわあ!」

目をくらませてる間にアントヤミーは複数の箇所を攻撃したらしい

俺はその攻撃で吹き飛ばされた

『ギアア!』

「ぐ……」

それだけじゃない

アントヤミーはあの槍から光弾を放った

「ぐ……ああ!」

まずい……近距離のガゼルじゃ攻撃が放てない

『消えろ!仮面ライダー!』

「え…ちょっとまじかよ!」

アントヤミーは世に言う破壊砲つてのを打ち出した

これはまじでやばい!

「くっ…」

なんとかかわしたけど

『ズガアア!』

あぶねえ…校舎に危つく当たる所だった

「くっ…コアを変えるしか」

なんてことを思っていたら幼なじみのあいつが窓から叫んだ

「巧ー！これ受け取りなさいよ！」

ヒュンと投げられたコアメダルは狼！

「文乃…」

「かつ…勘違いしないでよね…べ、別にあなたの為じゃな、ないから！／＼／」

「わかってる。明久から預かったんだろ？」

「そ、そうよ！／＼（本当は私が明久に返してと言っただけど…明久は何か笑ってたし…何なのよ二人して）」

「さて、いくぜ！」

『ウルフアップ！』

ガゼルを抜き取りウルフを入れ再び剣で読み込みウルフスタイルになった

「よし！！これならいける！」

ディアスセイバーを取り出してウルフメダルとセルを入れた

『ウルフブレイク』

『キアアア!』

放たれた光弾を交わし相手に近づく

「喰らえ!」

『キアアア!』

遅いぜ!

「てあああ!」

ズバアアとアントヤミーを切り裂いた

『ぎぎ…キアア!』

アントヤミーは爆発してセルメダルとなった

「はあ…はあ…よっし」

剣を地面に刺しみんなに手を振った

『にゃあ…巧かつこいい』

『それでこそ私の家来だわ!』

みんながいろいろ言う中と笑っていたら何か寒気が襲った

「…これは…明久か？」

何だ凄まじい冷気を感じる

気づけば走り出していた

雄
—
s
i
d
e

「オラア！」

ヤミーを捕まえてそのまま顔面を何発も殴る

『き…ぐ』

やっぱり張り合いがねえ…

セルメダルを入れてギリギリと回す

『カポン』

右腕のカプセルが開いた

『ドリルアーム』

無数の機械がドリルとなり俺の腕に武装された

「こいつは一番使いやすいな…オラア！」

ブオンと猿ヤミーの腹を殴りつけセルメダルセルメダルを奪い取る

繰り出された拳を交わし飛び上がる前に押さえつけドリルを突き刺す

『キイイ！』

へへっ…いい様だ

「よっ！」

跳び蹴りで吹き飛ばしセルメダルを再び入れた

『セルバースト！』

「逃がさねえよこの変態猿が！！」

ガシッと捕まえドリルアームを剣のように構える

「オオオ…」

ドリルアームにエネルギーがたまり猿ヤミーを思い切り切り裂いた

「オラアア！」

『ぐあああ…二次こそが全て…』

猿ヤミーはそんな言葉を残して爆発しセルメダルになった

『クレーンアーム』

すかさずクレーンアームを武装しセルメダルを吸引してミルク缶へ入れた

「はっ…こんなもんか」

やっぱグリードが一番大量だな…

「……雄二」

「なんだ翔子？まだい…うおおあ！」

翔子がいきなりバースバスターで打ってきた

『グアア』

クズヤミーか？

「…油断しすぎ」

「翔子！お前なんでバスターを…」

翔子は頬を赤らめながらこっちを見た

「夫のサポートは妻の勤め」

いつもならつつこむ俺だが…あまりのことで呆然としてしまった

「……雄二？」

「…おっと…わりいな…」

翔子に謝った瞬時…とてつもない冷気に襲われたような感じがした

「……！？」

この冷氣…まさか明久か？

「翔子…お前はここで待ってる！」

「…うん」

明久の奴…一体何があつたんだ！

N O s i d e

『タカ！クジャク！バツタ！』

タカジャバへと変身した映司は盾…タジャスピナーから炎弾を発射した

「ハア！」

『ああ！』

攻撃をくらったヤミーはふらつき、オーズは更に攻撃を仕掛ける

「何かやばいことが起きる…急がなきゃ！」

ヤミーの攻撃を交わして確実に攻撃を決める

アंकも驚いているが映司はよほど何か危険なことを察知したのだ
ろう

「これで決める！」

タジャスピナーを開きメダルを入れる

そしてタジャスピナーをスキャナーで読み込んだ

『タカ！クジャク！バツタ！ギン！ギン！ギン！ギガスキャン！』

「ハアアア…」

溜めをつくり一気に円形状の攻撃を繰り出した

『セイヤアア！』

『アアア！…明久…君』

ヤミーに直撃し、たちまち爆発が起きた

「はっ…たいしたもんだ…」

「…！」

アンの言葉を無視して映司は走り出した

（この感じ…紫の）

何かに焦りを感じながらもオーズは走しる

明久 s i d e

「ウオアアア！」

『ぐ…』

僕は高く叫び立ち上がった

僕にしかできない…馬鹿しかできないこと

僕は限界なんか知らない

自分がどうなっても人を助けたい

なら…この力を…僕は手懐けるんだ！

「ハアアア！」

体内から三枚のメダルを飛ばしキャッチする

恐竜…紫のメダル

「力が…溢れ出す」

メダルがガタガタと動く…負けてたまるかああ！

三枚のメダルをドライバーにセットしてスキャナーで読み込んだ

「ウオアアアア！」

僕は力の限り叫んだ

すると何かの波動が外へ吹き飛んだ

いくぞ!!!

最強と破壊と暴れ出す力

『がっ…っっ』

映司は向かう途中に跪いた

体内にある紫のメダルが強い力を放っているのだ

『ぐ…ああ！』

映司の瞳は紫色になり、徐々に支配していく

『アंक！逃げろ！』

映司は後ろにいたアंकに叫ぶ

『映司…お前』

『早く!!』

必死の言葉はアंकを動かした

アंकは舌打ちをしてかる素早く逃げ去った

『う…がああ!』

ビリビリと頭に激痛が走る…

『ウオオオオ!』

映司が大声で叫んだ途端にオーズは紫のコンボになってしまった

それは最も恐ろしく未知なる力を秘めている

そして別の所で紫の力が覚醒していた

明久 s i d e

『プテラ！トリケラ！ティラノ！』

三つの絵が重なり一つのサークルとなって刻まれた

「ウオオオオ！」

体から力が溢れ出す！？これは一体？

すると僕の体は金色になった後、みるみる本来の姿となっていく

スーツは白くそして紫色の姿…恐竜をイメージしたかのようなオーズとなった

『プ・ト・ティラーノザウルス！』

これが最強のオーズ

「ハアア…」

紫色の羽と尻尾を出しブワッとウヴァに向けて風圧を送る

凄い！？地面まで固まった

僕は悟った

「負ける気がしない！ウオオオオ！」

雄叫びにより氷が溶けウヴァが吹き飛んだ

僕は…力を手懐けたんだ！

『ぐ…な、なんだあれは』

「ウオオオオ！」

体から溢れ出す力を一気に解放する

ウヴァは再び吹き飛んだ

「凄い！凄いよ！」

これが…プティラ…コンボ！

「いくぞお！」

バツと構えて変態を見る

いかにも変態な顔してるよね

『誰が変態だ！』

ウヴァは雷撃を繰り返してきた

あれ！？聞こえてたの！

『オラアア！』

巨大な雷撃が落ちてくるけど僕は軽く振り払った

『な、何！？』

「弱いなあ…まるでスタンガンみたいだよ」

ダツと地面を走る

「おりゃあ！」

ガスッとウヴァの腹に命中しウヴァは後ずさる

凄いパワーだ…

「ハア！」

回し蹴りを放ちウヴァの顔面に直撃させた

『ウグア！』

ウヴァの触角が砕けた

これは…あれじゃないだろうか

いわゆる…無敵状態！

仮面ライダーって最強の姿は最初は本当に無敵だよな

「じゃあああ！」

跳び蹴りを放った後素早く地面へ叩きつける

『ぐ…』

「まだまだあ！」

顔面や腹、足などの鎧を壊しまくる

虫って生命力強いからこまめに破壊しなきゃ

『貴様…くふ』

喋る前にアッパーを打ち黙らせる

「りゃあ！」

再び跳び蹴りを喰らわせて蹴り飛ばした

『ウグオ…ガハ』

この力…本当に凄い…これなら雄二に勝てるんじゃないかな

「って正義のヒーローがそんなことしちゃ駄目だよね」

『ふざけんな！』

「ほいつと」

繰り出された拳を避ける

「しゃあ！」

『ガハア！』

顔面を殴り飛ばして準備完了

グツと拳を握る

「このコンボのもう一つの力…見せてやる！」

『アアアア！』

ウヴァはダダダと走ってくる

狙いを良く定めて…

「今だ!!」

ウヴァの体内に手をつ込みメダルを掴む

『な、何!?』

「くだけろお!」

バツとカマキリの意志の無いメダルを掴み思い切り握りつぶした

『ガアアアアアアアア!メダルが!!俺のメダルがあああ』

ウヴァは叫びながら後ずさる

ふう…これでよしと

「君も僕が助けるから…必ず！」

『オーズウウウ！』

スキャナーを取り出し再度読み込んだ

『スキヤニングチャージ！』

「ハッ！」

肩の角が伸びる…凄い伸びるなあ

『グフツ』

ウヴァに突き刺さり僕は目を光らせる

あまりやりたくないけど

「ハア！」

ブオンと再び凍らせる

『……………』

ウヴァは固まり動かなくなった

さあ！ここからが原作と違うよ！

「ハアアア！」

ダダダと素早く走る

風が…風が冷たいいいい！

「痛たたたた！」

うわあ！風がまるで槍みたいだ！

「トオウ！」

バツと飛び上がり

「セイヤアアア！」

ぐるっと回し蹴りを決めた

あれだよ！アंकクロストの回し蹴り！

バキイとウヴァは砕け散った

メダルがバラバラと飛び散る

「はあ…やった」

体中から力が抜けた

かなりの脱力感だよ…フィードバックよりきついんじゃないかなあ

「ふう…」

一息ついてからメダルを拾う

「4枚か…えつとこれが…意志のメダ」『明久!』

うん?何か聞こえたような気が

「気のせいだよね…」

メダルを拾い上げ握りしめる

壊さないようにしなきゃ…

『明久!』

『アキ君!』

ん? やっぱり声が聞こえる…フェイトとなのは?

「ってそんなはずないか…」

ある訳ないよ。二人は学園にいるんだから

「明久!」

「へぶほ！」

えっ何！？この柔らかい感触！？

変身してても伝わるんだけど！？

「アキ君！」

「にぶら！」

背中！背中に何か当たってるっつー！

羽？自分の羽だよね！？

ムニユンと伝わる感触…まさか

「なのはとフェイト？」

僕は試しに聞いてみた

うん。何かが顔に当たってるから見えないんだ

「……はわっ！／／」

「きゃうっ！／／」

何かに気づいたように二人が離れた

声からして間違いなく二人だ

「「じめんなさい！／／」「」

二人は僕にすぐさま謝った

「い、いきなりどうしたのさ二人共」

内心胸がバクバクするよ……

だって二人はバリアジャケットの姿で顔を赤くしてるし…

「「違うの！あれは体が勝手に」」

二人は同時に何かを謝っていた

「そんなことより…」

僕はらちがあかないと思ったから話を無理やり変えた

「その姿ってことはまさか戦ってたの？」

「「うん……」」

そうだったんだ…

「で、でも火野先生が助けてくれたから！」

なのはが慌てて上手く話を付け足した

「それなら良かったかな……」

火野先生なら大丈夫そうだ

「そんなことより明久」

この声は…まさか

「なにかな雄二…」

やっぱり悪友だった…なんだよせつかくのトークを邪魔する気？

「その姿はなんだ」

僕は改めて自分を見た

「プトティラだよ」

「「はあ？」」

巧と雄二は首を傾げた

「まあ簡単に言えば新しいコンボだね」

なんて話していたら

『ウオオオオオ!』

なに!? 雄叫び!?

途端に地面が凍り一気に割れる

「!」

『ウオオオオオ!』

「プトティラ…?」

僕らの目の前にプトティラコンボが現れた

氷河とフラグと鈍感（前書き）

お待たせしました！ちょっと急ぎ気味でしたので上手くまとまりませんでした

次回からはいよいよ終章の合宿編がスタートします！

氷河とフラグと鈍感

「ルオアアア！」

僕らの目の前に氷が降り始めた

「火野先生……」

僕と同じ姿をして……今僕らを襲おうとしている人の名前を呟いた

「ウアアア！」

凄まじい冷気だ……

「きゃあ！」

「ぐ……」

みんなはあまりの力に吹き飛ばされた

「みんな！ぐ……火野先生……」

プトティラとなった火野先生は明らかに暴走している

僕が止めなきゃ……僕しか止めれない

「……ウオオ！」

空中へ大きく砲口して氷りを砕いた

同じ力だけど……暴走しているなら力の制御はできない！

「ハッ！」

バツと構える…先生は叫びながら突進してきた

「おりゃ！」

突進してきたのを利用して腹部を殴りつけた

「が…」

「せや！はああ！」

バキバキと顔を殴りつけ投げ飛ばす

「……フウウウ」

「効いてない…か」

やっぱり物理攻撃じゃ駄目か…

「ウアアア！」

「うわ！」

繰り出された拳をすれすれで避ける

「今だ！」

ガシッと捕まえて顔に向けて冷凍ガスを口から吹き出した

「ぐ…がぁ」

ピキピキとプティラの顔が固まっていく…

「ぬおりゃああ」

ガツと顔を掴み思い切り叩きつけた

「ぐ…があ」

「ふ…とりあえず…」

安心したのもつかの間…すぐに起き上がってくる

どんだけタフなのさ！

「ウオオ！」

ワイルドステインガーだったかな？

肩から角が伸びてきた

「うわー！」

バツとすぐに避けてもう片方を弾き返す

「う…」

怯んだ隙に跳び蹴りを放った

「まだまだあ！」

倒れたと同時に起き上がって顔面を殴る

「うおりゃあああああ」

「があああ！」

このまま気絶させて暴走を…

「があ！」

「なわっ」

危ない…危うく殴られるところだった

「それにしても…なかなか倒れないや…」

このままだと…暴走しすぎて先生の方が危険だ…

「明久！」

「く…」

『ベルトを傾けろ！』

突如謎の声が聞こえたけど今は振り返る余裕はない！

「じゃあああ！」

バツと飛びかかり素早くベルトを傾け変身を解除させた

「があ…うああ」

プトティラは変身が解かれ先生へと戻った

紫のメダルが先生の体内へと消えていった

先生…まさか先生まで…

「映司君！！」

「映司！」

さっき声がした方から二人の人が走ってくる

泉先生と…確かもう一人のアंकだったかな？

「映司君！しっかり！」

泉先生は先生を揺する

「ああ…あまり揺すらない方が」

僕は止めようとしたけどアंकが割って入り…仕方なく変身を解いた

「馬鹿が。また無茶しやがって」

「…ああ…今回は危なかったよ」

先生は意識を取り戻しゆっくりと起き上がった

「映司君…」

「ごめんね…俺また暴走しちゃって…同じ紫のオーズに助けられたよ」

先生は俯いていた…胸が痛む…

先生は…何と戦ってるんだろう

「いいよ…映司君が無事なら…」

「ありがとう比奈ちゃん…」

泉先生は火野先生が力無く答えているのが心配だったのか…

「「…え」」

「おっ」

抱きついた…え？

僕には何故か主人公とヒロインに見えてしまったよ…

まさか先生達って

「無理しないで…」

「うん…そうだね」

火野先生は驚きもせずに笑った

やっぱり二人って

「あの…先生」

僕が動く前にはやてさんが動いた

「何？」

「先生達って付き合ってはるんですか？」

はやてはニヤニヤと、二人は真っ赤になっていた

え？ええ！？

「ち、違つよ八神さん！私は…」

「はへん。さては既に」

はやての言葉で更に赤くなる泉先生

火野先生は少し赤いけどわらっていた

「そうだね…それもいいかもしれない」

あつ…口から砂糖が落ちそう

「ひ、火野先生！？」

アंकはふつと笑つていてはやて以外のみんなは真っ赤になっていた

ヤバイよ…僕も顔が熱い

「だって比奈ちゃん…俺に手を伸ばしてくれるって言ったでしょ？」

「あ、あれは…」

「とにかく俺は嬉しいけどね」

そういつて火野先生は泉先生を抱き寄せた

「比奈ちゃん…ありがとう…」

「え、映司君…」

駄目だ完全に甘すぎる

「火野先生…大胆なの」

「うん…まさか明久も」

二人は何かを呟いて僕を見た

え？何かついてるのかな？

「駄目だあの鈍感」

「そうだな…（メール？やべっ乙女姉さんからだ！）」

「ありがとう吉井君…」

泉先生はそう言ってから火野先生の手を握りながら去って行った

「あれ？何で僕がライダーなの知ってるのかな？」

僕は首を傾げながら明日の合宿のことを考えていた

「明君」

と、後ろから優しい声が聞こえた

誰かはわかっている…だからこう言おう

「おはよう…まどか」

いつものように微笑むとまどかはニコッと笑ってくれた

「…相変わらず仲良しでいいわね。おはよう明久」

「おはようほむら。君だって大切な人だよ」

「た、大切？」

ほむらは頬を赤らめながら俯いていて、まどかは苦笑していた

あれ？何か変なこと言った？

「って大丈夫ほむら！？」

顔赤いし…熱があるんじゃないかな

「だ、大丈夫よ…！？」

ぴとつと手を額に置くとほむらは珍しくテンパっていた

「ど、どうしたの!？」

「な、なんでもないわ」

そづかな? 僕としては可愛く見えるんだけど

「明君…なんで私の頭を撫でてるの?」

まどかは赤くなりながら見上げてきた

「あつ…駄目だったかな? つい…」

「だ、駄目じゃないけど…その」

何を言っているんだろ？やっぱり怒ってるのかな？

「アキ君」

「明久」

「なぶしえ！」

なのは、フェイトに抱きつかれ倒れてしまった

な、何！？

「やっぱり明久に抱きつかないと落ち着かないなあ」

「フェイトちゃんも？私もアキ君に抱かれなきゃ落ち着かないの」

ぐ…鼻が…血がああ

「二人共ずるいよ！ほむらちゃん私達も！」

「え？ま、まどか？」

さらに美少女が追加される

「ぬぐ…」

ぬああ！前後左右がサンドイッチにいいい

当たってるうっ！あちこちから感触がああ

「アキ君（明君）（明久）大好きだよ！（よ！）」

吉井明久…生まれて初めてハーレムを味わいました

でもそんなことより

「り、理性がああああ！」

僕はプティラと言う理性と戦うので精一杯だった

それと

場所が教室だったので

『吉井明久ああ！』

こいつらに襲われるのも時間の問題だったよ

制御と支配と悪夢（前書き）

カウントザメダル

現在オーズが使えるメダルは

明久

タカ2

クジャク

クワガタ

バッタ

ライオン3

トラ3

チーター3

サイ2

ゴリラ2

ゾウ2

シャチ

ウナギ

タコ

プテラ3

トリケラ3

ティラノ3

サソリ

カニ

エビ2

映司

タカ2
クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
サイ
ゴリラ
ゾウ
プテラ2
トリケラ
ティラノ2

制御と支配と悪夢

「ふぐ……」

体が酷く疲れている感じがする……

『…せ』

だ、誰？

『ヨシイヲコロセ』

やめて……私は……

『コロセ！コロセ！』

「やめて！」

バツと起き上がり荒い息をする

夢？

「私が明君を…」

できる訳がないよ…だって私は

「あれ？私…」

左腕に違和感がありつい見てしまった

「…え…？」

左腕が…怪物みたいな腕に…あ

「まさか私…怪物になってきているの？」

嫌…誰か…明君…

「戻って…戻ってよ！みんなに見られて嫌われたくない…怪物になりたくない…」

私は静かに保健室で泣いた

「…うわ」

ガシャンと物にぶつかって気がついた

そっだ…今、鉄人の雑用やってたんだった

「なんか頭がぼーっとして…」

紫のコアメダル…力は抑えた…はずなんだけど…きっとまた

「まさか…ね。もう支配が始まってる訳ないよね」

だってさっきのことだったし…現に今だって

「それに僕にはみんながいるから」

ポケットからコアメダルを取り出す…新しい仲間が加わったんだし
しっかりしなきゃ

「えーと…これはあっちに運ぶんだっただかな…」

荷物を持ち上げた瞬間…僕は両腕が変化していることに気がついた

「うわああ！」

つい荷物を落としてしまった

腕が…何だこれ？

「…まさか！？」

僕は何かを悟った…そんなはず…

もう一度両腕を見ると普通の両腕だった

「やっぱり気のせいだね」

まどかは大丈夫かな？

いきなり倒れた時はびっくりしたよ…後でお見舞いに行かなくちゃ

「明久」

どこからか静かな声が聞こえた

誰かはわかる…

「ほむら…どうしたのさ」

ほむらの顔はいつものようなクールな感じが見られなかった

「明久…まどかを助けて」

「え…？」

まどかに何かあったのかな？でもまどかは保健室に居るはずだ

「いいから来て。話があるの」

ほむらはそう言ってスタスタと歩いて行った

「あつ…待ってよ…」

荷物を置きすぐについて行った

ほむらは人氣が少ない場所…つまりは立ち入り禁止的な場所に歩いて行った

「ね、ねえほむら…こんな所で一体」

「…明久」

ほむらはこちらを振り向くと真面目な表情をして近づいてきた

「あなたの体内…もう九枚あるのね」

そつと胸に手を当てられ目を見開いた

な、なんでほむらがそんなことを…

「明久…ずっと黙っていたけど私…体内に赤いコアメダルを宿しているのよ」

「え…」

突然のことすぎて驚くしかない

「赤いコアメダル…アंकの」

「そう…私は体内に彼のコアメダルが六枚あるの」

ろ、六枚…アंकのコアメダルが…

「そして…これが今の私」

ほむらは後ろに下がると背中から赤い翼が出てきた

「なっ…」

赤い翼が彼女を覆いたちまち彼女は美しい鳥のグリードになった

まるで…白鳥のように綺麗で…クジャクのように鮮やかだ

「これが今の私よ明久」

「まさか…グリードになるなんて…」

ほむらはすぐに戻り僕に近づいた

「ええ…でも不完全だわ…それにアंकにコアメダルを返さないといけないわ」

それはそうだね　だって元々アंकのコアメダルだから

「でもそれはあなたに危機が訪れた時よ」

「え…？僕に危機？」

ほむらはまた胸に手を触れた

悲しい顔をしながら

「あなたは私とは違って紫のコアメダルに飲まれかけているわ」

僕は黙って聞いていた…わかるんだ…確かに何か胸が苦しいしんだ

「紫のコアメダルは強力すぎるわ…どのコアメダルよりも」

ほむらは僕の手を取り自分の胸に押し当てた

「ちよっ…！」

うわわ…柔らかい感触がああ！？

「アंकのコアメダルは簡単に制御できる…でもあなたのコアメダルは強力すぎて…いつ飲み込まれてもおかしくないわ…まどかのように」

まどか？…さっきまどかって

「ちょっと待ってよ！まどかがグリードって？」

「まどかは…紫のコアメダルに飲まれたの」

「は…？な、何を言ってるんだよ。だってまどかは」

何でそんな悲しい顔をしているのさ

「紫のコアメダル一枚が… たった一枚がまどかをグリードに変えたのよ」

「う、嘘だね。僕はグリードになっていないし」

ほむらはガツと襟を掴んだ

「まどかは私に話したのよ！自分はグリードになってしまった… あなたを襲ったって！」

静かに風が吹いた

「ま、まどかに襲われたことなんか」

「本当に言えるのかしら？紫のグリードはヤミーを自分で作れるのよ」

自分で…まさかあのプテラヤミーは…

「あなたは意志が強くてコンボに耐えられるから…まだ支配が少ないわ」

ほむらは手を離し僕に抱きついた

「えっ…？」

「お願い明久…戦わないで。あなたが戦えば戦うほど支配は強まるわ」

ほむら…の泣いた姿を見たの初めてだった

僕は優しく抱きしめることしかできなかった

今日のように先生みたいに暴走するのだろうか？

そして…グリードに

でも、なおさら後には引けない

まどかを助ける…

だから…ごめんね

アंक…ほむら…みんな

僕は…戦うしかないんだ

馬鹿でどうしようもないけど

確かにやれることがあるんだ

N
O
S
i
d
e

廃虚したビルに四つの影が映る

「いよいよ終焉の時だ」

「あら…随分と早いのね」

「二年前の借りをここで返す」

「オーズか…楽しみだな」

黒いコアメダル…

桃色のコアメダル…金色のコアメダル…龍のコアメダル…

完全体となった時…世界は破滅へ向かう

「……」

そしてビルの上で女のグリードが空を見上げていた

最も最強の紫のグリードだった

彼らは姿を戻し文月学園に向かった

明日の合宿…それが最後の舞台となることを知りながら

合宿と心理と脅迫？

翌日…まあ昨日の続きと言う感じでね

僕らは合宿の為に電車で向かっている

理由は簡単だ。Fクラスは現地集合…それだけ

なのに…凄く悲しいのは何でだろう

予想はできていたんだけど、改めて思うと正直差が酷すぎるんじゃないかな

Aクラスはリムジンバス…Fクラスは現地集合…つまり案内無し…

くそっ…あのババア

「明君…暇だね」

「うん…暇だね」

で、今は電車の中で隣に座っているまどかに返事を返した

ゲームはいろいろと考えて持ってくるのをやめた

ちなみに席は

窓側に僕、隣はまどかで僕の前はほむら、隣は秀吉

向こう側は手前から美波、姫路さんでその目の前はなのは、フェイトと言った感じだ

ちなみにアंकは雄二や巧達と一緒に後ろにいる

まどかはいつものようににこにこしているけど、もしグリードになったら

「明君?...どうしたの」

「え？あ、ああちょっと考えごと」

ほむらは僕を見つめていただけど気にしない

後、何体倒せば終わるんだ

いつまどかは救われるんだ...

不安が僕を襲う...

僕だってグリードに近づいている...わかってる

でも離したくない...この力が奴らを...

溜め息をつきながら辺りを見渡すと美波が本を読んでいた

ちよつと気になる

「美波…何読んでるの？」

「ああこれ？心理テストの本よ。試しにやる？」

美波は優しく問いかけてきた

最近美波が優しいなあ

「うん。じゃあお願いするよ」

「わかったわ…えつとアキに合いそうなのは…あった」

パラパラとめくった後、美波は何かを思案するようにそのページを

開いた

「じゃあ…始めるわよ。『次の色であなたが思い浮かぶ異性をあげなさい…赤、緑、金、黒、青、白、オレンジ』」

ず、随分とこつてるなこの本

「えつと…あれ？みんな怖いよ…」

僕に突き刺さる目線

こ、怖い

「えつと…赤がまどか、緑が美波、金がフェイト、黒がほむら、青が姫路さん白がなのは、オレンジが比奈ちゃんかな」

僕が答え終えて突如みんなが美波に詰め寄った

「美波ちゃん！結果は！？」

「ちよつ、みんな落ち着いて！」

みんなに詰め寄られ美波が本を落とした

チャンスだ！！僕だけ確認して…

「何なに…緑は親友青、オレンジは恋人、赤と黒と金と白はーむが
あ！」

「雄二君！！」

みんなが雄二の本を奪おうと突っ込んでいく

うわ…雄二…ドンマイ

「それにしても姫路さんと比奈ちゃんが恋人…後のみんなはー」

「（どうしよう…後の色はみんな婚約者って知ったらアキが大変な目にあいそうだわ）」

美波は青ざめた顔をしながら雄二は死にそうな顔をしながら震えていた

『二回死ね！／／』

『ぐああ！』

向こうでは同じように心理テストをやっていたらしく

文乃が巧に蹴りを放っていた

照れ隠しなんだろうな…

「み、みんな落ち着いて…雄二が死んじゃうから」

「明久……助けてくれ」

雄二が死にそうな声で喋る

うわああ！やばい！

「ムツツリーニ！」

「……了解した」

僕と素早く起きたムツツリーニは雄二を助けるべく電気を体内に流した

「ぐへあああ」

ふう…なんとか復活

「危ねえ…！本当に死ぬかと思ったぞ！」

いや…逆に殺しかけた…

でも

「結果オーライ！」

「てめえ…」

ムツツリーニが今まで寝ていたのには理由がある

簡単に言えば僕と巧は脅迫されていて、雄二は霧島さんに結婚させられそうになっていてる…その犯人の調査を依頼したんだ

雄二は録音した物を売ってる奴、巧は脅迫者の犯人

で僕も一応犯人探し

なぜ一応かと言うのは以下を見ていただく

『あなたが大好きです…だから他の男の子とは話さないでください

もし続けるならこの写真をバラキマス』

これが脅迫の内容だ

うん…勝手すぎる！

ヤンデレ！？ヤンデレだよね？

文面から見て女の子だ

そしてバラキマスと言った写真はー

僕がオーズに変身している写真

ちょっと待とう。まず何かおかしい

男の子と話すなってー僕はそんなに興味はない！

僕が男好きと思っているのかこの女性は！

そしてこの写真はさすがにまずいけど二枚目は

僕がニコツと笑っている写真

何がしたいんだああああ！

こんな写真ばらまいて何がしたいんだよ！！

こんなの脅迫なの！？

別にばらまかれても大丈夫なんだけど

そして問題は最後…もう一枚紙があった

『合宿の初日…夜の0時に会いませんか？』

告白！？これって告白だよね！？おかしすぎる

正体ばらす気満々だ

結果として僕は脅迫的なラブレターを貰ったんだ

みんなにはまだ知られてないよ

「はあ…初日からなんか疲れそう」

じつと窓を眺める

このまま平和に終わってくれたらな…

みんなを巻き込みたくない

この後みんなもわかると思うけど僕は姫路さんの手作り弁当で地獄
に行きかけた

悪夢と犯人とメール

『あれ…？ここは何処だろう』

真っ暗な場所…僕しか居ない

何でこんな場所に…

『鏡？』

そこには大きな鏡があった…覗いてみるかな

『！？』

鏡に映ったのは僕じゃなかった

いや…僕であり、僕でない

グリード…恐竜のグリードだ…

『うわあ！』

突如腕が変化する

やめてよ！僕はグリードなんか

『ぎ、逆の腕も』

嫌だ…嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ

『うぐああ』

体中がメダルで覆われていく…

僕がグリードに…

『うわああああ』

「はっ！」

バツと体を起こす…

夢？悪夢だったのかな

頭が痛い…

「明久！目が覚めたか…」

アंकク？いやアंकクだけじゃない

「全く心配させやがって」

「尋常ではない状態だったぞい」

雄二や秀吉、みんながいた

「あれ？ここは…僕は確か」

「ああ…姫路の弁当を食べてお前はあの世に逝く所だったんだ」

巧は吐息をした後に淡々と語ってくれた

ここは合宿の部屋

僕、雄二、秀吉、ムツツリーニ、アंक、巧がメンバーの六人部屋らしい

実際は広くて六人でも十分にくつろげる

それにしても…最悪な夢だった…

グリードに…

「一体どうなってしまっただろう」

ずっとコアメダル…ウヴァ達を取り出しみんなから離れた

みんなは部屋を閉めてムツツリー二の調査結果を聞いている

「明久大丈夫？あなたかなり疲れてるわ」

「ありがとうメズール…大丈夫だよ」

「貴様に死なれたら俺らが困るからな」

「ウヴァは素直じゃないわね」

『全くさ…素直に死んでほしくないって言えばいいのに』

『うるさいカザリ！お前だってさっきまで心配してただろ』

みんなのやりとりは和むなあ…一時の苦しさを忘れてしまっくらいだ

『明久く大丈夫か？』

『はは…ありがとうガメル…』

みんなを体内に戻したいのは山々だけど紫のメダルに押し返されて
しまう

そう言えば…紫のメダルとは話したことないよなあ…

いつかみんなと仲良く話したい

「明久？何やってるんだ」

「あつ…ごめんごめん」

コアメダルをしまいみんなの所へ戻る

あれ？アंकが居ない

「…調査結果から巧と雄二は同一人物…明久は女性だということがわかった」

やっぱり…てつきり久保君かと思っただけど久保君は前にOHANA
SHIしたからなあ

「で、犯人は!？」

首を横に振るムツツリーニ…そうだよね

「…明久の犯人は美人で腹黒しかわからない」

「君は一体どうやって調べたんだ」

むしろそっちの方が凄いよ…

それにしても腹黒って

「それで雄二達は？」

「俺達も女だ…くそ」

うわ…かなり不機嫌そうだ

ここはそつとしておくべきだよね

「明久はいいとして二人はどうするのじゃ？」

秀吉の言う通りだ…僕は会う約束までさせられている

対して二人は本当の脅迫だ

「犯人がわからない以上は見つけられないよね」

「…いや、犯人は既にわかっている」

ムツツリーニは目を光らせながら言い放つ

いやいやそれなら最初に言おうねムツツリーニ

何で今になって言うんだよ

「…八神と工藤に情報搜索してもらった結果…犯人は明久に恋愛感

情を抱いている」

「「……」」

沈黙が場を覆った

は？どういうこと？

「明久…お前」

「またか…」

あ、あれ？みんなどうして呆れてるのさ

首を傾げているとメールの着信音が鳴り響いた

「ちょっと待っててみんな」

みんなから少し離れ携帯を開いた

「…？なのは？」

f r mなのは

s u bちよつと相談したいことがあるの

私達の部屋まで来てくれないかな？

「…なんだろう」

R Eちよつと相談したいことがあるの

わかった。雄二達はどうするの？

「送信…っ」と

二十秒後くらいに返信が来た

内容は大丈夫のこと…雄二達にも関係しているらしい

これはもしかして…犯人絡みかな

「みんな…ちょっと話があるんだ」

なのは達のことを話すと雄二は頷いた

「なるほどな…その可能性は高いな」

「じゃあ早速行こうよ」

「ああ…」

明かりを消して窓側へ歩く

ちゃんと閉めておかなきゃと思い窓へ近づいた瞬間何かが僕を掴んだ

「…いつ！？うわああ」

そのまま窓から外を投げ出されてしまう

えっ！？何何！？

「明久！？」

雄二達の声はあっという間に聞こえなくなった

「うわああ！」

宙を舞いながら必死にベルトを取り出す

この際仕方ない！

三枚のメダルを入れてスキャナーを手にとり読み込む

「変身！」

いつものように合い言葉を口にする

たちまちメダルに囲まれて仮面ライダーオーズへと変身した

『タカ！トラ！バッタ！』

『タ・ト・バ！タトバ！タットツバ！』

「うわあああ」

そのまま地面へ激突する。変身したおかげで体には問題はない

「痛たた…」

合宿場の外…か

『さあ…始めましょう…オーズさん』

「…だ、誰だ？」

突如宙から舞い降りてきた怪物は…お辞儀をする

『初めまして…植物系グリードのサクハと申します』

「ぐ、グリード」

まだこんなグリードがいたのか

『そう構えないでください…私はあなたと戦う為に来たのではないのですから』

「え？」

サクハと言うグリードは姿が変わり人間になった

いや…この人は

「比奈ちゃん…？」

「明久君…久しぶりだね」

いきなりの状況に僕は呆然とするしかなかった

真実と同盟と迫る闇

「ひ、比奈ちゃんが…グリード」

目の前の現実から逃げたい…

比奈ちゃんまでグリードだったなんて

「明久君…私は戦うつつもりはないから…」

え？…ああそうか…僕が構えているから

あれ？何で僕構えていたの？

「私は話しがしたいだけなの」

「…話し？」

理由なんか聞いていたらちがあかないから話しを合わせることにした

「うん…もうすぐ…世界が終わりを告げるの」

「え？」

間抜けな声を出してしまった。だってほとんどの人はまず信じない

「そう…グリードによって…世界が消えるの」

「…！」

グリードによって…世界が…

鴻上さんなら知ってるかな

「ちよっ…ちよつと待ってよ！世界が終わるってどっいつい」と…」

比奈ちゃんは真っ直ぐ僕を見たままだ

「2年前…グリードの誕生…世界の終わり…オーズの復活」

比奈ちゃんは急にポツポツと喋り出した

「グリード？確かグリードは800年前に…それにオーズが復活したなんて」

二年前…僕はみんなと卒業していたはずだ

それに世界だって平和だった

「な、何を言ってるのさ比奈ちゃん」

「これは女神のグリード…オルソナが残した記録…そして明久君の過去」

ますます訳がわからない…

「一体何なのさ！僕にそんな過去はない！君は…比奈ちゃんじゃない！」

トラクローを展開する

よくも比奈ちゃんに化けて現れたなグリード！

「うおおお！」

地面を蹴ってサクハに向かって攻撃を仕掛ける

「…寂しいね…明久君」

比奈ちゃんの姿からグリードに変化した

「……」

「!？」

攻撃が当たってない…なんだこの触手!？

「やめて明久君…戦いたくないの」

「ぐ……」

そんな悲しい顔をしたって無駄だ！

なんとかメダルを入れ替える

まずは触手をどうにかしないと

『クワガタ！カマキリ！タコ！』

頭部と体は緑色に足は吸盤のついた水色に変化した

「せりゃあー！」

腕についているソードを展開し触手を切り裂いた

「…きゃー！」

続けてクワガタヘッドから雷撃を放った

「喰らえ！」

青白い雷はサクハに直撃する

よし…次のメダルにチェンジだ！

「！…明久君やめて」

「う！？」

サクハの声でメダルを変えようとする手が止まった

まさか…本当に…

「…比奈ちゃん？」

サクハは…ゆつくりと起き上がり抱きついた

「良かった…正気に戻れたんだね…明久君」

「あ…」

さっきから揺れていた焦点が戻る

僕…比奈ちゃんを…

「明久君…落ち着いて。さっきまで明久君はメダルに飲まれていたの」

「メダル…に飲まれて」

サクハ…いや、比奈ちゃんは僕が息を整えるまで抱きしめてくれた

「…ごめんね…僕がメダルなんか飲まれたから」

「明久君のせいじゃないよ？…でも私が言ったことは本当だよ」

変身を解き僕は近くのベンチに座った

もうすぐ…夕ご飯だ

「じゃあ…僕はその時…居たんだね」

「うん。だってオーズに変身したのは明久君だったんだよ」

少しの間沈黙が続いた

「僕が？」

「そう。800年前とは違うグリードが現代に現れ…それを倒したのがクガ王の子孫…明久君だったの」

そう言って比奈ちゃんは僕の額に手を置いた

「今から明久君に…オルソナが残した記録を見せるね？」

「う、うん」

同意した瞬間…駆け巡るようにビジョンが映し出された

「…これが僕の記憶…」

そしてまどかがオルソナ…

オルソナは全てのコアメダルを取り込んだグリード…いや神

「わかった？」

「うん。僕が今やるべきこともわかった」

迷いなんてものはなくなっていた

グリードになっても僕は守らなきゃいけないんだ！

「…それで明久君に話しがあるのは…私達と手を組んでくれないかな?」

「君達が世界を滅ぼすんじゃないの?」

比奈ちゃんはゆつくりと頭を横に振った

「違うよ…世界を滅ぼすのは紫のグリード…まどかちゃんなの」

かつての恋をし、世界を守ってくれた彼女が…今は世界を滅ぼす存在

「…どうすればいいのさ」

「簡単だよ。私達が明久君に力を貸す…そして」

ゆつくりと比奈ちゃんが歩み寄ってきた

「真のオースを呼び覚ますの…」

「真のオース…」

「二年前とは違う最強の…でも、苦しい戦いになる…まどかちゃんは創造の力すら手に入れたから」

比奈ちゃんはじっと僕を見つめた

きつと答えを待っているんだろう

決まってる

「まどかを…世界を救う！」

比奈ちゃんはにっと笑い後ろを振り向いた

「どうするのクドー？」

比奈ちゃんの後ろから茶色いグリードが現れた

爬虫類グリード？

『…いいだろう。私も奴らは気に入くない』

「ありがとう。明久君…私達がずっとスル達を騙して入手した情報伝えるね」

「う、うん！」

最後の戦いが始まるんだ

これで…終わる

「…え!？」

何か視線を感じ振り向いたけど誰もいなかった

「どうしたの明久君？」

「あつ ごめんごめん。なんでもないよ」

本当に終わってくれるのかな…

僕と疑問と突撃女子

夕食が終わって僕らは自分達の部屋にいる…僕はボケーンとさっきのことを考えていた

「…世界の終わりか」

信じたくないけどこれは現実なんだ…もうじき奴らがメダルを狙って来るだろ

「…」

比奈ちゃんの情報によれば奴らは紫のメダルを必要としていて、僕から奪いに現れるらしい
そしてグリードとの対決…勝てるのだろうか？みんなを守れるだろうか？

（しっかりしろ明久！不安があるだけメダルに飲まれてしまうぞ！）

ありがとう…僕の心の悪魔…

（でもさ、グリードになったらきつとオーズより強い力が）

僕は天使を握りつぶした

(ぬああああ！)

駄目天使だ。僕の天使は駄目駄目だ

「明久大丈夫かの？」

「ああ秀吉…うん。ちょっと天使退治をね」

「？」

向こうを見ると雄二が僕を見ていた

な、何かな？

「明久…お前ずっと何処にいた？あいつらが心配してたぞ」

「あはは…いきなりヤミーに襲われちゃって」

適当にごまかさなきゃ…みんなを巻き込む訳には行かない…

けどなのは達には謝っておかないと…

「それでなのは達は何を相談してたのさ？」

「……………なのは達に変なメールが来たらしい。調べた結果雄二達の犯人と一致した」

「そうなんだ。ありがとうムッツリーニ」

僕は近くにある湯飲みを手にとりお茶を入れた

「何かおかしいな……」

雄二は考える仕草をしながら曇った表情をしていた

「どうしたのさ雄二？」

「いや…ちょっとな」

「脅迫犯のことか？」

「ああ…ムツツリーニ」

雄二は何か言っているとムツツリーニは親指を立てた
一体何を考えているんだろう

「…明久。メダルを見せろ」

アंकが何かいじりながら僕にメダルを見せるように言ってきた

というかいつの間に帰ってたんだ

「別にいいけど…」

アソクの元へ行ってメダルを渡した

ちなみに僕の所持メダルは

タカ 2

クワガタ 2

カマキリ 2

バッタ 2

ライオン 3

トラ 3

チーター 3

サイ 2

ゴリラ 2

ゾウ 2

シャチ

ウナギ

タコ

サソリ

カニ

エビ 2

そして紫のメダルが9枚と言った感じた

紫のメダルについてはアंकに話してある…全く制御しろだなんて難しいのに

「なるほどなあ…そして俺のコアで8コンボ可能か」

「え？アंकメダルが…」

アंकは黙りながら三つコアメダルを取り出した

「俺のメダルは今、4つだ」

クジャクとコンドルを見せながらアंकは呟いた

ほむらが渡したのか…

途端僕は彼女の言った言葉を思い出した

『あなたが危険な状態になった時…アंकに全てのコアメダルを返すわ』

寒気がするのはあれだよな？脅迫犯が怖いからだよね？

「明久…お前はグリードと打ち解けることができる存在だ…だからこいつらは持つてろ」

アंकは三つずつコアメダルを渡してきた

勿論グリード達の意志があるメダルだ

「明久…死ぬなよ…」

アंकはそう言った後部屋から出て行った

「アंक！？死ぬってどういっ」と

ん？廊下から足音が…かなりの数だ

「…やっぱり来たか」

雄二が呟いた瞬間…

『無駄な抵抗はやめなさい！！』

女子達が勢い良くなだれ込んで来た

僕と疑問と突撃女子（後書き）

明久の所持メダル

タカ

クワガタ

カマキリ

バッタ

ライオン

トラ

チーター

サイ

ゴリラ

ゾウ

シャチ

ウナギ

タコ

プテラ 3

トリケラ 3

ティラノ 3

アング所持メダル

タカ

クジャク

コンドル

クワガタ

カマキリ
バッタ
ライオン2
トラ2
チーター2
サイ
ゴリラ
ゾウ
サソリ
カニ
エビ2

疑いと暴言と待ち受ける罫

「…う…」

駄目だ…がっしりと掴まれていて…ほどけない

「…俺達は違うと言ってるだろ！」

「信用できないわ！そんなこと言ってごまかせると思っているのかしら？」

雄二の言葉も聞かず女子達はさらに締める力を強めた

それは突然のことだった…。勢い良く女子達が入ってきて…すぐに動きを封じられた

小山さんをリーダーとして女子のみんなが僕らが風呂を覗いたと言ってくる

そんなはずがない…カメラがあると言われたってあれはムツツリー二のじゃないし、それに僕は比奈ちゃんと話していて、雄二達はなのは達の所へ行っている

どう考えても僕らがカメラを仕掛けれるはずがないじゃないか！

「全く…お風呂を覗くなんて最低ね」

「全くでございます千世様」

そんな…梅ノ森さんまで…

「観念しなさい…」

「みんな正直に言ったほうがいいよ」

く…なんで…みんな信じてくれないんだ…

「明久？」

「巧…僕らは何かしたのかな？」

巧はすぐに首を横に振ってくれた

ありがとう

「そんなわけない。俺達は何もしていないさ」

「巧…あなたも正直になりなさい」

「千世…俺は前から正直になってるさ」

『だいたいFクラスは問題起こしすぎよね!』

『そうそう!絶対犯人はあの二人よ!』

『吉井と坂本ってあの最悪コンビよね?』

『…絶対犯人ね!みんな力をさらに加えて』

Eクラス代表の言葉で力がさらに強まり関節がしまる

「があ…な、なんでさ」

くう…このままだと確実に骨まで折られてしまっ…どうすれば

女子には暴力はふるいたくない

「はっ…お前らこそ卑劣だな」

どうしたらわかってもらえるか考えていたら雄二が呆れたように笑った

ついにおかしくなってしまったのか!?

「何がよ坂本…」

「俺なら構わずこの女子達を払いのける…だが明久の気持ちをうまく利用してくれるじゃねえか」

その言葉でみんなが動揺した…何?何?

「お前らは明久が暴力を振るえないのをいいことに俺より酷く力を加えている…下手したら確実に骨を折るきだろ」

「何よ?馬鹿にそんなことしても別にいいじゃない」

ええ！？骨折るきバリバリあったの！？いろんな意味でショックだよ！

「おや？どうやら俺が動くまでもないようだな」

雄二の視線が気になり僕や小山さん達も振り向いた

そこには…

「…へえアキ君達を理由無しに犯人扱いするんだ」

「明久達は罪がないのに…」

「あなた達に…明久を馬鹿にする資格があるのかしら？」

なのはやフェイト、ほむらさんが黒いオーラを出していた

「アキ達は覗きなんてしないわ」

「…雄二は正しい」

「坂本君に何をしているのかしら？」

「美波！霧島さんにマミさんまで」

「ちょっとあんたら何私の彼氏に手を出してくれとるんや？」

「覚悟はいいかな？」

「…はやてに工藤」

木下さんやティアナ、文乃や希まで…

「な、なによ…?」

「なんでみんなが吉井達の味方に」

驚く女子達を無視するかのようになんはオーラをまといながら部屋に上がってきた

「アキ君達を離してよ?」

「何言ってるの高町さん!あなた達はこいつらに騙されてるのよ!」

突然パアアアンと鋭い音が走った

僕らは驚くしかない…

「騙された？それはあなた達じゃないの？」

「え？」

驚く小山さん達をよそにほむらがゆらりと僕の方に近寄ってくる

「明久を離しなさい」

その顔はとても冷たい目をしていた

「ほむら……」

「暁美さん！あなたこいつを庇うの！？」

「違うわ……私は騙されたあなた達に締められている明久を助けるだけよ」

さらに歩みよる…ほむら…君はそんなに僕のことを

周りでは雄二はマミさんに助けられムツツリーニや巧、アंकも救出された

なのは達は小山さんと言い争いになっていた

止めなきゃ…

「来ないで！」

僕の腕を掴んでいた女子がおもいつきり腕をひねった

その腕はプテラヤミー達に傷つけられた腕だったからかなりの激痛がきたんだ

「いっ…っああー！」

「明久!？」

今までの疲れもあつてか意識が消えていった

『役立たずが……』

『役立たずは無に帰す』

『明君……』

合宿一日目は始まったばかりだ

眠りと狙いとアポロンヤミ

俺達は女子が消えた後、高町達と一緒に馬鹿の様子を見ていた

チャプチャプとテストロッサがタオルを水で濡らす音が静かに響いた

「さっきはすまなかったな…」

高町達は俺達の味方についたせいで共に悪人扱いだ…畜生…誰の仕業だ

「いいよ…私達は何があってもアキ君達の味方だから」

そう言って微笑む高町…俺は静かにお礼を言った

「アキは大丈夫なの？」

「正直…領けない」

島田の質問を返したのは彼氏である後藤だ

どうやら島田からの連絡を聞いて来てくれたらしい…ありがたいな

「これは…教師を呼ぶしかないな…」

後藤はそう行つた後に部屋から出て行つた

大方教師を連れてくるんだろう…

明久の方をチラリと見ると今だに起きず苦しそうな顔してやがる
くそっ…

「やっぱり今までの疲労が爆発したのかな…」

テストロッサは再びタオルを水で濡らしよく絞つた後明久の額に乗
せた

「…一体犯人は誰なのじゃ」

秀吉の言う通りだ…こっちの切り札を潰してくるとはな…上等だ

「そつだ…高町達は騙されてるって言ってたよな？」

巧の質問に女子達は頷いた

「うん…全ての犯人は…『きゃああ！』」

高町の言葉を遮るかのように廊下から悲鳴声が聞こえた

おいおいまさかだと思っが…

『ウオ！ウオ！ウオ！』

「きゃ！何？」

突然響いた声になのははびっくりしていた

「悪い…こいつはヤミーの出現を知らせてくれるゴリラカンドロイドだ」

ゴリラカンドロイドはカタカタと腕を回しながら目を光らせている

「つまりヤミーが現れたの？」

「ああ…こんな時に…巧！」

「わかってる！」

俺と巧はすぐに部屋を出た

ちっ！これも犯人の仕業か？

『ふん』

女子達が入っている風呂の道でヤミーが一人の女を締め付けていた

く…まずいな！

「っおお」

焦っていると巧は走り出しヤミーに突撃した

相変わらずな奴だ

『うお！』

ヤミーは首を絞めていた女子を離れた

「大丈夫か！？」

「けほ……うん」

俺は安全を確認すると女子を逃がすように促した

一体どういうことだ……俺達を狙っているんじゃないのか？

『ほお……貴様らは吉井の仲間か』

奴はまるで神話の神…アポロンをイメージさせたようなヤミーだ

「やっぱり狙いは俺達か…」

俺達はそれぞれベルトを取り出し腰に巻く

『どうやらその様子からだが高町達が妨害したようだな』

何？こいつ何でそれを

『せっかく貴様らを犯人にしたてあげたのにな…裏切り者まで出たようだ』

「何をぶつぶつ言ってるんだ…ストレスを発散させてもらっぜ」

ピンとメダルを弾きキャッチする

巧はコアとセルを入れて短剣を構えた

「変身!!」

セルメダルを入れてギリギリと回す

巧は短剣を突き刺して両手を広げる

『カポン!』

『ウルフアップ』

俺達は装甲に包まれて仮面ライダーへと変身した

「さあて…稼ぐぜ」

俺はパンと手を合わせた後に構えた

『同時に来るがいい』

随分余裕そうじゃねえか…

「それなら遠慮なく行くぜ！」

俺達は床を蹴ってアポロンに攻撃を仕掛けた

「喰らえやあ！」

ガスンとアポロンに向かって素早く回し蹴りを放つ

『…弱いな』

「!?!?ぐあ!」

アポロンは見えない速さで俺に何発ものパンチを放った

「なんつーパワーだ……く……」

俺はよろめきながらバスターを手にとった

「はああ!」

ディアスは巨大な剣でガガガとアポロンを斬りつける

が全く効いた様子が見られねえ

『ふっ!』

「ぐわあ！」

ディアスはアポロンの回し蹴りが顔に直撃して吹き飛ばされた

だが…奴は引つかかった！

『なんだこれは…』

アポロンの周りには何本もの剣が突き刺さっている

そつ…これはディアスが瞬時に腕の剣を無数にして放ったものだ

「ナイスだ巧」

メダルポッドをバスターの先端に取り付ける

『セルバースト!』

目が赤く光り、体中からバスターへエネルギーが集められた

「いくぜ!オラアア!」

トリガーを押しバスターから巨大な光弾が放たれた

『ウルフブレイク!』

ディアスに狼の紋章が浮かび上がった

「ハアア…」

剣に集中され刃先が巨大になった

すげえな…

「ウオリヤアア！」

ディアスは素早くアポロンに近づき思い切り巨大な剣で切り裂いた

同時にディアスが避けた後、俺が放った必殺技がアポロンに直撃し、爆発した

『ふむ…どうやら期待ハズレだな』

な…あんな必殺技喰らったのに傷一つないだと！？

「嘘だろ…」

ディアスも後ずさる…くそっ 今までのヤミーと全然違う

『次はこちらの番か』

そう言った瞬間にアポロンヤミーは消えた

「ぐあああ！」

なんだと！？消えたんじゃないかって…一瞬で瞬間移動しやがった！

「がは…」

ダメージがかい…このままだと装甲がもたねえ

「ぐ…」

『やはり貴様らでは相手にならん』

奴の態度は俺をイライラさせた

なめやがって…こっちはまだとっておきがある

だが…メダルが六枚必要になる…俺が持っているのはこいつらだけか

「く…」

セルメダルを入れてキリキリと回す

『シヨベルアーム』

手にオレンジ色の巨大シヨベルが武装された

『ほお…』

「ウオラ！」

繰り出した攻撃をアポロンはすつとかわした

くそっ！やっぱり駄目か！

『ぬるいな…』

アポロンは俺の背後に立っていた

振り返る暇もなくアポロンの火炎弾の餌食になってしまった

火花が飛び散り吹き飛ばされた

「があああ！」

「雄二！」

変身が解除されて俺はガクンと倒れた

「くそ……」

メダルがない以上変身ができねえ

『ふん……』

アポロンヤミーはディアスの背後に回り同じように火炎弾を放った

「くあああ！」

ディアスも変身が解除され巧は壁に叩きつけられた

このままだと本当にやべえ

だがどうすれば…

『終わりだな…』

アポロンが迫ってくる中死を覚悟した

こんな奴に殺されるなんて俺は弱いな

攻撃が来ない？

『…本命のお出ましか』

奴は違う方向を向いていた

そしてそこにはあいつがいた…

「雄…巧…遅くなってごめんね」

ベルトを腰に巻き堂々と明久は立っていた

僕と暴走とグリード化（前編）

「明久お前…」

僕はボロボロになっている雄二達を見た

「全く雄二達も無茶するよ」

人に言っておきながら自分達は何だっ て話になるよね

『来たか吉井明久』

今までとは違う風格を持ったヤミーがこちらを見る…姿からしてア
ポロンか

「悪いけど君と話す暇なんかないんだ」

ガチャンと一枚一枚入れていった

「明久大丈夫なのか!?!」

やっぱり巧は優しいなあ…確かにまだ体は本調子じゃないけど…

「うん。さっさと終わらせれば大丈夫だよ」

『簡単に言ってくれるな…』

う…別に強がってなんかないぞ!それにもしもの時は

「僕達だって急いでいるんだ!」

スキヤナーを持ちアポロンを睨みつける…生徒や教師はなのは達が避難させてくれてるし…思い切りぶちのめしてやる!

「変身!」

オースドライバーを傾けメダルをスキャナーで読み込む

そして無数のメダルが現れ上中下と僕の前に現れた

『タカ！ウナギ！タコ！』

頭はタカヘッドで体は鞭の付いた電気ウナギ…足はタコだ！

「はああ！」

鞭をバチイと地面に叩きつける…はは調教師か僕は

『面白い…』

アポロンは手をかざし火炎弾を放ってくる

「はあ！」

鞭… まあウナギウィップって言うんだけどそのウィップで火炎弾を弾く

弾かれた火炎弾は横に逸れて壁にぶつかった

「げっ！しまった！」

教師が居ないのいいことに壁に穴を開けちゃったよ…

『ふん！』

放たれたパンチをうまく交わして鳩尾を狙い拳を叩き込んだ

『ぐふ…』

「お前のせいで怒られるじゃないかああ！」

怒りに任せウィップを叩き込んだ

くそっ 鉄人にバレたらおしまいだ… きっと地獄補習がまってるだろう

『がああ!』

「たああ!」

ウィップで何度も電撃を流す

アポロンはダメージを受け跪いた

「今は早く終わらせて…壁を直さなきゃ!」

メダルを入れ替えて再び読み込む

『シャチ!ゴリラ!チーター!』

頭は青いシャチヘッドに体はガントレットが付いた銀のゴリラ、足は高速で走れるチーターだ

「うおりゃああ!」

高速で走りアポロンの火炎弾を避け素早くガントレットを叩き込む

『ぬぐあ…』

アポロンは後ずさり僕は鳩尾に何度も拳を叩き込んだ

こう言ったことはFFF団との戦いで鍛えられている…だから相手が何をしてくるのが大まかに読み取れるんだ

『貴様…』

「うおおおー！」

シャチヘッドから水流を発射してアポロンを怯ませ素早く蹴り飛ばした

『…強いな…流石はオーズか』

アポロンはすくつと立ち上がって炎に包まれた

な、何だ！？

『ウオオオオ！』

「うわっ！」

沢山の火炎が降り注ぐのかわしながら攻撃を仕掛けた

いや…待てよ…これは

「熱っっっ！？」

超高熱が出ている！

痛い！そして熱い！

『では第二ラウンドと行こうか』

さっきまで全く近づけなかった炎が吹き飛びアポロンが現れた

「え……」

アポロンの姿はかなり変化していた

赤と金色だったからだはゴツい体からかなり痩せている

つまり普通のヤミーと同じってこと

そして体は金色と白色になり鎧が覆われ長い剣を持っている

「姿が変わりやがった」

そんなのあり！？

『 - はあ！ 』

まるでアテナを連想させるかのような姿をしている

って速い！？

「ぐわああ！」

ズバツとアテナヤミーに切り裂かれ火花が飛び散る

「ぐ…あ」

う…体が苦しい…なんだ？

『余所見している場合じゃないわよ』

「ぬあ！」

振り落とされた剣をどうにか避けた

あ、危なかった

『吉井君…私の為に消えてくれないかしら？』

アテナはすつと剣を構えている…大方…この姿がヤミーの本来の姿

そして犯人の意志がある

「ちょっと待ってよ。君は誰なんだ？なんでこんなことをするんだ
！」

『高町だったかしら…あいつらよくも邪魔してくれたわね…』

無視された…けど今の言葉にはイラツときたよ

「なのは達が邪魔した？何を言ってるんだよ…」

メダルを入れ替えてスキャナーで読み込む

「そんなに僕らに恨みがあるなら…いくらでも相手をしてやる！」

『シャチ！ウナギ！バツタ！』

体は再び電気ウナギに足はバツタだ！

『…何もわからないくせに』

アテナは重たそうに剣を上げて構えた

「はああ！」

ウィップを持ちウィップに電撃をビリビリと流す
電撃を帯びたウィップは金色になった

「明久…お前だけいい格好させるかよ」

「ああ…俺達も一緒だ」

雄二はバッグにさつき出た大量のセルメダルを入れた

巧はその一枚を持ちカンガルーのメダルを取り出した

「明久…これ使ってくれ！」

巧がヒュンとメダルを投げてきたからキャッチした…何のメダルだ
ろっ？

「巧…これは」

巧に振り向くとコクンと頷いてくれた

ありがとう

『はあああ!』

「しまっ…うわああ」

強力な斬撃を受けて僕は壁に叩きつけられた…頭が

「ぐっ…」

「明久!？」

痛たた…うわっ

なんだ？違和感が

「大丈夫か!？」

「ありがとう　いくよ二人共」

雄二達はベルトを巻き変身し僕はメダルを入れ替えてスキヤナーで読み込んだ

「変身!」

『カポン!』

『カンガアップ』

雄二は仮面ライダーバースに変身し巧はボクシングのグローブが付いた紅色のディアスカンガールスタイルに変身した

『タカ!ウルフ!バツタ!』

僕は巧から借りたメダルでタカウルバに変身する

銀色の体で肩や腕に棘があり手には長剣を持っている

「これで二刀流だ！」

メダジャリバーを取り出し構える

『ドリルアーム』

バーはドリルを武装し相手を見据えた

「三人なら負けないね！」

僕らは頷き合いアテナは少し後ずさった

『なら…俺も相手をしてやる』

壁が砕け新たなヤミーが…違う

「お前は…」

金色の体をし赤い目にユニコーン（デストロイ）みたいな顔に…武装された体…そして金色の武装された足

間違いないあの時のグリードだ

でもベルトが金色じゃない？どういうこと？

『久しぶりだな…仮面ライダーオーズ！』

あいつから凄まじい波動が放たれる

やれやれやるしかないようだね

僕はまだ知らなかった…瞳が一瞬だけ紫色に光っているのを

僕と暴走とグリード化中編（前書き）

遅くなりました。続きを更新します

このままじゃ今年中に終わらない…（^ー^；）

僕と暴走とグリード化中編

「ぐああ！」

グリードの一撃を喰らい僕らは吹き飛ばされた

「く……」

『なんだ？もう終わりか？』

こいつ…昔より強い？それとも僕が弱いのか！？

「明久！俺達はヤミーを殺る」

「お前はグリードを頼んだ！」

二人はそう言ってからヤミーへ攻撃を仕掛けた

「オラア！」

繰り出された拳を喰らいアテナは引き下がる

「いくぜ！ボクシングパンチ！」

『ああっ！』

ディアスの放った高速パンチはアテナに命中した

『二年前の借りを返させてもらっぜ！』

「来い！」

神話のグリードカイは剣を取り出し構える

二刀流…剣を握る力を強めて相手を見据える

「ウオオ！」

ダツと走り出す。カイが片方の剣を振り上げてきたのをメダジャリバーで防ぎ、逆にウルフソードで切り裂こうとする

「甘いな！」

くっ…メダジャリバーが弾かれた…カイは片方でウルフソードを防ぎ後ろへと吹き飛ばした

「く…」

剣を地面に刺しガガガと響く中、なんとか止まった

速い…バツタを生かしてもさっきのようにやられてしまう…

「なるほどな…」

「む…なんだよ」

カイは馬鹿にするように僕を笑った

正直こっぴどいのはムカつくもんだ…特にあいつらには

「貴様…弱くなつたな」

「な…!？」

反論しようとした時横から蹴りが放たれた。それをなんとかかわすもの素早く剣が振り上げられる

避けれない！

「ぐああ！」

火花を散らしながら後ずさる。カイは容赦なく切り裂く…ぐ、なんて速さだ

体中が痺れるように痛い…

「弱い！弱いぜオーズ！」

「がはあ！」

ズバツと切り裂かれ、勢いよく吹き飛ばされた

「ぐ……」

強い…折角巧からメダルを借りたのに…

「明久！ぐ……」

バースはアテナの攻撃を受けて壁に叩きつけられた

『邪魔しないで！』

アテナはバースの首を締め上げる…雄二！

「ぐ…がああ！」

いきなり体に痛みが走った…カイが僕を踏みつけている

「なんだ？仮面ライダーはこんなにも雑魚なのか！？」

「ぐああ！」

ガスガスと踏みつけるカイ…ぐ…踏まれるたびに体中が悲鳴をあげる

「オリヤアア！」

「ぐ…ぬ」

ディアスが放ったパンチを喰らいアテナとカイは後ずさる

「明久…雄二…大丈夫か！？」

「ありがとう巧」

「はっ！全然余裕だ」

僕はカバツと立ち上がった
こんな程度の攻撃いつものことだ。それにいつまでもやられている
僕じゃない！

「いくよ二人共！！」

さあ！反撃だ！

呼んでる…仮面ライダーオーズが…紫のメダルが私を呼んでる…行
かなきゃ

オーズを倒さなきゃ

なのはside

私達は今、アキ君の所へ向かっています

理由はみんなを非難させた後、バツタのカンドロイドが来たことで
わかったの

『もし…僕に何かあったら…その時は』

聞きたくない言葉でした…だから私達はそれを阻止する為にフェイトちゃんやほむらちゃん達と一緒に女湯前へ…アキ君の所へ向かっているの

「明久…大丈夫かな」

「大丈夫や！アキ君やで？きっと大丈夫やて」

不安になっているフェイトちゃんをはやてちゃんが元気づけます

「明久はメダルに飲まれはしないわ…きっと」

「明久君は仮面ライダーだもんね」

ほむらちゃんの言葉に青い髪に元気な魔法少女のさやかちゃんが頷きました

アキ君は仮面ライダー…だから自分にも勝てる…そうだね？アキ君

「みんな！もっと急ぐよ！」

明久side

「ぐ…はあはあ」

僕らは今、絶対絶命の状況に陥っていた

まさかグリードが他にいたなんて…完全に僕らはあいつらの罠にはまってしまった

カイとの激闘中…僕はコンボチェンジをしてシャウタに変身した

形成は逆転…いつきに僕らが有利になった

流石コンボだ…

けど…突然他のグリードが出現した

甲殻のスル…龍の鎧を身に付け顔は朱雀ように美しい外見にナイス
プロポーションのグリード…ワス…

一気にグリードが三体…

「こんなことが…」

「くそ…！」

『消える仮面ライダー』

『お前らの負けだ』

『コアメダルは頂きますよオーズ』

「諦めてたまるか……」

立ち上がった瞬間鳩尾に激痛が走った
ワスに蹴られていた……ぐ……頭が痛い！

「ごめんなさいね……」

「がは……」

女のくせになんてパワーだ……
メダルが……しまった

「はい。メズール回収です」

メダルを拾おうとするワス…させるか！

「きゃあ！」

バンと突き飛ばしシャチだけでも拾った

離す訳には行かないんだ！

『痛いです…酷いですよオース』

ワスはいきなり体育座りになり何故か落ち込み始めた

あ、あれれ？何このシチュエーション…

「あの…」

タトバに戻ってしまい防御は薄いけど何故か気になってしまいワス

に近づいた

『何ですか？』

うわ…泣いてる…まるで普通の女の子みたいだ

「えと…なんで泣いてるの？僕で良かったら相談にのるよ」

何を言ってるんだ僕は…でも何故かほっておけないんだよなあ

『本当…ですか？』

急に明るくなったワス…な、何なの本当に

「う…うん」

『この接し方…まさか…明君！？』

嬉しそうに僕に抱きついてきたワス…ぬええ！？何これ！？

『この反応…やっぱり明君だ…』

まさか僕グリードまで攻略しちゃったのか…って神のみぞ知るセカイじゃあるまいし！そんな訳あるかああ！

ほら！！みんな啞然となってるよ！！

というかさっきから胸が…鎧からでも感触が

『なんで僕の名前を…』

『そうだった…明君はわからないよね…初めまして！私はウス…本名はオルソナ！この姿は仮で本当は天使のグリードなんです』

え？オルソナ…？

『それでね…完全に復活する為にメダルを集めてたんだよ！だけど

今はどうでも良くなってきちゃった』

ワス…もといオルソナは勝手に言葉を続けて喋りだした

完全復活？でもオルソナは世界を修復させたって…

『そして私の本当の名前は鹿目まどか…一年前の鹿目まどかだよ』

にっこりと笑うオルソナ…それはまるでまどかそのものを見ているようだった

「まどか？」

『二年ぶりだね明君…やっぱり仮面ライダーになっていたんだね』

もうさっきまで見せたグリードという雰囲気が見られない

まどかと信じるしかない…

「本当にまどか？」

『うん…時間がないかな…今日の夜に会おうね!』

そう言った瞬間まどかは消えて…空間が歪みだした

え!?!何?何?

「明久!」

凄くうるさい声がして…僕の意識が戻った

さっきのは幻?

今の状況…さつきと変わらない…でも…ワスは姿がガッチリしていて男だった

「嘘おおお!？」

最悪だ!本当はまどかじゃなくてなんかむさいグリードだなんて!認めない!認めないぞ!!

『ああ…俺もお前を認めない』

どこからか静かに声が聞こえた

「が…!？」

な、なんだ意識が…
紫のメダル？

駄目だ…

「ぐ…」

空中に浮かぶメダルを掴みそのままベルトに入れ読み込んだ

……体が…言うことをきかない

まさか……

そうだったら逃げて二人共…頼むから逃げてくれ

じゃなきゃ…

『プテラ！トリケラ！ティラノ！』

冷気をまといながらオーズは紫の姿へと変わった

『プ・ト・ティラーノザウルス！』

冷気をまといながらオーズは紫の姿へと変わった

『プ・ト・ティラーノザウルス！』

「ウオオオオオ！」

プトティラコンボになった明久は砲口する

グリードだけでなくバーズ達までも凍らせ吹き飛ばした

『『がああ！』』

「ぐあああ！」

「ハアー……」

今ここにいる明久は見たものを虐殺する暴走コンボになってしまったのだ

『みんな嫌いだ…お前も嫌いだ…僕の気持ちを理解してくれないお前なんか大嫌いだ！お前も僕になれよ！！暴走しろ！』

「ウオオオオオ！」

「明久？」

「なんだ…なにが」

プトティラは構えグリード達を標的にとらえた

僕と暴走とグリード化後編

俺は一人なんだ…

どんなに仲間がようとそれは変わらない…

なあお前…お前もそうだろう？ 沢山の仲間がいて…戦う力を手に入
れて…告白されて…

それでも俺達は一人なんだよ…満たされないんだよ…俺達は

なら壊すしかないだろ？終わらすしかないだろ？

だって俺達は満たされないだからな…寂しいんだよ

結局は俺達は一人だから…この世界は俺達を否定してるから

「ウオオオオオ！」

大きくプトティラコンボは叫ぶ

「…明久」

バーズは呆然とそれを見ていた

『ガハアア！』

『ぐあ！』

『ぬあ！』

三体のグリードはプトティラに踏みつけられ首を締め上げられ顔面を何度も殴られている

その光景はただやられるしかないグリードと圧倒的すぎるプトティラコンボ

ただの拷問としかいいようのない状況だ

「…なんなんだよ」

ディアスは足に力が入らなかった

恐怖…それが彼を襲っているのだから

「ウオ！」

プトティラは甲殻のグリードスルの顔面を掴み地面に叩きつけた

『ぐ…あ』

スルは既にボロボロな体なのでさっきの一撃でメダルが落ちる

『くそがあ！』

カイはプトティラを切り裂くがプトティラは何もないようにカイを掴んだ

「ルアア！」

大きな音が響くくらいカイは壁に叩きつけられる

『が…』

カイからメダルが跳ぶ

グリード達の持っているコアメダルは5枚

三体のグリードはプティラの攻撃を受け続け残り二枚になっていた

「ルアア！」

回し蹴りを放ちワスを蹴り飛ばした

『がああああ！』

ワスはなすべなくされるがままに受けるしかなかった

まさにプトティラは化け物と言うのがふさわしいだろう

『ぐ…うわああ！』

プトティラはワスを鷲掴みギリギリと力を入れる

「ウオオオオオ！」

そのまま片手で振り回し叩きつけ踏みつけた

『ぐ…くそー！』

スルは素早く地面へ潜ろうとしたがプティラは瞬時に尻尾を出し
なぎはらった

『がぁぁ!』

ワスとスルはプティラに踏みつけられ逃げる力さえなくなっている

『うわぁぁ!』

カイは怖くなり逃げ出そうとするがプティラ…オーズがそれをさせ
なかった

「ルアア!」

オーズは足を掴み握りつぶす。カイは悲鳴をあげ足がセルメダルに
変わってしまった

「……」

バースとディアスは鋭い恐怖を覚え立てなくなっていた

それほど今のオーズは残虐だったのだ

「フー……」

オーズはグリード達を踏みつけ荒く息をする

『くそ……が』

カイは立ち上がろうとするがすぐさまオーズに頭を捕まれ地面に叩きつけられる

「ウオオオオオ！」

再びオーズは大きく叫び三体のグリード達を殴りつける

「…」

完全に弱っているグリード達は声もせず苦しんでいる
オーズは目を光らせグリード達を地面に叩きつける

「ルア！」

オーズは地面に手を突っ込み何かを取り出した

「…あれは斧か！？」

プトティラの武器…メダガブリューにセルメダルを入れるレバーを
下げていく

「ガブガブ…」

まるで恐竜がセルメダルを食べているかのようにメダガブリューから音声が流れる

『ゴックン！』

飲み込んだと同時にメダガブリューの持ち手を曲げ銃の形にした

そうこれはプトティラが留めさす動作だ

『プ・ト・ティラ・ノヒツサーツ！』

銃の形になったメダガブリューに高密度のエネルギーが溜まる

「フウー……」

カチツと押した直後大きな破壊砲がグリード達を飲み込み爆発させた

「……まじかよ」

バースはただ圧倒的な力を見ることができなかった

爆発した中からメダルが飛び散りグリード達はセルメダルとなった

「ハア……ハア………ウオオオオオオ！」

オーズは再び叫ぶその目は二人を捕らえていた

「明久！？ぐああ！」

「やめろ……がああ！」

ギリギリと首を締め上げられていくバースとディアス

その力は凄まじく二人の足がドンドン上と上がっていく

「ウオオオオオ！」

さらに力を入れ二人は叫ぶことすらできなくなっていく

『アキ君！！』

突然後方から叫び声が響いた

声の主…なのははハアハアと息をついてからオーズを見た

「…フー」

オーズは威嚇するように睨みつけるがなのは動じない

「明久…やめてよ…」

目の前から金髪の美女フェイトが歩いてくる

「フー…」

「お前ら何してんだ!？」

「早く逃げろ!!」

二人の言葉を聞かないかのようになのは走り出した

同様にフェイトも走り出しオーズ…明久に抱きついた

「アキ君…私達アキ君の気持ち理解したなんて言わないよ」

「でも…私達があなたを助ける…必ず。」

「フウー…」

なのはとフェイトは手に力を込めた

「全部…全部聞いたの…鴻上さん…ううんあなたのおじいさんから
！」

オーズは手を緩め二人を離れた…その目はじつとなのはとフェイト
を見ている

「全部聞いたの…明久の過去や…今の状況…鴻上さん…ううん吉井
さん本当は凄くあなたのこと心配してた」

「……」

二人は悲しい顔になりながらもじっと明久を見る

「私達はあなたが好きだから！だから吉井さんの分まで…助けたいの！」

二人の言葉が明久に響き渡る

「う…ぐ…う…」

頭を抑えながらプティラは下がる

みるみる変身が解除されそこには悲しい顔した明久がいた

「明久！」

バースとディアスも変身を解き明久に近づこうとする

「みんな来ないで！」

明久の叫び声に全員が止まった…明久の本気の叫び声など聞いたことがなかったから

「僕は…駄目なんだ。いくら関わりを持っても…こいつを救えないんじゃない」

ぐっと自分の胸あたりを掴み…涙を流す

「明久…」

「二人共…ありがとう」

明久は礼をした後すぐに走り出した

なのはとフェイトはその場に泣き崩れるしかなかった

（彼の心は冷たく凍っている…どんなことがあっても満たされない
……アキ君…お願いだからグリードにならないで）

壊れた壁から風が吹き月が四人を照らした

「はあ…はあ」

明久は胸を抑え林の中を歩いていった

「ごめんね 君をずっと僕は苦しめてたんだね」

激痛に耐えながらあてもない中をガサガサと歩いている

「う…!!」

不意に彼を激痛が襲う

目は紫色に光る

「がは…嫌だ…」

明久は何かから逃げるようにガサガサと走る回る

「嫌だ！嫌だ！嫌だあああ！」

紫のメダルが体内で強く発光し明久をメダルで覆う

メダルに覆われ明久は恐竜のグリードへと姿を変えた

既に手遅れだったのだ

「ウオオオオオオ！」

明久グリードは月に向かって砲口し辺りの物を凍らせた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6786s/>

バカとメダルライダーと召喚獣

2011年10月22日18時48分発行